THE CENTRAL REVIEW

中央公論

六月號

第三十七年第六號 第四百九號


染めたと見えぬ
生れ付の黒髪と同色に染る
志らが
赤毛染
ナイス
ナイスの五大特長
◎タッタ二十分で染る。
◎自然の髪の色艶に染る。
◎襟枕に汚染の惧なく。
◎洗ふて剝げず永く保ち。
◎用法至極手輕便利也。
發賣元 大阪 東京 丹平商會
全國化粧品店及び藥店にあり

大正十一年

中央公論

六月一日發行

六月號

第卅七年第六號

第四百九號

內閣改造の悲喜劇

日本の政界程安價な現狀維持を喜ぶ處はない。「現狀」の些でもの紛更に對しては、政治家達は命を賭けて爭ふ。こんな處に如何して進步發達を見ることが出來やう。

日本の政權は窮局する所「金」で運用さるる。「金」の鎖で多數が繫かれ、「金」の鉾で政界の安定が期せらるる。政治家達の生活そのものが實に這の基礎の上に築かれて居るのだから、彼等がこの狀態の些しでも動搖さるゝことに極度の不安を感ずるのは、素より怪むに足らない。

日本の政界に於て大に爲すあらんとする者は、先づ這般の情誼に通ずる所なければならない。國利民福がどうの、世界の大勢がどうの、殊に理想がどうの、道義がどうのと云ふ樣な事にこだわり過ぐるは、實際政治家としての第一資格を缺くものだ。斯う云ふ意味に於て先きの宰相原敬氏の如きは、眞に現代日本の要求に適合する偉大なる政治的天才であつた。

原氏が現狀の維持に生活の安全を喜んで居つた連中の唯一の希望であつたことは言ふまでもない。夫れ丈け彼の不時の橫死は彼の追隨者をして大に狼狽せしめたのであつた。而して此際に於ても之等の追隨者は現狀維持の絕對的必要を忘れなかつた。原氏の後釜に高橋氏の迎へられたのも畢竟この動機から來るのである。

併し高橋氏が原氏の後任者として理想的人才でないことは、彼等も萬々承知して居る。が、なま中他の者を持つて來たのでは一層の不安が感ぜられる。そこで、高橋氏の脫線癖に可なりの不安を感じつゝ、彼が黨人としての經歷未だ深からざるに乘じて多少奔放の機鋒を制し得べしと恃みて、遂に彼を戴くを最良の策ときめたのだ。其の代り、先きに原氏に一任した萬事の切り盛りは政黨の幹部に握つて置かうと決心した。高橋內閣の成立に伴つて政黨幹部の陣立を改めたのも、考へて見れば、みなかうした現狀維持の動機から來て居るものに外ならぬ。

斯くして政友會の內部の收りはつく。けれども天下の同情を失つた政友會內閣は、內がかたまればかたまる程世間の同情から遠ざかつて行く。常識から云へば、總辭職をせねばならぬ程の痛手を先度の議會で負はされたと謂つて可い。が、幸か不幸か下院には依然として絕對多數を擁して居るので、丸で投げ出すにはまだ惜しい氣もする。そこで、天下の耳目を新にし得る最少限の變革を加へても少し現狀を續けて見やうといふことになつた。根本的に政界の革新さるゝを欲しないと云ふ所から、多少の改造をやらうかといふ所に落ち付いたのだ。最近の

内閣改造の一喜劇は、要するに大なる革新を避けんが爲の小改革に外ならなかつたのである。

この大勢に促されて策士は動いた。高橋首相も浮々と之に乘つた。併し彼の乘つた動機はまた聊か趣を異にする所がある。彼は元來彼を迎へた人々の期待するが如く永く傀儡として止るを肯しとしなかつた。前任者が自分の内閣を操縦した樣に、彼には眞の高橋内閣を提げて一度天下に號令して見んとの野心があつた。斯うした望みの彼の柄に相應はしいかどうかは問ふ所でない。要するに彼は本來永く政黨幹部の頤使に甘んずるものではない。只黨界に於ける經歷淺きを以ての故に暫く隱忍して居つた迄でだ。今やすなはち策士の誘ふ所となり浮々と改造に手を染めた。只時機宜しきを得なかつた爲に失敗したのは彼に取つて甚だ遺憾のことであつたらう。

改造運動の失敗の直接の原因が元田中橋兩相の頑強なる反對に在つたことは言ふまでもない。裏面の消息は分らないが、表面から觀ると、元田中橋兩氏の政治家としての能力は之に依て全然地に墜ちた。人格的な内面的な能力に自信なきものは、とかく其の與へられた外形的の地位の得喪を以て窮局の成敗の岐るゝ所とする。彼等は彼等の所謂政治的生命を擁護せんとして却て之を國民の信認から褫つて仕舞つたのだ。憫むべき徒輩である。

改造運動の失敗したことは、色々の意味に於て遺憾なことゝ思ふ。之を企てた者又之に乘つた者の困惑は予輩の關する所ではないが、この運動の成功と共に或は生ずることあるべき政治的原則の實際的解決が、一時見られなくなつたことを甚だ殘念に思ふのである。それは何かと云ふに、原氏在世中は黨界の指導一にその專擅に委して厭はなかつたのに、今度は幹部の合議に此の實權を握らんとしたのだが、此の新方策の遂行の爲に迎へられた高橋新首相が、果してよく這の主義に從順であり得るかどうか分らない。固より首相對幹部の交渉が、以上の點を意識的に顧慮して應接するのではなからうけれども、事件發展の自然の經過の上に、總裁專擅主義と幹部合議主義との爭がやがて鬪はれるに相違なかつたと思ふのである。而して之が日本の將來の政界の發達の上に實に少からぬ關係があるのである。

單に之ばかりではない。高橋首相の内閣改造運動を客觀的に抽象的に又内面的に考へて見ると、幾多の面白き新問題を包藏するものであつた。之等の新問題が、改造運動の頓挫と共に、折角出しかけた芽を藏めて仕舞つたのは頗る惜しむべきだが、併しこはもと高橋首相其人に依て蒔かれたのではなく、時勢の溫みが自ら芽ばえせざるを得ざらしめたのだから、早晩また何かの機會に頭を擡げて來るに相違ないと思ふのである。

その中に蠢めいて居る連中は下らないが、時勢は悠然として適當に歩を進めて居る。政黨者流に愛想がつきても、まだ我々は匙を投げるには早い。

中央公論



第卅七年第六號
六月號
第四百九號

現下流行の宗教文學に鑑みて信仰隆興の機縁と志向と意義とを論ず

田中王堂

一、序説

一、改革者の意氣

今からすると餘程以前のことになるが、或る日、わたくしは當時懇意であつた或る醫者を訪問したのであつた。客間に通されて主人の現はれるのを待つ間に、ふとわたくしの眼に留まつたのは、其の室に掛けられた額の文字であつた。

それは『夜叉手菩薩心』といふのであつた。『夜叉手菩薩心』！　此の句を讀んだわたくしは其れが如何にも正しく（啓者を含めて）あらゆる種の改革者の心意氣を象徴して居ると思つて深く感に入つたのであつた。

『夜叉手菩薩心』なることの熟語は支那人の創意に成つたものか、或は漢文、若しくは、漢想に爛れた日本人の創意に成つたものであるかわたくしは知らない。然し、一つの正しき態度に當然含まれねばならぬ、二つの側面、若しくは、其れより自然に發展する二つの段階を強いて引き離して對立する二つの事件と見做し、新たに其等をして互に填補せしむる工夫に依つて、始めて一つの正しき態度を表現しようとする支那人に特有な對偶辯は別として、こゝに、此の句を解釋して、或る人が眞に菩薩の心を有つて居るならば、其れは必然に發展して、彼れをしてさうすることの必要な場合に方つては、夜叉の手を有つ者の如く振舞はしめねばならぬとか、或は、（同一事實を裏面より見て）或る人が自づから菩薩の心を有つて居ると稱しながら、如何なる事情に出會つても、一度でも夜叉の手を有つ者の如く振舞はないならば、彼れは眞に菩薩の心を有たぬのであるとかいふことを意味するものとするならば、この句は確かにあらゆる種の改革者の心意氣を象徴するものであると謂はねばならぬ。

何故に改革者は菩薩の心を抱くに拘はらず、否、其れを有つがために、夜叉の手を振はなければならぬか。

人間の性情の根本理法から、彼れが彼れの生活に於て絶えず幸福を實現して行くためには、彼れは絶えず彼れの生活方針を改造して行かねばならぬ。嘗て善であつた、即ち、滿足を齎らした生活方針は必ず何時か一度は惡、即ち、不滿足を齎らすものとなるに定まつて居る。されば理想的に言へば、異なる個人はてんでにさうすることの必要のある程度に、風に、一行ごとに彼等の生活方針を改造して行くのが彼等に取つて最も善いのであるが、事實として、彼等の多數はさうする能力をも時間をも有つて居らぬ。大體から言つて、彼等は過去に於いて少數の天才が彼等の要求を會得し、

其等を基礎として彼等のために工夫したところのものを遵奉して、自分の生活方針として居るのである。其等が、實際、餘程不便となつても、新らしき天才が新たに彼等の衝動を醇化し、其等を基礎として、彼等のために或るものを工夫するまでは、彼等には、其等を不便と感じながらも、尚ほ有は無に優るの道理からして、其等を墨守するより外に術はないのである。

將に溺れんとするものは、藁に縋つてなりと、おのれを救はうとする。民衆にして自づから新たに彼等の生活方針を工夫する能力を缺けば、缺くほど、彼等は過去に於いて彼等に與へられた其等のものに執著せざるを得ない。そこで、其等のものは、極力、法律と信仰と辯證とに依つて保護され、硬化されることになる。彼等が彼等の生命を其れに托する限りに於て、彼等は其等より或る種の滿足を或る量に體驗する。そして、彼等がさうする限りに於て、其等は疑ひもなく善である。然し、少數の改革者は聰明に於て彼等に勝つて居る。假りに身を彼等の位置に置いて考へて、若し彼等にして一層正しく彼等の現に置かれた環境を考察し、一層適切に彼等の現に有てる能力を發揮し運用したならば、彼等が現に享樂しつゝある善よりも、種に於いて、一層優れた善を享樂し得ることを知つて居る。そこで、是等の少數の改革者は彼等のためにさう爲し得る方法を工夫して彼等に其等を與へようと企てる。然し、彼等は、自分等の理會に依つて、彼等の既に有てる善と、彼等に約束される善との間の價値の優劣を比較することが出來ない。彼等に最も缺けたものは、知的圖式を以て示された計畫の合理性と可能性とを洞察するに必要なる生命の飛躍と叡智の飛躍とである。

斯くして、改革家の事業は殆ど總べての場合に於て、民衆よりの誤解と反抗とを受けることになる。これまでのところでは、改革者が其等に打ち克つのに二つの武器が用ゐられた。其れは、權力と信仰とであつた。今後に於ける武器は、主として說服であらねばならぬ。孰づれにしても、改革者にして眞に改革者たるの功績を擧げんとするならば、彼

れの民衆に對する菩薩心は夜叉手にまで發展し得るものであり、又、事實に於て、夜叉心として實現してはたらくものでなければならない。

畢竟するに、あらゆる種の改革は或る種の犧牲を意味する。大なる善の建設のために、小なる善を犧牲とするのである。卵を壞さなければオムレツは出來ない。卵を壞すのを懼れてオムレツを作ることを躊躇するのはセンチメンタリズムといふものである。たゞ、聰明なる經世家はよく多く民衆に與へるためには、先づ、均しく彼等より奪ふことの必要なることと、如何なる機會に於て、如何なる方法に依つて其れをなすのが最も有効であるかを知つて居るのである。その愛は人類全體を包容して餘りあつた經世家の一人、キリストも、自分はこの世に劍と人を投ずるために來たつたのであると宣言したではないか。

この頃、刻下わが同胞の一部の間に瀰漫しつゝある信仰隆興の事實に因んで、其れに對する批判、若しくは、啓蒙の態度を非難するやうな口吻を洩して、『今日、民衆が信仰を欲求して居るならば、自分は彼等のその欲求を尊重する、若し、彼等のさうすることが愚であるならば、自分は彼等と倶に愚でありたい』と言ふ意味の言葉を語つた一人の文藝家があつた。わたくしは、この意見の前半には滿腔の同意を表する者であるが、それの後半には全然反對する者である。(たとひ其れが總べての關係が彼等に依つて、十分に反省されないために、其れの意識が彼等に依つて到徹に理會されないにしても)、彼等は近世生活に强ひられるまゝに、尠なくとも、其れに對應して行くだけには彼等の生活を組織して居るに相違ない。それで、一時の衝動より彼等の生活の大部分より孤立し、若しくは、其れに逆行する或る種の信仰が彼等に依つて懷かれるならば、個人的に、社會的に、現在に於て矛盾を生ずるか、將來に於て悔恨を齎らすことになる。されば、眞に彼等の欲求を尊重するならば、彼等のために其れを醇化し、其れを整齊することが世の改革者たるも

のの任務であらねばならぬとわたくしは考へる。彼等の愚に同情して單に彼等と倶に愚であるに止まるのは、決して彼等の幸福のために講じて忠なるの道であるとは謂はれない。

近世人は民衆の欲求を尊重するに一つの特有な見地を發見した。是れは、概して古代人、若しくは、中世人の發見し得なかつたところのものである。古代人の、若しくは、中世人の民衆の欲求に對する態度は二つしかなかつた。其れは、彼等の欲求を壓迫するか、其等を放任するかであつた。然し、近代人はこの兩極端を避けて、その間に一つの中正なる態度を發見した。其れは彼等の生活の永遠の幸福を目安として、彼等の欲求を尊重しながら、否、最深義に於て、彼等の欲求を尊重するがために、其等を利導するといふことである。

二、信仰隆興の社會心理

堪能なる古生物學者は、彼れの精緻なる知識と、其れに依つて支持される彼れの豐潤なる想像力とに依つて、深き地層の中より堀り出される一片の枯骨から、正確に其れの屬した動物全體を再造するといふことである。若しわたくし共が現に營みつゝある生活の異なる部分の間に、普通人が意識して居るよりも一層密接な關係と一層微妙な交渉とがあるならば、今日、わが同胞の一部の間に、影を追ひ、響に應じて、流行しつゝある信仰隆興の事實からしてわが社會生活の疾患はいづれの邊に潜在するか。そして、其れの病症は如何なるものであるかを診斷することは、決して困難なことではないとわたくしは信ずる。

現存の事實に含まれた意義に據つて、わたくしの診斷した結果を、こゝに、端的に語るならば、わが社會の最大の、否、唯一の疾患は、わが同胞が正しき意義に於て、言ひ換へれば、現存の資力を合理的に、經濟的に、利用するといふ

意義に於て、全然理想主義を缺くところにあるのである。同一事實をも拗し敷衍するならば、彼等は近世文明の刺激に依つて、外形的に、衝動的に、情意に於ては解放されたが、若しくは、解放されることを欲求して居るが、まだ、内的に、道徳的に、理智に於てはその解放に相應するだけに、彼等の生活方針を改造して居らぬし、又、改造するに必要なる理會を有つて居らぬといふことに歸するのである。

彼等の生活の中に含まれたこの疾患は、彼等の生活をして不自然に、不經濟的に二分せしめ、彼等をして一方に於ては、平板なる現實に膠著しながら、他の一方に於ては、空靈なる幻想、若しくは、空想を追求せしめて居る。こゝに彼等の一部に於ては、たとひ短時日に止まる現象であるに定まつて居るとはいへ、宗教上の信仰の隆興を催し來たらざるを得ない。然し、わたくしの見るところでは、宗教上の信仰の隆興はこの事態を惡化することはあるとも、決して其れを、善化することはない。わが同胞の一部は正に木に緣つて魚を求めて居るのである。何故ならば、宗教上の信仰はそれの起原からしても、それの構成からしても、將た、過去の歷史に殘したそれの實績からしても、想像的に、抽象的に、感情の陶冶だけは爲し得るが、さうして陶冶されたる感情をして、理智に對して交渉を生ぜしめ、事實的に、具體的に、生活全體の改善を遂げ得ないことは明らかであるからである。

其の機會はどうであつたか、其の動機はどうであつたかを問はず、わたくし共が現に近世生活を營んで居ること、生死を賭してまでも其れを完成して行かなければならぬことは、何人と雖も否むことの出來ざる儼たる一大事實である。近世生活を古代生活、若しくは、中世生活に反襯して、それの特徴を一口に言つて見れば、それは、人間が想像的に、抽象的に、感情の陶冶だけに努力することに依つて幸福なる生活を實現しようとすることの効果の尠なきことを覺つて、事實的に、具體的に、情意の關係と、併せて理智の組織の改整を工夫するとに依つて一層優れて幸福なる生活を實現しよ

うとして居るところにあるのである。前の生活法は主として宗教の企てゝ居たものであつて、後の生活法は主として宗教より分派した、然し、其を洗練し、淨化して出來たヒユウマニズムと科學との現に企てゝ居るところのものである。

人間が生活するといふことは單一な事實である。それは、各個人が自分の欲望の間に、自分の欲望と他人の欲望との間に、矛盾を來たさないやうに、自然の勢力に應酬しながら其等を利用して、彼れの生活を持續して行くことである。蒼茫たる太古より今日に至るまで、人間が生活するといふことはたゞ是れだけであつた。今日より無窮の未來に至るまで、人間が生活するといふことはたゞ是れだけであらう。然し、之れを解決するために人間が用ゐ來たつた方便に就いて稽へれば、想像力に憑へて宗教の形に於て其れを爲した時代と、知力を藉りてヒユウマニズムと科學との形に於て其れを爲した時代との差別があつた。人間が批判し、反省しながら、生活して行つた間、結局、想像力に依つて生活するよりも、智力に依つて生活する方が、滿足を生ずることが一層多くして、悔恨を齎らすことが一層尠ないことを彼れは知つた。そこで、彼れは、彼れがだんだんに自覺と自由とを得るに隨つて、或る時期に及んで、宗教を棄てて、ヒユウマニズムと科學とを採ることになつた。

宗教に取つて代つたヒユウマニズムと科學とはさきに散漫に宗教の爲したことを一層正確に爲さんがために、交錯的に、塡補的に、其れを分擔することになつた。大體から言ふと、科學は自然の勢力に應酬しながら、其れを利用する方面を司り、ヒユウマニズムは自分の欲望の間の關係を整齊し、自分の欲望と他人の欲望との間の關係を整齊することを司ることになつた。然しながら、生活するといふことは、もともと、單一不可分の仕事である。啻く自然の勢力に應酬し、其等を利用して行くのには、自分の欲望の間の關係と、自分の欲望と他人の欲望との間の關係を整齊して行かなければならないし、又、自分の欲望の間の關係を整齊し、自分の欲望と他人の欲望との間の關係を整齊して行くのには、自

然の勢力に應酬しながら、其等を利用して行かなければならぬ。ヒユウマニズムは科學の存在を假定して始めて發達し、科學はヒユウマニズムの存在を假定して始めて進歩するのである。されば、若しヒユウマニズムにして科學化されないならば、それはヒユウマニズムとしての作用を失ふ如く、科學にしてヒユウマナイズされないならば、それは科學たるの職分を空うすることになる。畢竟するに、ヒユウマニズムは近世生活の體であり、原理であつて、科學は其れの用であり、發動である。近代生活の初頭に於いて、科學の創始者であつた者は、ダヴインチにしても、ベエコンにしても、下つては、ロツク、チデロオ、コンドルセエの徒にしても、悉とく、同時にヒユウマニズムの鼓吹者であつたのは、實を言ふと、彼等のヒユウマニズムの鼓吹者たらんがために科學の創始者となつたのは之れが一つの有力なる證左であらねばならぬ。

然し、專門化は往々孤立の傾向に依つて其れの本來の志向を裏切ることがある。ヒユウマニズムと科學とも、其等が年を閲するに隨つて、當初の約束を忘れて、各、孤立することになつた。ヒユウマニズムは科學化されないでヒユウマニズムたり得ると信ずる如く、科學はヒユウマナイズされないで科學たり得ると信ずるやうになつた。ヒユウマニズムも、科學も、事實に於てさうあつては一日と雖も存續することの出來ないことは、是等の各の起原と構成とに鑑みても明らかであるから、是等の各は、未だ曾て一日と雖も、實際に於て其の提携を絶つたことはない。然し、この事實の意識の鈍ると鈍らないとの間には兩者の提携のはたらきの上に多大の相違が生ずる。そして、現代生活に於てはこの事實の意識の鈍つた場合は確かに多くあつた。こゝに近世文明の惱みは生ずる。

ヒユウマニズムと科學とが、各、その提携の意義を忘れた時、兩者は同程度の損害を受ける。然し、外面上その損害を受けるのはヒユウマニズムだけであつて、科學ではないやうに見える。科學はヒユウマニズムを凌駕して自由の天地

に横行濶歩することになるが、是れが科學の受ける最大なる損害であるのである。

斯くして善良なる忠言者より離れた科學の活動は沒反省的に、沒批判的に、一側面に馳せて、自づからおのれの職分を卑下して、其れの本來のものの半分以下に極限するやうになる。そして、『欲望を滿たす方便を案出し、準備することだけが自分の職分である。其れを如何に安排し、整頓するかに至つては自分の全然關知しないところである』といふことになる。さうなつて來ると、當然、ヒユウマニズムと科學とに依つて滅ぼさるべき運命の下にありながら、猶ほ纔かに過去の惰性に依つて、人間の生活の暗黒面に隱れ、其れの餘勢を保つ迷信に翻弄され、擅制に虐使されることになる。輕薄なる世人はこの有樣を見て、輕卒にも科學の志向と功績とを忘れて、一概に生活改造の道具として科學の無力を指摘するだけならばまだしも、進んで其れの殘忍性を指彈しようとするのである。

わたくし共日本人は四圍の壓迫より死活を賭して近世生活を營むやうに强ひられたのである。わたくし共はどんなことをしても自分の力量に依つて其れを完成せねばならぬ。然し、わたくし共の採用した近世文明は提携の意識を失なつてやゝ孤立に陷つたヒユウマニズムと科學とより成り立つて居た近世文明であつた。そして、目前の焦眉の急を救ふがために、わたくし共の無經驗と不聰明とより、時としては、故意にヒユウマズムを排斥して、科學だけを取り入れようとしたのであつた。この事實からして、わが國に於てヒユウマニズムと科學との疎隔はヨオロッパに於ける其れよりも一層甚だしきものがある。ヒユウマニズムと科學とは其等が懸隔したまゝにわが國に輸入されたにしても、其等がわたくし共の生活の組織に入つた後、わたくし共の生活に特有の事情より其の懸隔の性質が變更され、增張されたならば、其の懸隔を一掃して兩者の提携と其れの意識とを回復することは直ちにわたくし共に與へられた意味に於て近世文明を[illegible]し、完成する唯一の道であつて、如何なる方法に依つて其れを成就するかは獨りわたくし共の獨自に特有に解決し

なければならぬ問題である。

この見地よりすれば、科學もさうであるが、特にヒユウマニズムに至つては、わが國に獨自の、そして、特有なる地理と、歷史と、實際の必要とから制限され、涵養されて成長したわたくし共の國民性に依つて醇化され、醇化されなければならないものである。さうされて始めて眞の意義に於てわたくし共のヒユウマニズムと言はれ得るものになるのである。さうして始めてヒユウマニズムも科學も適切にわたくし共の生活に役立つものとなり、又、更に新たに役立つものを產出することが出來るのである。

然るに、今、わたくし共の手にある近世文明、即ち、ヒユウマニズムと科學とはまだ風土化され、國民化されて居ない。わたくし共は其れから十分な滿足を得る筈はない。わが同胞は必要上近世生活を營みながら、そこに、必然に、專念其れに沒頭し切れず、全心其れに悅服し切れない或る不合理素（surd）が殘る。そして、弱き者、愚かなる者にあつては、實驗的に、合理的に、この不合理素を溶解する方法を有たぬ。彼等は超越的に、不合理的に、（たゞ想像に於て）之れが溶解の方便を信仰の樣式の中に求めることになる。こゝに信仰隆興の起緣がある。

三、汝自づからを知れ

中世紀を通じての道德の特徴は其れが宗敎的であつたことである。近代を通じての道德の特徴は其れがだんだんに（正しき意味に於て）政治的となつたところにある。そして、人間の根本性情からして、是れは確かに正しき經路であつた。然るに、わが國に於ては、萬般の急迫せる事情はわが同胞をしてますます彼等の道德を政治的にさせなければならなくたつて居るのに、彼等の或る者は（其等の中には前途有望なる青年の多數をも交へて）今、新たに彼等の道德を

宗教的に引き戻さうとして居るのである。何たる時代錯誤の所爲であらう。

わたくしは宗教上の信仰の欣求者に告げたい。『諸君が信仰を抱擁することより或る種の滿足と悅樂とを得ることをわたくしは疑はない。然し、それは幻想より來たる滿足と悅樂とである。幻想より來たる滿足と悅樂とは一度冷酷なる現實の前に立つ時には、倏ち消散して了ふ。其の後に來たるものは、さきの滿足と悅樂とに倍蓰する不滿と悲哀とでなければならぬ。それであるから、諸君は現實の改造より來たる滿足と悅樂とを味はふために、現實の改造を唯一の目的とするヒユウマニズムと科學とを採用せねばならぬ』と。

わたくし共はカアライルの忠言に從つて、美しき理想を追求するために、醜き現實を卑んではならない。何故ならば、如何に醜くとも現實を外にして眞に理想を實現する材料は一つとしてあり得ないからである。若しわたし共にして正しく現實を視、聰明に其れを取り扱かひさへすれば、理想は既に現實の中に含まれて居、理想の中にはたらいて居るのである。正しく現實を視、聰明に其れを取り扱かふといふことは、わたし共の置かれた境遇と、わたくし共の有てる才能とを正しく視、聰明に取り扱かふことである。こゝにわたくし共に取つての最上の智慧が見出だされる。是れを稱して最も含蓄ある意味に於て自己省察の智慧といふのである。嘗てソクラテイスが彼れの同胞なるアテンス人に向つて、彼等の中に惹き起さうとした智慧も、この自己省察の智慧であつた。

わたくしの考へるところでは、今日に於て個人として、國民として、わたくし共の有り得る最高の義務はわたくし共の置かれた境遇を正しく視、其れに對應するためにわたくし共の有てる才能を聰明に取り扱かふことである。否、この一事を外にして、他にわたくし共に取つて一つの義務もあり得ることは考へられない。さうして、始めてわたくし共に取つて優れた政治も、產業も、道德も、藝術も、學問も成り立つ見込みがある。されば、わたくしからすれば、如何な

る方針でも、如何なる敎義でも、如何なる主張でも、はた、如何なる表現でも、其れの價値はこの一事を成就することに與つてどれだけの貢獻を爲して居るか、又、爲し得るかを標準として決定されるのである、決定されねばならぬのである。されば、刻下流行の宗教文學も、其れの最後の價値としてこの標準に依つて決定されることは、わたしからすれば、當然過ぎるほど當然の事柄である。

刻下流行の宗教文學にどれだけの長所があるか、將た、どれだけの短所があるか、近世生活を營む覺悟と準備との上に、どれだけの光明をわたくし共に與へるか、或は、どれだけの暗黒をわたくし共に投ずるか。わたくしは其等の一切をこの標準よりして考索し、批判して見たいとおもふ。

二、理　論

一、宗教に對するわたくしの態度

以上の所説からして、わたくしが如何なる標準に依つて刻下流行の宗教文學の價値を決定しようとして居るかは、略、明らかになつたと考へる。然し、個々の著作に就いて、それぞれ、其れの異なるメリツトとデメリツトとを指摘するに先立ち、尙ほ一つの準備が必要であるやうに思はれる。それはわたくしの宗教觀に關する一般的叙説である。

わたくしとしても、ロオマの詩人テレンスと倶に、『自分は總べて人間的であるものに對しては無關心でありたくない』と言ふだけの雅量と博愛とは有つて居るつもりである。宗教といふものが、わたくし共の祖先がまだ其の叡智に於て曖昧であつたに拘はらず、その意欲に於て極めて强烈であつた時代に方つて、彼等の生活に尠しでも幸福と安心とを齎らさんがために、彼等に依つて眞劍に工夫されたものである以上、わたくしは彼等が宗教を工夫するために、彼等が

どれだけの苦勞をしたか、どれだけの辛酸を嘗めたかを想像する時、宗教に對してわたくしの心の中には沛然として敬虔の念が生じて來る。わたくしの頭はおのづから其れの前に垂れるのを覺える。

いみじくも或る一人の經濟學者が喝破した如く、過去に於いてわが種族の活動は主として三つのものに依つて分割され、支配されて居たのであつた。其等は戰爭と、産業と、宗教とであつた。其等の中でも、(彼等の想像の上で)彼等にまで最も堅固な安心と、最も甚深の滿足を與へたものは宗教であつた。この點から見て、何が人間的であると言つて、善い意味に於ても、悪い意味に於ても、宗教ぐらゐ人間的のものはあるまい。わたくしにして人間の種族に屬する一人であり、其れの運命に服さなければならない一人である限り、斯くまでに人間的であるものに對してどうして無頓着であり得ようか。

然し、人間は悠久に存在する。彼れの理想の樣式は變化する。隨つて、人間の幸福を増進することは不變の問題であるが、之れが方便となるものゝ構成に就いては絶えず改整の考慮が施されねばならぬ。尤も人間の理想の樣式が變化すると言つても、それは嶄新するのではなくして、漸遷するのであるから、昨日まで有効であり、有價値であつたものが、今日、急に無効になり、無價値となるといふことはない。例へば、美術の樣式に就いて言つても、彫刻は古代人の美術であり、繪畫は中世紀の美術であり、音樂は近代人の美術であるとすることには十分の理由はある。然し、現に今日に於いて彫刻も、繪畫も、音樂と併んで行はれ、そして、それぞれ、相應な鑑賞家を引き付け、彼等に相應な滿足を與へて居るやうなものである。又、現代の社會を民主主義の社會と呼ぶのには十分の理由はある。然し、仔細に其れを分析すれば、其の中には擅制主義も貴族主義も含まれて居る。されば、コムトの指摘した人類進歩の三段階に相當な理由はあるとしても、あれは、たゞ傾向を言ひ表はしたものであつて、劃然たる限界を言ひ表はしたものでないと解釋し

ないならば、多くの誤謬はそれより生ずるであらう。

これだけの用心は必要であるとして、わたくしは人間の理想の樣式の變化するにつれて、其れの機關として過去に於て構成されたあらゆる習慣や制度の間に價値の消長のあることを認めないわけに行かぬ。この事由から、如何なる場合に於ても、正しく人間の生活を理會し、適切に其れを取り扱かはうとするならば、靜的の見方を棄てて、動的の見方を取ることが大切なことになる。若し音樂が特殊の意味に於て現代人の美術であるといふことが事實として歸納的に證明され得るならば、現代人に取つては音樂が彫刻よりも一層價値あるものであつて、彫刻そのものまでが音樂的になる程度に隨つておのれの存續を保障し得るのである。若し現代人の社會が、特殊の意味に於て民主主義のものであるならば、その間に取り殘された專制主義も、貴族主義も、民主主義に適合するやうにおのれを改善することに依つて、始めておのれの存續を保障し得るわけである。

わたくしは無數の現存の事實のはたらき振りと意義とより歸納して、現代人の生活方便はヒユウマニズムと科學とであると斷言するに躊躇せぬ者である。わたくしの現代人の生活方便はヒユウマニズムと科學とであると言ふ意味は、實驗の精神と方法とに依つて實際にそこにある總べての個人を出來るだけ聰明に、自由にすることを理想として居るといふことである。さうすると、あらゆる機關と等しく、宗教もこの理想に適合するか、どうか、適合するといふならば、どの風に、どれだけの程度に適合するか、どうかといふ事實に依つて、批判されなければならない。

今日宗教の信奉者と支持者とは、ウヰリアム・ジエムスが清新の思想家として信仰の擁護を試みたと言つて、彼等は恰も鬼の首でも取つたやうに喜んで居る。あの『信ぜんと欲する意思』は彼等に依つて金科玉條と見做されて居る。なる程、一見したところ、彼れとしては、自然科學の領域と宗教の領域とは全然異なるところにあるのであるから、自

然科學の證明に依つて信仰の對象の存在を否定することは出來ない、といふことだけは巧みに論じ、そして、或る程度にまでは其れに成功して居るやうである。然し、わたくしからすれば、宗教の性質を論究するに方つて、前に宗教を工夫し、後に科學を工夫した人間の生活そのものと宗教との關係に對しては、彼れの考察は確かに不徹底であり、不親切であつた。つまり、彼れは宗教を棄てて新たに科學を取つた現代の社會生活一般に對して、信仰の鼓吹が如何なる影響を齎らすべきかを彼れの考案の外に逸して居るのである、彼れは彼れの『宗教經驗の種々の型』に於て、或る信仰の樣式はどんなに狂亂のものであり、不合理のものであつても、社會生活に及ぼす其れの結果が有利である限りは、其等の信仰は是認さるべきものであると言つて居る。然し、わたくしの見るところでは、或る時期に於て、或る信仰が狂亂のもの、不合理のものと見做さなければならぬならば、結局、當時の社會一般に及ぼす其れの結果が有利であり得る筈はない。畢竟するに、信仰に關する彼れの見解は具體的のものではなくして、（彼れの最も嫌つた）抽象的のものであつたとせねばならぬ。

宗教上の信仰の價値に關して、わたくしは別に一つの地歩を占めようとする者である。

プルウタスの言葉に倣つて、宗教に對するわたくしの立場を一言に約するならば、それは『わたくしが宗教を愛することの寡ないためではない、人間を愛することの更に多いためである。』

二、宗教の起原と進化

若し、人あつてわたくしに對つて、簡單なる方法に依つて人間が生に執著することの强さの極限を示すようにと求めるならば、わたくしは何物よりも先に宗教の起原の説明を以て、これに應じようと思ふ。實に、人間は幸福を實現する

に必要なる方便の見出だされるのを待たないで、否、其れを見出だすことを努めないで、端的に、幸福を享樂しようとするくらゐ強く生に執著したのである。

原始時代に方つて、人間が彼等の生活を持續するために、彼れの最も苦心したのは、如何に自然の勢力に順應しながら其等を利用して行くべきかといふことであつた。然し自然の勢力には、後來彼れの苦き經驗が十分に證明した如く、それぞれ人間の單なる我儘では左右出來ない或るはたらきが含まれて居る。このはたらきを見出だすのには、多年の克己と忍耐とを以て爲される觀察と實驗とを必要とするが、原始時代に於ける人間はそんな手數を費やすことが出來なかつた。そんな手數を費やすだけの智力の訓練も、時間の餘裕も有たなかつた。彼等は欲求の起るまゝに、端的に、自然の勢力を利用しようと考へた。それでは、彼等は實際にどう振舞つたか。自然の勢力との接觸に於て、彼等が彼等の情緒の上に體驗したものを、直ちに自然の勢力そのものの性質、若しくは、はたらきとしたのであつた。忠實に事實を語るならば、彼等はさうするまでもなく、彼等にはまだ智力と感情との分化なく、主觀と客觀との區別はなかつたから、彼等の體驗した情緒は、卽ち、存在であつたのである。神はおのれの形に似せて人間を造つたといはれて居るが、その實は、人間の形が直ちに神であつたのである。斯くして太陽は慈愛の神であり、嵐は怒りの神であつた。啻に直接の情緒が神であつたに止まらず、彼れの意欲の發動よりも亦多くの神が出來た。五穀が彼れの生活に必要ならば、そこに穀物の神があり、金錢が彼れの生活に必要ならば、そこに金錢の神があり、家畜が彼れの生活に必要ならば、そこに家畜の神があるといふ風に。かういふ風にして土地を守護する氏神、航海を守護する水神、竈を守護する荒神等、殆ど多數の神々が出來た。その後になつて、人間が經驗と反省とを積んで來ると、さきに斷片的であつた、若しくは、斷片的と見えた彼れの情緒と意欲とは、それまで潛在して居た其等の意義の發動に依つて、だんだんに相互の間に、組織と統一と

が成立つことになつた。さうなると、この經過に相應して、其等の象徴たる神々もおのづからだんだんに組織され、統一されることになつた。そして、其等の神々は合併されて、一つ、若しくは、二三の神が工夫されるか、或は其等の神々をそのまゝにして置いて、其等を主宰する一つ、若しくは二三の神が工夫されることになつた。いづれの場合に於ても、新たに工夫された神は人間の情緒、若しくは、意欲の象徴として、どこまでも彼れの性格に於て人間的であつた。例へば、わたくし共が知る如く、ユダヤの種族神たるエホバは世間的にアブラハムの後裔だけの繁榮と、繁殖とを圖り、彼等を取捲く他の種族に對しては、常に惡意と敵意とを抱く神であつた。彼れの寵民たるユダヤ種族に對してさへも彼れは狹量で、殘酷で、怒り易く、嫉妬深いことは、當時の人間と些しも異なるところがなかつたのである。

如何なる民族に屬するかを問はず、概して言へば、原始時代に於ける人間は悉く斯かる人間らしく、氣むづかしき神の守護の下にあつたのである。彼等の幸福の保障を得るために、捧げ物や、犧牲や、祈禱の儀禮を案出したるに何の不思議もない。捧げ物は自分の收獲の一部を取りて、其れを神に捧げて、彼れの嫉妬を防ぐためであり、犧牲は牛羊の美肉を以て彼れを饗し、さうして彼れの甘心を買ふためであり、祈禱は自分の願望を彼れに愬へて、其れの實現に向つて彼れの助力を乞ふためであつた。然し、實際に於て、かゝる手段に依つて果して彼れの幸福は保障されたか。果して彼れはあらゆる困窮と、災厄とから逃れることが出來たか。無論、さういふことはなかつた、さういふことのあるべき道理はなかつた。時としては、凶作も來たる。時としては、惡疫も流行する。時としては、他の民族と戰爭して敗北もする。其の他、種々の天變地災の生ずるのを免かれない。

一つの困窮、若しくは、一つの災厄が起る度毎に、民衆は彼等の神に捧げ物や、犧牲や、祈禱をなすことだけが、眞に神の恩寵を受ける道であるか、或は、是等の外に、他に一層優れた道がありはしないかと漠然ながら疑ひ始めた。こ

の民衆の漠然たる疑惑を見て取つて、其れを啓明して其れを一つの忠言となし、神の意思の代表者として、猛然起つて彼等に宣告したものは當時の先覺者たる豫言者であつた。『この困窮は、この災厄は汝等の神から汝等の罪と心の穢れとに對して、汝等に下し給へる罰である。されば、汝等にして再び汝等の神の恩寵に浴さうとするならば、汝等はまづ汝等の罪を悔ひ、汝等の心を潔くせねばならぬ。汝等がさうしない限りは、どんな捧げ物も、どんな犧牲も、どんな祈禱も汝等の神は決して嘉納し給はぬであらう』と。かゝる忠言を與へた豫言者は時の要求に應じてかはるがはる起つた。

その感化に依つて、民衆の神に仕へる方法は、言ひ換へれば、彼等の欲望を整頓する方法は、だんだんに外形的より内面的のものになつて行つた。斯くして、儀禮的であつた宗教は精神的のものと變形したのである。然し、こゝにわたくし共が十分に考へなければならないことがある。成る程、人間は彼れの欲望を整頓しないために、即ち、彼れの不道德なるがために、彼れの生活の上に或る種の困窮と災厄とを招くことは疑はれない。然し、彼れがこの天地の間に生息して行く中に、彼れの生活の上に降りかゝる總べての種の困窮と災厄とは果して全然彼れが彼れの欲望を整頓しないためから、即ち、彼れが不道德であるがためからのみ生ずるのであらうか、といふことである。例へば、惡疫が流行するとか、饑饉に出逢はせるとかいふことは無論のこと、强國の兵に襲はれて敗北するといふが如きも、全然、その結果を民衆が不道德であるの一事に歸すべきではない。隨つて、それより來たる困窮、若しくは、災厄を取り除くには、彼等の欲望を整頓するより外に、他に一層適當な方法を講じなければならない。然し、彼等はその眞理に氣付かなかつたのである。彼等は一切の幸福は欲望を整頓するだけで十分であると想像して居たのである。

宗教が儀禮的のものより精神的に變形したのは、一段の進歩であるといふことはわたくしとても認める。何故ならば、さうしたことに依つて、欲望の整頓は、比較的に言つて、外形的より内面的になつたからである。然しながら、わ

たくしは世人がなすほどに兩者の間に相違のあるのを認めぬ者である。宗教が禮儀的のものより精神的のものに變形した時に、一つの極端よりその極端に走つたが、之れがために兩方に共通の弱點は尠しも取り除かれなかつた。兩方に共通の弱點といふのは、餘りに端的に、無雜作に、生活の改善を圖らうとする結果、智力に依つて事實の組織を改整することを怠り、たゞに想像力に依つて氣分を更改することのみを努めて、其の目的を實現しようとするところにあるのである。生活を改善する態度に於ては、儀禮的宗教も、精神的宗教も全然同一である。たゞ兩者の相違するのは、兩者に依つて其れが向けらるゝ方角だけである。儀禮的宗教は魔術を通して無雜作に自然の秩序を變更しようとし、精神的宗教は瞑想に頼つて端的に性情の構成を變更しようとする。儀禮的宗教の執著したあの世間的處世法は、一度其れの目的が破れた時には、世人が皮相に想像するよりも遙かに容易に、遙かに自然に、精神的宗教の皷吹する出世間的人生觀となるのである。この事實よりして、儀禮的宗教の裏返へされたものが、そのまゝ精神的宗教であると觀るのは、極めて至當な見解であらう。されば、キリスト教徒が、外觀上非常に異なつた教訓を含む新約と舊約とを一つの連續體としてゐるのには信者の本能がそれにはたらいて居るからである。

わたくし共は儀禮的宗教より、精神的宗教への變形の過程を繹ねる時、宗教そのものに對して、人間が取つた態度に大なる變化の生じたことを見逃がしてはならぬ。それは、中世紀の錬金術の失敗が近世の化學の濫觴をなしたやうに、儀禮的宗教の精神に依つて行はれたいろいろの儀式と秘傳とは其の當面の目的に於ては當然失敗であつたが、其れの偶然の所得として、人間をして自然の勢力と、人と人との關係との眞相に關してだんだんに、尠しづゝではあるが知見を得せしめたことである。是れが當時ほんの『手より口へ』の貧弱なる基本を以てはたらいて居た常識にはたらきかけ、其れを豐富にし、正確にしたことは甚大であつた。この感化の下に、常識は次第に生活の道具として有力なるものとな

り、産業や、藝術や、科學や、道德の萠芽にまで分化して行つた。或る民族に於て彼等の實驗的氣質が旺盛であれば、あるだけこの傾向は速に發達し、この傾向が速かに發達すれば、するだけ、彼等の日常生活と其れの道具としての宗教とは疏遠になつた。經濟學者のヴェブリンも彼れの『工作の本能』の中で、日常生活に關して、早く宗教上の儀式を脫した民族の間に於て、産業は早く發達したが、晩くまで其れの束縛の下にあつた民族の間に於ては、産業は晩くまで幼稚の程度に止まつて居たといふ意味のことを語つて居る。かういふわけで、健全なる、言ひ換へれば、實驗上の效果に依つて生活の發展を圖つて行つた民族にあつては、宗教が儀禮的のものであつた間は、それは衣食の必要品として彼等の生活の大部分を支配して居たが、其れが精神的のものとなつた後は、それは僅かに其れの一小部分感情の贅澤品たることになつた。精神的宗教の尊重し、高調する特殊の人生觀の特徵は、僅に日常生活の道具としての産業や、藝術や、科學や、道德が存在し、そして、十分に其の役目を滿たして居るといふことが、假定されなければ到底說明出來ないものである。この事實を假定して、始めて、その人生觀が如何にしてあのやうに非現實となり、不合理的となり得たか、又、何故にさうなつて居るがために、其れが生活を深化し、淨化するに獨異の效力あるものとして、或る種の人々から熱烈なる渴仰と欲求との對象とされて居るかといふことが說明出來るのである。

三、宗教の本質

宗教の本質は何んであらうか。何を以て其れの根本思想と見做すべきであるか。一口に宗教と言つても、其れの起原に於ても多種であり、其れの發達に於ても多岐に分れて居る。其れの一つの系統に就いて言つても、其れの所說は一見したところ多枝多葉を極はめて居る。されば、宗教の本質の何んであるか、其れの根本思想の何んであるかを語ること

は容易な業でないやうに思はれる。然し、わたくしは十分なる事實に依つて、其れは人間の要求を根柢として宇宙の事件の一切を解釋しようとするところにあると斷言しようと欲ふ。是れは自然の法則に關して、わたくし共が事實として受け取つて居る見解に超越するところのものであるから、超自然主義と呼ばるべきものである。又、是れは人間の運命を宇宙の中心に置き、宇宙は彼れの幸福のために存在し、彼れの欲求の赴くまゝにはたらくとするものであるから、擬人間主義と呼ばるべきものである。あらゆる宗教に於ては、人間の要求を根柢として宇宙の事件の一切を超自然的に解釋しようとすることから、其れの賞罰觀を生じ、其れの救拯觀を生じ、其れの靈肉觀を生じたのである。して見ると、わたくし共が現に個人的に、社會的に營んで居る生活の組織と理想とを標準として、宗教が憑つて立つ超自然主義と、擬人間主義とを批判することに依つて、わたくし共に取つての宗教の價値は決定されるやうに思はれる。

宗教の世界觀を批判するに先立ち、念のため極く簡單になりとも、便宜上、わたくしの人生觀の輪廓を暗示して置かねばならぬ。

實を言ふと、一個のヒユウマニストとし、理想主義者として、わたくしも、亦、或る意味に於ける人間中心主義を取る一人である。言ふまでもなく、人間がこの宇宙の間に生れ、其れより來たる刺戟に順應しながら、其等を利用して、彼れの生活を持續して行つて居る以上は、宇宙と人間との間には交渉の成立つ或る根柢がなければならぬ。然し、宇宙は、其れがあるまゝに、それの總べての部分を通して、人間の欲求する通りに組織されても居らないし、はたらいでも居らない。人間の幸福の立場から全然合理的の宇宙は出來上つて居るものとして發見されるものではなくして、これから先き、彼れの努力に依つて作り出さるべきものである。人間は彼れの意思を實現する方便として知識を工夫した。されば、彼れは彼れの智識をヴエヒクルとして、始めて宇宙を理會し、其れを取り扱ふことが出來るのであるから、彼れの意識

に上る現在の宇宙は人間的の要素を以て滲透されたものである。然し、人間の知識と意思とに依つて征服されない其れの部分は、全然暗黒であり、不合理である。そして、如何ほど人間が自分の爲に棲みよい世界にしようとして、彼れの知識と意思とに依つて其れを征服して行つても、後から、後からと暗黒であり、不合理である側面は生じて來ることが事實であるから、若し、嚴密なる意味に於て宇宙を理想的のものとするならば、其れは人間の理想に依つて征服された限りに於てさうであるのである。彼れの理想の感化の及ばないところは、全然盲目的の物質であるとせねばならぬ。さうして見ると、善とか、愛とか、調和とが、完全とか言ふことは、宇宙そのものに與へらるべき形容詞ではない。

昔、プレトオは先きに理想の世界があつて、其れが墮落してわたくし共が現に見る如き世界が出來たと言つた。が、彼れは人間の一人として、どこからそんな不思議な經覺を得たか。あれは、實際に人間社會にはたらいて居た道德關係を抽象し、醇化した後、それを客觀に投射して出來た世界である。されば、其れは前進的に、未來に於て構造さるべき世界であつて、溯源的に過去に於て見出ださるべき世界ではない。若し、プレトオの言ふところのものを文字通りに受け取るならば、どうして、そんなに完全であつたものが、この苦しみ多く、悩み深き世界にまで物好きにも墮落したか、何時までも完全に止まつて居たならばよかつたではないか、といふ疑問が生ずる。プレトオと雖も、この疑問に對して到底滿足な辯解は出來ないとわたくしは信ずる。

さうして見ると、人間が安全に語り、又、語り得る自由を有つことの出來るのは、獨り彼れの過去の經驗が敎へるものと、其れよりわたくし共が推理し得るものとに限られねばならぬ。カントは認識の對象の外に、思惟の對象の存在の可能を許し、認識の對象は其の中に感覺の要素を含まなければ成り立たないが、思惟の對象は其の中に矛盾さへ含まなければ成り立ち得ると言つた。然しながら、彼れの謂ふところの思惟の對象も、其の起原に溯れば、過去の或る時代に於て、

人間が彼れの法外な要求を滿足させるために、想像力に依つて認識の對象より勝手に捏造して出來たものであることが解かつたならば、其れは到底認識の對象と對立する資格はないものである。あれほどまでに嚴密に認識の對象たり得る條件を制限して置きながら、便ち無雜作に、原始人の迷信に依つて空想されたもの――自由の觀念は兎に角として、神や、靈魂不滅の觀念までもの――妥當性を許すといふのは、辻褄の合はぬ話ではないか。彼れは結局當時の頑迷なる宗敎や僧侶の怒りを恐れたのであらうか。或は一個の素朴なるパイヤティズムの一信徒として、祖先傳來の信仰の束縛を脫することが出來なかつたのであらうか。わたくし共は、經驗の意味に就いてカントに學ぶところがなければならぬ。然し、彼れの『純理批判』に於ても最も大なる弱點と、最も驚くべき詭辯とに滿ちた、思惟の對象に關する彼れの擁護に對して、彼れを超越せねばならぬ。

わたくし共の經驗の敎へるところと、其れよりわたくし共の推理し得るところに隨つて、徹底的に考へて見れば、わたくし共が、眞に、根本的に價値を置いて居るのは、たゞ生きると言ふことにだけである。然し生きるにも、幸福に生きるのと、不幸に生きるとの差別は確かにあるから、幸福に生きさせる方便は善とせられ、不幸にしか生きさせない方便は惡とせらるゝに至つた。そして、愛は幸福に生きさせる方便の總べてではないが、其れの最大要素であるから、善の大なるものとせられ、憎は不幸に生きさせる方便の總べてではないが、其れの最大要素であるから、惡の大なるものとせらるゝに至つたのである。そして、調和は幸福なる生活の構成であり、矛盾は不幸なる生活の構成である。斯くして、幸福を增す行爲は其れを奬勵するために功として賞せられ、幸福を傷ける行爲は其れを豫防するために罪として罰せらるゝに至つた。して見ると、愛憎、善惡、調和、矛盾、功罪、賞罰等は悉く人間と人間との間に於て見出だされる事實、若しくは、構成される關係であるから、全然、人間的である。人間的であるに限らるべきである。人間に取つ

ての最大目的は、自分の生活のために、隨つて、他人の生活のために、出來るだけ幸福を增し、不幸を減ずることである。そして、これは一夜の襲擊に依つて占領さるべきものではなくして、產業や、藝術や、科學や、政治や、道德の手段に依つて、無期限の持久戰に依つて實現さるべきものであつた。

わたくしの人間觀のわたくしに告げるところのものは、大體、こんなものである。

宗教は、其れが儀禮的のものより精神的のものにまで變形しても、其れが宗教である限りは、自分の欲望のはたらきや、社會生活のはたらきを二分して、其等に就いて、支配し、統一する要素、若しくは、側面を神、若しくは神的とし支配され、統一される要素、若しくは、側面を人間、若しくは、人間的とする考へ方を脫することは出來ない。それで、さきに擧げた愛憎、善惡、調和、矛盾、功罪、賞罰、救拯等を勝手に、非論理に、神の性質と、人間の性質と、兩者の關係とに分割し、分配したのである。そして、之れに加味するに、生に對する盲目の本能の所產たる未來性の觀念を以てした時に、其れの神人關係觀を生じ、其れの靈肉觀を生じ、其れの賞罰觀を生じ、其れの救拯觀を生じたのは、別に驚くに足りないことである。

然し、わたくしの問はんとするところは、もともと、人間と人間との關係としてのみ、始めて意義があり、完成の可能性のあるものを、斯くの如く、大げさに、劇的に、宇宙と人間との關係に置き換へた時に、どれだけ人間の幸福が增されるか、どれだけ人間の生活の改造に便宜が與へられるかといふことである。

ジョン・スチュワアト・ミルは擅制政府がおのれを維持するために其の子弟を教育するといふことは矛盾である。何故ならば、擅制主義と教育とは元來一致しないものであつて、教育された子弟は何時か其の擅制政府を倒すことになるからと言つた。成る程、教育の種類に依つては、一時、靑年の心の發達を鈍らせ、其れの光りを曇らすことが出來ないも

のでもあるまいが、教育一般なるものは、其の本來の性質からして、人間を啓蒙して、だんだんに、彼等をして經濟的に、合理的に生活せしめるやうにするものだとすると、ミルの意見は正しいものとせねばならぬ。ジエスイットの學校がジヤン・ジヤツク・ルウソオを出し、ロオマ舊教の僧院からマアテン・ルウテルの現はれたのも、是れが一つの證據にはなる。宗教の信奉者、若しくは、支持者にして眞に其れの權威と効果とを維持しようとするならば、彼等の取るべき道は唯一つしかないやうに思はれる。それは、生活と其れの機關の總べてとを、宗教が人間の要求に應じて發生し、隨つて、其れが全心を以て彼れに依つて尊信された時代にまで引き戻すことである。さうでなくして、一方に於ては、生活の道具として宗教が不備であり、不合理なものとなつたために、其れに取つて代はつた政治や、道德や、産業や、科學を利用しながら、他方に於ては、其れ等と併せて宗教を信奉し、支持しやうとするのは、餘りに矛盾した所爲であるとせねばならぬ。實際に其等のものを生活の機關として利用して居る以上は、既に、事實に於ては、宗教の權威と効果とを否定して居るのである。たゞたゞ、彼等にはこの理屈が解らないために、空しく形式に於て、宗教の功德を諷誦して居るのである。

人間に取つて彼れの生の欲求はあらゆる價値の根源である。出來るだけ其れの價値を增すために、彼れは其れの機關として先に宗教を工夫し、既にして其れの効力が尠なくして、其より來たる障害の多いことを覺つて來た時に、其れに代へるに政治や、道德や、産業や、科學を以てしたのであつた。それであるから、彼れが生活に價値を認める間は、さきに彼れに依つて宗教に與へられた價値は、今は一層深められて是等のものに移つて居るに相違ない。さきに宗教に對して示された熱心と、其れの宣傳のために費やされた精力との大部分の、今是等のものに對して示され、是等のものの完成のために費やされて居るのを見ても解かると思ふ。

現在の社會生活と社會狀態とに於て、宗教の信奉者や支持者がして居るやうに宗教を鼓吹して居る時には、わたくしはいつか彼等の上にジスイルウジョンの襲ひ來たる期のあるのを畏れる者である。ジスイルウジョンは譬へやうなく淋しく、悲しいものである。わたくしはわが同胞をして其の淋しく、悲しいジスイルウジョンを味はしめたくないために。溫和なる手段に依つて、生活に對する彼等の評價の標準と方角とを轉換して行かうとして居るのである。

三、批判

一、宗教文學是非

先きに、わたくしは現時信仰が流行するに到つた社會心理と認めらるべきものに對して、詳しく考察を費したのであつた。そして、其れをわたくし共の現に營みつゝある社會生活に著しき缺陷があるがために、わたくし共の或る者の要求の總べてが滿たされずして、そこにおのづから或る surd、即ち、不合理素の起る事實に歸したのであつた。この surd 即ち、不合理素は加速度の性質を有つて居る。其れが或る風に正しく溶解されなければ、其れはたゞ生活に不滿と不安とを增すだけである。それでは、如何なる方便に依つたならば、正しく其れを溶解することが出來るかといふことが問題となる。

わが同胞の中の或る人々は、正しく其れを溶解する方便としては（最も廣義に解釋して）たゞ宗教があるだけだと考へて居るやうである。この考慮からして、彼等は、それぞれ、自家の所信を實行に於て、言論に於て、宣傳して居る。そして、彼等は、それぞれ、若干の歸依者と渇仰者とを有つてゐる。わたくしの知り得る限り、彼等は悉くその品性に

於て高潔であり、その志に於て殊勝な人達である。ただ彼等の所信と、所説と、所爲とが果して現代社會の病弊に適中し、其れを匡正するに機宜を得たる方便であり得るかどうかに至つては、わたくしは大に疑を挾まざるを得ない。なる程、彼等の接觸するこの個人、あの個人に就いて言つたならば、或る一時に方つては、或る風には、其等が彼等に慰安を與へ、或は改悛の機會を與へて居ることは確かにあらう。そして、事實、其等がさうして居るとしたならば、誰れ一人として彼等の事業を非難し、彼等の功績を疑ふ者があらうか。何故ならば、この世の中に於て、一人の悲める者を慰め、一人の望を失なつた者に望を與へるといふことは、極めて貴重な業であるからである。然し、わたくし共にして、一度、深く人間の性情の本質と、彼れの生活の本義を究めた上、汎く現代人の理想の基調と、現代生活のはたらき振りの趨歸を察する時是等の指導者の抱く見解に從つて、其等の人々が用ゐる手段が用ゐられる結果は、個人に對し、社會に對して一惡を除くことが一善を增すことだけに止まならないで、反つて、彼等の豫想しないところに、彼等の豫想し得ない程度に、（たとひ彼等は其れを惡と認めないにしても、）一層大なる惡を作ることとになり、或は、其れが直ちにさういふことをするに到らないにしても、一層大なる惡を釀す機緣となることをわたくしは恐れる者である。こゝに至つて、彼等の志向に對しては敬服して止まざるわたくしも、彼等の用ゐる手段に關しては反對せざるを得ないのである。

『思想は人を導いてアレナに戰はしむ』とハイネは言つた。微弱なりと雖も、わたくしも、亦、現代の社會生活の改造に志ある者の一人である。彼等の所信や、所説や、所爲が、わが同胞の或る者に依つて輕卒に、無雜作に信奉され、歸依される狀態を傍觀するに忍びない。かういふわけで、こゝには刻下流行する宗敎思想の代表として、西田天香氏の其れと、倉田百三氏の其れと、伊藤證信氏の、石丸悟平氏の、及び、賀川豐彥氏の其等とを取つて、其れ等の假定と、系統と、結果との價値を吟味することにした。

二、『懺悔の生活』を通して観たる西田天香氏の宗教観

十九世紀の最賢者と呼ばれて居る、八面玲瓏の哲學的詩人ゲーテは語つた。『自分はこれまで一度も過去の行爲に對して悔ひたことはない。たゞ、其れを改めて行くだけである』と。事實、如何にもさうであつたらうと想はれる。かゝる性格にして、始めて『フアウスト』のやうな詩は書き得られたと肯づかれる。『フアウスト』には普通の劇に於て言ふやうな大團圓はない。主人公は自己擴張を唯一の目的として、後から、後からと心の赴くまゝに新らしい經驗を重ね行き、彼れの生命の終つたところが劇の最後となつて居る。それならば、普通人の標準に照らして、ゲエテの生活に過失が尠しもなかつたかと言へば、決してさうではない。隨分、あつた人である。然し、其等の一切は其等に敎へられて一層賢くならうとする彼れの努力に依つて十分に償はれてゐる。たゞ、彼れの生活の中には、其等のために過去の自己と絶緣して了はうとする心機一轉の時期も、希望も來たらなかつたのである。

然し、世の中には、過去の行爲に依つて敎へらるゝにしても、其等に對してゲエテの取つた態度とは全然異なる態度を取る他の性格が見出だされる。この型に屬する人々は、彼等が生活して行く中に、ある機會に於て社會の缺陷より、若しくは、自分の過失より、或る困難に陷つて來ると、彼等の前途に横はるものは、たゞ、暗黒と陷穽とだけであるやうに空想する。そして、其等は悉く過去の罪深き自己の所産であるとして、全然それと絶緣しなければ、到底、他に復活の血路は一つも開かれてゐないと彼れは想像する。トルストイの如きはこの型に屬する一人であつた。

いつの時代に於ても、是等の二つの型に屬する人物は存在する。ジエムスの稱呼を藉りれば、前の型に屬する人々は現世主義の人々であつて、後の型に屬する人々は他界主義の人々である。然し、わたくし共は或る人々が現世主義を取

らずして他界主義を取るのは、彼等が一層罪の深いがためであると考へてはならない。又、現世主義を取らずして他界主義を取つたために、彼等の生活は必ずしも一層浄化されたと考へてはならない。たゞ、生活の外形の轉換だけに就いて言ふならば、現世主義の人々と他界主義の人々との間には多大の相違がある。現世主義の人々は徐々に生活を改造して行くのに、他界主義の人々は嶄然新らしき生活に突入しなければ心安んぜざるからである。

西田天香氏の自づから語るところに從へば、彼れは確かに他界主義の型に屬する一人である。可なりに思ひ切つた他界主義の型に屬する一人である。『わたくしには一つの癖があります。小さい事でも、何處までもそれを徹底してやらなければ氣が濟まない性分です。』と彼れは自分に就いて語つて居るが、如何にも、是は事實であると想はれる。

總べて事件の意味はそのものに內在するのではなくして、其れを取り扱ふ人に依つて附與されるのであるといふことは平凡なるツルイズムとなつた。淺人、小人は其れを淺く解釋し、小さく取扱ふ。深人、大人は其れを深く解釋し、大きく取扱ふ。幾千年となく、普通の人間が何んの氣なしに看過した樹より落ちる林檎も、ニートンあつて始めて其れに引力の意味が附與されたのである。幾千萬の農夫に依つて何んのことはなしに取扱はれて居た家禽の變化もダウインあつて始めて其れに進化の意味が附與されたのであつた。西田氏に煩悶を起さしめた事件も他の通常人からすれば、極めて有りふれたものであつた。其れをそれほどに重大な意味を有つたものとし、あんな風に解決せしめたのは、全く彼れの性格の然らしめたものである。彼れに取つて其れがどういふ風に煩悶の種となつたか、其れが彼れに依つてどういふ風に解決されたかといふ顛末は、彼れの『轉機』と題する一文に於て、極めて巧妙に述べられて居るから、こゝにわたくしが其れに就いて細述する必要はあるまい。其れの經過の內容は極はめて簡單である。それは、(今日、流行の言葉でいへば、)勞資協調の具體的解決の困難からである。

彼れは江州の產であるが、二十二三歳の頃、或る事情から、二三の資產家と協同して北海道に五百町步ほどの土地を拂ひ下げ、開墾の事業を始めた。一徹な彼れは『報德記』一卷を手本として彼れの事業を經營して行かうと志ざした。事業成功の秘訣として二宮尊德に依つて說かれて居るのは、勤勉、節約、分度、推讓の四德である。彼れはどうか、かうか、前の三德だけは實行することが出來たが、後の一德、卽ち、推讓に至つては、其れを資本家と勞働者との關係に於て實行することの至つて困難であることを經驗した。彼れは當時の行き詰つた事情を次のやうに語つてゐる。『若し推讓の德を勵行して兩方の爲に自分が推し讓るなら、自分を捨てにやならぬ。小さいながら親の財產を失ひ、多勢ではないが、わが妻子を餓えさすかも知れぬ。自分を何處までも守れば地主の味方となつて小作人を苦めるか、又は明白(はつきり)小作人の側に立つて地主の利益を削ぐか二つに一つである。手前も立ち兩方も立てる良策は、その當時のわたくしには見つからなかつた。』と。この困難な問題を適當に解決する方法が見出されないために、彼れは終に單獨に其の事業より身退くことにしたのである。それより後、彼れが三十二歳になるまでに、彼れは如何なる事業に從事して居たかわたくしには不明であるが、兎に角、彼れは種々の經濟學書までを獵つて、苦心慘憺『資本とは何ぞや、』『利子とは何ぞや、』の二つの問題を研究して行つたのである。然るに彼れが三十二にも達した時に、一つの事件が彼れの身の上に起つた。その事件の內容は解らないが、彼れの言葉を藉りれば、其れは、彼れをして『人と人とは假令兄弟の樣な間柄でも食み合つて生活してる。』といふ悲慘さを沁々味はしめたのであつた。それがために、彼れは飯も食はないで二日ほど京都の或る宿屋の一室に閉ぢ籠つてゐたさうである。その時、一人の友人からトルストイの『わが宗教』を贈られたのであつた。彼れは一氣呵成に其れを讀んで行く中に、卷末の『わが告白』といふ一節の中程に到つて『生きやうとするには死ね』といふ意味の文字に打つかつたのであつた。トルストイのこの一語は、如何なる感激と決心とを彼れに與へたか。彼れは當時の

自分の感激と決心とを次の言葉で叙述して居る。

『この「死ね」は極めて無造作に、露骨にわくしに響きました。「死ぬと決心すれば生き復へる」といふやうな巧利的なものでもなく、「浮ぶ瀬のある事を豫期して身を捨てる」のでもなくて、たゞ、人を凌いで生きることは、凌がれる全體の死ぬことだ、全體が生きるなら自分が死んでも本懐でないか、自分も他人もたゞ水面に偶然生じた泡沫のやうなもので、その泡沫に執着するのは全體たる水を知らぬためである。死んだとて何物も消去るのではない、生きやうと思はゞ死ねといふ言葉は、上の様に解釋して差支へはない。無理に他を凌いで生きるのは死ぬることである。運命を天に任せて、食へなければ本體に還れば可い、死ねとは迷妄から離れよとの事で、悟れは全體が自分なのである。宜しい、死んで仕舞ふ、といつた感じに全くわたくしはうたれて了ふた。この場合わたくしには何等力む氣持はなかつた、極めて安かに廣い世界へ飛び出したやうな氣持がして、壞れぬ我にぶつつかり永生の實在界に還つたやうでありました。今考へてみると、それは所謂靈覺で、また宗教的にいへば再生だつたのでせう。』

斯くして彼れは過去の一切と絶縁して再生したのである。新生したのである。それより以後の彼れといふものは、今日に至るまでの十七年の間、たゞ、一直線に彼れの所信を實行しつゝ進み來たつた。彼れの信條と、其れに基づく生活とは、至極簡單なものである。其れの輪廓だけは數言にして盡すことが出來る。

彼れ自づからも語る如く、彼れの發心の機會は經濟問題に苦しめられ、其れの解決から逃れようとして彼れに與へられたのであるから、束縛より自己を解放する道として、彼れの注意は、自然、財産所有の否定の方角に向つた。この世の中で、あらゆる惡の原因は財産を所有することにある、あらゆる善の基礎は其れを否定することに依つて築かれねばたらぬ。所有の慾を棄て、それと併せて、其れに關聯する一切の慾を棄てた後、卽ち捨身の態度を取つて他人に奉仕す

れば、彼れの謂ふところの光は必らず自分をよいやうに使つて下さるに相違ないと彼れは信じた。この信念を以て彼れはおのれを救ふために猛然、新生活を始めた。そして、そこに彼れは悦びと満足とを得たのであるが、さういふ覺悟より爲された奉仕は、圖らずも、同時に其れを受ける人々にも彼れと同樣な悦びと満足とを得せしめた。奉仕する者と奉仕される者との相互的歡喜は、恰も乳を與へる母と、乳を吞む赤子との其れに等しきものであることを彼れは見出した。そこには、强請もなく、爭鬪もない、たゞ、あるものは謙讓と感謝とのみである。そして、相方に取つて、最も都合のよい經濟關係が成り立つことを彼れは見出だした。奉仕する者への喜捨のために、奉仕を受ける者の有てるものより一毫も減らさせまいとするのが奉仕する者の祈願であるから、奉仕を受ける者の中に儉約が行はれるやうになる。奢侈はいろ〳〵の惡德の基であるから、儉約に依つて、いろ〳〵の美德の基は作られることになる。そして彼れの信念に從へば、このやうに、一人として罪人ならざるなきこの世に於て、奉仕者と被奉仕者との生活の間に善き結果を齎らさしめるのは、もともと、彼等を支配する光の力であるから、その間に人間の作爲を一切用ゆべきではない、たゞたゞ懺悔の心を以て一切を光に任すべきであるのである。彼れはこの態度を自然法爾と呼んで居る。最後に、一燈園に於て奉仕が、今日世人から最も卑められ、最も下等とせらるゝ仕事より始められるのは、何もさうすることが最後の目的ではない、たゞ、さうすることに依つて、相方に謙讓の德を養はしめるために過ぎない。この意味に於て、彼れは一燈園を呼んで『與貧學愚の園』と言つて居る。

斯くの如きものが、彼れの信條と、其れに基づいて彼れが送つて來た生活の大略である。斯くの如きものに依つて、最も徹底的に今日の人間の惱みは取り除かれ、社會生活の缺陷は改善されるものと彼れは考へて居るのである。そして、彼れは、彼れの講話に於て、其れの實行が歴々其れの効果を擧げて來たことを、數多く述べて居る。例へば、托鉢に依

つて托鉢者が謙譲の德を學んで彼れの素行が改まつたと、同時に、被托鉢者が儉約の德を學んで、彼れの家庭が平和になつたといふやうなことや、光は何時でも人間の智慧を超越して、正しく彼れを導くといふやうなことを。

わたくしは、根本的に現代社會の病弊を匡正するに、之れが方便として其れの經濟組織の改造に著眼したことに對して、彼れの知見に敬服する者である。又、其れを實現するに、彼れが企てたやうな徹底的な計畫を企てたことに對して彼れの勇氣を偉なりとする者である。然しながら、彼れが期待する如く、其れを以て有効なる生活改造の方策とするに至つては、大に疑はざるを得ない。わたくしが疑ふのには三つの根據がある。其れが禁慾的なると、柔惰的なると、神祕的なるとからである。そして、是等のものは、生活改造の方法として、理想として、古來、あらゆる宗教がそれの特徴としたものであるから、是等を約して、其れが宗教的であるからと、わたくしは言ひたいと思ふ。

古來、生活改造の方法として、理想として、禁慾的の色彩を有つたものは隨分數多く起つた。然し、それの實績からすると、政策として直接の効果がなかつたのみならず、永遠の理想としても、感化は割合に尠ないやうに思はれる。『三軍の帥は猶ほ奪ふべし、匹夫匹婦の志は奪ふ可からず』人情の機微と其れの傾向を無視するものは、或は少數の信者を得ることは出來ようが、到底、多數の實行者を得ることはむづかしい。これまでのところ、生活改造の方法、若しくは、理想として、思ひ切つて極端な嚴肅主義、若しくは、禁慾主義を提げて起つたものは、大抵、中途に於て其れに對する反動に依つて沮害されるか、實際の必要に應ずるために、だんだんに人情に依つて取り入れられる程度のものに緩和されて了つて、最初の綱領はほんの形式になつて殘るに過ぎない。是れは、宗教に於ても、法律に於ても同樣である。

一燈園との接觸に來たつた人々は、若しくは、家庭は、それぞれ、悉く特殊の事情のあるものばかりである。つまり、一燈園の救に依らざれば立ち行かないと考へたものばかりである。其等の人々、若しくは家庭に對して、一燈園の主張

する生活法の感化が多少でもあつたことは別に不思議とするには足らない。然し、特殊の事情を有たず、一燈園の救を求めて居らない社會一般の人々や家庭やに對しても、同樣な感化があると考へるのは大なる誤りであらう。又、たとひ一燈園との接觸に來たり、其の禁欲主義の感化に依つて一旦救はれたと心から感謝した人々にしても、其れの感化を十年、二十年、一生涯に亘つて現に保留して居る者が果して幾人あるであらうか。わたくしは彼等の極めて少數なるべきを恐れる者である。

現代生活の缺陷は、財産組織の不合理なるにつれて、各人が富の使用を誤つて居るからだと言つて、之れが病根を剿絶するがために、徹底的に財産所有を否定するといふことは奇拔な思付きではあるが、之れは、餘りに近世文明の傾向と近世人の欲求に逆行した思ひ付きである。

近世文明は、人間がおのれの欲望の尊貴を自覺して來ると同時に、其れを滿たすために方便としておのれの能力の權威を發見して來たところから起つたのではないか。そして、この文明に價値を認めて、其れを完成しようとして居るのが現代人ではないか。近世文明は現代人に取つて彼等の生活の價値の最も適當なる表現である。されば、今日の政治も、道德も、科學も、藝術も、この一大事實を認識し、肯定して居らないものは一つもない。

なる程、近世文明の組織の中にも、近世人の欲求の中にも、愚な要素、狂躁な要素、不聰明な要素は多分に含まれて居る。是等のものは現代生活に、個人的には焦慮と煩悶とを、社會的には爭鬪と反目とを引き起して居るのであるから、無論是等のものは適當に整理されねばならぬ。されば、この弊害を看て取つた一つの新らしい運動が其れを整理しようと心懸けるのは善いことである、正しいことである。然し、整理するとは、全體として其れの成立を肯定し、部分として其れの扞格を調節することであらねばならぬ。然るに、西田氏は、全然、其れを整理することを名として、その實、

其れの成立を否定して居るのである。こゝに生活改造者としての彼れの不明があり、空想がある。

生活改造に用ゆる西田氏の情操は如何にもパッシイヴに偏し、センチメンタルに過ぎる。古來、悠久に、社會に其れの感化を及ぼしたあらゆる生活改造の運動は、其れの中に、アクチイヴの要素と、アグレッシイヴの要素とを有つて居つたやうに見える。單にパッシイヴであり、センチメンタルであるに過ぎない教訓はニイチエに言はせれば『一個の奴隷道德』である。實際に於て社會一般に及ぼす其れの感化は極めて微弱なものである。社會の秩序は强者と權力者とに依つて、彼等の我儘と利益とのために支持されて居るのであるが、パッシイヴであり、センチメンタルである教訓は決して、眞實には、彼等の良心に觸れ、彼等の生活を動かす力のあるものではない。何時の時代に於ても、强者と權力者とは驕慢であるし、自己滿足の情操に滿ちて居る。彼等の良心に觸れて彼等の生活を動かすのには、どうしても彼等の心の中に恐怖の感じまででなくとも、不安の念を起させるものでなければならぬ。ところが、わたくしの見るところでは、西田氏の唱道されて居る生活改造の計畫にはこの要素が一切缺けて居るやうである。わが國に於て、眞に救を要する者は弱者に限つたことではない。强者、權力者も其れを要するのである。そして、若し救は良心の刺激より始まるべきものならば、眞に其れを要する者は弱者でなくして强者、權力者である。事實さうであるのに、西田氏の現に用ゐて居る方法では、尠しも强者、權力者の良心にまでは達せぬやうである。

西田氏は托鉢に出る彼れの徒に、如何なる家庭に入るも、其れの有樣に就いて決して批評がましいことを言つてはならぬと注意して居る。一燈園の計畫からしたら、さうである外に出ることは出來まい。否、さうであるのが一番賢いことであらう。然し、それは一燈園が宗教の古來の傳統を墨守して、生活改造を個人的のものに限り、其れを社會的のものにすることの大切なことに開眼されないからである。わたくしとしても、愛が個人と個人との最後の關係であり、協

同生活を圓滿に支持し、完全に成就する最後の條件であると言ふことを知つて居る。然し、大なる愛を實現するために、時としては小なる反抗も、爭鬪も必要なる道具となるのである。こゝに於て、反抗と爭鬪とを其れの外形とする社會運動が重大なる意味を有つて來るのである。西田氏はよく基督や親鸞を手本として居るやうに言ふが、若し彼等をして今日の時代に在らしめたならば、彼等も、亦、個人的の方法と、併せて、社會的の方法を取つたであらう、或は、個人的の方法に先立つて、社會的の方法を取つたであらうといふことを誰れが否定し得るか。

一燈園の生活は何故にあんなに神秘的であるのであらうか。何處にそんなに神秘的であるの必要があらうか。古代人に取つて神話の滿たした役目は、現代人に取つて科學が滿たして居る役目と、其の意味に於て同一のものであつた。彼等は生活を支持する機關として、眞劍に其れを工夫し、眞面目に其れを信じたのである。然し、既に其の後になつて一層優れた生活の機關が工夫されたのに、尙ほ神話を作り、若しくは、其れを說けば、神話は既に其れの第一義に於ける神話たるの性質を失つて居る。今日の教育を受けた者は、誰れにしても西田氏の光なるものは、畢竟するに、わたくし共の文化と、經驗と、教養との結晶の様式化されたものに過ぎないといふことを氣付かねばならぬ筈である。其れがさうである限り、其れを外にして差し當り、わたくし共の生活の方針はないわけであるから、其れを啓發しながら其れを利用して行くことは肝要なことである。然し、其れの正しきはたらきは、全然、個人、個人の作爲に賴らなければならないものである。そして、事實光(みひかり)がさうはたらくのは、個人、個人の作爲に賴つてはたらいて居るのである。然るに、彼れがなす如く、この事實を沒却し、或は、故意に其れを神秘的のものとして來ると、そこに、生活の方針を固定させ、硬化させる弊害が生じて來る。光(みひかり)は、もともと、人間的のものである。されば、其れを人間的と見て始めて權威を有つて來るのである。其れに權威を有たせやうとして、わざわざ其れを超人間的のものとするのは、反つて其れより

權威を奪ふことになる。隨つて、作用を奪ふことになるのである。彼れは光の信仰に依つて法悅を體驗して居ることを恰かも其れの實證のやうに想像して居るが、法悅は尋常の美感に過ぎない。或る人が或る事に彼れの興味を集中して居る間、其れは必らず其の人に依つて體驗される感情である、其の事が他から見てはどんなに愚であり、つまらぬことであつても。この故に、法悅は其れが體驗される時には、其れは何人に取つても、言語に絕する體驗ではあるが、決して、其れはたゞ其れだけで客觀的價値を保障するものではない。眞に現代に於て生活改造に志す者は、民衆の永遠の幸福のために是非とも、過去の時代に於て、或る事情と或る必要とから沈澱された考へ方の遺物たる光の如きものの信仰と束縛とより解脫せねばならぬ。

無意味に、若しくは、不合理に生活の複雜化されて居ることは確かに近世文明と現代人との惱みであり、病弊である。こゝに其れの改革は其れを單純化することより始められねばならぬ。これまで、あらゆる改革はさうであつた。今日より以後と雖も、あらゆる改革はさうでなければならぬ。然し、人間の永遠性が或る範圍の中にしか變らざるものである以上は、この單純化は一層優れた、一層美しい複雜化の準備としてのみ、始めて一つの意義を有ち得るのである。

西田氏の生活は如何にも思ひ切つて單純化されたものである。彼れの生活理想は如何にも思ひ切つて單純なものである。然し、たとひ其れが彼れの信ずる通り、道德界に於ける『コパニカス式方法』であるとしても、其れは來たるべき或る物のための過程であつて、其れ自づからが最後の段階でないことだけは明白である。然るに、其れを、彼れに取つて、彼れの同胞に取つて、生活の最後の典型と西田氏の想像して居るところに、彼れの迷信があり、イルウジョンがある。

三、『愛と認識との出發』及び『出家とその弟子』を通して觀たる倉田百三氏の宗教觀

倉田百三氏は一個の詩人である。随つて、彼れの宗教觀は詩人の宗教觀である。

原始人の生活は其れの色彩に於て極めて絢爛であり、其れの關係に於て極めて混沌であつた。そこには知覺と情緒との差別もなく、現實と夢幻との反襯もなく、人と神と相應じ、幽界と明界と相通じ、主觀と客觀と相錯はつて居た生活であつた。そこには、想像は直ちに實在を生じ、事實は忽ち空想と消え去つた生活であつた。かゝる構成を有つた生活に於て、原始人は一つも生活方針なるものを有たず、或る瞬間に於ては極度に滿足し、次の瞬間に至つては極度に絶望し、歡樂と悲哀とを交互に味つて行つた。

然し、人間にして瞬間毎に生を更めぬものでなくして、恆久に其れを續けて行くものならば、かゝる生活の狀態は、方法は、結局、彼れに取つて便利なものでないことは明らかである。そこで、人間は經驗を積み、叡智の啓けるに從つて、彼れは、だんだんに、彼れの體驗の各に就いて其等のはたらき振りの類似と相違、抱合と乖離、協同と反撥、明瞭と不明瞭、及び安定と不安定等の性質に随つて、其等を識別することを始め、そこに、感情より知覺を、空想より實在を、そして、最後に、主觀より客觀を區別し分類することにした。是れが、抑も人間に取つて生活方針の端緒であつた。

一度かゝる生活方針が工夫されて來ると、其れを基礎として、成功よりも一層多く失敗を繰り返しながらも、其れは、一方に於て、ますます正確になると同時に、他の一方に於てますます統一されて行つた。この經過のはたらきは、散漫なる常識よりして、必要に應じて次第に產業や、政治や道德を分化せしめた。終にはこの同じ經過は、更に進んで生活を構成する諸の要素のはたらく傾向や、其等を取り扱ふ方法を一層洗練した上、其等を實在化し、『法則』といふものまで

をも工夫した。この最後のものは、即ち、科學である。實に科學の建設は人間が彼れの能力と興味との制限内に於て、どのくらゐまで自分の生活の幸福の繫がるあらゆる事物と事件とを整理し得たかといふことを語る好個の記念碑である。

斯くして、人間は彼れの生活を整理して行く方角に限りては、ますます便利な、そして、ますます的確な方便を得て來たが、それでは、さうなることに依つて、そこには利益のみであつて、何等の損失もなかつたか。古い格言ではあるが、『決定は否定である。』彼れは彼れの生活方針を洗練し、正確に生きるためには、是非とも無限の可能性を蘊んだ繼續體より其れを切り離して、それの母體の大部分を拒否しなければならなかつた。特有の性情と、有限なる能力としか有たぬ人間として、これは彼れの生を續けて行くといふ最大なる目的のために、斯くしなければならぬことは洵に止むを得ないことではあるが、繼續體の或る部分が拒否され、取り殘される度毎に、冷酷なる條理の支配の下に知覺と官能とは、其れの色彩と奔放とを減少することになるから、人間は其れに對して未練と、愛着と、哀傷とを感ぜざるを得ない。早く大人にならんことを望みながら、いつまでも小供で居たいといふこと、詩人でありながら政治家を兼ねたいといふこと、一つの物を深く知ると同時に無限に多くの事を經驗したいといふことのやうな、數へ來たればわたくし共には無數の矛盾する欲望がある。其等は到底出來ない相談であるから不合理であることは知れ切つて居る。然し、是等は何人の心の奧底にも潜む憧憬である。それで、わたくし共の生活方針が嚴密になればなるほど、それだけ、其れは生活の持續には役に立つて來るが、又、それだけ其れの支配力の範圍が狹隘となり、其れの內容が貧弱になるのを免かれない。それでも、市井の通常人は目前の仕事に追はれて他を顧るだけの餘裕を、時間の上にも、情操の上にも有たないが、其れに關して人類全體の損失の意識を代表するやうに、特に優れた官能と想像力とを賦與されて生れたのが詩人である。

詩人とは、どんなに洗練された文化の中に活き、其れの影響を受けても、何時までも原始人の爽新なる官能と、豐潤

なる想像力とを多分に保持した人の謂である。この結果として、常識と科學とに依つて建設されたコンヴエンションに滿足しないで、別に其れの外に、先きに、奥に、若しくは、源に、生活の價値を見出ださうとすることを彼等の通有性として居る。この通有性は現存の事實より來たる刺激に通常人が與へるよりも異なつた意味を與へることに依つて自分の滿足を求めようとして居るのであるから、大まかに見て、彼等は悉くアイデヤリストである。彼等が現存の生活に不滿を抱いて、(彼等の情操に從つて)其れを一層完全なる統一體としようとすることに於て彼等は一致する。然し、彼等の個性の特徴からして、彼等のアイデアリズムは、限られた意味でリアリズムとなり、ロオマンチシズムとなつて現はれる。リアリストは、現存の事實を肯定しながら、其れに潛む意味を發揮することに依つて、其れを一層完全なる統一體としようとし、ロオマンチストは全體として、或は部分として、其れを否定し、其れに優れた或るものの存在を別に假定し、其れの意義を高調することに依つて一層完全なる統一體を發見しようとする。然し、ロオマンチストにも大體二つの型がある。其れの一つは、現存の事實を破壞して、新たに建設するものの中にそれを發見しようとし、他の一つは現存の事實を單なる現象、若しくは、幻想に過ぎずとし、其れの本體、若しくは、眞想に溯ることに依つて其れを發見しようとする。前のをレヴオリユウシヨニストと呼ぶならば、後者はセンチメンタリストであらねばならぬ。かういふ風に、詩人を三つの型に分類して來ると、(他の見方と興味とよりすれば是れと同じくらゐ正しい分類が他に幾つでも出來ようが、)シエツクスピヤや、ダンテは第一の型に屬し、バイロンやシエレエは第二の型に屬し、キイツやウオツヴオスは第三の型に屬する詩人であつた。

詩人として倉田氏は確かにロオマンチストであり、そして、センチメンタリストである。彼れはセンチメンタリストとして生活の一層完全なる統一を圖らうとして居る人である。そして、愛、宇宙の根本原理としてそこに存在する普遍

愛、完全愛の力說に依つてこの目的を達しようとして居る人である。こゝに彼れに特有の宗教觀が生じて來る。

人間の生活を支持する機關にして、一つとして合理的でないものはないが、是等のものは、其の始め、一つとして自然的でなかつたものはないのである。總べて生活の道具として人間が有つて生れたものは、其れが盲目的であり、斷片的であるといふ意味に於て自然的であるが、其等は人間の生活の道具であるといふ簡單なる事由からして、其れが內部からの衝動に依つて動かされ、外部からの刺激に應ずるためにはたらき出して來ると、元來その內に含まれた統一力と、分化力とははたらき出して來て、自づから生活の機關を形造るのである。言ひ換へれば合理的となるのである。衝動より理想が生じ、知覺より實在が生じ、嗜欲より理性が生ずるやうに。或るものが生活の支持と發展とに役立たんがためには、後になつて顯はれて來る其れの價値と意義とは、始めから其れに含まれて居る。然し、其の價値と意義とは、その始めはたゞ混沌たる容態に於てあるのであつて、後に至つて見出されるやうな整然たる樣式を以てあるのではない。同一のものであるが、混沌たる形體に於てある間をわたくし共は其れを自然的と呼び、整然たる樣式を取るに至ると、其れを理想的と呼ぶのである。然し、今日に於ても、人間に關する進化論的の說明が一般に嫌はれてるのでも解かるやうに、俗人は理想的のものは、自然的のものより變化して來たのであると說明すると、何んだか理想的のものの權威がなくなるやうに想像するがために、彼等は理想的のものは一層理想的のものから、降下して來たものだと說明することに依つて、其れの權威を高めようとする。彼等は物の實際のはたらきに信を置かないで、其れの一部を象徵して作られた象徵に信を置かうとして居るのである。かういふ考へ方は原始人に固有のものであつて、其れが本能的になされた結果、神話は出來たのであるが、一向に、彼等より遺傳した情操を沒批判的に保持しようとして驚くべき詭辯を以て組織されたものが形而上學である。

一口に、形而上學の誤謬を道破するならば、それは、人間の要求を實驗的に、前進的に、主張しようとしないで、ずれを客觀の存在として本質的に、回顧的に物化して居るところにある。

倉田氏が一個の詩人であると共に、或は、一個の詩人であるがために、又、一個の哲學者、精しく云へば、一個の形而上學者である。彼れは普遍愛、若しくは、完全愛を宇宙の原理として信仰するのみならず、確實なる認識を以て其れを支持しようと努めて居る。然し、そんな試が僞たる事實の前にどれだけ成功するものであらうか。彼れはどういふ風に彼れの謂ふところの普遍愛、若しくは、完全愛に形而上學的の根柢を與へようとして居るかを見るためには、先づ彼れの所說を引いて、彼れ自づからをして語らしめることが便利であらうと信ずる。

「然らばその愛の源流は何であるか。それは認識である。認識を透して、高められたる愛こそ生命のまことの力であり、熱であり、光である。

「私は自己の個人意識を最も根本的なる絕對の實在として疑はなかつた。自己がまづ存在してもろ〳〵の經驗はその後に生ずるものと思つてゐた。併しながら此の認識論は全く誤謬であつた。私の一切の惑亂と苦悶とはその病根をこの誤謬の中に宿して居たのであつた。實在の最も原始的なる狀態は個人意識ではない。それは獨立自全なる一の自然現象である。我とか他とかいふやうな意識のないたゞ一のザインである。たゞ一の現實である。たゞ一つの光景である。純一無雜なる經驗の自然自展である。主觀でもない客觀でもないたゞ一の絕對である。個人意識といふものは、この實在の原始の狀態より分化して生じたものであるのみならず、その存在の必須の要件として之に對立する他我の存在を豫想してゐる。客觀なくして主觀のみ存在することはない。

「それ故に個人意識は生命の根本的なるものではない。その存在の方式は生命の原始より遠ざかりたるものである。」

第二義的なる不自然なる存在である。それ自身には獨立自全に存在することの出來ないものである。これは個人意識が初めより備へたる缺陷である。愛はこの缺陷より生ずる個人意識の要求であり、飢渴である。愛は主觀が客觀と合一して生命原始の狀態に歸らんとする要求である。缺陷ある個人意識が獨立自全なる眞生命に歸一せんがために、已れに對立する他我を呼び求むる心である。人格と人格と包擁せんとする心である。生命と生命とが融着して自他の區別を消磨し盡くし第三絕對者に於て生きんとする心である。

『それ故に愛と認識とは別種の精神作用ではない。認識の究極の目的は直ちに愛の最終の目的である。私等は愛するがためには知らねばならず、知るがためには愛しなければならない。我等は畢竟同一律の外に出ることは出來ない。花のみよく花の心を知る。花の眞相を知る植物學者は自ら花であらねばならない。すなはち自己を花に移入して花と一致しなければならない。この自他合一の心こそ愛である。』(『愛と認識との出發』、異性の内に自己を見出さんとする心、頁一一三――一一五。)

こゝに、倉田氏は認識を以て形而上學的信仰たる普遍愛、若しくは、完全愛の起源を說明しようと試みてゐる。然し是等は恐らく失敗であらう。普遍愛、完全愛といふやうなものは、人間が既に智識や道德を持つて來て社會生活を行つてから發展して來た愛を象徵化した結果の所產に過ぎない。(嚴密に吟味すれば多くの矛盾を含むを免かれないが、)道德感情の高調されてはたらいて居る人々に、普遍愛、完全愛といふやうなものの號呼されて居ることは事實である。然しながら、其れは單なる要求である、信仰である。どんなことをしても、どんな意味に於ても、そんな情操に客觀的證明の與へらるべきものではない。倉田氏は彼れの『出家とその弟子』の中で、或る個所に於いて、親鸞に、『信心には證據はありません。證據を求むるなら信じて居るのではありません。』と言はしめて居るが、是れが眞實なのである。又、

この頃、土田杏村氏より贈られた『華嚴哲學小論攷』の附錄になつて居る石川舜臺氏の一文の中に、『佛教の解處は尋常思量の外に在て一と一とは二なりといふ算盤勘定は多く失敗す。』と彼れは言つて居るが、これが眞實なのである。この種の信仰がどうして人間に考へ付かれたか、實際生活に於てどれだけの價値があるかは、別に究明される必要がある。兎に角、普通の意味での認識論では證明出來るものでないとわたくしはいふのである。わたくしから見れば、大分、スカラ哲學の殘骸を保留して居るカントの認識論さへも、其れの目的は一方に經驗說の誤謬を指摘すると同時に、形而上學の信仰を排斥し、どこまでも人間の認識能力の範圍を實驗的のものとしようとしたのではなかつたか。

原始生命に溯るまでもなく、其れが人間的になつても、(前に少しく其の狀態を述べた通り)、主觀と客觀との差別なく、彼れの經驗は悉く渾一であつた、混沌であつた。それではどういふものか彼れの生活を持續するに不便なものであつたから、終にそれは分割されて、三の基本に歸せしめられた。物體と、感覺と、精神とが其等である。物體は感覺を通して精神にまで抵抗して現はれてゐる。こゝに、其れを支配するために、知識が工夫されたのである。知識は主觀が客觀を支配し、利用する方便である。されば、知識が主觀と客觀とを融合するとは、其れが兩者を攪拌して元の渾一體に歸せしめるのではなくして、彼れの生活の保存と、擴張と、發展とのために、其れを變形しながら利用して行くことである。それであるから、それはどんなに完成されても、人間の興味と、立場と、制限とを離れてはならない、又、離れることは出來ない。それを離れては、既に其れは知識ではない。非人間的のと言ふ意味に於て、一般的の、若しくは、普遍的の知識といふことは、既に言葉の矛盾である。されば、倉田氏は『花の眞相を知る植物學者は自ら花であらねばならない。すなはち自己を花に移入して花と一致しなければならない。』と言つて居るが、知識ではそんなことは出來ない。若しそんなことをするものがあるならば、それは決してわたくし共の知つて居る知識ではない。假りに、知識がわたく

し共に花の有つて居る感情を知らせるところまで進んで行つたとしても、共れは、畢竟するに、数學的、物理學的知識を根柢として洗練されて來た人間の知識に依つて推理された結果であるから、人間的のものであつて、植物的のそれとは何等の關係もないものでなる。

成る程、認識は人間のあらゆる活動と相關する如く、愛とも相關する。認識に依つて愛は廣まると同時に、愛に依つて認識は深まる。然し、いづれも人間的の場合に限られてである。

矢張り普遍愛、若しくは、完全愛の存在を假定しての上であるから、形而上學的の辯證であるが、倉田氏には、外觀上、人間的の愛を超越して行つて、終に宇宙的の愛と合體しようとするところに滿足を見出す道がも一つある。それは戀愛より宗教に入るの道である。こゝには彼れの苦しき體驗よりの裏書きがあるやうである。彼れはどこかで戀愛の性質を說明して次のやうに述べて居る。

『戀は遊びでもなく樂しみでもない、生命の止みがたき要求であり、燃燒である。生命は宇宙の絕對の實在であり、戀愛は生命の最高の顯彰である。哲學と藝術と宗教とを打して一團となせる焰の迸發である。生命(靈と肉)と生命とが抱擁して絕對なる、原始なる、常住なる、自然なる實在の中に沒入せんとする心である。神とならんとする意志である。』

『戀愛の究極は宗教でなければならない。これ戀の最も高められたる狀態である。』(異性の中に自己を見出さんとする心、頁一二九)

又、倉田氏は彼の『出家とその弟子』の中で、親鸞と唯圓との間の對話として次のやうなことを述べて居る。

唯圓　では戀と信心は一致するもので御座いませうか。

知驚 戀は信心に入る通路だよ。人間の純な一すぢな願ひをつき詰めて行けば、皆宗教的意識には入り込むのだ。戀するとき人間の心は不思議に純になるのだ。人間のかなしみが解るのだ。地上の運命に觸れるのだ。そこから信心は近いのだ。

是等の言葉は、多分、戀に關する彼れの體驗の忠實なる記錄であらう。是等の句を讀んだ者は、何人と雖も彼等の眞劍さと純粹さとに驚嘆しないものはあるまい。若し世の中に宗教的感情と呼ばれ得べきものがあり得るならば、彼れが自分の戀を宗教的と呼んで居ても、わたくし共は其れに對して何んの誇張も感じない。然し、彼れの語るところに依れば、彼れの戀は破れたのである。彼れは彼れの戀人に依つて裏切られたのである。固より彼れは其れがために一時、悲嘆を極めた、絕望の淵に沈んだ。それでは彼れは戀と共に一切の愛を詛うたか、棄てたか。決してさうではなかつた。彼れの愛はその內容と方向とを變へた。然し、ますます擴大され、醇化されて行つたのである。

『私は人心の頼み難くして人生の寒冷なることを經驗したるにも拘はらず、それは私をして白眼世に拗ねるがごとき孤獨に向はしめなかつた。私は却つて人と人との接觸の核實の愛でなくてはならないことを感じた。私の愛を深かめることによつて他人と一歩接近した。私は切に與ふるの愛を主張したい。愛は缺けたるものゝ求むる心ではなく、溢ふるゝものゝ包む感情である。人は愛せらるゝことを求めずして愛すべきである。人に求むる生活ほど危いものはない。その人が軈がて自ら足りたる時我が側を離れ去るとも、その人のために祈る覺悟なくして愛するは初めより誤謬である。』（『愛と認識との出發』、頁一八九——一九〇）是れが當時の彼れの告白である。

斯くして、彼れの心氣を一轉して、戀を棄てゝ、彼れの謂ふところの隣人の愛に向つた。彼れの考へに隨へば、隣人の愛とは尠しもエゴイズムを交へない人と人との愛である。母子の愛や男女の愛のやうな本能に基づく愛は悉く其れの

本來の性質から見てエゴイズムを含む。愛と言つてもその實は闘爭であり、煩惱である。其れは生物と生物との共喰ひと同じ相であると彼れは斷じて居る。然し、尠しでもエゴイズムを含んだものは眞の愛と言ふことは出來ない。眞の愛たる隣人の愛は本能の愛の如く甘き滿足ではなくして、苦き犧牲である。然し、隣人の愛、即ち、尠しもエゴイズムの含まれない愛のみが正しき愛であつて、是れのみが天國を開く鍵となるべきものであつて、基督の愛、佛者の愛が是れであつた。

それならば、隣人の愛の尊むべきを知りながら、そして、男女の愛、母子の愛の卑しむべきを知りながら、わたくし共は隣人の愛だけで生活して居るか、生活して行けるかと倉田氏に問ふならば、彼れは否と答へるのである。彼れは女に對しては隣人の愛だけを以て彼女に交はるべきであると言ふことを承知しながら、彼れは彼女に對して性欲を感ずるを禁じ得ない。彼れはそこに彼れの二元性に出遇つて其れを解決する道を知らない。

人間關係の間に眞の愛、即ち、隣人の愛を求めて失望した彼れは、更に眼を轉じて自然界を見た。そして、愛の本源たる自然界にだけは眞の愛、即ち、隣人の愛に類するものの圓滿にはたらいて居らなければならないことを豫想した。要求した。然し、こゝにも彼れは求めるものを見出だすことが出來なかつた。何故ならば、こゝには最も赤裸々の形に於て、生物と生物と相喰み合つて居るのを彼れは見たからである。蟲は草を食ひ、鳥は蟲を食ひ、獸は鳥を食ひ、そして、獸と雖も、猶、彼等の順番になつて、人の食たるを免かれないからである。普遍愛、完全愛の信者たる倉田氏は如何にして事實の根柢の上に彼れの信念を懸けようとするのであるか。彼れとて、事實は事實として認めなければならぬ。然し、之れがために、盲目なる情操の辯證家として生れたる彼れは、彼れの信仰を、若しくは、要求を動かすことは欲しない。今のところ詮方もなき不調和である。けれども私は世界は調和ある一つの全體であると信ぜずにはゐられない。私

はまだ失望しない。何とかして調和ある世界として感じ得るやうになるまで努力して行きたい。』と語るのである。然し彼れは如何なる魔術に依つてこの驚歎すべき目的を遂しようとするのであるか、感じ得るやうにと彼れは言つて居るが、彼れにして今日彼れが有つて居るやうな感覺と理會とを有つて居る間は、さう感ずるだけでも容易な業ではあるまい。否、殆ど不可能の業であると言はねばならぬ。普通の場合に於て、生活に痛切なる事實の大部分を無視し、若しくは、顚倒して了ふやうな幻想や詭辯は起し惡いからである。

然し、彼れは何故にそんな事實の前に苦しんで居るのであらうか、苦しんで彼れ自づからにも、彼れの同胞にも、どんなに間接にでも、どれだけの利益があるであらうか。然し、確かに彼れはさう考へ、さう感じて苦しんで居るのである。そして、其の大部分、想像の上に捏造されたこの苦しみを美的に享樂する一個の享樂主義者に陷つて居るのである。

倉田氏は本能に基く愛を僞はりのものとして卑下し、排斥して居るが、わたくしからすれば、愛は本能から發するが故に、始めてわたくし共に取つて權威を有ち、價値を有ち得るのである。されば、彼れが極力、卑下し、排斥する母子の愛の如きも、其れが本能に基づくがために純なる愛であり得るのである。母は其の子に乳を與へることに依つて滿足を得、子は其の母より乳を吞むことより滿足を得るがために、おのづから、彼等は相互に賴り合ふことになり、こゝに、人間性に潜んだ愛のはたらき出す對象と機會とが生ずるのである。それであるから、無論、母子の愛は相手に對して相互にインテレストを有つて居るといふ意味に於てセルフイッシュである。然し、倉田氏がセルフイッシュの感情はエゴイステックにしかはたらかないと想像するのは彼れの僻見に過ぎない。セルフイッシュであるがために、さうでなければ苦と考へられ、犧牲と考へられなければならない行爲も甘しと考へられ、滿足を與へるのである。彼れが獨り眞の愛とし

て擧げた隣人の愛にしたところが、わたくしの見るところでは、その關係は、その根柢に於て、全然、母子の愛、男女の愛と同じである。そこに、始めて、相互のインテレストが織り込まれて居るからこそ、事實上の協同が成り立ち、相助の精神がはたらくのである。自分の生活に價値を置かないで、どうして他人の生活に價値を置くことが出來よう。自分の欲求の尊貴を自覺しないで、どうして生人の欲求の尊貴を敬愛することが出來るか。自分の生に對して絶大の執著を有つ人にして、始めて、他人の生のために、場合に依つては、死ぬことも出來るのである。されば、倉田氏が隣人の愛の最も完全なる標本として擧げた、基督の愛でも、佛者の愛でも、セルフイシユであればこそ、あれだけにはたらくことが出來たのである。

畢竟するに、愛に關する倉田氏の誤謬は、具體的には總べての愛が有たねばならぬ二つの性質を抽象的に二分して、一方のものを絶對的に善とし、他の一方のものを絶對的に惡とした結果である。

生物が互に喰み合つて居ること、天變地災が起つて無辜の人類を多數に殺すこと、惡人が不義の榮華を極めながら、長壽を保つのに、善人が寂しく謙徳を守りながら短命にして逝くことのやうな類例は、神の善を疑ひ、宇宙の攝理を疑ふ材料として、是れまで、しばしば懷疑者無神論者等が擧げたものである。其れに對抗するために、神學者、辯護家、思辯論者等よりいろいろに辯護や、辯解が試みられたのであるが、其等はわたくしからすれば、悉く、一向に眼を炳たる事實より背けて、無理な前提たる彼等の教理を辯護しやうとする苦しき詭辯に過ぎない。彼等の議論に辻褄を合せる道は唯一つしかあり得ない。それは、原始人の作つた神話を棄て、正直に事實を見ることである。是等の事柄が不調和と見えるのは、たゞ、わたくし共の協同生活のために生じた道徳觀念を輕卒にも直ちに自然界に適用して、前者の範疇に據つて後者のはたらき振りを批判しようとするからである。人間の要求より成り立つ人間の道徳を以て其れの感化の及

ばない自然界の出來事を律しようとするのは、隨分無法である。されば、兩者の間に矛盾があるならば、その罪は、自然界の方にあるのではなくして、わたくし共の方にあるのである。一旦、さう悟つたならば、自然界がどうはたらかうと、自然界にどういふ出來事が起らうと、何も其れがわたくし共の責任として、わたくし共に取つて煩悶の種となるわけはないではないか。わたくし共は、わたくし共と其の苦樂や運命を共にする協同者の間の幸福を高めるやうに道德を完成し、道德觀念を洗錬して行けばよいのである。又、其れ以上はわたくし共の爲し得ることでもないし、爲さねばならぬ責任でもない。わたくし共はおのれ等の生命を惜み、幸福を欲するが故に、わたくし共の類推の力が及ぶ限り、他の生物の生命の奪はれ、幸福の傷けられるのに對して苦痛を感ずるのは事實である。然し、わたくし共としては、總べての生物を一夜に絶滅することの出來ない限り、わたくし共の爲さなければならないことは、たゞ、わたくし共と道德關係に入る總べての生物の生命と幸福とを尊重するだけであらねばならぬ。

倉田氏は宗教の說く罪と救とのことに言及して、

『私たちの罪は償はれなくてはならない。併し百の善行も、一つの惡行を償ふことは出來ない。私たちは善行で救はれる事は出來ない。救ひは他の力による。善行の功に依らず愛に依つて赦されるのである。宗教の本質は其の赦しにある。併し尊くならうとする祈りが無いならば、己れの罪の深重なることも、その赦されの有り難さも解りはしないであらう』(『愛と認識との出發』過失、頁二八二)

と語つて居る。然し、罪とは何んであるか、償とは何んであるか、そして、救とは何んであるか。誰れが誰れに對つて罪を犯し且つ償ひ、誰れが彼れを救ふのであるか。是等は總べて人間的の關係に限らるべきではないか。さう考へて始めて生活の改善に有效となるのではないか。

罪は善行の端緒である。そして、一つの善行は百の悪行を償ふて餘りあるべきである。故に過去の行爲の罪であることを意識するものは、その限りに於て、彼れは既に善人となつて居るのである。世人はよく過去は改められないといふが、わたくし共は過去の基本の上に行爲して行くことに依つて、時々、刻々に、其れを改めて行つて居るのである。過去の行爲の悪であつたこと、即ち、其れが罪であつたことを意識すれば、彼れは既に救はれて居るのである。是れを外にして、如何なる種の救が有り得るであらうか、如何なるものが救となり得るであらうか。

して見ると、宗教で說く罪と救との如きは、實際の事實に反して生活を無理に固定的のものと見、そこに、無益な煩悶を生ぜしめ、それを神秘的の方法に依つて償はうとして居るのである。何んたる殘酷な措置であらう、何んたる無駄な手數であらう。

四 『人間親鸞』を通して觀たる石丸梧平氏の宗教觀

この文章を始めるに方つて、一つのエピソオドを語るもあながち讀者に突梯の感は與へまいと思ふ。それはかうである。

今より三年程前のことであつたと記憶する。一日、早稻田大學の教授日高氏は次のやうにわたくしに語られたのであつた。氏は當時富士川博士の組織されて居た親鸞鑽仰會の會員であつたさうであるが、富士川博士の意見として、今日、自分の學說や意見を公表して居る人々の中で、同博士の見るところでは、わたくしの思想が一番親鸞の思想に近いものである、それで、いつか折があつたら、親鸞鑽仰會へ來て、わたくしの思想を述べてくれまいかといふことであつた。

その時、わたくしは氏に對つて、『わたくしは親鸞の思想に就いて何んの知るところもありません。これまでわたくしの

思想と彼れの思想とには斷じても共通點があるなどとは考へませんでした。すれば、彼れの思想に就いては一言も語ることは出來ませんが、自分の思想ならば、いつでも持ち合はして居ますから、よい折を見てそのうち上りませう。』と答へたのであつた。この話はそのまゝになつて、其の後、富士川博士に會ふ機會もなかつたから、今日まで、どういふ意味で同博士はそんなことを言はれたか直接にお尋ねもして見ないで居た。ところが、最近に或る會合の席で、平常心易くして居る鈴木氏と呼ぶ眞宗の青年僧侶に遇つたら、同氏の友人で、同じ宗派に屬する一人の僧侶が、わたくしの思想は親鸞の思想と極めて酷似したものを多分に有つて居ると語つて居たと、同氏はわたくしに告げたのであつた。かゝる解釋を以て、親鸞の思想とわたくしの思想とを讀んで居る某氏に對しても、わたくしは、彼れがどういふ理由からさういふ意見を作つて居らるゝかを尋ねて見なかつた。然し、親鸞の研究者、若しくは、渇仰者の二人までが同じやうにこんな意見を有つて居るといふことには、何か根柢があるやうに想はれる。この根柢は何んであらうか。わたくしの見地からそれを推察して見るのも、特にこの場合に於て全く興味のないことではあるまい。

わたくしは如何なる意味に於ても、あらゆる宗教に對して緣の遠い者である。が、殊に佛教に對しては極めて緣の遠い者である。佛教に對してわたくしの有つて居る緣の總べてと言へば、西洋の地理書に『その人民は佛教信者である。』と書かれて居る日本に生れたぐらゐのものである。基督教に對しては多少其れの教理や歷史を研究し、會得して居るといふだけでも、もすこし深い緣がある。然し、それとても今は信者ではない。そして、わたくしの哲學上の學說が、信條が、如何なる種の教化と、哲學と、考察方法より涵養されるにしても、わたくしが、今日有つて居る其等は、普通の意味に於て、宗教的でないことは明らかである。見る人に依つては、反宗教的であると言ふかも知れぬ。わたくしは必らずしも宗教を固定的に、文字通りに取つて、其れに反抗しようとはしない。わたくしはそれを過去に於て、文化の或る

段階に於て起つた生活機關の一つ、然かも、當時の特殊の事情と必要とから生じた變態なる生活機關の一つと見て、其れに絶對的、最後的の價値を與へる代はりに、相對的、中間的の價値を與へて、其れをして現代生活の要求に適合せしめんとする者である。わたくしは、さうすることが人類一般の幸福を保障し、增進する唯一の道である、隨つて、宗教そのものの本來の志向の發揮に對しても取るべき唯一の道であると信じて居る者である。

かういふ風に見て來ると、何んと辯解しても、神話の正當なる發達として、宗教の中核となり、精髓となつて居る他力主義を高唱した親鸞の思想と、わたくしの思想との間に同一性を求めるのは、尠し無理でもあり、物好きでもあるやうに思はれる。さうすると、先きに擧げた二人の紳士があんな風に考へ、あんな風に言つたのに、果して何等かの根柢があり得るであらうか。

彼等があゝいふ風に考へ、あゝいふ風に言ふのに相當の根柢があると假定して、若し親鸞の爲した教説に關して、わたくしが有つて居る間接の、そして、極めて貧弱な知識に依つてその根柢なるものを推察するの權利がわたくしに與へらるゝならば、それは、親鸞の思想とわたくしの思想とに依つて暗示される志向の一點に於てであると、わたくしは斷ぜざるを得ない。然し、この同一志向は、外觀上、極端に異なる時代に生れ、極端に異なる教養を有つた我等二人者の間に於て、極端に異なつた發現を取つて居るのである。我等に在つて、志向は同一であつて、其れの發現に至つて非常に異ならなければならなかつたところに、わたくしからすれば、彼れの思想をして、即ち、眞宗の教理をして、現代生活の要求に適合せしむるためには、其れ自づからを超越して了ふやうに見えるまでに解釋され、改造される必要があると思はれる。

我等に共通の志向とは、總べて自然的のものは、其れの意義に於ては合理的である、總べて合理的のものはその起原

に於て自然的である、自然的のものを外にして合理的のものは成り立ち得ないし、又、合理的のものを離れて自然的のものは存在し得ないとして居るところにあるのである。然し、彼れとわたしとにあつてこの志向が異なる發現を取るのは、わたくしが、是等を一元として、たゞ作用的に識別するのに、彼れは二元として本質的に區分するところから來るのである。わたくしのするやうに、是等をたゞ作用的に一時對立するものとして識別すれば、其等の關係は內在的に理會出來るが、之れに反して、一度、是等を本質的に區分すると、其等は超越的にでなければ其等の間の交渉は說明出來なくなる。突きつめて言へば、人間の生活のはたらき振りは悠久に亘つて大體一樣であるから、孰づれの見方を取るも、生活そのものには大した相違を齎らさないと或る人は言ふかも知れぬ。然し、見方が生活を組織する一つの重大なる要素であるならば、そのはたらきを內面的の關係とするか、或は、其れを超自然的の交渉とするかに依つて、生活のはたらき振りの上に或る相違を齎らすことは極めて見易く、知り易き道理である。

わたくし共が生活して行くに方つては、(こゝには詳しく說明の出來ない人間に內具する性情よりして、)わたくし共の心は時々、刻々に現實と理想、即ち、支配される方と支配する方との二側面に分れ、是等の交渉に依つて行爲が形造られ、制限されて行くのは事實である。然し、是れは永久の存在の對立ではなくして、一時の作用としての分化である。一行爲の商量每に心の中に起る作用的の分裂と一致とを物化し、其れを人間とし佛として外界に投射した後、神祕の方法を以て其等の兩者の融合を圖るところに(さうとすることは宗敎としては止むを得ないであらうが、)わたくしからすれば、現代社會に生きるわたくし共の生活の說明とし、其れの方針として、佛敎に、眞宗の敎理に、そして、親鸞の思想に含まれた非現實と不適切とが暴露されると思はれる。

かういふわけであるから、若し親鸞の思想とわたくしの思想との間に或る一致が見出だされるならば、其れは、兩者

の志向に於てであつて、其れの發動に至つては自づから千里の差をなすものがあるとわたくしは考へる。かゝる考慮からして、わたくしは多大の興味を以て、石丸梧平氏の『人間親鸞』を讀んだのであつた。

詩的たらんとする哲學は、哲學的たらんとする詩と等しく、失敗に終るに定まつて居ると言はれて居る。然し、世人が一般に認めて居るやうに、ヘンリイ・ジエムスは小說家たる技巧を以て心理學を書き、ウヰリアム・ジエムスは心理學者たる氣分を以て小說を書いて、前者は豐潤に、後者は奇峭に、どちらも獨自に卓越したものを創造して成功したではないか。多分、ダンテは一個の哲學者たるよりも、一層大なる詩人であつた。サンタヤナは一個の藝術家たるよりも一層大なる文明批評家である。然しダンテの取り扱かつた題目は哲學的のものであつたために、ダンテは多くの哲學的考察を彼れの詩の中に取り入れて、詩としての其れの效果を高めたのであり、サンタヤナの取り扱かつた題目は最高義に於ける藝術の表現として見ることに依つて、始めて其れが理會されるやうなものであつたから、彼れは藝術的氣分で其れを描寫することに依つて文明論としてそれの意義を深めたのである。して見ると、哲學は詩的であつてはならぬ、詩は哲學的であつてはならぬといふことは、哲學が外的に詩的形容に依つて傷けられる場合と、詩が外的に哲學的談理に依つて偏される場合とに限つて言はるべきことである。

『人間親鸞』は、一見したところ、小說としては如何にも重苦しいものである。談理に墮した嫌ひがないでもない。然し、其れの目的はどこまでも、忠實に、如實に親鸞の性格の發展して行つた徑路を描寫するところにあつたのであつて、決して、眞宗の成立や教理を說明しやうとして居るのではないとわたくしは理會して居る。たゞ彼れの性格の發展は、彼れの信仰の轉機、若しくは、完成と離るべからざるものであり、どうしても、彼れの信仰の轉機、若しくは、完成を離れて彼れの性格の發展を描寫することは出來なかつたから、おのづから、眞宗の成立や、其れの教理を說明すること

に著者の意を致すことになつたのであるとわたくしは思ふ。不可避(enevitableness)といふことを、詩としての價値を批判する標準とした批評家があつた。わたくしは不可避といふことが藝術上の作品の高下を批判する唯一の標準であるとは思はない。然し、藝術はどんな場合に於て、どんな材料を取扱ふにしても、一つの興味から其等を醇化し、統一して一つの全體とすることを其れの主なる目的として居る以上は、或る作品に含まれた或る部分が、或る風に、其れに取り入れられることが不可避であつたか、どうかといふことは、確かに有力なる標準の一つになると思ふ。こゝには『人間親鸞』の藝術上の價値を吟味することは、全然、わくしの本領の外にあるが、こゝには、たゞ、この見地よりして、著者が如何に多く眞宗の成立と教理とを說くも、決して、其れが藝術上の作品として、『人間親鸞』の價値を傷けるものでないことだけを一言して置かうと思ふのである。何故ならば、著者がさうすることは、人間たる親鸞の性格の發展を描寫するに不可避のものであつたからである。

わたくしは、この文章に於ては、主として、著者が眞宗の教理の成立に對して取つた理會と態度とに關してわたくしの考察を施さうと思ふ。

石丸氏の描き出さうとして居る親鸞は、恐らくこれまで描かれた親鸞の中で最も現代的の、最も現代化された親鸞であらう。それが歷史上の親鸞、若しくは普通に眞宗信徒の心に想像されて居る親鸞とどれだけ違ふか、そんなことはどうでもよい。何故ならば、著者は『人間親鸞』に於て親鸞を藉りて、自分の信仰の眞實性を語つて居るのに過ぎないからである。わたくしは重ねて言はう、『石丸氏がこゝで描き出さうとして居る親鸞は、最も現代化された親鸞である。それだけ、彼れの信仰轉化の經路に關する著者の物語りはわたくし共現代人に取つて極めて切實な意義を有つて居る』と。

著者の描くところに隨へば、(事實もさうであつたとわたしは想像するが、)親鸞は生れながらにして卓越した道德の敎

師となるに相當する資格を多分に享けた人物であつた。彼れは熾烈な情慾と、敏感な良心と、精進のためには如何なる苦行をも辭せない强い、强い意思を有つた人であつた。彼れはさういふ性格の人物であるのに、未來生の存在と、そこに行はれる賞罰との確實性とまでではなくとも、其れの可能性の一般に信じられ、そして、是等の信仰が、微弱にせよ、人心を支配して居た程度の文化の中に生れ、之れに加ふるに、彼れは、夙に、倫理關係を佛と人間との間のものと解し、人間は、特に、僧侶は、彼れの徳を成就することに依りてのみ救はれ、徳は學問と苦行とに依つて情慾を禁ずることに依りて成就することを教へて居た叡山の學寮に僧徒となつたのである。そこには、無論、表面上、禁慾生活が勵行されながら、裏面に於ては、漁色や、暗闘や、嫉妬や、僞善やの跳梁するのを見たのである。彼れはそこに長老たる僧侶の生活が威嚴と謙徳との兩つを裝ひながら、その實、案外虚榮に滿ち、名利に馳せ、そして官邊に對しては極めて卑屈なものであり、無力なものであることを知つたのである。彼れのやうな性格で、このやうな境遇に處し、このやうな經驗に出遇つたのであつた。彼れが終に山を下つて、たゞ自分だけの禁慾と力行とに依つて、徳を成就しようとして安んじ得ず、終に、當時、法然上人の唱へ出した念佛宗に歸依するに到つたのは、極めて自然のこと、當然のことと肯かれる。

著者は親鸞がさまざまの苦悶と迷惑とを重ねた後、彼れが最後に辿り着いた安住の境地に同情するのみならず、そこに到る經路を是認して居るやうである。わたくしとて、彼れの棲んで居た文化と、彼れの有つて居た教養とを考慮の中に入れる時、彼れの行動に同情する、そして、或る意味に於ては、其れを是認しないこともない。然し、わたくしが著者の態度に不滿なのは、著者の態度を詰難しなければならないのは、彼れが一個の現代人として、現代人のために其れを無雜作に、沒批判的に是認して居るやうに見えるからである。著者は現代の欲望と理想と責任とを有つた現代人をして、尙ほ親鸞の履んで行つた過程を是認せしめる方便として「親鸞の前身たる」範宴に配するに彼れの友人たる法善を以

でして居る。彼れも、又、もと叡山の僧侶であつたが、彼れの性格と境遇とより、今は當時の文化の産物としては想像のつきかねるほどの自由思想家となつて居る者である。彼れは自由思想家の氣分を發揮して、頻りに範宴に對つて一切の宗教の迷信であること、生活は實驗的に其れの欲望を整齊して行くことに依つて十分に處理されることを語り、範宴が信仰生活に精進して行かうとする態度を嗤つて居る。然し、かくまでに自由思想家として理論的に勇者であつた彼れも、不思議に實行に於ては怯者たるを免かれなかつた。何故ならば、彼れは彼れの實生活に於て(著者の解釋に隨へば)彼れの智識と彼れの意思とは併行せず、調和せざるがために、自分の平常主張して居る實驗主義の實際生活に於ける効果に疑ひを抱いて來て居るからである。これは著者が人間は實驗に基づく倫理だけでは到底生活して行けないことを諷して、暗に故なく範宴のために勝利の位置を設けて居るのであるが、それは著者の眞に實驗主義の精神と覺悟とに徹底しないことを證據立てるものである。若し法善にして、眞の自由思想家であつて、其れの精神に徹底したならば、彼の生活にどんな困難が起らうと、あんな自暴自棄の言辭を弄する筈はない。この世の中では、誰れの生活にしても、或る一時に方つて、知識と意思との間に融合せざるところがあり、それがために破綻の生ずることは事實である。然し、人間としてこの普遍の缺陷を補塡して行く唯一の道は、たゞ、知識を以て意思を啓發して、其れを共通化し意思を以て知識を限定して其れを事實化して行くだけのことである。成る程、生活には苦痛はある。いつまで經つても、人間が人間である限りは、其れは全然、取り除かれぬであらう。然し、其等の大部分は、盲目なる欲求の經驗に依つて訓練されないことから來たつて居るのであることを知らなければならない。わたくし共の先人は、これまで何千年となく、實際に於ては、彼等の自力だけでいろいろの困難や障礙を征服して、わたくし共のために比較的に住み善い世界を準備してくれたのである。眞に之れが道具となつたのは、一時の氣休めたる神や佛の存在の假定ではなくして、わたくし共の生活を組織す

る諸の成分を實驗的に改善して出來た政治や、道德や、科學や、藝術や、產業であつたのである。

それから、範宴が彼れの信仰生活に於て現に取つて居る態度、これから進んで行かうとする方角に對しての法善の批判は徹底して居らない。彼れは何故に彌陀の存在の假定は人間の盲目の欲求と、人間の道德關係とが原始人に依つて本能的に結び付けられた遺物に過ぎないといふことを、發生的に、心理學的に說明して、彼れの蒙を啓かうとしないのであるか。若し法善にそれだけのことをする親切と、知識とがあつたならば、聰明絕倫の、そして眞劍一方の範宴である、よもや他の蒙昧なる民衆と一般に、おのれの業の深さを感じて、直ちに法然上人の下に走つて、安價な安住を求めるやうなことはしなかつたかも知れない。

わたくし共現代人が範宴が取つたやうな氣分と理會とで、他力の信仰に落付くことが出來ないのには二つの理由がある。一つは信仰に關する疑問であり、一つはその信仰の效果に關する疑問である。

神、若しくは佛の存在は如何なる方法に依つても、客觀的に證明出來ないことは、現代人の汎く承知して居ることである。して見れば、主觀的の要求に基づくものでなければならない。つまり、わたくし共が自分の生活を整齊して行くために、わたくし共の心內に時々刻々に起る欲望と理想、若しくは、私欲と理性、言ひ換へれば、行爲の內容となるものと、其れの形式となるものとの間の交涉を本質的に二分し、その結果を想像力で存在的に外化し、物化したに過ぎない。このやうに、其の系圖の解り切つて居るものを、自分以外にあつて、自分の苦痛を聽き、自分の運命を支配するものとして其れを信じ、若しくは拜むことがどうして出來ようか。

然し、假りに民衆を他の總べての點に於ては實驗的に生活して行くようにだんだんに敎育して行くが、獨り、神や佛の信仰に關しては彼等を其れを疑ひ始めない程度に止め置くことが出來るとする、若しくは、一步進んで、彼等をして

ますく\さういふ存在物を信仰させて行くように教育することが出來るとする。さうした時に、其の結果は、今日、正統信者が考へて居るほど、若しくは、信じようと努めて居るほど、實際生活に効果のあるものであらうか。この點に關しても、わたくしは大いなる疑問を挾む者である。

佛の存在と、彼れの人間に對する慈悲とを肯定した後、それの信仰の信者に及ぼす感化に就いては、先きに他の場所に於てわたくしが引用した石川舜台師の小品が、實に立派に、しかも、簡淨に釋明を施して居る。それはかうである。

「鑚仰する時、我の惡人なるを知ると共に惡人なる我と惡人なるを見て居る我と二人である。見て居るは能觀即我の智であつて佛願を我願としたる我なり。見られてある我は依然たる惡人なり。是は所觀の境である。

『既にして佛願の我願なるを知れば境智冥合して能觀の智一切を攝す。何故なれば佛願即我願なりしを知りたる能觀の智は正に是佛智なる故なり。而して所觀の境なる惡人なる我は一切衆生と同一の我なれば一切衆生皆成佛で成佛すること能はざる者は十方世界に一人もなく一人も我が心內の衆生に非ざるものなし。』

石川氏は、『佛教の解處は尋常思量の外に在て一と一とは二なりといふ算盤勘定は多く失敗す』と言はれて居る。こゝに師の算盤勘定と言はれて居るのは狹く限られた常識を意味するならば、それは、必らずしも佛教に限つたことではない。常識が科學に進んで行つても、科學が哲學に進んで行つても、先きにあつたものの標準からすれば、後に來たるものの中には、必らず算盤勘定に合はない或るものが現はれて居る。然し、後のものがさうあるのは、大局より見れば、形骸に於て、先きのものと矛盾しながら、精神に於て、一層其れを助成するためであらねばならぬ。後のものは先きのものを統一するために起るのであるから、必然に、先のものに於て知覺的であつたものを概念的の、若しくは、象徵的のものとする。然し、或るものが一度、概念的、若しくは、象徵的の形を取つて來ると、長い間には、其れは新らしく起る

生活の要求を滿たさず、其れに反抗してまでも、猶ほ最初の意味があるものとして、おのれを固執する弊害が生ずる。

わたくしは始めから、或る過去の時代に於て實際に、若しくは、想像の上で、生活の要求を滿たすものとし造られた象徴が永久にわたくし共に對して其の價値を保留するものとは信じて居ないのである。佛教の教説を如何に解釋することが正しいか、過まれるかを吟味するに先立ち、わたくし共の現代の生活と其れの理想とを標準として教説そのものの價値を吟味しようとして居るものである。さうすると、わたくしの考へるところでは、始めに人間の生活を支持して行くために其れの中にたゞ作用的の役目を以て時々刻々に相續して行く、支配されるものと支配するものとを先づ本質的に二分して佛と人間とし、又、人間が佛を鑽仰することに依つて、彼れの中に佛願に依つて批判する我、即ち、善人と、批判される我、即ち、惡人との對立を假定するやうなことのわたくし共の日常生活を處理して行く上に些の利なくして、多くの害あることを信じて居る者である。其れは、そんな象徴を通してわたくし共の生活を見ることに依つてわたくし共が善をなし、惡を避ける上に、大して特別な動力を加へずして、反つてわたくし共をして具體的の方針を計畫することを忽諸に附せしむるがためである。

わたくし共にして範宴が法然上人の説ける他力宗に歸依した行動を公平に評價せんがためには、當時、一般に佛教界に行はれて居た二つの信條を考慮の中に入れて置く必要がある。其れの一つは、罪ある者は悉く地獄に墮するといふことである。も一つは、其の罪は獨り學業と苦行とに依つて滅ぼされるといふことである。さういふ事情の下に在つて、若しこゝに一つの宗派が新たに起つて、慈悲深き彌陀があつて、何人でも現在の罪のまゝに彼れに依つて救はれると説いたとしたならば、眞面目にさきの信條を信じ、眞劍に其れと戰つて居た人々のこの宗派に向つて趨つたことに不思議はない。

法然上人が、

『自力聖道門の教へでは煩惱を斷ち、悟りを開いて佛になると云ふことが本旨でありますが、それは私どもには到底出來ないことだと感じました。私どもは凡夫です。凡夫と云ふのは煩惱の多い――業そのものです。如何に學問修業しようとも到底救はれないものです。けれども私どものことは、佛はかねて御存知なのです。そしてこの罪深い私どもを、修業が出來上つた上で救はうと仰つしやるのではなくて、煩惱そのまゝ業そのまゝの私どもを救つて下さるのです。無量壽經の中に明かにそれが書いてあります。』(『人間親鸞』頁二二六――二二七)

と說いたために、範宴は、こゝに、始めて彼れが永年求めて得なかつたものを得たのであつた。それで、彼れは法善に對つて、自分が法然上人に遇つて始めて救はれた時の歡喜を次の言葉で述懐して居る。

『――佛が人間の煩惱を作つたのではありません。人間を作つたのは誰れだか、わかりません。それは自然だと云ふより仕方ありません。そして佛は、人間のかうした罪を救ふために本願をさゝげられたのです。怨むどころではありません。無邊の慈悲をたゞ感謝するばかりです。――わたしも叡山に居るころは、そも〳〵佛の心を疑ひました。と云ふのは、私どもはみな涅槃に入らうとして苦しい學問と修行とをしたのでした。けれども、いつまで經つても晴れないものは煩惱の曇だつたのです。――これほどまでの苦行をしても、尚ほほんとうの解脫が出來ないやうに世の中が作られて居ると云ふのは、何と云ふ無慈悲なことだらうと、さう考へたのでした。叡山では現に、女は罪深くして三世の諸佛も見捨て給ふと云ふことになつて居るのでした。煩惱を解脫して、どこまでも善行をしなければ極樂には行けぬ教へでした。けれどもそれは凡て誤りだつたのです。小さい自分の力で解脫しようとしたのが間違ひの第一步だつたのです。私は法然上人の教へを聞いて、さうした疑問がすつかり解かれました。ありがたい阿彌陀佛があらせられたのです。煩惱その

ものである罪深い私どもを、その罪のまゝ業のまゝお救ひ下さるのです。――彌陀の本願力はそれほど大きいのです。これほど絶對的の大きい救ひはないと思ひます。』(同上、頁二二八――二二九)

法然上人の説話からしても、範宴の告白からしても、聖道門の敎へがあつたために他力宗が生じたといふことは明かである。然し、若し佛敎の敎へが、たゞ其れが佛敎であるといふ事實だけで信の置けないものであつて、それには、佛もなく、佛に對する罪もなく、罪の償ひとして地獄もなかつたならば、他力宗も全然その存在の理由を失なふことになりはしまいか。そして、わたくし共は、現にさういふ時代に於て生れ、棲息して居るのである。わたくし共は、わたくし共の生活と其れの理想とを標準として、他力宗の敎を批判し、そこにわたくし共に適合した、わたくし共の要求する新らしき生活法を創造せねばならぬ。

五 『無我愛の眞理』を通して見たる伊藤證信氏の宗敎觀

昔、基督が誤つて國事犯の罪に問はれてピラトの前に引き出された時に、『自分は眞理である』と提言した。それで、ピラトは彼れに對つて、『一體お前の言ふ眞理とは何んであるか』と彼れに尋ねたのであつた。彼れはこのピラトの問に對して、別に何んの答もして居らないやうであるが、他の場所に於て、彼れの傳計者の一人は、彼れをして、『眞理はお前達を自由にする。』と語らして居る。

眞理の意味に於ては、昔はプレトオより今日は新プラグマチスト、實在論者、さては新カント派に屬する人々に至るまで、その人、その人の興味と立場とからいろいろの解釋を施して居る。然し、わたくしは、矢張り基督が優れて居ると思ふ。眞理の性質に關する哲學上の割義としては、餘りに簡淨に失して不明瞭の嫌ひもあるが、究竟するところ、萬

人一様に努力して居るのは、彼等がてんでに彼等の自由の範圍を擴めることに關してである。して見ると、わたくし共がこれほどまでに眞理を追究し、眞理を尊重して居るのは、それがわたくし共の自由の保障に、若しくは、擴張に密接な關係があるためでなければならぬ。さうすると、眞理を定義して、其れは人を自由にするものであるとした基督の意見には的確な根柢があると言はねばならぬ。こゝにも確かにキリストの天才は輝いて居る。ギルト社會主義の驍將たる、否、首將の位置に居るコオルも『自由は手段でなくして目的である』と叫んで居る。若しわたくし共にして自由といふ言葉を單に政治的の意味に取らず、最深義に於ける倫理的の意味に取るならば、自由は手段でなくして目的であると言はねばならぬ。

わたくしはこゝに最深義に於ける倫理的の意味と言つたが、それでは最深義に於て倫理的に自由に活きるとは、結局、どういふことであるか。是れはわたくし共が現に有てるあらゆる能力を最も經濟的に、最も合理的に用ゐて、其等が一層經濟的に、合理的にはたらき得る次の段階を實現して行くことであるとわたくしは言ひたいのである。

かゝる命題の中には、自然、澤山な條件が含まれて來るから、其れの意味に就いては、人々に依つて種々の解釋が施されることになる。然し、どんなに高遠な理想でも、其れを實現する方便としてはわたくし共が現に有つて居る現實より外に材料はないのである。何んとならば、この現實は其れに依つて實現される直ぐ次の理想の材料となり、この理想が實現されて一つの現實となつた時に、其れが、又、次ぎの理想の材料となつて行く外に、最後の理想を實現する方法はないからである。されば、現にわたくし共が有てる材料を尊重し、擁護して、成りたけそれが不經濟にならないやうに、成りたけそれが不合理にならないやうに用ゐて行かなければならぬ。ゲエテが『瞬間を受用せよ』と言つたのもこの意味である。カアライルが『汝に最も手近な義務を爲せ』と言つたのもこの意味である。エマソンがヨオロツパに旅

行して、『私が行く先々に、アメリカは絶えず私に附き纏つて行つた。ヨオロッパに行つて、私はたゞアメリカだけを見た』と言つたのもこの意味である。

現にわたくし共の有てる材料を最も經濟的に、最も合理的に用ゐる！これは隨分漠然たることのやうに思はれるかも知れない。然し、わたくし共が聰明になり、わたくし共の覺悟が正しくなれば、其れは容易に解かることである。つまり、わたくし共はわたくし共の勝手では否定出來ない儼たる當境に置かれて居る。そして、わたくし共は自分等の生活を尠しでも善くしたいといふ理想を抱いて居る。當境より來た刺激の何物であるか、何物と解釋することがわたくし共に取つて最も意味があるかを知る聰明がわたくし共にあつて、理想をして其等に剴切に順應しながら、適當に、其等を利用せしむる覺悟がわたくし共にあるならば、現にわたくし共の有てる材料を最も經濟的に最も合理的に用ひて行くことは、實際に於ては、たゞ文字の上で理會しようとするよりも一層容易なことであると、わたくしは信ずる。さうすると、わが同胞に依つてなさるる總べての事業の價値は、其れが政治上の、産業上の、教育上の、學問上の、乃至、宗教上の計畫にしても、其等が果して現にわたくし共の有てる材料を最も經濟的に、最も合理的に用ゐさせるように、わたくし共を聰明にして居るか、わたくし共の覺悟を正しくして居るかといふことに依つて定まるのである。わたくしはいつもこの標準に依つて、其等のものの價値を定めようとして居る者である。

先頃、伊藤證信氏は『無我愛の眞理』なる一卷を公にされた。其れの内容を構成する殆ど總べての文章は彼れが十數年の間、固持して來た主義、若しくは信仰の釋明として、彼れが隨時世間に發表したものである。無我愛の眞理はわたくしが平常眞理を批判する標準として用ゐて來たものに照らして、果して眞理であるか、或は、不眞理であるか、全然不眞理とまでは行かないにしても、大なる眞理を犧牲とした小なる眞理であるのではないか、どうかを批判して見たい

とわたしくは欲ふ。

こゝに、かういふ話がある。或る時、或る處に、平常仲好くして居た三人の友人があつた。一人は劇通であり、他の一人は食道樂であり、更に他の一人は愛書家であつた。彼等は伴れ立つてヨオロッパへ旅行に出かけたのであつた。彼等は名所、舊跡、乃至、大都、小市を觀光して、それぞれ滿足を得て歸つて來た。然し、彼等が故郷へ歸つて、各、見て來たところの事柄を話し合つて見たら、劇通だつた一人は芝居やオペラや其等の看板だけの記憶しか有たなかつた。食道樂の一人はいろいろの料理屋や、そこで食べた料理の數々だけの記憶しか有たなかつた。最後に、愛書家の一人は圖書館や、古本屋や、そこで見た書物の名前だけの記憶しか有たなかつたといふのである。つまり、是等の人々は心理的に言へば、それぞれ三つの異なつた世界を旅行して來たのであつた。それでも、彼等は彼等の情操に於て寛裕であり、彼等の聰明に於て推理の力を全然失つて居らなかつたから、他人から彼等の見聞を話されて見れば、其等を實驗の事實として理解し、納得したのである。然し、假りに不幸にして彼等は自分の好むところに耽するの餘り、彼等の情操は硬化され、彼等の聰明は推理力に彈力を失つて了つて居たとしたならば、その結果はどうであらうか。例へば食道樂の者が、『いや、吾々の旅行した場所には、どこへ行つても、料理屋の外何もなかつた。そこの住民は殘らず料理屋の主人か、料理番か、乃至、給仕人かばかりであつた。女も男も、老人も子供も、王樣も乞食も、犬も猫も、悉く料理屋の主人か、料理番か、給仕人かであつたといふやうなことを主張して止まなかつたとしたならば、どうであらう。このやうな假說は隨分馬鹿らしいものであるが、然し、或る人が或る興味から其の興味を滿足させるもの、若しくは、させると彼れが想像するものだけを複雜な構成を有つ實在より抽き出し、其れのはたらきを、若しくは、意味を無制限に誇張することになると、さきの假說に類した宇宙觀若しくは、人生觀を作つて來るのである。そして、この偏頗な、抽

象的な程度に於て、無論さきの假設ほどまでではないが、同じ興味と、同じ道行きとに依つて、其れに近い宇宙觀、若しくは、人生觀を作つて居る人々は世間にさう稀ではない。それでは、かういふ風に出來た宇宙觀は、若しくは、人生觀はなぜ悪いか、どこに其れの缺陷があるかと言へば、それは、知的様式として、其れの取り扱かふ世界、若しくは、人生に對して指標價値を有つことが其れの唯一の存在の理由であるのに、さういふものを失なふことになるからである。も一遍、さきの假說した例を引いて來ると、あの食道樂の有つて居るやうな知識では、政治家の參考にもならないし、彼れと興味を異にする旅客の參考にもならないからである。彼れがさう想像して、彼れ自身だけで滿足して居るならば、そして、其れが彼れの生活の覺悟の他の部分に少しも惡影響を及ぼさないものならば、(是れも、固より、保證は出來ないが)まあまあ彼れの勝手だとも云へる。然し、それが何人も受け取らなければならぬ世界觀、若しくは、人生觀であるとして、他人に對つて宣傳されることになると、わたくし共は、其れに關して別な、そして峻嚴な態度を取らなければならなくなる。

昔、スピノザは神に酔ふたる人と言はれた。伊藤氏は確かに愛に酔ふたる人である。如何にも、愛は協同生活の社會組織の根本原理であるから、わたしくとても其れの價値を高唱するに躊躇する者でない。然しながら、或る人が其れを高唱するがために、おのれの高唱の重大さを他人に徹底せしめるがために、現存の事實の上に立てる社會生活の幸福の保障と增進とを目安する時は、愛でないものまでも愛と誤認し、愛のない處に愛を求め、そして、反つて實際に愛を增加し、創造して行く手段を閑却して居るならば、わたくしは彼れを非難せねばならぬ。さういふ遣り口では、結局、たゞ物の名稱を變へるに止まる場合が多い。流石に、基督のやうな現實感に富んだ理想家はそんな過ちには落ちなかつた。彼れは、『汝の敵を愛せよ』、『兄弟とは誰ぞ、わが道を行ふ者は、恐くそれ』といつたやうな殆ど無制限の愛を有つて居

た。然し、尙ほ、彼れは、この世の中には敵があり、自分の道を信じない者があり、善に對する惡があり、愛に對する憎のあることを知つて居た。

伊藤氏は十年一日の如く、無我愛を宣傳して來たが、彼れの說くところは極めて簡易なものである、無雜作なものである。そして、其れはわたくしからすれば、實際に人間の生活の中に愛を發揮し、愛を增進するのには大した助けにもならず、大した參考にもならぬところのものである。宇宙の根本原理は愛であり、調和でなければならぬ。然し、翻つてわたくし共の生活を見ると、憎に滿ちて居る。矛盾が多い。然し、わたくし共がさう思ふのは、たゞわたくし共の至らぬからである。わたくし共にして一層完全になれば憎も愛であつたこと、矛盾も調和であつたことが解かるであらう。さうなるやうにわたくし共は努めねばならぬ。伊藤氏の說くところはこれだけである。これ以上に出ることは出來ないのである。

わたくしは人間である。どこまでも人間的の立場を離れたくない。一度でも人間的の立場を離るれば、わたくしの語るところは、悉く一片の rhapsody になつて了ふのである。わたくしは、伊藤氏が考へるやうに、(人間の興味と理想とを標準として觀れば、)宇宙は愛の結晶でもなければ調和の結晶でもないと思ふ。宇宙はたゞ人間が人間的の意味で、愛と調和とを作る原料として役立つに過ぎない。わたくし共が愛とか調和とかいふものを人間的の意味で語つて居る時には、其等は必然に人間的の意味に限つて語られなければならぬから、若し宇宙に調和が見出だされるならば、それはわたくし共が其れを整頓した部分と深さに於て見出だされるのであり、愛が見出だされるならば、其れはわたくし共が想像的に其れに賦與した性質に過ぎない。つまりわたくし共が宇宙を整頓し人格化した結果に過ぎない。

伊藤氏は次のやうに說いて居る。

『卽ち私共は此世界を觀察するに、常に二方面からして居ります、實在若しくは事實の方面と觀念若しくは意識の方面とであります、實在若しくは事實の方面は眞善美の完全體でありまして、讃美と奉仕とを献ぐる外、少しも議論や批評の餘地はありません。けれども吾々が一たび觀念若しくは意識の方面に立ち入りて之を觀察するならば、此世界は實に不完全極まつたものとなるのであります。反省の必要もあれば、批評の必要もあり、改造の必要もあれば、進步發達の必要もあるのであります。私がこれまで述べ來つた處、卽ち我々の周圍は此儘で極めて面白く有難く尊く、さうして可愛いものであるといふのは、專ら實在の世界事實の世界の眞相を明かにしたのであります、隨つて此世界は道理と美と善との秩序の整然としたものであるといふのも、實在若しくは事實の方面から云ふのでありまして、觀念若しくは意識の方面から云へば、此世界には惡もあれば醜もあり不道理もあれば不秩序もあり或意味から云へば此世界は不道德、不秩序、不道理、不調和の塊りであると云つても差支へないのであります。此觀念若しくは意識の方面の妄惡醜に對し、實在若しくは事實の方面の眞善美を高調し、さうして觀念界意識界の惡と醜とを對治し、それを變じて實在界事實界の眞相通りに眞と善と美との活動と成らしめたいといふのが私共の根本的の願望であります。(『無我愛の眞理』無我愛の信念頁一一三——一一四。)

こゝに、伊藤氏は、『私共は』といふ言葉の中に、何人を含めて居るかわたくしには解らない。然し、伊藤氏のやうに考へず、さう考へない方が反つて正しいと思つて居る人々がこの世の中に多數にあることは事實である。そして、わたくしも彼等の一人である。伊藤氏は世界を觀察するに二方面ありとして、實在の方面から觀察した世界と、意識の方面から觀察した世界とを對立さして居るが、實在の方面から、卽ち、意識を通さずして觀察された世界が存在するといふこと、其れがどんな性質を備へて居るかといふことを彼れはどうして知つたか、實在の方面から觀察されたといふのが既

に一葉の矛盾である。わたくし共は、どんなことをしても、わたくし共の意識を通してでなければ、世界の存在も、それの性質も全然解かる筈はないのである。それであるから、彼れの謂ふところの實在の世界といふのも、畢竟するに、知識を通して知られた世界である。彼れが實在の世界と呼んで居るものをわたくしの理會から解析して見れば、そんなものは、わたくし共がわたくし共の意識を通して知つて居る現存の事實中に見出される調和の傾向だけを抽象し、其れを彼れの要求より生ずる想像力に依つて延長し、誇張したものに過ぎない。勿論、伊藤氏がこゝで捏造して居るやうな世界を捏造することは、決して彼れから始まつたわけではない。プレトオが理念の世界を捏造して以來、その例は澤山ある。然し、其等は皆、人間の生活に見出される傾向の或る部分を抽象し、其れを材料として捏造されたものである。つまり、人間の要求の概念化であり、物化であり、外化である。之れとしても、斯かる世界を想像することに依つてわたくし共の生活が尠しでも善くなれば結構であるが、わたくしは、只さういふ世界を想像するだけでは、未來永劫、わたくし共の生活は尠しも善くならないと考へる。

愛は人間の體驗に限られた事實である。たゞわたくし共はわたくし共の心の中に愛のはたらく時には、其れが或る種の動作を伴なふから、わたくし共が他の存在物に於て其等に類似する動作を見出だした場合に、わたくし共は其等が彼等に於て愛の發動であると類推し、彼等にも、亦、愛のあることを推理するのである。それであるから、動物にしても、わたくし共人間と大分懸け隔たつた動作をするものに就いては、其等が愛の發動であるか、どうかを判別することは大分困難な仕事である。動物心理學者の説く動物愛は純粋の觀察よりも、劇的興味から來たつて居る方が多い。然るに、伊藤氏は愛が宇宙の根本原理だといふ形而上學的興味から、化學的要素の結合までをも、愛のはたらきだなどと語つて居るのである。彼れはどんな知識と論理とに依つてさうであることを推理し、論斷し得たのであるか。

この世界は愛の結晶である。隨つて事實在るものは美だけである、善だけである、樂だけである、進歩だけである。醜だとか、惡だとか、苦だとか、退歩、若しくは、墮落といふやうなものがあるやうに見えるのは、たゞ人間が不完全なためであるといふ珍妙な思想を有つて居る伊藤氏が、どんな議論を以て其れがさうであることを證明しようとして居るかを示すために、些しく彼れをして語らして見よう。

『凡ての刺激が自分の爲になり、恩惠であるとするならば、なぜ我々は一方の種類の刺激を樂として、それを好み、他方の種類の刺激を苦としてそれを嫌ふのであるか、即ちなぜ氣に入つた刺激と氣に入らない刺激と兩方に分れるのであるかと云ふに、それは刺激其物が兩方に分れるのではない、刺激其物に二種類あるのでは無くして、それを受け取る我々の感受性が、之を分つに過ぎないのであります。我々の感受性なるものは、やはり我々の性能の一つでありまして、無意識的には完全圓滿な作用を爲して居るのでありますけれども、意識的には、發達のまだ途中にあるものでありまして、極めて不完全な不平等な、偏したものなのであります。前に掲げた例に就いて申して見ますと、私は人に譽められると、自信を強められますが、人に譏られると、反省せしめられます。さうして自信を強められるのと、反省せしめられるのと、兩方とも何れ劣らず、私の爲によい事であります。此事は事實として私の否むことの出來ない處であります。けれども、それに拘らず、私はやはり譽められる事は好みますが、譏られる事は嫌ひます、私の好惡の感情は、今の處では、此様に事實と齟齬して居ります、然し譽められた當座、譏られた當座は、私の感情が好惡の二つに分れますが、時間が經つに隨つて、其事に對する好惡の感情は薄らいで行つて、終には、譏譽の兩者ともに、一樣に自分の爲になつたと云ふ事を意識して喜ぶやうになります。』(無我愛の信念頁一七六――一七七。)

こゝでは、同氏は刺激そのものに二種類があるのではなくして、其れを受取るわれ〳〵の感受性がさう分つに過ぎな

いのである。そして、われ〱の感受性が其れを分つのはまだ十分に發達し切らないで不完全であるからだと言つて居る。然し意識するのはわたくし共の感受性あつてのことである。感受性に依つて、苦樂は始めて其の存在を得るのである。それであるのに伊藤氏は如何なる方法に依つて感受性が其れを苦と樂とに識別するは誤りであると知り得たか。苦樂を體驗する唯一の機關の能力を疑つて、苦樂は畢竟するに不可分の一つであるとどうして氏は言ひ得るか。又、わたくし共の感受性が發達すれば、今日苦と感じて居るものも、悉く樂と感ずるやうになるといふことを、如何なる方法に依つて氏は豫想し得たか。實在としては、つまり樂だけであるといふことを證明する積もりで勝手に無數のそして無限種の苦と樂との中よりその結果に於て同樣であると彼れが想像したところの二つのものを取り出して來る、然し、何故に彼れは人間の經驗の及ぶ限り、人間の判斷の徹し得る限り、苦に終る苦と樂を生ずる樂とを除外して居るのであるか。

彼れは、わたくし共が實際に經驗する美と醜との關係に對しても、善と惡との關係に對しても、皆、殆と苦と樂との關係に對すると同樣な見方をして、矛盾に滿ちた詭辯を以て、醜は美であり、惡は善であると押し付けようとして居る。それも一向に、宇宙全體は善であり、調和であるといふ前提に筋途を合せようとする惡戯に過ぎない。

わたくしが人間の生活を改善するに用ゐる方法は伊藤氏の用ゐて居るものとは全然違ふ。わたくしは美醜や、苦樂や、善惡の對立的存在をわたくし共に取つての痛切な、權威ある事實として受け取り、そして其等の生ずる、若しくは、存在する條件を實驗的に考察し、尠しでも醜と苦と惡とを減じ、美と樂と善とを增す手段を考究するのをわたくしの取るべき道として居るのである。

伊藤氏はもと、眞宗の僧侶であつたと聞いて居る。眞宗の教理には、無論、現代生活の構成と其れの理想に照らして非

難すべき點も尠なくはない。然し、それが多分に人間味を含んで居ることは事實である。伊藤氏はどういふ動機で眞宗の教理をすてて、無我愛のやうなものを著想するに至つたか。

伊藤氏は『無我愛の眞理』に序して、『――之を一種の哲學だと云へば、さうも云はれます。之を一種の宗教だと云へば、さうも云はれます。さては一種の科學とも云はれ、一種の詩ともいはれ、將又一種の道德とも云はれます。』と言つて居る。其れが或は一種の宗教であり得るかも知れない。然し、どんな種のものにしても、科學とか、哲學とか、詩とか、道德とかいはれるものはこんなものではないやうである。こんなものであつてはならぬやうである。

五 『死線を越えて』を通して觀たる賀川豐彥氏の宗教觀

今日、世間の文藝家、若しくは、文藝通と呼ばるゝ輩は小說としての賀川豐彥氏の『死線を越えて』の低級なるを、否、其の閾にさへも達しないのを嘲けるを常として居る。成る程、一個の藝術上の作品として見れば、この書に含まれた缺陷は數へ立てるには餘りに多すぎるほどある。其れの缺陷は觀照の上にもある、思索の上にもある、そして、技巧の上にもある。選擇の工夫が足りない、醇化の努力が足りない、洗練と燃燒との心熱が足りない。この書に於ては、プロットとか(藝術としての)性格描寫とかいふものが殆んど見當たらない。其れはたゞ雜駁なる事件と人物とを平板なる筆致で端から端へと書き連ねて行つただけのものである。これでは、どんなに寛容な態度を以てしても、到底一個の小說として許すことは出來まい。然し、若し彼等文藝批評家がこの書の小說になつて居るか、居らないかの一事だけで、其れの存在の權利を決定しようとして居る者があるならば、其れは、たまたま、彼等の興味の狹隘と彼等の理會の輕浮とを自白するものと言はねばならぬ。わたくしの見るところでは、この書は、このまゝ、一分を增さず、一分を減ぜずして、そ

の存在の權利は無論のこと、わたくし共に對つて尊敬を要請する特權さへも有つて居るものである。一つの人間文獻として、しかも、極めて貴き、驚くべき人間文獻として。

わが國に於て、是れまで、わが同胞の中の最も不幸なる部分、即ち、謂ふところの貧民窟に住む人々の心理狀態と生活狀態とに就いて、どれだけ忠實に、親切に調査されて居るかをわたくしは知らない。又、その調査の結果がどういふ形を以て公けにされて居るかもわたくしは知らない。然し、若しそんな事があつたとしても、其れは、いづれ、內務省とか、市役所とかいふ處の官吏、公吏の手に依つて作られた乾燥無味なる統計表ぐらゐに過ぎないであらうとわたくしは想像する。さうすると、『死線を越えて』の公刊に依つて、わたくし共はこゝに始めて劇的興味を以てたされたわたくし共の社會生活の一斷層の一摸寫に接することが出來たのである。わたくし共はこの書に依つて、始めて、そこに夜晝間斷なく、紛糾し、交錯して演ぜられる悲劇、喜劇、さては悲喜劇の數々を知ることが出來たのである。わたくし共は、この一點よりしても、深く著者の勞を謝さねばならぬ。

『死線を越えて』はわが社會を其れの墮落より濟ふの道は、一方に於ては、勞働者を保護するために勞働組合を組織して資本家に當たり、他の一方に於ては、貧民の教師となり、相談相手となつて彼等の生活を改善する他にないと考へ、身を挺んじて貧民窟に飛び入り、そこに貧民と起臥を共にし、喜感と苦感とを分つて暮らして居る（著者の變名と思はれる）主人公、新見榮一の生活を緯とし、彼等を取り卷く種々の人物、彼れと彼等との交渉の間に起つた雜多な出來事を經として成り立つて居るのである。隨つて、この書の中心興味は彼れの社會事業の敍述にある。たゞ、主人公は基督教信者であり、總べての社會改造の企は其れが貧民の救濟であつても、勞働者の保護であつても、其等は總べて基督教の精神に依つてなされることに依つて始めて有效であると、彼れは固く信じて居る者であるから、自然、基督教の價値

に關する彼れの意見や、其れに對する彼れの信念の告白も、隨處に現はれるのである。然し、此の書の中心興味からすれば、其等は賓位に在つて、決して主位を占めて居るものではない。この理由で、嚴密なる意味では、この書は宗教文學と呼ばれ得るものでないかも知れない。然し、主人公としては飽くまでも社會事業と基督教とは分離さるべきものではない。基督教の精神に導かれて、始めて社會事業の成績は擧がるものであると確信して居る。されば斷片的であるとは云へ、この書の中に散在する基督教に關する、若しくは、基督教信者としての彼れの體驗や抱負に關する彼れの言說を綜合して、彼れの宗教觀の如何なるものであるかを推定し、彼れの實際に從事しつゝある事業と、彼れの信仰との間にどういふ關係があるかを見るのは、現代生活に於ける宗教の役目を斷ずるに一つの有益なるヒントを與へることになるとわたくしは考へる。かういふ考慮からして、こゝにわたくしは彼れの宗教觀を觀察し、批評することにした。

主人公榮一は何を彼れの生涯の仕事として居るか、その仕事の成績を如何なる精神に依つて擧げようとして居るか。是等は彼れが一旦貧民窟を出て米國に二三年の遊學を終へた後、歸航の船中に於て彼れが祖國へ到着して後の自分の擇ぶべき事業、取るべき方針に就いての決心を語つた條下に明らかである。彼れは其の時の決心を次のやうに記して居る。

『北氷洋のオーロラの冴えた晩、榮一は甲板に出て、そこに跪き、天の父に祈つた。彼は日本に歸つて、太陽を射る子になる。そして日本の貧しい人々とその虐げられた勞働者を救ふ爲めに、彼は再び貧民窟に這入る。彼は日本をより自由な國にする爲に、勞働者の自由組合を作る！その爲めに、彼は決して××を辭し無い！然し彼は最後までイエスの弟子として勞資の戰爭に暴力を用ゆまい、彼は人を屠る前に、先づ自分を十字架につける。彼は決して、惡魔と妥協しない。敵が刄で來ても決 てこちらは刄を拔くまい。最後まで彼に公義と人道によつて敵と戰ひ、一敗地に塗みれて十字架上に斃

れるまで奮鬪しよう。日本を救ふ道は、自由勞働組合の外に道は無い！

「神よ――

北氷洋に船の針路を守り給ふ神よ、

日本の針路をも、守つて下さい！」

から云つて、榮一は船が浪を切つて進む波の音を聞き乍ら、祈つた。』（『死線を越えて』頁四四六――四四七）

つまり、彼れは基督教信者として貧民の味方となり、基督教の精神に依つて、一切の暴力に頼らない勞働組合を組織しようといふのである。

彼れの語るところに依れば、隨分、粗笨な考へ方ではあるが、彼れは學生時代より、わが日本は實に墮落の淵に沈んで居る。啻に日本がさうであるのみならず、世界全體がさうである。彼れの言葉を藉りて言へば、それは『……軍國主義と、資本主義の「パラノリア」に惱まされて居る、地球大の腦病院』となつて居る。彼れは之れに對つて戰を開かなければならないと考へて居た。然し、其の戰に成功するには、現在の哲學は餘りに生氣がなさ過ぎる。基督教主義の學校に學んだが、當時、彼れの有つて居た唯物主義は邪魔となつて、彼れをしてまだ神を肯定するに到らしめなかつた。一時は佛教の根本精神を發揮することに依つてこの目的を成就しようと志したこともある。然し、それも一時の空想に終つた。彼れは自分の悲慘な運命と、現代の社會制度に對する不平とのために、煩悶に煩悶を重ねて行つた。彼れは自殺しようといふ氣分にもなつたこともある。然し、終に彼れ自づから語るところに依れば、『實在の驚異が遂に彼に勝利を得た。彼は、凡てを肯定する決心をつけた。凡ての肯定――そうだ生命とその時間の上に流れる凡ての表現を肯定することにした。彼は絕望の淵より驚異の世界に甦つた。彼は實在の世界に死の力を以つて強く生きんと覺悟した。……自殺

する勇氣を以て凡てに打衝かつて行かんと決心した。』(頁三二五)

この決心の下に、彼れは基督教に歸依して、イエスの弟子となり、それから一ケ月經たない中に葺合新川の貧民窟へ傳道に出かけたのであつた。こゝに、彼れの終生の事業と、其れの性質とが決定されたのである。

この時より、今日に至るまで、彼れは何を考へて來たか、何を爲して來たかと言ふことは、『死線を越えて』、上中二巻を通して彼れ自づから悉しく語つても居るし、世間にも廣く傳はつて居るのみならず、この文章の主趣に直接關係したことではないから、わたくしは其等をこゝに繰り返へさないこととする。

わたくしのこゝで主題として居る彼れの信仰と彼れの事業との關係、若しくは、彼れの事業に及ぼす其れの感化に就いて、勘しくわたくしの意見を述べて見たいのである。彼れが一代の事業として居るものは、(前にも、彼れの言葉を藉りて擧げて置いた通り、基督教の精神で出來るだけ貧民と勞働者との味方となつて、彼等の生活を向上せしめようとするところにあつた。さうすることだけで、たとひ彼れが豫想する如く、わが社會が全體として改造されるか、どうかは頗る疑問であるにしても、事實、貧民と勞働者とはわが國の人口の大きな割合を占めて居る以上は、彼れの事業が彼れの豫定の目的の成就に對つて多大の貢献をするに相違ない。彼れの事業の性質がさういふものであり、そして、容易に他の何人の追隨を許さぬ風に、全然、名譽も、褒貶も、逸樂も、一切度外視して、貧民と勞働者との幸福のために一身を捧げて居る彼れに對つて誰れ一人として非難の聲を發し得る者があらう。わたくしと雖も、彼れの志向の善なるを認め、其れを賞讃することに於ては、決して人後に落ちないつもりである。たゞ、わたくしがこゝで一層進んで吟味して見たいと欲ふことは、彼れの信仰が、彼れの事業に對して、彼れが想像して居るほどに緊切のものであるか、或は、其れが反つて無益に彼れの精力を分裂さして居りはしないか、及び、其れが貧民や勞働者の上に及ぼす感化が彼れの想像する

如く利益のものばかりであつて、その中に何等の害悪をも含まぬものであるか、或は、其の利益を全然抹殺して了はないまでも、未來に於て、或る形を取つて彼等の生活の上に多大の障礙を化醸するものではないかといふ點である。そして、わたくしが是等の點を吟味するには、現代文化を背景としたるわたくし共の生活の構成と理想とを目安として居ることは言ふまでもない。

彼れの事業につれて、彼れの信仰が勞働者の生活に及ぼす感化の方から、わたくしの吟味を始めよう。

彼等は無智、無力にして、如何にも可憐な者である。彼等の幸福、及び、彼等の子供達の幸福は、全然、彼等の指導者たり、輔佐役たる榮一の手に委ねられてある。彼れは、彼等の幸福を考慮する時に、出來るだけ自由に、出來るだけ柔軟に其れをなさねばならぬ。

彼等は現在いろいろの迷信、即ち、彼等の生活の要求に合はない信仰の形式を有つて居る。この事實は『死線を越えて』二卷が到る處に證明して居る。今、其等に代ふるに基督教の信仰を以てすることは、比較的に言つて、確かに彼等の迷信を打破することにならう。この限りに於て、彼等に基督教の信仰を鼓吹することは結構なことでもあり、必要なことであるやうにも思はれる。然し、若し榮一の最後の目的が、彼等と彼等の小供達とをして、近世文化の恩惠を餘すところなく受用することに依つて、自由と幸福とを十分に享樂せしむることにあるならば、この種の生活に必要なる彼等の他の能力を彼等が現に有てるまゝに放任して置いて、一向に彼等に基督教の信仰のみを鼓吹することは、さきの目的を實現するために、不十分である、非常に不十分であるとわたくしは考へる。彼等は、まだその事實に想到するほどに修養を有たないが、實際に於ては、彼等は一夜に近世文明に接觸して居るのである。たゞ彼等の心の眼、若しくは、智の眼が開かれさへすれば、直ちに其れを攝取することが出來るのである。然し、榮一が鼓吹して居るやうな風に、基督教

の信仰を鼓吹しては、其れは、彼等の眼を開かないのみならず、反つて、其れを閉ぢる結果を來たさないか。

第一は基督があれだけに偉大な人格を自づから築き上げたのは、彼れが信ぜんとする絶大なる意思を抱いて居た結果である。否、彼れはさういふ意思そのものであつたからである。随つて、彼れの人格の崇高さを知るには、又、信ぜんとする絶大なる意思を要すとして、或る個處で次のやうに述べて居る。

『彼【基督】は海の上を歩き、五つのパンで五千人を養ひ得た。數學と物理學は、そんなことを彼に許す筈は無い――今日我等の持つて居る物理學は。然し信ぜんとする意志のあるものには、キリストが白日の中に昇天する位のことは何でもない。人間は飛ばんとして、飛んだ。信ぜんとする意志は、生きんとする意志である。海をも暴風をも飢餓をも越えて、生きんとする意志である。それで、信ぜんとする意志を持つもので無ければ、福音書のイエスは全く虚僞の人間である。それは暗示の結晶物である。』（頁一一九）

彼れはこのやうに考へて居るのである。又、このやうに書いて居るのである。彼れは何故に數學や、物理學のみならず、長い間、人間が彼れの生活を持續して行くために、失敗に失敗を重ねながらも、工夫に工夫を凝らして其等を訂正して來た結果として出來た他の實驗學が其等の嚴肅なる信條に依つて拒否しようとする基督の傳說を無理にも信ぜよと說くのであるか。そんな大きな犧牲を拂ても、奇蹟に關する傳說を受け取らなければならない理由がどこにあるか。

彼れは信ぜんとする意思は生きんとする意思であると言つて居る。それは如何にもさうに違ひない。然し、同時に、人間が彼れの叡智と德性とに長ずるに隨つて、生きんとする意思は信ぜんとする意思を生じたではないか。基督教に關する神話を結晶さした事情は、其等を信じさした事情と同一のものである。基督教のロオマやギリシヤに廣まつたのは、あの山上の說教が高遠なる道德の理想を開展したためではなくして、基督に關して當時の望を失なへる民衆の心を滿足

させるに足る神話が創造されたためであることは疑はれない。この意味に於て、基督教の創始者は、決して基督、自身ではなくして、ヨハネ傳の記者と、使徒ポオロとであつたと言はねばならぬ。

然し、事實として、今日、わが國に於て、見出される事情は大に其等と趣を異にする。大體、生活の方便として宗教に取つて代つたヒユウマニズムと科學とがわたくし共の現に取つて居る生活法の大部分を支配するのである。彼等貧民と勞働者と雖も、尙ほ現代文化の相續人として、其れの與へる總べてを受用し、享樂する要請を有つて居る。榮一は何んの權利あつて、(理窟から言つて、)彼等に其れを受用し、享樂するの機會と能力の發達とを拒否しようとするのであるか。

かういふわけであるから、若し、榮一にして貧民と勞働者との眞の友人であらしめ、眞に彼等の自由と幸福とを冀ふ者であらしめたならば、彼等の要求全體の立場より、彼等をして恥かしからざる近世文化の恥しからざる相續者たらしめるのみならず、若し能ふべくんば、進んで、其れの優秀なる開發者たらしめるために、因襲に依りて、彼等の心に植ゑ付けられた沒批判的に信ぜんとする意思を制限して、實驗學の精神と知識を尊重することが彼等に取つて重大な義務であることを彼等に對つて敎へべきであるとわたくしは考へる、斷ずる。

若し彼等貧民と勞働者との容智と德性とはまだ神話創造の段階にある。彼等の生活を統一する方便として何等かの神話を與へなければならないからといふ理由で、彼等に基督敎の信仰を與へようといふのならば、彼れは、何故に其れが何時でもヒユウマニズムと實驗學との發達を阻害することのないやうにして其れを彼等に與へることを努めないで、反つて其れが彼等の心に入つて容易に凝滯し、硬化して、其等の發達を阻害するように與へようとするのであるか。

次に、わたくしは榮一の信仰に關して、少しく心理的、論理的の批判を試みねばならぬ。

一旦、この世界に對して絶望し、自殺までも企てたのである。然るに、彼れの許るところに隨へば、彼れは實在の驚異に眼覺めて、再び勇氣を回復し、どんな困難や障礙と戰つても生きて行かうと決心したのである。この決心が彼れをして神の存在に眼覺めしめたのである。それで、この世の中に力と生命とがあるといふことが、彼れに取つては、神の存在の證明になつて居るのである。如何にも、力と生命との存在といふことは、如何にも不思議な事實に相違ない。然し、其れが人人の道徳心が要求するやうな全知、全能の神の存在する證明となるならば、どうして其れの發動としてわたくし共が非難しなければならぬ殘忍や、矛盾や、醜惡がこんなに多くこの世の中に見出されるのであるか。榮一としてもこの冷酷なる事實の前には、時として宇宙の主宰者として全知全能の神の存在を疑ふこともあるやうである。そこで、彼れも自然神を外界に求めずして、其れを彼れの心内へ求めるやうになる。そして、神の最後の表現は自分の良心に他ならないといふことになる。然し、良心は人間がいろいろの障礙と戰ひ、過失を正して行くために、彼れが持つて生れた選擇の能力をだんだんに種族的に、個人的に、敎養し、洗練して作つたものではないか。して見れば、畢竟するに良心は人間的のものである。卓越した意味に於て、人間的のものである。尠なくとも、其れは、其れの起原に於て、神的でなくして人間的のものであるとして、何不足なくわたくし共に依つて理會出來、使用出來、敎養の出來て行けるものである。彼れは或るところで、

『それは耶蘇が、愛による神の認識を敎えてくれたからです。つまり、愛の行動そのものの中にのみ、神が最も尊く示現するとイエスが敎えてくれたからです。つまり、耶蘇の宗敎は敎と稱する愛の行動の中に、神を發見すると云ふのです。』(『新小說』本年三月號宗敎に就いての對話、頁五、)

何もあの時代に於て、『神は愛である』と基督が言つたと言つて、異なつた理想を以て、異なつた文化生活を送つて居

るわたくし共が、基督に倣はないでもよいではないか。基督の時代に方つては、人間の道德的欲求を客觀化して、始めて其れから統制力を求めたのであるが、わたくし共は、其れをどこまでも自分の要求として置いて、そのまゝ、一層圓滑に、一層完全に、統制力を其れに見出だすのであり、見出だすことが出來るのである。

之れを要するに、わたくしは榮一が善事を爲して居ることを尠しも疑ふ者ではない。然し、若し彼れが彼れの生活を二分して神と自分とにするやうな手數を取らずして、何を考へ、何を爲すのにも、たゞ自分だけであると思ひ直して、純一に彼れの仕事に從事したならば、そこに、彼れは一層の効果を擧げることが出來るであらうと、わたくしは考へるだけである。Ecce homo は現代に生活するわたくし共に取つて、最高の、否、唯一の標語であらねばならぬ。

結語

わたくしは、この論文に於て、當初、わたくしが考察しようと企てたことは已に考察し盡したやうに思ふ。されば、この論文を草するに到つたわたくしの心事を說明するために、重ねてこゝに『夜叉手菩薩心』を掲げて之れが結語として置く。

勞資戰の第一線を觀望して

林　癸未夫

一　攻勢から守勢に轉じた英國坑夫

一九二〇年八月に制定された英國の鑛業條例第二部（Wining Industry Act, part II）は幾多の論議と曲折とを經て終に廢棄された。事は一法律の存廢問題に過ぎないけれども、此問題に纒綿した事情は、最近數年間に於ける英國勞資戰の形勢を揣摩すべき好箇の一資料と認められる。

英國政界に重きをなすバルフオア外三名の政府代表者が、「炭坑勞働者をして將來炭坑經營上有力なる發言權を有せしむるを以て國家の利益と確信する」旨を陳述した所謂第一回のサンケー報告が公表されたのは一九一九年の三月であつた。而して爾後一年有半の後に政府の提案によつて新に設けられた鑛業條例第二部は、實にサンケー報告によつて振出された約束手形に對する政府の支拂であつた。何となれば同法は各炭坑、各地方毎に、炭坑主及坑夫双方同數の代表者から成る委員會を設け、勞働者の安全、健康、幸福に關する事項、産額の維持及增進に關する事項、賃金其他雇傭條件に關する事項等に就て討議協定すべきことを規定したからである。併しながら同決議實行の機關は專ら勞資双方から選出する委員によつて組織されるのであるから、双方が進んで此機關を形造るの意圖を有たなければ實施することができない。從つて同法の附則として、若し同法制定後滿一ケ年間に右の委員會が組織されなければ、政府は其事情を議會に報告し、議會が其報告を受けてから一ケ月以內に反對の決議をしない限り、同法は自然に廢棄さるべき旨を規定してあつたのである。

同法が議會に提出された當時、英國の勞働組合運動は尙其左傾的態度を維持してゐた。殊に直接同法の支配を受くべき英國坑夫聯合會は、第二回サンケー委員會以來、其名を眞赤な烙印によつて英國朝野の人心に銘したロバート・スマイレーとフランク・ホッヂスによつて統率されて、鬪志尙甚だ旺盛であつた。

彼等は炭坑國有運動に未曾有の大惡戰を試みて、政府資本聯合軍の堅壘容易に拔くべからざるを知つたと同時に、豫期した同盟軍の後援の賴むに足らざるに失望して、姑く戰略的退却を行ふの餘儀なきに至つて居つたとは言へ、未だ毫末も講和の意志を有つてはゐなかつた。所謂虎視眈々として乘ずべき機會を狙つてゐた。たとひ彼等の理想とする炭坑國有が直に實現されないまでも、少くも此際勞資均等の權能を以てする共同管理位までは漕ぎつけたいといふのが、彼等内心の希望であつた。かういふ彼等の希望を全然無視することゝの危險なことは政府でも感付いてゐた。其結果彼等の攻勢を緩和する意圖を以て政府から提案されたのが此鑛業條例であつた。本條例は單に雇傭條件や幸福增進に止まらないで、「產額の維持增進」に對しても勞働者の發言權を認容した點に於て、確に在來の工場委員會制度に一歩を擢んでゝゐたけれども、坑夫等の要求する水準からは遙に低級な革新であつたことは言ふまでもない。殊に坑夫等は本法の實施によつて戰時中折角獲得した全國劃一主義の團體交涉權が地方的に分割される危險のあることを憂慮したので、下院の勞働黨議員を通じて本法の成立に異論を唱へた。之に反して炭坑主等は、本法によつて彼等のオートクラシーを破られることは内心喜ばなかつたに相違ないけれども、强大なる坑夫聯合會の攻撃力は當時尙彼等を畏怖せしめるに十分であつたがゆゑに姑く隱忍して本法を甘受するの得策なるを思ひ、之に贊成した。而して本案は結局兩院を通過し、一九二〇年八月に法律となつた。

然るに其後本法が果して實施されるか何うか不明であつた間に經過した約一ケ年の歲月は全く英國炭坑界の形勢を一變せしめて勞資攻守の地位は轉倒するに至つた。一九二〇年の秋と一九二一年の春に於ける二回の大罷業は、政府と資本家との關係をます〳〵緊密ならしめたことゝ、三角同盟を事實上瓦解せしめたことゝ、急進的なる首領スマイレーに代ふるに保守的なるスミスを以てしたことゝ、賃金實收の激減したことゝ、組合賃金の凋渇したことゝ、失業者の增加したことゝ、空虛な紙上の利權を得たことゝの外には、坑夫等を益する何物もなかつた。玆に於て彼等は永遠の平和を欲しないまでも、暫時和を講じて休養するの必要を痛感して來た。而して其講和條件として彼等の承認しやうと申出たのが、一年前に彼等が拒否した鑛業條例第二部の實施であつた。同法が最後の宣告を受取つた本年三月七日夜の下院に於て、勞働黨議員のワルシュは同法の廢棄に反對してから演說した。本法は「責任ある勞働者と經營者とを協同せしむることによつて、相互の友情と敬意とを增進することがで

きるであらう。……坑夫等は誠心誠意職務に當り、事業の成功を希うて休まざるの事實を、傭主等に確認せしめることを欲すると。若し二年前の英國勞働界に於てかくの如き協調的意見を公表する勞働首領があつたならば、恐らく彼は叛逆者として除名されたかも知れない。

さはれ坑夫等の讓步は、急に氣強くなつた炭坑主等を滿足せしめるには足らなかつた。彼等は斷乎として鑛業條例第二部の破棄を固執したのみならず、今や追擊戰に移つて、曾て奪取された一切の領域を奪還せんと志してゐるものゝ如くである。しかもかゝる形勢は獨り炭坑界ばかりでなく、英國產業界全體を通じての現況である。今や英國資本團は一九〇九年以來の最低賃金法に向つても一大斧鉞を下さんと目論見つゝある。此種の反動政策が戰後の民主的精神を如何なる程度まで壓伏し得るかは今後の問題である。

二　獨逸工場協議會法の成績

近着の米國勞働省の Labor Review は獨逸の工場協議會法の成績に就て、同國各地方の工場監督官から政府に提出した多數の報告を轉載してゐる。これは現存の資本主義的產業組織の下に在つて、所謂勞資の協調が如何なる程度まで可能であるかといふことを推測するがためにも、又今日の勞働者の道德程度に於て、彼等の仲間に於ける代議制度なるものが果して有效に行はれる可能性があるか何うかを判斷するがためにも、極めて重要にして且興味ある一題目と言はなければならぬ。何となれば獨逸の工場協議會は、將來或は實現することあるべき純社會主義的な產業組織か、或は勞資の均等なる權能を以てする共同管理制度の下に於てならばいざ知らず、現存の產業組織と賃金取得者としての勞働者の地位に著しい變化がない限りは、現に產業經營上勞働者に許容されつゝある發言權の最大限度を示すものと認められるからである。これ以上に彼等の產業上の權能を增大することは、現に獨逸が仕遂げたやうな政治上及經濟上の變革を一層深刻に實行した國でなければ、望まれないことである。しかも其例は唯露西亞があるばかりである。二年前伊太利に於て、金屬工場占領騷動後、首相ジオリツチによつて、其前提として必要なる基礎的變革なしに、產業經營上勞働者の參與權を認容しやうと計畫されたけれども、固より成功しなかつた。英國の炭坑夫も一氣に炭坑の國有と勞働者の經營參加とを實現しやうと企てたけれども失敗に了つた。此故に若し露西亞以外の他の諸國に於て、社會主義者の期待するやうな根本的の變革が到底近い將來に望むべからさるものであるとするなら

ば、彼等は姑く獨逸の工場協議會程度の發言權に滿足するか、さなくば全然之を拒否するの外はないのである。しかも獨逸の勞働者は之に滿足したか何うかは別問題として、ともかく之を拒否せずに採納した。然らば彼等は如何に之を取扱つたであらうか。私は今それを吟味したい。

併し先づそれに先つて、獨逸の工場協議會なるもの丶出來と內容とを概説して置かなければならぬ。

革命後の新獨逸政府が一方では保守的な諸政黨から牽制され他方では急進的な諸運動から脅嚇されながら、辛うじて生み出した「黄い小兒」の一人は此工場協議會法であつた。此兒を生むさへもなかく〵の難産であつた。本法案が初めて議會に提出されたのは一九一九年の五月で、第一讀會を通過したのが同年の八月、委員會を開くこと前後四十三回、修正案の提出されたもの百二十七件、議會を通過したのは一九二〇年の一月で、最初の政府案は僅か五十六條から成つてゐたに拘らず、最後の確定案は百六條、卽ち約二倍に增加した。以て如何に精到な審議と熱烈な討論を經たかを察することができる。しかのみならず本法の確定案がいよ〵議會を通過しさうな形勢が見えた時、本法の內容を以て姑息不徹底なりとする左翼勞働團體の大示威運動が伯林の市中で行はれ、大擧して議會を包圍しやうと企てたので、これを阻止しやうとする警官隊と衝突して百幾十名の死傷者を生じた。卽ち本法は難産の上に血の產湯を使つて誕生したものと言へるのである。

本法がこれ程までに朝野に重要視せられた理由は、それが單に在來の工場法や勞働保險法の類とは異つて、獨逸新憲法中の最も意義ある一條、卽ち再生したる獨逸の產業經營上に於ける勞資關係の根本方針を規定したる第百六十五條に基く憲法附屬の一法律であつたからである。新憲法第百六十五條は「勞働者（アルバイテル）及俸給被傭者（アンゲステルテ）は賃金及雇傭條件の制定並に生產に關するあらゆる經濟的發達に貢獻せんがため、傭主と同一の權利を以て協働するの資格を有する」ことを認め、且彼等の「社會的及經濟的の利益を保護するがため、法律の規定に從ひ、其代表者を以て工場勞働者協議會、地方勞働者協議會及全國勞働者協議會を組織す」べきことを規定してゐる。此故に此憲法の條項によつて制定さるべき工場協議會法は、勞働者が「傭主と同一の權利を以て「生產に關するあらゆる經濟的發達に貢獻する」ことを得べき方法を現實に設定し、且勞働者の「社會的及經濟的利益を保護する」に十分なる保證たり得べき機關を造らなければならない筈であつたのである。然らば實際出來上つた工場協議會法の內容は果して右に述べるやうな憲法上の要求を充し得べきも

のであつたか何うか。

工場協議會法の內容に就ては拙著『産業民主主義運動』中『新獨逸の産業及勞働政策』と題する一章に於て、かなり詳しく說明して置いたから、茲には其骨子ともいふべき部分のみを指摘するに止めやう。先づ本法に依ると獨逸國內に於ける總ての工場鑛山は必ず勞働者及俸給被傭者各々の互選に係る代表者を以て協議會を組織しなければならぬ。協議員の數は從業員の多寡に應じて三名以上三十名以下に定められ、勞働者と俸給被傭者との割合は全體の員數によつて按分される。被選擧資格には多少の制限を設けられてゐるが、男女による區別は全然認められない。

是も注意すべき點は協議員の權能であるが、彼等は原則として事業の經營に直接參與することは許されてない。唯作業能率の增進に關し傭主を援助し、新生産方法の利用に就て工場管理者と協力すべきことを要求されてゐるに過ぎない。其他は雇傭條件の決定とか、勞働爭議の和解仲裁とか、衞生變災住宅等に關する事項とかに就て相當の發言權を認められてゐるが、是等は從來の勞働組合の既に有してゐたもので、格別新しい獲物とは言はれない。若し本法が何等かの新しい或物を勞働者に與へたとするならば、それは協議員中から更に互選される少數の執行委員（ベトリーブスアウスシュス）の權能だけであらう。執行委員は傭主に對し、勞働者の就業狀態、給料賃金、其他雇傭條件に異動を及ぼすやうな取引契約を行つた時には、其都度之を報告せしめることができる。又傭主は執行委員に對し、每年少くも四回事業一般の景況生産の狀況、前途の見込勞力需要の增減等に就て報告するの義務を課せられる。しかのみならず常時勞働者三百人以上又は俸給被傭者五十人以上を使用してゐる傭主は、每營業年度の損益計算表及貸借對照表を執行委員に提出し其內容を說明するの義務がある。又重役會の設けある事業所では、執行委員の一名又は二名は重役會に出席して其意見を述べることを許される。但執行委員はかくして知り得たる營業上の機密は一切口外することを許されない。若し之を洩らせば處罰される。

之が工場協議會法の要點である。何人もこれだけで憲法第百六十五條の立法精神が具體化されてゐると信ずるものはあるまい。獨逸勞働者が非常な不滿の情を以て之を迎へたのは寧ろ當然である。唯多數を支配してゐる右翼の勞働組合は、社會民主黨との關係上正面から之を破壞することも出來なかつたゝめに、工場協議會によつて決定される雇傭條件の內容は、勞働組合の團體交渉によつて決定されたる雇傭條件に矛盾することを許されないといふ保證を、修正案として挿入せしめたゞけで、姑く

本法に滿足することになつたのであつた。ミュラーやシャイデマンの徒も恐らく之を以て能事了れりとは考へなかつたであらうが、保守的勢力との妥協なくしては政局を維持し難い獨逸の現狀から見て、蓋し已むを得なかつたものと思はれる。

さてこれから工場協議會法實施の成績を覗はう。但これは冒頭に述べたやうに、獨逸の各地方の工場監督官の報告中から、私が其要領を拔萃し、且隨意に項目を別つて之を綜合したものであるから、單に大體の形勢を紹介するに止まり、各地方の狀況により多少相違した事實の存することは豫め承知して置かなければならぬ。

一、委員の選擧に就て

委員の選擧は概して圓滑に行はれたけれども、法令の内容に通曉しない者があつたり、法文の解釋に疑義があつたりした爲めに多少の紛紜は免かれなかつた。最初の選擧に於て、委員の候補者として擧げられた者は、年の若い、急進的な思想を懷いてゐる者が多數で、比較的年長の職工は委員に擧げられることを避ける風があつた。ザクセン地方では平素勤勉にして技能優秀な職工は大抵委員たることを好まないために、最も熟練職工に富んでゐる或工場では、小使が委員に選ばれたやうな例もある。デュセルドルフ地方では急進的な勞働組合が自派の委員のみを當選せしめるために、投票を用ゐずに、起立によつて選擧を行ひ、反對派の組合から横暴呼ばはりをされた。いづれの地方でも組合員と非組合員とを混用してゐる工場では、組合委員が團結して非組合員を壓迫し、事實非組合員は其代表を擧げることが困難だといふ苦情が多い。從つて選擧の結果から見れば、委員の大多數は組合員で、殊に自由組合（フライエゲウエルクシヤフテン）に屬する者が最も多いやうである。

一旦委員に選擧された後に辭職を申出る者もかなり多い。殊に議長の更迭が頻繁である。其理由は任務が面倒であるのと、傭主からは睨まれ、同僚からは攻められ、甚だ割の惡い役廻りだといふ考へから起るのが大部分である。

次に勞働者自らが工場協議會の設立に不熱心だといふ報告がかなり少くない。殊に非組合員の多數を使役してゐる工場では一層さうである。從つて委員の選擧に當り投票を棄權する者が甚だ多い。職工約一萬人を有する或製鐵工場では、最初の選擧に四　五分の棄權者を出し、委員の總辭職により、二度目の選擧では六割五分の棄權者を出した。

全國を通じて女工の多い工場では、彼等の無理解と不熱心とのために、委員選擧の棄權者が頗る多く、殆ど協議會の成立をなさないやうな場合すらある。又一般に女工は自ら委員たるこ

とを嫌惡するの風があつて、女工が大多數を占めてゐる工場でも、委員として選ばれる者は男工に多い。

二、勞資の關係に就て

工場協議會成立後に於ける勞資の關係に就ては、各地方或は各種產業によつて、隨分異つた觀察が報告されてゐる。先づ樂觀的な報告を擧げると、ポツダムやオツペルン地方では、最初工場主側で協議會の成立を喜ばず、成るべく之と接觸することを避けるといふ風があつたが、後に至つて協議會の効果を認め之を嫌惡しないやうになつた。キヨルン地方に於ては、協議會は概して勞働者の利益と事業の繁榮とに對し誠意を以て努力するの意向を示し、傭主も漸次初期の誤解を去つて、協調的態度に出てゐる。併し未だ其ために生產の增進を見るまでの實績を擧げてゐない。ザクセン地方では、協議會は豫想以上に滿足なる協調の實を擧げ、驚くべき迅速を以て新制度に慣熟しつゝある。ドレスデン地方では、少數の例外を除けば成績は概して良好であり、ヴユルテムベルグ地方では、傭主の氣受は概して良好で、殊に或二三の工場主は非常に本制度の効果を推讃してゐる。マグデブルグ地方では、本制度によつて衛生其他幸福增進の施設に改良を施すことができた。

次に悲觀的な報告を擧げると、ベルリン地方では法文の解釋や適用に就て勞資の意見が屢々衝突し、結局双方とも現行法に對し不平不滿を有つてゐる。ポツダム地方では、協議會は產業上の惡影響を顧慮せずに、勞働者の利己的要求にのみ沒頭するの弊がある。デユセルドルフ地方では、被傭者は餘りに利己的であり、又傭主は法の精神を理解しないで、協議會の要求を拒絕するを以て能事とし、到底双方協調の實を擧げ難い。フレスラウ地方では傭主の多數は協議會に敵意を有し、勞資の關係は却て紛糾を增し、產業上何等貢獻する所がない。

これまで協議會其者に關聯して起つた勞資間の紛議は、大抵會に要した費用及委員が會のために費した時間に對して支拂はるべき賃金の多寡が問題となつてゐる。是等の支出は法律によつて當然傭主の負擔に歸すべきものであるけれども、其程度や範圍を箇々の場合に決定することは相當面倒な事務と思はれる。殊に大工場の協議會では、委員中の一二名は全然工場の勞務に服さないで、毎日各職工から申出る苦情を聽くことゝ、工場主に對する談判とで日を送つてゐる。是等の委員に對しても相當の賃金を支拂ふことは工場主に取つては苦痛とせられて居る。

以上が獨逸の工場協議會の成績に關する報告の大摑みな要領である。これは實施後僅か一年間の成績であるし、又單に工場監督官の立場から見た觀察であるから、資本家及勞働者の立場

からは又異つた感想を聽くことが出來るかも知れない。が不完全ながらも右の要領の中から、吾等は同法の成績に就て、相當有益なヒントを得ることができると思ふ。

三　米國に三角同盟成る

英國の三角同盟は昨年四月の「黒色の金曜日（ブラック・フライデー）」に於て事實上瓦解したが、大西洋の此方では本年の二月二十二日に新三角同盟の成立が正式に布告された。締盟團體は炭坑夫に鐵道從業員に波止場人足（ロングショアメン）で、總勢すぐつて二百萬と註される。同盟の目的は「賃金爭議に當り組合勞働者を防護するため協力一致して有効なる活動を」なさんとするに在つて、其實行方法としては、「各締盟團體が豫期せざる攻撃の犧牲たらんとすること明なる場合に於ては、締盟團體の代表者相會し、此危局に處すべき最善の方法を考慮」しやうといふのである。乃ち同盟の主たる目的は資本側の賃金引下運動に對する防禦にあるものと察せられる。これは英國の三角同盟が「全國的性質（ナショナル・キャラクター）」を有するか又は「甚しく主義（プリンシプル）に影響する」問題であれば、何事に依らず協同作戰に出づべきや否やを決定するために聯合會議を開催することを約したのに比較すると、餘程目的が局限されてゐる。併し英國の三角同盟の加盟者は昨年約百八十萬で、トレード・ユニオン・コングレス總員の約四分の一であつたのに、米國の三角同盟の加盟者は約二百萬で、目下のA・F・L總員の約二分の一に當つてゐるから、數の上では寧ろ優勢である。唯問題は此種の比較的散漫な勞働同盟が、廣汎なる勞資の戰線に於て、果して幾何の戰鬪力を發揮し得るかといふ點に在る。組合の統制に於て、團體運動の訓練に於て、將た戰備の充實に於て、階級意識の發達に於て、遙に米國の勞働者を凌駕してゐる筈の英國勞働者すら一度も三角同盟の威力を發揮するの機會なくして了つた。恐らく米國に於てもかゝる機會の到來は尙近い將來ではあるまい。米國の輿論が英國に於て三角同盟が成立した當時に比較して、遙に冷淡に此新事實を迎へたことは毫も怪むに足りない。

四　團體交涉權問題として見たる米國炭坑大罷業

勞働組合運動の第一次の目標が雇傭條件の改善に在つて、其有効な實行手段が殆ど團體交涉權の運用に限られてゐることは今更めて說くまでもない。併しながら團體交涉なるものは一工場若しくは一地方に孤立的に行使されるのでは其効果を擧げることが困難である。何となれば團體交涉によつて決定される雇傭條件は、傭主の隨意に左右する雇傭條件に比べて、應急の伸

結力を缺いでゐるがために、一工場と他工場との間に營業上の競爭が行はれ、一地方の産業と他地方の産業との間に經濟上の利害が衝突するやうな場合には、商況の變化に應じて即座に雇傭條件を變更することの出來る工場又は地方ほど競爭上有利な地位を占め、然らざる工場又は地方は不利なる地位に立つ結果として、團體交渉の支配の下に在る工場主は、勢ひ團體交渉を破棄しなければ到底、事業を存續することができないと感ずるに至るからである。此故に勞働組合が有効に團體交渉權を運用して、其實益を收めるがためには、其交渉の範圍を、營業上競爭の行はるゝ同一産業の全局面に擴大することが何よりも肝要である。即ち全國的團體交渉權の獲得がそれである。而して之を獲得するがためには、先づ一産業に屬する全國の工場を組合化することから初めなければならぬ。この組合化なくしては所詮團體交渉權の有効なる運用は不可能であるばかりでなく、時としては勞働者自身のために有害である場合すらある。何となれば團體交渉權を有たない非組合工場では、幾分か不利な雇傭條件を課せられる代りに失業しないで濟む場合があるけれども、團體交渉權を有する組合工場では、雇傭條件の低下を甘ぜないがために、失業の憂目を見なければならぬ場合があるからである。

からいふ觀察點から見るならば、今次の米國炭坑夫の大罷業は勞働組合運動に少からぬ教訓を與へるものと私は思ふ。米國に於ける工業用石炭（ビチュミナスコール）の主たる産地はペンシュルヴニヤ、オハイオ、インヂアナ、イリノイス及ウエスト・ヴージニヤの五州である、しかもウエスト・ヴージニヤを除いた他の四州（所謂中央競爭地區（セントラル・コンペチチーヴ・フヰールド））内に於ける炭坑は全部が組合工場（クローズドショップ）で、一八九八年以來團體交渉權を確認せられ、毎年各炭坑の代表者と炭坑夫組合の代表者とが相會して、將來一ケ年間の雇傭條件を協定する例になつてゐる。然るに是等四州の炭坑に對し有力なる競爭者の地位に在るウエスト・ヴージニヤの炭坑が最初から此團體協約に參加しなかつたことは、四州の炭坑主に取つては甚だ憂慮すべき事態であつた。しかもウエスト・ヴージニヤの炭坑を此協約に參加せしめるためには、先づ同州内の炭坑を組合化せしめることが必要である。而してそれは言ふまでもなく炭坑夫組合の努力に俟たなければならぬ。此故に一八九八年に締結された第一回の團體協約では、翌年度までにウエスト・ヴージニヤの炭坑を組合化せしめて、此協約に加入せしめるといふ組合側の保證を前提としてゐたのである。

　然るにウエスト・ヴージニヤの炭坑は、勞働組合の攻擊に對しては難攻不落の要塞であつた。ジョン・ミツチエルやジョン・ル

ーキスの如き傑出したる勞働首領の努力を以てしても終に之を陷落することができなかつた。二十餘年を經過したる今日に於ても尙且さうである。これは同州がやゝ南に偏して居るといふ地理的關係もあり、又比較的多數の黑奴(ニグロ)を使用してゐるといふ人種的影響もあるが、實は主として超人爲的なる傳說的雰圍氣の作用である。此傳說的雰圍氣の不思議な作用は勞働運動の上に於ては屢々經驗される例であるが、殊に鑛山に於てそれが多いやうである。例へば米國に於ける二大銅山たるユータとビユートとは比較的接近した位置に在るに拘らず、ユータは曾て同盟罷業を見たことがない程靜穩であり、ビユートは最も險惡な爭議の震源地と認められてゐる。しかも賃金其他勞働者の待遇はユータよりもビユートの方が遙に勝れてゐるのである。日本に於ても北海道の炭坑に於ては屢々激烈なる爭議が演ぜられたに拘らず、九州の炭坑に於ては勞働團體必死の宣傳も曾て其功を奏せなかつた。こんな事情でウエスト・ヴージニヤの炭坑は今尙組合化せらるゝに至らず、從つて同州の炭坑主等は團體交涉の局外に立つて、任意且隨時に雇傭條件を變更するの自由を樂みつゝ今日に至つてゐるのである。これは他の四州の炭坑主等のためには、絕えず營業上の脅威であつたに相違ない。それにも拘らず彼等が今日まで團體交涉の破棄を敢てしなかつた理由は、產業界の形勢が比較的順調であつたので、甚しき苦境に陷らずに濟んでゐたゝめに外ならなかつた。

然るに戰後に於ける產業界の沈衰は四州の炭坑主等をして最早舊態を維持することの不可能なるを感ぜしむるに至つた。石炭の需要は減じ、價格は低落した。そこで生產費の緊縮が產業の存立を濟ふ唯一の手段となつて來た。其際ウエスト・ヴージニヤの炭坑主は生產費緊縮の手段として賃金の値下を斷行した。若し他の四州の炭坑主が市場の競爭に堪へんとするならば勢ひ同樣なる賃金値下の手段に出でなければならぬ。併しながら彼等は團體協約の束縛の下に在つた。同協約は本年三月末日の期間滿了に至る迄は雇傭條件の變更を許さゞるがゆゑに、四州の炭坑主は如何に焦慮しても、手を空しくしてウエスト・ヴージニヤ炭のために販路を侵蝕されることを傍觀するより外はなかつた。

此事實は單にウエスト・ヴージニヤの炭坑主と他の四州の炭坑主との利害問題ではなくして、同時に又双方に於ける炭坑夫自身の痛切なる利害問題であつた。何となればウエスト・ヴージニヤの炭坑夫は名目上の個數賃率を引下げられた代りに、事業の繁榮に伴れて稼高に增加を來し、實收賃金は却て著しく增加したに拘らず、他の四州の炭坑夫は賃率は引下げられずとも

事業の沈衰によつて稼高に減少を來し、實收賃金が減少した上に、多數の失業者を出し、甚しき苦境に起たなければならぬことになつたからである。

かくの如き事情は勞働組合運動の社會道德的意義に關し幾多の議論を誘發する原因とならずには措かない。殊に米國の如き國柄に於ては一層さうである。それは必ずしも資本主義的勢力が强大であるからといふのではない。全體のためには一部の犧牲を惜まないだけの用意を有する識者連中が、「公衆のために」(for public sake)を標語として常に論陣の先登に立ち、しかもそれが輿論の向背に與つて力あるのが米國の慣例である。酒の製造業者や販賣業者に一錢の賠償だもなしに禁酒法を成立せしめたのも、實は此種の識者である。而して此種の識者は、幸か不幸か、重大なる勞働爭議の發生に當つては、大抵の場合「公衆のために」勞働組合に反對の態度を取る。殊にそれが鐵道とか石炭とかいふやうな、公衆の日常生活の安危に直接影響するやうな場合に於ては尙更さうである。戰後の米國に於ける勞働問題の論議は一九一九年秋のスチール・ストライキ以來「開放工場か閉鎖工場か」といふ一命題に其焦點を置いてゐる。而して米國多數の識者の說に從ふと、若しも「自由」が民主國民に取つて生命の如く貴重なものであるとするならば、勞働組合に加入すると否とは完全に各勞働者の自由意志に留保されなければならい。それと同時に、非組合員を雇入れると否とも亦完全に工場主の自由意志に放任されなければならない。然るに若し茲に勞働組合あつて工場主に對し組合員のみを雇傭すべしと要求するならば、それは工場主の自由雇傭の權利を侵害するものであると同時に、組合に加入を好まない勞働者の自由を奪つて、强ゐて組合に加入を强制するものと言はなければならない。所謂閉鎖工場の主義は此意味に於て米國民の傳統的思想に違背するものである。從つて又閉鎖工場たることを前提とする團體交涉權の要求も此意味に於て不合理とせなければならぬ。何となれば若し一工場主が組合の代表者と協定する所の雇傭條件を非組合員の上にも適用するならば、非組合員の契約の自由を侵害することとなるからである。しかのみならず閉鎖工場に於ける團體協約は生産費の低下を妨げて屢々公衆の利益を裏切ることがある。由來勞資間の鬪爭は兩者の私鬪である。それが公衆の安寧と相關しない限りに於ては、勝敗は敢て問ふ所でないけれども、若しそれが公衆の安寧を脅すに至つては、公衆は當然之に干涉すべき權能を與へられなければならぬ。勞働者の團結權を認めないことは固より不道理である。併しながら彼等の團體交涉權や同盟罷業權に對しては相當の制限を設けなければ公衆

安寧は之がために危殆に陷る。これが米國に於ける多數の識者の意見である。ハーバート大學の名譽總長たるエリオツト博士の如きは其代表的な論客である。

かういふ識者の論調は多年團體協約の桎梏に惱んでゐた四州の炭坑主に取つては何よりの聲援であつた。ウエスト・ヴージニヤにして飽くまでも獨立の地位を維持して變らない以上は、過去二十餘年の團體交渉を破棄して個人的契約に復歸することの外に、目下の營業上の危機から遁れ出づる途がないと彼等は確信するに至つたのである。

此形勢を見て取つた炭坑夫組合は、四州の炭坑主をして團體交渉破棄の意向を翻へさせるためには、是非とも多年の宿望たるウエスト・ヴージニヤの組合化を實現するの外なきことを痛感した其結果昨年八月に於ける同州未曾有の炭坑大暴動となり戒嚴令の施行となり、軍隊の出動となり、幾多流血の慘事が演ぜられたけれども、結局組合側の企圖は失敗に了つた。

此大暴動の際炭坑夫組合がウエスト・ヴージニヤの罷業坑夫團の軍資として送つた金は二百五十萬弗の巨額に上つた。しかも此金は總てチエツク・オフ・システム（Check-off system）によつて得られたものである。これは四州の炭坑主の好意によつて各坑夫に支拂ふべき賃金中より組合への掛金を差引き、これを一括して組合事務所へ交附する制度をいふのである。此制度は單に組合の掛金徴收の手數を省くばかりでなく、組合員の統制上至大の便宜を與へるものである。併し此便宜が勞動資金の調達に供せられるに至つては、米國輿論の顰蹙を買ふこと固より當然であつた。

以上述ぶるが如き遠因近因を背景として今回の米國未曾有の炭坑大罷業が演出せらるゝに至つたのである。爭議の內容は要するに團體交渉とチエツク・オフ・システムを撤廢しやうとする四州炭坑主側の要求と、是非ともこれを維持しやうとする炭坑夫組合側の要求との衝突である。就中其主眼は團體交渉權の問題にある。

今回の爭議に當つて炭坑主側は一九一九年のスチール・ストライキの際ジヤツジ・ゲーリーの取つた戰術を眞似て、組合代表者との商議を拒絕する策を取つてゐる。これは併し、今日までの形勢からいふと炭坑主側の失策であつたと思はれる。何となれば中央政府及識者側の同情は之がために却て炭坑主側から背いたからである。一九一九年のスチール・ストライキの場合すら、上院の調査委員會は飽くまで組合代表者との會見を峻拒したゲーリーの態度を非難した。併し當時ゲーリーの支配の下に在つた製鐵工場の勞働者中、組合に加入してゐたものは二割內

外に過ぎなかつたからして、ゲーリーが被傭者の少部分のみを代表してゐる組合員を相手として、被傭者の大部分に影響すべき問題を協議することは、非組合員に對して公正を失するものであるといふ理由を以て、會商を拒んだことには、確に一面の道理があつた。然るに今回の炭坑爭議に於ては大に事情を異にし、勞働者の殆ど全部が組合員であり、且炭坑主は多年組合代表者と會商して雇傭條件を議定するの習慣を有つてゐるに拘らず、今回に限つて組合代表者との會商を拒絶し、自ら好戰的の態度に出たことは、確に一般の同情を失はしめる原因であつた。

炭坑主側が一般の同情を失つてゐることは、此罷業に對する政府及議會の態度が能く之を證明してゐる。昨年十月の鐵道爭議の危機に際しては、政府は全力を擧げて罷業の防止に努め、若し罷業が實現したならば、政府自らが大規模な「罷業破り」を斷行するの準備を調へたので、終に勞働組合側は屈服して罷業命令を取消すの已むを得ざるに至つた。然るに今回の炭坑爭議に對しては、政府は全く嚴正中立の態度を維持し、毫も組合側を壓迫するやうな處置に出てゐない。しかのみならず大統領は政府部内に調査委員會を設けて、炭坑經營に關する根本方針を定めやうとしてゐる。其結果は未だ公表されないけれども、必ずしも炭坑主側に有利な提案とは豫想されてゐない。

又米國上院議員中に炭坑公營論を主張する者がだん／＼殖えて行く傾向のあることも注意すべき現象である。ポラー氏の如きも其熱心な一人であるらしい。炭坑夫組合長のジョン・ルーキスも亦炭坑公營論者であるが、彼等の主張の内容は判然しない。併しいづれにしても、現行の炭坑私營制度の弊害が公營論の前提である以上は、勞働運動の上からは有利な傾向と認めて然るべきである。殊にそれを團體交渉權の問題として見るならば、如何なる內容程度のものであつても、公營は私營に比べて炭坑夫組合に不利であるべき理由はないのである。

が併し之を公衆の立場から考へるならば、或産業の勞働者が完全な團體交渉權を獲得することが、其利益であるか何うかは容易に斷じ難い問題である。米國に於ては「公衆」なる語は屢々一切の勞働者を除いた「消費者」といふ意味に用ゐられるけれども、私が茲で謂ふ所の公衆とは勞働者をも含めた意味の公衆である。例へば米國に於て炭坑夫が全國的に完全な團體交渉權を獲得したとする。そして其結果坑夫の賃率が高められ、勞働時間が減ぜられたとするならば（又實際さういふ結果が得られなければ彼等の團體交渉權は寶の持腐れである）彼等の生活は改善されるに相違ない。併し其ために石炭の産額が減少するとか或は生産費が高まつて、石炭の小賣相場が騰貴するとか

いふやうな事態が發生するならば、直に其厄を蒙むる者は一般の公衆である。炭坑夫以外の一切の勞働者を抱擁する所の公衆である。果してさうだとすると、炭坑夫の利害と、炭坑夫以外總ての勞働者の利害は相容れぬことになつて、炭坑夫の團體交渉權獲得は、全體としての勞働者の生活改善の要求からは寧ろ呪詛すべきものとならなければならない。

從つて一產業の勞働者が完全な團體交渉權を獲得することは彼等に取つて最大最利な武器を掌握することを意味すると同時に、彼等が此武器を使用する場合は、厳に其結果が他の勞働者の利益を害さない場合、從つて又公衆の利益を害さない場合（公衆の全部が勞働者であるやうな新社會が出現しない限りは）に局限されなければならぬ。これが勞働組合の道德である。勞働組合が此道德を厳守しない限りは、勞働運動は社會的正義の上から是認されないのみならず、又階級としての團結をも達成することができない。

併しながら此の如き勞働組合の道德は英國に於てすら尙確立されてゐない。三角同盟が曾て其威力を發揮することなしに瓦解したのも畢竟其ためである。況んや勞働組合運動の未だ十分に發達してゐない米國に於ては尙更である。眞に共通の利益の上にのみ、眞の團結が作られる。米國の炭坑夫が今回の爭議の結果として、從來の團體交渉權を維持し得たとしても、或は進んで一層堅固な團體交渉權を獲得したとしても、彼等がそれを如何に運用　るかに就ては、米國の公衆は最も厳酷な監視者であり又批評家であることを記憶しなければならない。

退嬰的經濟思想を排して、積極的經濟政策の確立に及ぶ

法學博士　堀江歸一

經濟社會窮迫の結果

私は近頃我國に行はれつゝある種々の議論を考察して、其間に退嬰的經濟思想の潜んで居ることを嘆ぜざるを得ない。如何にも最近數年間我國の經濟社會は不景氣に襲はれて、國民生活は慘憺たる狀態に陷つて居り、今日の所では、何時に爲つて、局面の恢復を見るか、測り知る可からざる趣さへある。斯くて此事が國民の元氣を消耗させて、諸事に退嬰を旨とするに至らしめるものとも解釋される。然らば兩三年前經濟社會の好景氣であつた時代には、國民に輝いた希望があり、之を達する爲めに、邁進する所あつたかと云へば、必ずしもさうではなく、經濟上の利益と稱するものは、多く一部の虛業者に依つて、吸收され、恐慌の一過した後に於ては、其利益が果して何處に留まつて居るか、殆ど之を認めるを得ない。好景氣の時代にも、不景氣の時代にも、共に經濟上の見地から考へて、興國の機運なり、將た又之を誘導すると認められる政策なるものはなく、前者に於ては、一部の社會に屬する者が幻影的利益を獲得し、後の時代に於ては、彼等が曩日收め得た利益を喪失する、而して眞面目に自已の勤勞を役して、生活を營んで居る者は兩時代を通じて生活上の困難に惱まざるを得ないとすれば彼等が元氣に於て、沮喪し、競爭上の落伍者たるが如き趣を示すに就ては、聊か同情を寄することを禁ぜざる次第である。

然し之を經世上の見地から考へて、國民の元氣が沮喪したからと云つて、國家の政策が此沮喪した人心を基調として、立案されるようであつたならば、如何なる結果を生ずるであらうか。斯の如きは國家自ら國民の爲めに、墓穴を掘るものであつて、將來に禍害を及ぼすの弊大ならざるを得ない。國家としては斯く沮喪した人心を振作して、興國の機運を醸成しなければ

ならぬ道理であるのに、我國の現狀を見ると、政府に斯る根本的政策の定まれるものゝない一方に、民間に於て退嬰的思想を耳にすることは、私の深く遺憾とする所である。

産兒制限問題

最近の一例として、産兒制限問題を擧げる。近年合衆國に於て、此問題に對する自家の所信を宣傳しつゝあるサンガー夫人が來朝し、殊に内務省が同夫人の宣傳に嚴重なる制限を加へた結果、産兒制限問題に對して、世人の視聽を惹くこと、少なからざるに至つたやうであるが、此問題の如き私を以つて見れば、我國に於ても何も今日取立て云ふ程、新しい事柄でもなければ珍らしい話でもない。封建時代に於て、既に受胎忌避、墮胎、殺兒、幼兒遺棄等が種々の地方に於て行はれたことは、隱れもない事實であつて、殊に前二者に關する方法の如き、私は爰に之を公表しないが、餘程進歩したものもあつたと稱される。而して斯る手段に依つて、人口の増殖に對して人爲的制限の加へられた原因は何れに在るかと云へば、要するに封建時代に於ける經濟生活の特徴に存するものと認めざるを得ない。即ち封建時代の特徴として、一の藩と他の藩との交通は甚だ不便であり、大藩の内には、他に對して殊更に交通の關係を遮斷して居るものもあり、一藩の經濟は其藩内に於ける自給を主とし、他の廣き場所に向つて、有無を疏通する道に出づることを許されない。陸上の交通の不便であつた如くに、海上の交通に於ても、船舶の石數に嚴重なる制限のあつた結果海上を通じて、一藩と他藩との交通の安全に、又迅速に行はれることを望まれなかつた。斯くて封建時代の經濟生活は大體に於て自給自足を重なる要件とし、交易に依つて、物資の價値を増進して、自他の利益を謀るとか、進んで生産物を増殖するとか云ふが如き働きは、如何にしても之を見るを得ない。殊に工業は手工を主とし、商業は一般に人々に賤まれ、農業が國民生業の主たるものと爲つて居つた以上は、偶々或る領土に於て土地廣濶で、收獲される農産物の多量である場合には、其多量であるだけ、多數の人口を給養するを得るに相違ないが、若しも其領土に於て農産物の收穫される分量が減少した、又は今後増加する見込を失つたとしたならば、其土地に居住する人民は各自の生活程度を從來の標準點に維持する爲めに、勢人口の増殖に制限を加へることを急要とするに至るのである。現に山間の僻地に在る村落に於て、住民が如何に努力した所で耕耘す可き土地すら自由に得られない山を越へ、谷を横ぎつて、山間の盆地すら、既に耕し盡したと云ふような狀態の下に、墮胎、殺兒等の盛に行はれた一事に徴

しても、是等の風習が封建時代に於て局限された經濟生活の下に生ずる産物であることが理解されるのである。

資本勞働移動の自由

斯る封建時代の經濟生活は封建制度其ものゝ、解體した如くに、其根柢から打破された譯である。今日吾人の營んで居る經濟生活の特徴は資本や、勞働に於ける移動の絶對に自由である一事であつて、資本は其所有者に依つて、之を運用するに最も適した場所に放下され、資本の放下に依つて、事業の起り、利潤の生ずる場所には必ず多數の人口が吸引されて、其所に住所を求め斯くて一ツの都市を建設する、此都市に於て、住民の生活標準は何に依つて高低するかと云へば、都會に生産される富と人口との割合に外ならない。随つて或る都會に於て、天與であると、人工であるとを問はず、産出される富が多量であつて人口之に及ばない場合には、生活程度は必ず高い度合に上り、反對の狀況に居る地方から、人口を吸引し、斯くて富と人口との割合や、各地に於ける生活の程度に均衡を保たしめるに至る道理であつて、交通なり、移動なりが自由に行はれゝば、行はれるだけ、生活程度に平均するものと考へられる。

更に此勢の赴く所を著しからしめるものは、國際間の交通である。今日國際間の廣きを通じて、資本の移動の自由であり、又自由である可きことは論を俟たない。欧洲戰爭中、英國の如き資力の豐富な點に於て、世界有數の地位に居りながら、尙ほ内國の資力を涵養することの必要から、資本の海外に輸出されるに對して、嚴重なる制限を設けた國があり、又支那の如き外國の權勢の自國に加へられることを恐れる餘り、外國資本の移入を喜ばざる國もあるが、是等は戰時非常の秋に際會するか、又は國民固陋の思想に基くか、孰れかの一に出づる間違であつて、資本の移動の國際間を通じて、自由であることは、一般の原則を以つて目される。然らば資本は何を目標として、國際間に移動するかと云へば、其れは一に資本運用の結果として生ずる利潤なり、資本貸付の報酬として得られる利子なりの高低に依つて、決せられるのであつて、資本の放下される所に於ては必ず多くの富源が開發され、富源開發の歩を進めるに随つて、必ず多數の人口を給養する實力が涵養されて、資本に次いで人口が吸引される道理であり、資本が有效に運用されて、其効程を發揮する一方に、其効程の增進すると同一の程度に於て、人口の增殖して行く限り、其地方に於ける人口の生活程度は優良なる狀態に維持され、人口の增殖は或る程度まで資本其ものゝ効程を增進せしめるに至るのである。

斯の如く考へれば、一國の間に於ては勿論、更に國際間の廣きを通じて、資本勞働の移動の自由の認められる以上は、一國に於ける國民の多産多殖は兩者の移動に對する自由の認められなかつた時代に於けると全然違つた問題に爲つて來たことを知らなければならぬ。假に或る國に生れる人の多くが病弱であつて、自己の生活資料を得るだけの勤勞に堪へない、彼等の生活上に消耗する所は勤勞上に産出する所を超過すると云ふ狀態であつたならば、斯る人民は他の人民に依賴して、生活するものであつて、吾人は之を呼ぶに寄生蟲的生活と云ふを憚らない。斯る生活を送らなければならぬ精神的又は肉體的弱質者に屬する人口の增加は何としても之を回避し、又抑制することを必要とする。之に反して人が健全なる四肢を備へ、又是等の四肢を生産上に利用せしめるだけの智能を持つて居るとしたならば、其生産上に與へる所は生活上に費す所を超過する譯であつて、增加する人口は自ら給養する資料を齎すことゝ爲るであらう。而して一國に存在する生産資料中、天然物件に屬する土地の如き、鑛山の如きは、其供給に限りがあり、此點から開發され可き富源に制限の存する場合に、人口獨り增殖したならば、其增殖した人口は依つて以つて生産的技能を應用する餘地に乏しからざるを得ない、之を打開するに就て、其處に二つの道が開かれる。其一ツは天然力の多くを要して、其割合に多數の人口を給養するを得ない農業牧畜林業の類を棄てゝ、天然力の多くを要せず、而して狹い面積に多數の人口を給養するを得る商工業の發達を謀ることであり、他の一ツは一國の産出する生産資料の割合に、棲息する多數の人口の一部分を外國に移住する道を付けることである。

我國移民政策の成敗

我國民の一部を外國に移住させることは、明治初年來我國に起つた議論であつて、始めは外國移住は國内に於ける强壯なる勞働者の供給を不足せしめると云ふ反對論があり、寧ろ内地移住を盛にするを可なりとする意見も行はれたが、内地移住の行はれる場所としては、一の北海道を重なるものとする一方に、内國に於る國民の生活は年と共に困難を加へる結果、外國移住は目前の必要と爲り、又事實外國に多數の移住民を送り出した山口縣廣島縣熊本縣長崎縣の如きは、移住民の内地に對する送金に依つて、大に地方の經濟を潤澤にするを得た事實の爭ふ可からざるものがある。即ち、我國の海外移住は或は布哇移民と爲り、濠洲移民と爲り、南北亞米利加の移民と爲るが如くに種々の方面に移動し、時に北米や濠洲に對する移民の自由の制

限された善後策として、十數年前時の外務當局者であつた小村侯の口を通じて、滿韓移民集中論と云ふ說すら主張されたことがあつた。即ち我國が經濟的生活の標準點を上進させる爲めに舊來海外移住を急要と認めたことは既往の實驗に依つて、證明される次第であつて、山田長政とか、高田屋嘉兵衛とか其他海外に別天地を拓いて、自家の運命を築いた人々の事蹟は屢々引用されて、國民の對外發展を刺戟する資料に充てられたのである。然し此國策の成敗は如何であつたらうか。滿韓移民集中論の如きは、移民問題の解決策としては、全く顧みるに足らない。移住民が政治上や宗教上の關係から、安住の地を求める爲めに、行はれる場合に於ては兎に角、普通の移住は經濟上の關係に基き、移住地に於て勞働に就き、職業を求める方が現住地に於けるよりも、豐富なる賃銀を得て、安易なる生活を營み得ることが動機と爲つて行はれるのである。隨つて滿韓兩地方の如き低廉なる勞働報酬に甘んじ、生活程度の向上を謀る方便を知らない朝鮮支那の下等勞働者の群集して居る方面に向つて、何として彼等よりも生活程度の高い日本人を移住民として送遣する餘地があるであらうか、斯の如きは對米移民問題の解決に窮した外務當局者が一場のテレ隱しに述べた放言たるに過ぎない。

然らば對濠對米移民は成效したと見られるであらうか。兩地方に於て、日本人が常に排斥されたり、當初持つて居つた權利を奪はれたり、何としても白晳人と同等の地位を與へられるに至らなかつたりする諸點は我國移民の失敗を語るもの丶如くに思はれるが、實利害の方面に着目して、考へを進めると、兎に角多數の日本人——其內には東京を見たこともない者が居る——が內國に於けるよりも遙に優良なる生活を營んで居り、土地を所有し、家屋を所有し幾多の白晳人を使役して、營業するまでに根據を築き上げた者もあり、單に一個の力役者として、勞働して居る者に就て見ても、年々若干の貯蓄金を本國に送還し、他日歸朝の際に、自家の生活を安定させる資金を收めつ丶あるものは、其數に於て少なしとしないであらう。私が地方を旅行する毎に感じることが一ツある。商工業上の根柢のある大都會は別として、名も知れない小都會で特に經濟上に繁昌して居つたり、又は住民の生活に餘裕のあつたりするように見受けられるのは、養蠶業か盛んであつて、農產物よりも寧ろ生絲の產出に依つて、經濟を營んで居る所か然らずんば外國移住民の送還金を受けて居る所か、孰れかの一に限られる事實を發見する場合に外ならない。卽ち海外移住民の內地送還金が一年五六千萬圓にも上るものであるとすれば、其地方の經濟を潤澤にす

ることは、當然であるとしなければならぬ。

悲觀論の起る所以

故に我國に於て若しも移民政策が發展し、國内に過剰である人口の一部分を海外に送遣し、國内に於ける富と人口との間に調節を保させ、更に移住民の送還金を內國に於て資本として、活用したならば、今日の如く退嬰的經濟思想の起ることはなかつたであらう。人口が幾ら增殖しても其一部分は外國に移住して、却つて本國に對する經濟上の連鎖と爲るとしたならば、餘程我國民の經濟的立國問題に對する感情は寛大なるものと爲つたであらう。然るに移民政策の發展しつゝある其半途に於て、從來我國が移民發展地として注目して居つた北米合衆國も、濠洲も共に我國に對して、移民排斥の方針を取り、始めは左程までと思はれなかつた排斥の狀態は次第に酷烈と爲り、鎖國の甚だしきに至らんとしつゝある。一方に我國民の主要食糧品である米穀の收穫高は年に依つて一高一低するが、全體から見ると年々增殖する國民に對して、豐富に供給するを得ず、米價騰貴の如きも、固より通貨價値の低落に依つて、惹起されたことの少なからざるものありとしても、同時に米穀の收穫高が之に對する消費量に比較して、常に不足勝であることを以つて、有力なる、又恒久の原因であるとする。隨つて米價は將來も一昂一低するであらうが、供給不足と云ふ事實の動かす可からざる以上は、其不足した供給量を多數國民の爭ひ奪ふ結果は必ず米價の繼續的騰貴を來し、中流以下の階級殊に多數の從屬的家族を擁する家庭の生活を困難ならしめざるを得ない、此事が論者をして產兒制限の必要を叫ばしめるに至るのである。而して拔近數年間に於て、我國の經濟社會は甚だしく動搖した、大正五年から八年に至る四年間は好景氣時代である、之に次いで大正九年恐慌の襲來を蒙り、爾來不景氣の狀態に沈淪しつゝある次第であるが、此數年間社會は好景氣であらうが、不景氣であらうが、常に生活に壓迫を蒙るとか、又は經濟社會に涌出しつゝある不時の利益に浴することの最も少ないとか云ふような階級がある。斯く不斷に壓迫される階級は何を以つて之に對抗するであらうか。抑も彼等が斯る壓迫を蒙ることの已むを得ざるに至るに就ては、永久の原因としては現行經濟組織の不備を擧げなければならず、一時の原因としては、原內閣や高橋內閣になつて行はれた金權偏重の經濟政策を指さなければならぬ。即ち近年經濟社會の變動に伴つて、富の分配狀態の不公正である事實の頗る顯著なるに至ると共に、一面には現行經濟組織に對する改造論が社會到る所に行はれ、他の一面には政友會內閣の縱

濟政策に對する國民の反感の强きに至つたことは、敢て偶然なりとしない。然し經濟組織の根柢は一瞬時に改新されるものではない、政友會内閣の倒れることは、時期の問題であるとした所で、次に起る内閣が果して國民の生活難を緩和するに適切なる政策を施すや否やは、確乎たる信念を以つて、答へるを得ないとしたならば、國民が當面に殺到する生活難に對抗する爲めに産兒制限の實行を以つてするのは、已むを得ざる所と見られよう。

産兒制限の價値

私は産兒制限論に對しては、經濟上の見地に於てのみ、承認を與へる可能性があると考へる。第一、日本の經濟の營まれる範圍が此狹い島國に局限される、第二資本に就ては兎に角、人口の國際的移動には制限があり、殊に日本人の對外移住は絕對に不可能である、第三、内地に於ける天然資料の産額にも制限があつて、濫に其增加を許さないと云ふが如きは即ち經濟上の見地から、産兒制限論の根據に充てられるものであつて、果して此通りの諸事情が一國に於て働いて居り、一方に之に對抗する勢力が絕無であるとしたならば、現在此世に生を亨けて居る者の爲めに、産兒を制限して、人口を調節することは、誠に已む得ざる所と爲るであらう。但し是れは經濟上の見地に於て、一已むを得ずとするのであつて、他の見地に基く産兒制限論に至つては、自ら判斷の異なる可きを至當とする。即ち經濟上の關係以外に於ける産兒制限論なるものは、例へば婦人の容色を永く維持する必要とか、婦人をして社交上の享樂を味はしめる爲めに、手足纏と爲る小供を除かうとか、婦人をして兒童敎養の負擔を免かれしめようとか云ふような理由に基くものであつて要するに一種の文明的都會的疾患に罹つた者の言たるに過ぎない。婦人が兒童を敎養して、次代に善良なる國民を遺すのは、婦人の最も重要なる職分であると共に、婦人の有する最大の權利であつて、此職分に盡瘁し、又此權利を行使してこそ、婦人の社會に對して負へる天分が發揮されるに至る。其れを何ぞや年が來れば必ず衰へることに定まつて居る容色を維持する爲めに又は一種の井戸端會議に過ぎない社交の爲めに、此重大なる職務を閑却し、又此尊重す可き權利を放擲するに至つては婦人自ら卑むの甚だしきものとせざるを得ない。

産兒制限と國民經濟

然らば經濟上の理由に基く産兒制限論は如何なる場合に於ても、取つて以つて一個の國策とするを得るかと云ふに、私は其

然るを信じない。卽ち私が此議論を認容するのは、曩に擧げた三個の事情の備はつた場合に、限られるのであつて、斯る際に私人が產兒制限に依つて、生活狀態の窮迫を回避しようとすることに對しては、道德上から何等の非難を加へるを得ない。然しながら私が玆に一言しようと欲するのは、斯る場合に臨んで個人の立場と國家の立場との間に、著しき相違の存することである。換言すれば個人が自己を生かす必要に驅られて、產兒の制限を敢てする、之に對して幾ら道德上の非難を加へる餘地がないとして、若しも國家が斯る所業の行はるゝことを寬假したならば、如何なる結果を生ずるであらうか。數に於て、限られたる人口が限られたる領域に於て、衣食住の資料に缺乏しないだけの安樂なる生活は之を營むを得るとしても、此以上に國民間の協同的努力に依つて、國民の技能を錬達せしめるとか、又は一國特有の文明を海外に傳播せしめるとか云ふような大なる國民的使命を果すに於て、遺憾なきを得るかどうか、一個の問題に屬する。產兒制限論者は一家庭に於て、教養され可き兒童の數を少なくすることに依つて、優良の人種を作り出すことを期する。是れも亦一個の議論たることを失はないが、私は同時に或る「數」のあると云ふことが一ツの勢力であり、又其數の內から優良なる者の選擇され易いことを認めなければならないのである。

斯の如くであるとすれば、一國の經濟生活が窮迫して、上記の如き狀態を示し來つた場合に臨んで、國家が之を默視して、產兒制限の如きを行はるゝに任せたならば、國を擧げて退嬰消極の氣分に陷らしめ、結局國運の發展に一大頓挫を來さゞるを得ない。國家としては斯る退嬰的氣分の國民間に漲ることを防ぐ爲めに、經濟生活を窮迫せしめる諸種の事情を除却するの一事を以つて、經濟政策の眼目とす可きであつて、此點に就て何等の施設を爲さず、又誤まつた施設を爲して居りながら、一足飛びに產兒制限の如き退嬰的思想を振廻すが如きは、甚だしく輕卒の處置とせざるを得ない。

二種の經濟生活

然らば我國に於て退嬰的經濟思想を排斥し、之に代つて如何なる政策を取る可きものであるか、更に切言すれば如何なる政策を施すことに依つて、退嬰的思想を撲滅し得るかと云ふ問題に逢着する。先づ第一に私が主張するのは、國の面積と其面積の上に給養される人口の多寡若しくは其生活程度の高低との關係である。面積の狹隘なる國土に於ては、多數の人口を給養するを得ない、左ればと云つて、海外に移住させる見込もない、こ

結局人口の增殖を制限するの外に道はないと云ふのは、論理として一貫する所あるようなものゝ、立論に獨斷に失した跡のあることを蔽ふを得ない。何が獨斷的であるかと云へば、面積の狹隘なる國土に於て、多數の人口を給養するを得ないとするのは、其最も甚だしきものである。蓋し一國々土の大小は其國に生活し得る國民の多寡なり、其生活程度の高低なりを決する唯一の標準と爲るものではない。農業牧畜森林の如き土地を要することの最も多き、而して土地以外の生産要件を要することの最も少なき事業を一國の主なる産業とし、國民の多數をして斯業に依賴して、生業を求めしめる場合には、如何に國の面積が廣くとも生活し得る國民の數は寡少であつて、其程度も劣等ならざるを得ない。

之に反して一國に製造工業が起り、商業が盛に爲り、更に運送、仲介、金融の諸業が發達し、啻に國内に於ける所要に應ずるばかりでなく、國際間の廣きに向つて、或は製造工藝品を供給するとか、或は商業を始め、其他の諸事業に於ける勤勞を諸外國に提供するとか云ふような手段に出でたならば、如何なる結果を生ずるであらうか。國の面積に比較して、多數の國民は斯る經濟的立國策の行はれる國に於て、住居を求め、又職業に就き、而して優良なる生活を營むことが出來るのである。何故かと云へば、後者の場合に於ては、國民は土地其ものを通じて衣食の資料を求めようとしない。製造工業を經營し、續いて工藝製造品を産出するに就ては、大なる資本の力こそ必要とされるが、産出物資の數量なり、價格なりの饒多である割合に、廣大なる土地を必要としない。隨つて土地其ものを離れて、富を增殖し、又人口を給養することゝ爲るであらうし、各種勤勞に至つては、勤勞を爲す人口の住居するに足る寸尺の土地があつて、都會的生活を爲すに至れば、自由に行はれ、之に對する報酬として、内外國到る所から、物資が吸收されて、生活を繁榮ならしめるのである。

國の面積と其面積の上に住居する人民の多寡とを割合に取つて見ると、國の異なるに隨つて、其間に著しき相違を存する。英國に於ては一平方哩の人口三百八十五人であるに反し、日本に於ては、殆ど其五分の三に當る二百十四人に過ぎない。然るに兩國民の生活狀態を觀察すれば、全體の上から云つて、英國民の方が遙に日本人よりも優良であることを爭ふを得ない。何故に兩者の間に斯る相違を生ずるか、其理由は外でもない、日本では今日に至るまで農業が有數なる國民産業としての地位を占めて居り、斯業に多くの土地を要し、而して其土地から産出される産物に依つて、給養される人口の數に限りあるに反し、

英國に於ては擧國の精力を商工業に傾注し、國民の多數を都會に集中吸引し、其都會に於ては商工業を始め、之に附隨する各種生業の並び行はれて居る爲めに、多くの人々に優に職業を與へ、又衣食の資料を供することゝ爲るのである。

對外放資の效果

更に國の面積の廣狹と其面積に依つて、給養される人口の多寡とをして全然相關係する所なからしめるものは、一國に於ける對外放資の效果である。或は是れは商業と云ふことを廣義に解釋したならば、其內に含められるかも知れないが、私は對外放資を以つて、一國が有價證券買入れの爲めに、外國に資本を送致したり、又は外國に事業を經營する爲めに、資本を放下したりするものとする。如何なる狀態の上に於て、此種の經濟的交涉が國際間に起るであらうか。蓋し一國に於て資本の供給され、運用される目的物には、自ら限りがあり、其供給され、注入される分量の多ければ多きに隨つて、利潤や、利子の步合は必ず低落する、殊に利子の內には、危險に對する報酬が含まれて居る以上は、一國の經濟的文明が進むに隨つて、資本放下に於ける危險が減少すれば、此點から考へても、利潤並に利子の低落することを以つて、自然の勢とする。戰爭とか、恐慌とか時に意外の事變が起つて、資本に對して、大なる破壞を加へる爲めに、利子步合の低落には或る制限があるとしても、其次第に低き率に至ることを以つて、自然の勢としなければならぬ。す此場合に一國の經濟狀態は如何なる趨勢に向ふかと云へば、國民が利子の低廉であることに依つて、貯蓄に何等の刺戟を感ぜず、現在の所得を消費する傾に爲り、斯くて資本の供給を減ずるのは、其一であり、內國の金利や、利潤の低廉なるに比較して、外國殊に新開の富源の豐富なる國に於て、利子利潤の共に豐富なることに大なる刺戟を受け、之を獲得する爲めに、外國に資本を放下する、即ち外國の有價證券を買入れたり、又は外國に於て事業の經營を試みるに至るのは、他の一ツである。

一國の經濟社會が資本增殖の極點に達した場合に、右に揭げた二種の趨勢の孰れに出づるかは、國民的精神の退嬰に流れるか、其れとも進取に傾くかに依つて決せられるし、又國家の國民に對する指導の宜しきを得ると否とに依つて、定まるのである。私は此點に於て、世界に於ける列國の興亡が經濟上の關係に依つて、決定される秘機の存することを認めざるを得ない。歐洲戰前に於て、英國が對外放資の增殖と對外企業との擴張に力を致し、獨逸亦是等の二點に於て、英國の追隨することに勉めたのは、何の故であつたらうか。兩國共に斯の如くにして資

本運用の利益を大にし、其利益金を物資の形態で國內に回收し國民に對する供給を豐富にし、以つて彼等の生活を繁榮ならしめることを期した結果である。英國が彼の如き狹隘なる面積の國土を擁しながら、能く四千六百五十二萬八千人の人口即ち一平方哩に對して、三百八十五人に相當する人口を給養する、然も其生活程度の他國に比較して、優良であると云ふことに就ては對外放資並に對外企業に依る資本運用の效果の然らしめるものと斷定される。英國人の性質に就ては、種々の批評はあるが彼等が天涯萬里を距つる如何なる僻地であらうが、言語風俗の異なつた如何なる未開の地であらうが、自家の生業を營むに足ると信じたからには、必ず一家を擧げて其所に居をトし、家族全體の協力に依つて、土地を拓き、富源を擧げ、之を終生の事業とする氣魄に對しては、飽くまでも之を尊敬せざるを得ない。英國人の內には無論外國の有價證券に投資し、其利子配當に依つて、安樂に生活するやうな人もあり、倫敦の郊外などには此類の人の住居する小綺麗なる住宅を見受けるが、同時に何歲に爲つても、海外に於て事業の爲めに、奮闘し、邁往する企業的精神の熾烈なる者がある。此精神こそ凝つて、英國の經濟的立國をして今日の如く爲らしめたものであつて、英國の官民が之に對して重きを置くことも、亦偶然でないのである。

退嬰思想を排す

私は以上の道理に照して、今日我國に退嬰的經濟思想の行はれつゝあることに反對する。我國に於て物質的文明が進んだ、富の生產高も、累積高も、資本の運用高も、國民の所得も共に增加したことの明瞭であるに拘はらず、富の分配される狀態が宜しきを得ない、國民の多數は次第に窮乏を訴へるとすれば、其原因は何處に存するであらうか。之を確め、確めた上に、之に對する匡救の道を講ずるのが、即ち吾人の任務である。此任務は之を放擲し、生活難救濟の一法として、一足飛びに產兒制限の如き退嬰的手段を以つてするのは、智慮に於て果して周熟したものと稱するを得るであらうか、私の疑を挾む所である。然らば何を以つて匡救策とするか。經濟社會が全體として繁榮す可き地位に居りながら、尙ほ社會階級の如何に依つて、禍福の相違の著しきものがあり、或る者は自己の家族の廣さを思ふ儘に膨脹させ其膨脹した家族の各員に飽滿なる生活上の慾望を果させながら、他の者には家族の員數に對して、人工的制限を加へ、其廣さを局限しなければ、現在の家族をして、生活を全うせしめるを得ないと云ふが如き、階級間に極端なる相違を生ぜしめる所以に至つては、其罪は今日の經濟組織に於ける缺陷

に存するとしなければならぬ。換言すれば今日の經濟組織に於て、其基礎とする所は私有財産制度と自由競爭との二者であつて、從來にあつては飽くまでも前者を尊重する一方に、後者をして其行はれるに任せたればこそ、富の分配に不公平を生じ、一部の階級に甚だしき生活上の困難を感ぜしめたのである。此根本問題を解決し、自由競爭の勢を緩和する一方に、私有財産制度に對しても亦嚴重なる制限を置き、社會公衆の生活に至重の關係を有する財産の如きは、之を國家の所有に移し、其財産の運用に依つて生ずる利益は廣く之を國民に頒與し、更に進んでは人をして營利の觀念を離れ、社會公衆の利益を擧げる手段として、生産に當らしめなければならぬ。退嬰的手段を施すに先だつて、斯る改造を經濟組織の上に加へることの可否如何は吾人の深く考量す可き所である。

　私は右の問題に對しては、本論に於て深く觸れることを避ける。而して假に我國の經濟組織を從來の形態のものとして置いても、尙ほ經濟政策の立て方如何に依つて、今日以上に增殖する人口に向つて、今日以上に安樂なる生活を營ましめる道の存することを信ずるのである。日本の移住民政策に對しては諸外國共に日本人排斥の方針に出で、其入國に對して制限を嚴重にするは勿論、何時に爲つても、其緩和される見込を得ないことが確に我國民をして國運に對する前途に就て、一種の悲觀を懷かしめるに至つた有力なる原因であると考へられるが、本來一國が勞働者を外國に移住させ、斯くて一方に國内の人口を調節し又他の一方に出稼勞働者の内地送還金に依つて、内國の經濟を豐かにしようとするが如きは、一個の經濟政策としては、極めて劣等のものであつて、國際間に於ける國家の地位の卑賤なるものゝ行つて、可なりとする所である。何故に私は此政策を以つて、卑賤のものとするかと云へば、自國民を外國に移住させるのは、自國民をして外國に於て一般的勞働に就かせるの意であつて、其一般勞働の内には、外國人の就くことを敢てせざる下等の種類のものが少なくないばかりでなく、斯る移住の行はれることは、即ち一國々民の生活狀態の他國に比較して、貧しい事實を暴露する所以であるからである。

　然しながら事實今日の日本に於ける如く、國民生活程度の低き場合には、如何ともするを得ない、國民の一部を外國に移住させる、然らずんば人口の增殖に對する制限亦已むを得ざるものであるとする論者に對しては、私は我國經濟的立國策の將來一新され可きものであり、其れが一新されたならば、此狹隘なる國土に於て、今日よりも多數の人口を今日よりも優良なる程度に於て給養し得る道の存することを示さなければならぬ。即

ち海外に向つて、移住民を送遣する代りに、資本を輸出する、企業能力を供給する、更に此資本と企業能力とを結合して、外國に事業を起し、其收益を本國に回收することは、我國をして經濟的立國の點に於て、優秀の地位に就かしめる所以であり、又我國に支那大陸が隣接して居り、資本と企業能力とに缺くる所甚だしく、爲めに天與の富源も永く未開の狀態に居るものとすれば、我國の經濟的勢力が今後如何なる方面に向つて進む可きものであるかも、略ぼ之を推測するに難しとしない、國民の主要食糧たる米の供給の不定であり、又其不足勝ちであることも、我國の經濟生活を窮迫せしめる所以であるが、斯る狀態も畢竟我國が內地の米產額に重きを置き、所謂自給自足の舊夢を脫しない結果であつて、若しも我國が國民の必要とする物資は其如何なる場所に於けるを問はず、最低廉の費用を以つて生產される地方に就て、供給を求めることゝし、而して斯く生產される場所に向つて、日本自ら資本を放下すると共に年々若干量と云ふ略ぼ定まつた分量の米を需要することゝしたならば、我國民をして今日の如く內國米の收穫の不良である上に、重ねて外國米の輸入も思はしく行はれず、爲めに凶歉に苦しましめるやうな虞れを除去るに至るであらう。

經濟政策改新の要

然らば我國從來の經濟政策は我國の經濟生活をして、以上の方嚮に就かしめるが如くに、行はれて居るであらうか。對外放資や、對外企業に就て、一定の方針が缺けて居り、日支兩國の關係は常に圓滑を缺き、我國將來の原料品供給は今日の狀態を以つてしては、頗る不安定であるとせざるを得ない、而して內地に於ける物價の騰貴、生活費の膨脹に加ふるに、富の分配の不公正であることが在來の狀態の如くであつたならば、果して今後海外に繼續して、放下されるまでに、豐富なる資本の供給を收め得るであらうか、大なる疑問に屬する。現に今日國際間の經濟狀態は戰後の影響に依つて、種々の變態を示し、正常の方則を應用する能はざる趣はあるが、尙ほ近時歐米諸國に於て金利の低落しつゝあるに對して、日本の金利の上進して、已まない一事の如き、偶々我國經濟政策の過誤を極めて居る結果の目前に現はれ來つたことの一例とするに足りる。我國經濟政策の間違が今日の儘で進んで行つたとする、其結末は如何なる所に落着するであらうか、其れこそ六千萬の同胞が此狹隘なる島國に跼蹐して、互に相食むの慘狀を呈し、產兒制限論者の說明や、宣傳を待つまでもなく、老幼は死滅し、壯年者は離散し、

出産數亦減少して、我國の限りある經濟的能力を以つて、給養し得るだけの人口數と爲るであらう。退嬰的經濟思想の恐る可きは、實に此種の思想を無用のものたらしめる進取的施設を講ずることを怠り、更に其極退嬰的政策を施さゞるを得ざる狀態に陷らしめる一事に外ならないのである。

内務省は我國に於て産兒制限に關する宣傳の行はれることを恐れるようである。此一事から考へると内務當局者は我國に於て從前通りの勢を以つて、人口の增殖することを希望するものゝ如くに思はれるが、然らば人口の增加した狀態に於て、彼等に充分なる所得を併へ、衣食資料を與へる成算があるか。此成算なくして、産兒制限論を禁遏しようとするのは、大なる矛盾である。私は一部の人士が濫に産兒制限の必要を鼓吹し、一方に進取的經濟政策を閑却することを非なりとするが、同時に日本の官憲が何等進取的經濟政策を工夫せずに、單に國民に多産を要求することの甚だしく背理である愚を指摘せざるを得ない。或は道德上から考へて、避妊の方法が眞實生活上又は生理上之を必要とする人に利用されずして、不品行の所業を敢てする手段に使用されたならば、社會の風教を害すると云ふ信念の下に、内務省をして、産兒制限の宣傳を禁止するに至らしめたと云ふ說もあるが、此點に就ては私は今別に論じない。私の考へる所を以つてすれば、産兒制限と云ふことは經濟生活に至重の關係を有する問題である。何としても私は我國經濟政策の根柢を改新し、日本をして國民生活上、他國に讓らざる樂土たらしめることを期したい、若しも我國に於て一平方哩に於ける人口數が英國同樣の程度に上るとしたならば、優に一億三十八萬四千百三十人の人口を給養し得る譯ではないか、經濟政策を革新しないで、國民をして狹隘なる國土に跼蹐せしめるが如きは、無策無經綸の輩の爲す所であつて、吾人の絕對に與せざる所である。若しも國家經綸の任に居る人にして、此事に着眼せず、退嬰的思想を以つて、一時を糊塗するが如きことであつたならば、私は我國運の將來に對して、深き憂を懷くことを禁ずるを得ないのである。

第三黨の無意義と有意義

永井柳太郎

(一)

政黨は或意味に於て民衆政治よりも舊く、寡頭政治の時にも又君主政治の時にも、既に存在した。黨同異伐は古來各國の王朝、貴族、平民に共通の事實である。併し正確なる意味に於ける政黨の起つたのは民衆政治になつてからで、人民が參政權を有するに至つた結果である。即ち人民が參政權を有し、其の生活上の要求を政治上に實現せんとするに際して、其主義を一にし、又其利害を同うするものが自然に團結して政黨が出現した。英國に於てはチャールス二世の時代に於て、既にホイッグ黨とトーリー黨とを生じ、米國の二大政黨も亦千七百九十六年の大統領選擧に際して現れた。其他自由な國家で政黨のないものはない。學者の中時として政黨の存在を呪咀し、黨弊の恐るべき事を論ずる者があるけれども、議會政治は政黨なくして之れを運用する事は殆ど不可能である。現に我國の官僚政治家中にも政黨を否認し、政黨に加入する事を非惡なるが如く非難する者が少くないが、それでも政黨なくして議會政治を運用し能はぬ證據には、彼等自身が、其名稱及び形式は政黨でないけれども、其實質及び運用は毫も政黨と異るなき政治團體を組織して居るではないか。例へば貴族院の研究會、公正會其他の各團體がそれである。

併し政黨にも種々の種類がある。國策に對する政見の異同に基くもののみでなく、又宗教の相違や、民族の差別や、地方の利害關係の爲めに政黨が出現する。嘗て米國には舊教に反抗してノー・ナツシング黨が起り、今日でも歐洲諸國には舊教黨、一名僧侶黨がある。民族黨、若くは地方黨の色彩を有するものとしては愛蘭の國民黨、シン・フエン黨、革命前の獨逸の丁抹黨、エルザス・ロートリンゲン黨、猶太人排斥黨、及び墺太利の波蘭黨、ツエヒ黨等がそれである。ゼームス・ブライスは其著『現代民主政治論』に於て政黨首領の人格に對する崇敬の念も亦、

時に政黨發生の一原因たる事を論じ、「南米ウルガイでは六十年前に相爭ふた兩將軍の與黨が紅白兩黨となつて今猶ほ對立しつゝある。」と云ふて居る。斯くの如く政黨は其發生の動機に於て頗る複雜して居るが、併し一般の國策に對する政見の異同に基く政黨は決して左程複雜なものでない。產業組織の進步した國々に於ては、國策の主張を目的とする政黨は、大體に於て、三黨鼎立となるのが最近の傾向である。

（二）

近代國家は孰れも產業革命の結果としてフランス革命前の貴族對平民に異らざる新階級を生じた。それは資本家對勞働者の對立である。科學の進步は全產業を機械化し、機械化されたる產業は少數の大資本家に集中せらるゝ傾向を生じ、多數の貧困悲慘なる勞働階級を生じた。此資本主義の壓迫から免かれんとする勞働階級の努力が卽ち勞働運動となつて現れた。勞働運動と云へば其內容は極めて複雜して居るが、併し其根本精神は勞働階級乃至無產階級の解放と云ふことに歸する。而て此勞働階級乃至無產階級の解放を目的とする努力の政治上に現れたものゝ中、最も顯著なるものゝ一が卽ち勞働黨乃至社會黨の出現である。今や歐米諸國の如き產業組織の發達したる國々に於ける政黨を見ると、孰れも現在の資本主義經濟組織を維持し、資本主義經濟組織の上に立つて國利民福を計らんとする保守、自由兩黨と、資本主義經濟組織を否認し、生產手段を勞働組合又は社會全體の管理及び所有に移す事を目的とする勞働黨又は社會黨との間に、政治上及び經濟上の思想が分裂して、其三黨が互に權力を爭ふて居る。マルクスは「政治組織に變化を生ぜしむる原動力は其社會に於ける生活の物質的條件、就中生活必需品の生產及び分配に關する不平、不安及び鬪爭である」と云ふた。その言葉は少くとも現代の歐米諸國に於ける政黨の變遷の動機に就いては眞理である。

（三）

英國に於てもチャーチスト運動の初期に於ては、勞働階級は猶ほ中產階級と結合し、ホイッグ黨は上院及びトーリー黨を威嚇する爲めに屢々勞働階級を利用したのであつた。斯くの如くにしてホイッグ黨は勞働階級の力を藉りて千八百三十二年の議院改革案をも通過せしめたのであるが、新議會は勞働階級の爲に何等の利益をも圖ることなく、勞働階級は初めて自己の獨力に依る運動の必要を感じたのであつた。それは南部ではロンドン、中部ではバーミンガム、北部ではリーズ、蘇蘭ではグラ

スゴー等の勞働者を中心とした社會主義運動となつて現れ來つたのである。斯くの如くにして勃興したるチャーチスト運動は千八百四十二年の大罷業が失敗に終つた爲めと、其首領等が一網打盡的に逮捕せられた爲めとで一時殆んど終熄したが、千八百七十年代に至り、自由競爭の弊害が益々露骨となり、生活の不安が愈々痛烈なると共に、其精神は又々勃發し來り、マルクス主義者ハインドマンの組織せる社會民主聯盟、シドニー・ウエブ等のフェービアン教會、ケーア・ハーデーの率ゐたる獨立勞働黨と云ふが如き社會主義の理想に依つて國家を改造せんとする新團體が相次いで出現し、勞働階級の勢力はチャーチスト運動の當時に勝つて重大なるものとなつた。

千九百年二月には勞働組合聯合會の國會委員、社會民主聯盟、フェービアン教會、及び獨立勞働黨の協同計畫に依つて社會主義團體及び勞働團體の代表者凡そ百二十人がロンドンに集り、議會に勞働階級の獨立したる勢力を樹立する準備として勞働議員選出委員會(Labor Representation Committee)なるものを組織した。而て千九百年九月の總選擧には五十人の候補者を立てゝ、其中二人を當選せしめた。其一人が卽ちケーア・ハーデーである。次で千九百六年一月の總選擧には五十六人の候補者を立て其二十九人を當選せしめたのであるが、別に勞働議員選出委員會に屬しては居ないが、英國第一の大勞働組合たる坑夫同盟も亦別に十四人の議員を出した。此勞働階級の擡頭は上下を震駭し、英國も愈々二大政黨對立の歷史より一轉して、現在の經濟組織を是認するものゝ間に、ホイッグ黨と、トーリー黨との二大政黨ある外、更に現在の經濟組織を否認する第三黨を生じた。千九百十八年十二月の總選擧に於ては、勞働黨は實に三百六十二人の候補者を擁立し、投票總數九百六十九萬の中、二百三十七萬五千卽ち約二割四分の投票を收めた。候補者の多數であつた割合に當選者は少かつたが、それでも猶六十三名の議員を出し、今や英國議會に於ける在野黨中の最大多數黨である。

英領自治植民地に於ける政黨の實狀も亦大體に於て英本國と同一の傾向を示して居る。只濠洲の政黨のみは勞働黨と國民黨とに分立し、依然として二大政黨對立の觀があるが、併し之れも仔細に其經過を考ふる時は、英本國の政黨と同じやうに經濟的變遷の結果、舊時代の保守、自由兩黨のみの對立が旣に不可能になつた事を示して居る。濠洲では移住者は皆英人であり、且つ英本國に於ける如き宗教上の爭がなかつたので、政黨別は比較的單純であつて、唯大地主小地主、保護貿易對自由貿易と云ふが如き經濟上の問題に關して從來保護貿易黨と自由貿易黨とがあるのみであつた。而て此兩黨が互に政府黨になり、反對黨と

なつて爭ふたのであるが、兩者共に現在の資本主義經濟組織の擁護者たる事に於ては英本國のホイッグ黨及びトーリー黨と異なる所はなかつた。而るに十九世紀末に至り英本國に於けると等しく勞働黨が出現し、專ら勞働階級の利益を增進するが爲めに戰ふたのである。而て千九百年第一回濠洲聯邦議會が成立した際には、上下兩院を通じて百十一名の議員中勞働黨は既に其廿四人を占めたのである。斯くの如くにして濠洲に於ても二大政黨對立の時代は過ぎて三黨鼎立の時代となり、孰れの一黨を以てしても獨立して內閣を組織する事が困難となつた。玆に於て自由貿易黨と保護貿易黨とは孰れも爭ふて勞働黨と提携せんとし、勞働黨は恰も英國議會に於て愛蘭黨が用ひたる如き戰術を以て巧みに既成二大政黨を操縱し、其間に於て大いに黨勢を擴張した。殊に婦人參政權が與へられて後は勞働者の妻女は其夫又は兄弟と共に同じく勞働者の爲めに投票に出かけるに反し、資產家の妻女は概して選擧などのために奔走するを好まず、此點に於ても勞働者の勢力は著るしく增加し、軈て上院に於ては全然壓倒的大多數を占むるに至つた。玆に於て自由貿易黨及び保護貿易黨は俄かに狼狽し、現在の經濟組織を擁護して、其急激なる變動を豫防する必要に於て遂に大同團結するに決し、新に國民黨を組織して勞働黨と對立するに至つたのである、故に濠洲に於ける勞働黨と國民黨との對立は從來の二大政黨對立と大いに其趣を異にし、新に出現したる第三黨の現存せる經濟組織に對する攻擊が如何に猛烈且つ重大となりつゝあるかを語るものであつて、若し從來の保守黨又は自由黨が勞働階級乃至無產階級の生活の安定及び向上のために大に努むる所なきに於ては、從來の二大政黨對立よりも更に重大なる經濟的意義を有する新たなる二大政黨對立の時代が軈て出現し來る兆候あることを豫告するものと云ふて宜しい。

(四)

獨逸は戰前に小黨分立の國として有名であつた。其多くは地方的若くは階級的利益を代表する事を目的とし、其數は大小併せて約二十七を算した。併し此中で眞に國家の全般に對する政治上の主義及び政策を代表すると認め得るものは保守黨(Deutschkonservativ)中央黨(Zentrum)國民自由黨(National liberale)進步國民黨(Fortschrittliche Volkspartie)及び社會民主黨(Sozialdemokraten)の數黨に過ぎなかつたのである。而て此五大政黨の中保守黨は千八百七十六年の創立以來、其標語たる「神の惠に依る王國の建設」を理想とし、屢々農民同盟(Bund der Sandwirte)及び獨逸農民同盟(Deutsche

Bauernbund）と結んで社會民主々義に反對し、常に帝國主義、產業保護主義、基督教々育主義を高調したのである。從つて其名の如く純粹の保守黨であつたが、中央黨も亦其實質は舊敎黨であるけれども、其政綱の大綱は保守黨と多く異る所がなかつた。革命後兩黨は孰れも依然として其勢力を失ひ、其黨名までも變更せざるを得ざるに至り、保守黨は帝國黨（Reichspartei）と合併して獨逸國民黨（Deutsche Nationale Volkspartei）を組織し、中央黨は基督教民主人民黨（Christliche Demokratische Volkspartei）と改名したけれども、併し其根本精神は依然として保守的である。只中央黨は國際聯盟を支持し、婦人參政權を認むる點に於て稍々進歩的であるが、兩者共に社會主義に反對し、汎獨逸主義を信じ、猶ほ衷心帝政に戀々たるものあるに至つては即ち一である。國民自由黨及び進歩國民黨は政治上及び經濟上の自由主義を標榜し、主として中產階級に其勢力の根柢を有した。殊に進歩國民黨は多年ワルデック、ホーフエルベック、ウイルヒョウ、リヒテル等の如き學識ある指導者を有し、軍國主義、官僚專制主義、保護貿易主義に對する不斷の攻撃者として革命前には獨逸議會に重要なる地位を占めたのであつた。革命後此等の自由主義を代表したる諸政黨も亦改名し、國民自由黨は獨逸人民黨（Deutsche Volkspartei）と改名してストレアセマンや「アルゲマイネーツアイツング」其他六十種の新聞雜誌の所有者として最近俄に獨逸の政界に擡頭したるユーゴー・スティンネス等が之れを率ゐ、進歩國民黨も亦急進黨（Freisinnige Volkspartei）と合併して獨逸民主黨を組織し、革命當時まで獨逸宰相たりしマックス公や、嘗て植民大臣たりしデルンブルヒや、中歐同盟の主唱者として有名なるナウマンや、「ベルリナーターゲブラット」紙のウルフなどの指導の下に其傳來の自由主義と社會改良主義とを提げて奮鬪しつゝある。併し之れ等の兩政黨は前述の獨逸國民黨や基督教民主人民黨よりは遙に進歩的であるけれども、資本主義の經濟組織を破壞せざる範圍内に於て社會改良の理想を遂げんとするのであるから、其根本思想に於ては、社會民主黨と獨逸國民黨及び基督教民主人民黨との中間に位すること、戰前同樣であるは云ふを待たぬ。

今日の獨逸に於ける最大政黨は云ふまでもなく社會黨である。社會黨は戰時中、戰爭の可否に關する意見の衝突の爲め分裂を生じ、多數社會黨、獨立社會黨、共產黨及びスパルタスクス、グルッペーの四となつたのであるが、今日は多數社會黨のみでも其議員數は戰前に於ける社會民主黨全部のそれに劣らない。戰前即ち千九百十二年の總選擧に於ける社會民主黨の選出議員は百十名であつたが、千九百二十一年の總選擧に於ては多

數社會黨の選出議員のみでも百十三名に達し、これに獨立社會黨の八十一名、共產黨の二名を合すれば、實に百九十六名の多數を算する。而して多數社會黨は今猶ほエーベルトや、シャイデマンや、アイブナーや、ノスケや、クワークや、ラーンツベルヒやラインハートの如き多數の著名なる政治家を包擁し、獨立社會黨も亦、未だ單獨にて政府を組織する程の勢力を有しないけれども、共黨中には有名なるベルンシュタインや、カウツキーや、レデブールや、アヒホーンや、デットマンや、ハーゼの如き、單に政治家としてのみならず、又思想家として傑出した人々が居つて、其主張の宣傳に努めて居るので、其勢力は實に侮り難きものである。共產黨は其主張する所露國の過激派と同一にして、現在はフランツ・メーリングやクラ、・ツエトキン等が之れを率ゐて居るのであるが、其勢力は尙未だ微々たるものである。スパルタクス、グルッペに屬する者も亦其首腦者たるカール・リープクネヒト及びローザ・ルクセンブルグを失ひたる爲め其勢力は革命當時に比して云ふに足りない。

獨逸に於ける政黨の現狀は大體右の如くであるが、之れを大觀すると矢張り三黨鼎立の傾向がある。固より多數社會黨と其他の三種の社會黨とはその思想に於て大なる相違がある。即ち前者は議會政治を主張し、戰爭の不可避を認め、又生產手段の公有は當分獨占的性質を有するものに止め、急激なるべからずと云ふに反し、他の三派は孰れも議會政治を否認し、戰爭に反對し、又一切の生產手段の即時公有を主張する點に於て大に異るのであるが、併し兩者共に社會主義共和國の建設を以て窮極の理想となすに至つては即ち一である。故に今日の獨逸に於ける政黨も亦大體に於ては資本主義の經濟組織を否認するものと資本主義の經濟組織を是認する自由、保守兩黨とに三分し得るのであつて、只獨逸の政黨が英米のそれに異る所は、社會主義の經濟組織を設立せんとする政黨が、之れに反對なる政黨よりは遙かに優越であると云ふに過ぎぬ。千九百二十一年の總選擧の結果を見ると、社會黨各派の議員數は前述の如くであるが、之に對して獨逸國民黨は六十六、基督敎民主人民黨は六十九、獨逸人民黨は六十二、獨逸民主黨は四十五であつた。

(五)

佛蘭西及び米國の如き共和國に於ても、其政黨の變遷は、英獨兩國のそれと同一の過程を辿りつゝある。佛蘭西の政黨は複雜であるのみならず、それが絕えず解散したり合同したりして異つた名稱の下に出沒する。現に千九百十年の總選擧に於ては佛蘭西代議院に於ける政黨は十一を數へ、千九百十四年の當時

は九團體に減じ、最近に於ては又十二黨を算すると云ふ狀態である。從つて各種の政黨政派一として代議院の三分の一すら占め得るものなく、小黨分立の狀態であるが、而も其集散離合は啻に其政權のためのみでなく、又對人關係に於ても行はるゝのであるから、其思想上の分類は頗る困難である。併し大體に於て佛蘭西の政黨も亦、三種に區別し得ると思ふ。

第一は所謂極左黨であつて、共產黨及び社會黨である。佛蘭西で勞働運動が顯著になつたのは普佛戰爭以後のことで、社會黨の出現も亦千八百七十年代の末期である。然し社會黨は其後勞働組合に對する意見の衝突や、サンヂカリズムに對する態度の相違や、又ドレヒユース事件に對する主張の不一致や、種々なる出來事のため幾多の小黨に分裂したのであるが、其內階級鬪爭主義を信ずる極左派のものゝみが、ヂヨレースや、ゲードなどの指導の下に千九百五年合同して合同社會黨 (Socialistesunifiés) となつた。合同社會黨は一時非常に發展し、千九百十四年四月の總選擧に於ては百二名の代議士を得たのであるが、ヂヨレースの死後黨內又々分裂し、千九百十九年十一月の總選擧には其代議士六十五名に減じ、更に翌年十二月マルセル・カシヤン等の過激主義者十二名を失ふた。この二十名の團體が卽ち前記の共產黨である。

第二は佛蘭西大革命の傳說を信奉する過激共和黨であるけれども、經濟上に於ては猶ほ社會改良主義を脫せざるものである。社會主義共和黨 (Républicains Socialistes)、社會主義急進黨 (Radicaux Socialistes) 左派急進黨(Radicaux de gauche) 左派共和黨 (Républicains de gauche) 民主共和黨 (La Gauche Républicain Democratic) 等之に屬する。社會主義共和黨及び社會主義急進黨は、社會主義を標榜するけれども、共に階級鬪爭主義を排し、專ら他の進步主義政黨との協力に依り社會改造の目的を遂げんとするものであつて、社會黨が入閣拒絕を政綱とするに反し、此兩黨は他黨の內閣に入ることをも敢て辭せぬ。ミルテン、ヴイヴイアニ、ブリアン、ブールヂヨア等は此系統の人々である。第三は保守黨とも云ふべきものであつて、かの王黨 (Royalistes) や獨立黨 (Groupe des Independents) や自由行動黨 (Action Libérales) の如きも此部類に屬する。然し此部類に屬する政黨の中最も大なるは共和團結 (Entente Républicains) であつて、其所屬議員は千九百二十一年一月の現在數百八十一名に達すると云ふことである。而して此等の政黨政派は、其政治上及び經濟上の思想から見ると、大體に於て、保守主義者である。北米合衆國に於ても亦之れと同じき傾向が現れて居る。米國も共和國であつて建國の初より民主々

義を標榜し、夙に普通選擧を採用して其民意を政治上に實現する機會を與へて居たのみでなく、共和黨（Republican Party）も、又民主黨（Democratic Party）も、共に下層階級の利益を保護するに努めたのであるから、特に勞働階級を代表すべき政黨の必要少く、社會主義は政治上に於ける勢力となり得なかつたのである。從つて千八百八十年代に至るまで米國の政界は大體に於て二大政黨に兩斷せられ、彼の背札黨（Greenback Party）とか禁酒黨（Prohibition Party）とか云ふやうな特殊な目的を有するもの丶外第三黨を生じなかつたのである。然るに産業組織が複雜となり、勞資兩階級の利害の衝突が深刻となると共に、勞働階級の間に自己の力に依つて自己の利益を本位としたる政治を行はんとする運動を生じ、斯くの如くにして千八百七十七年に出現したのが社會主義勞働黨（Socialist Labor Party）である。然し社會主義勞働黨は過激なる社會主義者の團體であつて、勞働組合の保守的なるを非難し、社會改良主義者とも提携する事なく、單獨にて資本家階級を攻擊し、其主張が餘りに極端であつたので、大勢力となることが困難であつた。玆に於てユージン・デッブス等が別に社會黨（Socialist Party）なるものを組織し、專ら勞働者と提携して社會改造を企てんとした。之れが民心に投じて千八百九十七年の創立以來著るしき發達を遂げ、千九百十六年の大統領選擧に於ては戰爭の是非に關して社會黨の內部に激烈たる意見の衝突を生じ、それが爲め多數の投票を失ふたけれども、猶且つ其候補者ベンソン氏は五十八萬五千の投票を得、更に最近の大統領選擧に際しては、其候補者デッブスが入獄中であつたに拘はらず、社會黨の得票數二百萬に達し、デッブスは獄中より書を發して次期の選擧戰には必ず凱歌を奏せんと豪語したのである。

（六）

斯くの如く近世の經濟的發達と社會的變遷とは、歐米諸國の政治界に於て曾て存在したる事なき新なる勢力の擡頭を促した。此新勢力たる勞働者若くは社會黨は現在の經濟制度を根本より改革し、之れに代ふるに社會主義の經濟制度を以てせんとするのであつて、之れに反對する者は其保守黨たると自由黨たるを問はず、之れを敵視して敢て挑戰せんとするのである。固より歐米先進國に於ても社會主義は學說としても、又實際政策としても、決して一般の承認を得て居る譯でない。現在社會主義又は共産主義を實行せんとしつ丶ある國に於ても、それは猶未だ試驗時代を脫せず、之れが果して一般國民の要求する如き幸福を與へ得るや否やは大に疑問である。嘗てルイ・ブランは

千八百四十八年、其社會主義に關する理想を實現する機會を得たるも、數月にして失敗に終つたのである。露國に於ける過激なる社會革命が露國民に禍したる事も亦頗る大なるものがあつた。從つて歐米先進國に擡頭し來れる勞働黨又は社會黨なるものが如何なる未來を有するやは、今俄かに豫言し得る所ではないけれども、併し孰れの國に於ても既成政黨が勞働階級乃至無産階級の生活問題に冷淡にして、其經濟的要求を蹂躙して顧みざる場合に於ては、勞働階級乃至無産階級が、遂に自己の力に依つて自己の運命を開拓するの必要を自覺し、勞働階級乃至無産階級の生活の安定と其解放とを目的とする新政黨を組織せんとするに至るべきは自然の勢なりと云はざるを得ぬ。

日本も歐米諸國と國情が違ふからと云つて安心して居られぬ事は、最近頻々として發生し來る勞働者の過激なる政治運動及び社會運動に徴しても明白である。日本に於ては、經濟上に於てのみならず政治上に於ても、尙未だ少數專制の陋習が現存する。此陋習に對する反抗運動が露國の過激派や、米國のI・W・Wの如き極端に走るを豫防する唯一の道は、政治上に於ける特權階級の少數專制を打破すると共に、又經濟上に於ても勞働階級乃至無産階級に屬する者の生活の安定及び其向上の爲めに最善の方法を講ずるにある。然るに現在の狀態は如何であるかと云ふに、政黨も官僚も、唯政權の爭奪に沒頭するのみで、國家の治亂に最も密接なる關係を有する勞働問題乃至生活問題の解決には、殆んど風馬牛相關せざる傾向がある。殊に我國の立法府は、貴衆兩院共に、大體に於て、特權階級の代表機關であつて、其政治團體の多數は純然たる保守黨である。唯憲政會及び國民黨のみは、其政綱に於て自由主義を理想とし、普通選擧の必要を說くと雖も、而かも勞働階級乃至無産階級の生活の安定及び其向上を計るものとしては、尙未だ不徹底なる所が頗る多い。第三黨は之れ等の既成政黨が滿足せしめ能はざる勞働階級乃至無産階級の要求を、政治上及び經濟上に實現する事を唯一の使命として出現する所に、初めて重大なる文化的意義ありと信ずる。

(七)

最近の我政界に於て最も注目すべき新事實の一つは、革新俱樂部の第三黨としての出現である。革新俱樂部は今や其團體を正確なる意味に於ける政黨とすべきや否やと云ふ事に就て論議しつゝあると聞くが、併し議會政治の運用に於て政黨の發生は止むを得ない。議會政治の根本觀念は云ふまでもなく人民の意志を最もよく主張し得るものは人民自身だと云ふ事である。故

に議會政治に於て人民が其意志を貫徹し、其主張を實現せんとするが爲めに各種の集會を催し、各種の團體を組織して出來得る限り多數の贊成者を求め、其結合したる勢力に依つて議案の通過を計らんとするは當然の態度と云はざるを得ぬ。加ふるに議會政治に避くべからざる選擧運動が絶えざる注意と努力とを要する職業と化するに從ひ、組織されたる選擧運動の機關を有する候補者と、それを有せざる候補者とは其勢力に於て大なる懸隔を生ずる。從つて人民が自己の屬する階級の代表者又は自己の包懷する政見の支持者と認むる議員を出來得る限り多く議會に選擧せんとすれば、勢ひ其選擧母體となるべき團體を組織し、選擧に對する機關を設備せざるを得ない。革新倶樂部の如きも假りに議員の社交團體に止むると聲明しても、其議會に於ける進退や、選擧に際しての活動は事實に於て既成政黨に異る所はあるまいと思ふ。殊に國民黨及び憲政會の如きは既に黨議拘束の惡弊を徹去し、立黨の本義以外に亘る小問題に就いては其所屬議員の自由意志を尊重する事になつて居るから、革新倶樂部が其組織を政黨にすると否とは、事實に於て、我國の政界に多くの新味を加ふる問題であるまい。

凡そ政黨の正しき活動なくんば、議會政治の運用は、却て困難である。議會政治の先進國たる英米兩國の歴史を見ても、其議會政治の圓滿なる運用は或る程度まで其政黨の正しき活動の賜である。若し政黨がなく議員が個々に贊否を決する事になれば、政府は其議會に提出せんとする法案の運命を豫側するの術なく、政局の不安は絶へずして反つて其間に諸種の弊害を生ずる事は、黨派の集散離合常なく、多數の小黨割據して互に權謀術數を事とする佛蘭西の内閣が絶えず動搖し、第三共和國の憲法の制定以來約五十年の間に、内閣を更迭したる事既に六十回以上なるに徴しても明白である。故に英米の政治家は政黨の弊害も知つて居たが、亦其價値を認めて居た。而して其弊害は決して絶對に不可避のものでない。

故に革新倶樂部にしても、其出現の第一義は、其組織を政黨とすべきや否やと云ふが如き形式の事でなく、其政綱政策の内容に於て、既成政黨以外の天地を開拓する事であらねばならぬ。それには勞働階級乃至無産階級の生活の安定及び向上を主要目的とし、社會改造黨として立場を確立する事が最も有意義である。然るに最近革新倶樂部の發表したる宣言に依るも、又其主要政綱として新聞等に傳へらるゝ所に依るも、其倶樂部組織の主要なる動機は、第一に黨議拘束の陋習打破、第二に、(イ)普通選擧、(ロ)綱紀粛正、(ハ)軍備縮少、(ニ)税制整理の四大政策の遂行にあると云ふ事である。然し若し革新倶樂部の

主要政綱が此數種の政策の實行に過ぎぬとすれば、それは國民黨や憲政會の如き既成政黨のそれと何等異る所なく、第三黨としての出現の意義が薄弱になる。惟ふに世人が革新俱樂部に期待乃至要求する所は、政治上及び經濟上に於ける特權階級の橫暴を打破し、眞に勞働階級乃至無產階級の生活の安定及び向上のため各種の大膽なる立法を敢てせんとする社會改造黨たる事ではあるまいか。

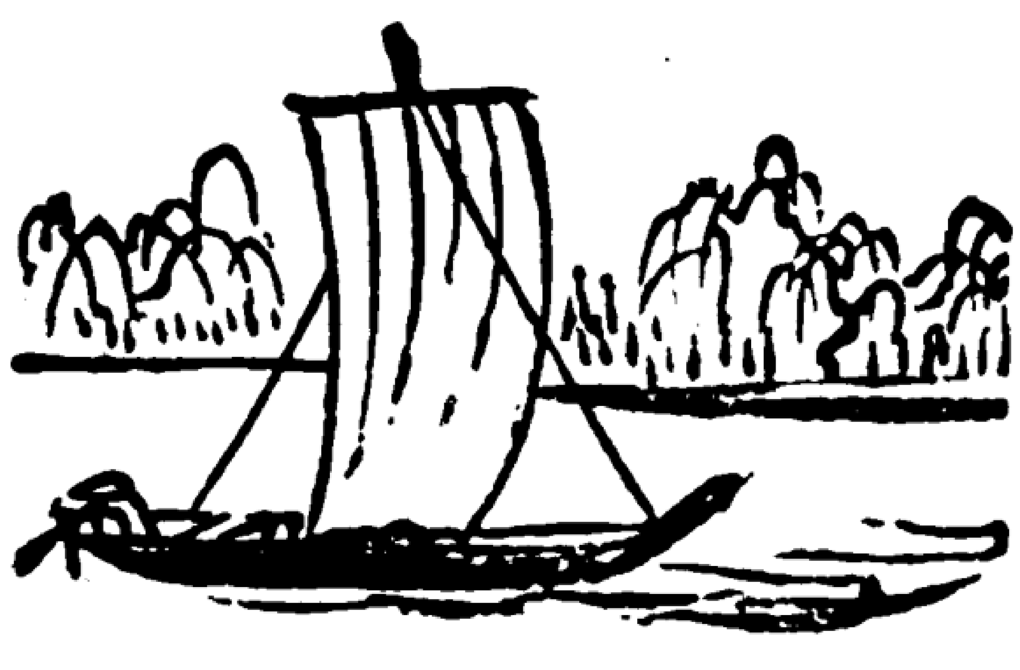
（八）

併し翻つて思ふに今日の日本に於て勞働階級乃至無產階級の期待乃至要求に適應するが如き第三黨の出現は決して容易でない。今日の日本に於ける貴衆兩院は、其選擧制度の關係上、共に少數なる特權階級を代表する事になつて居るのであるから、此特權階級の代表機關に過ぎざる貴衆兩院の中に勞働階級乃至無產階級の要求を體現するが如き第三黨が、其存在を認めらるゝ程度に大なる勢力として出現する事を期待するのは無理である。此點より見る時は、革新俱樂部の主要政綱が大體に於て國民黨及び憲政會の夫れと大同小異であると云ふ事は、今日の議會組織に於ては、實に止むを得ざる結果であるかも知れぬ。結局我國の政治組織は猶ほ未だ文化的意義を有する第三黨を產出する程度に發達して居ないのである。爰に於てか益々普通選擧の急務を感ぜざるを得ぬ。

オイケンは近代文化の特徵を以て個性の尊嚴の自覺にありと云ふて居るが、殊に十九世紀の末葉より此傾向は一層著るしくなつた。即ち各人が自分の中に個性を見出し、其個性を思ふ存分發揮し、眞に自己の力に依つて自己を本位とした新生活を創造せんとする要求が勃然として起つて來た。即ち個々の限りなき多種多類の特性を夫れ〳〵發揮させる事が大自然の本義であると共に又文化の進步であると云ふ思想である。佛蘭西革命の中心思想であつた自由、平等、友愛の觀念は民衆運動を刺戟したるには相違ないが「人間の普遍性」と云ふ事から出發した考へであつて「個人の特別性」を主とした解放論ではない。即ち人間は貴族たると平民たるとを問はず、本來自由に生れたものであるから自由に還らなければならぬと考へたけれども、各個人の個性を解放し、各個人をして其最高最大と信ずる生活を營ましむる事の要求に重きを置いたのではなかつた。然るに今や政治の目的を以て各個人をして其最深且つ最大と信ずる生活目的に徹底せしむるに最も都合よき社會狀態を建設する事であると云ふ思想が人類を風靡した。而して此民衆個々の生活を確保し其日々に新なる人生の要求を貫徹せしむるに必要なる社會狀

態を具備する新國家の建設は、其基礎に於て少くとも次の四ツの人權を確立せざるを得ない。第一は生存權である。第二は勞働權である。第三は機會均等權である。第四は自治權である。然るに今日の日本に於ては近代國家の倫理的條件とも云ふべき此四ツの基礎權利の孰れもが確認されて居ない。新日本の建設は此四ツの基礎權利の確認から始めなくてはならぬのであるが、之れを確認するとせざるとは即ち貴衆兩院の意志に依て決するのであるから、貴衆兩院の民衆化と倫理化と云ふ事が新日本の建設に對する合法的手段の第一歩である。

惟ふに革新倶樂部も亦、今日の日本に於ては、歐米諸國の第三黨と等しく社會改造黨として戰ふの容易にあらざるを發見し結局第二黨たる憲政會の友黨として當分普通選擧の實現に協力するに止まるのではあるまいか。然し第二黨の友黨として貴衆兩院の民衆化と倫理化とに協力する事が總て新日本建設の豫備行爲なる事を自覺して之を爲すに於ては、其協力は革新倶樂部自身が社會改造黨を組織するに劣らざる程度に於て重大なる文化的意義を有するのである。



刻下の國民生活難と物價引下げ策

如何なる犠牲を拂つても物價問題を解決せよ

法學博士 河津暹

我國現時の經濟問題、社會問題の中で物價問題が最も重要なるものである。我國の一切の經濟問題は、物價を引下げて經濟を常態に恢復するに非ざる限り、到底之を解決する事は出來ない。故に我々は以前より物價調節の必要を認めて居つたのである。然るに政府も國民も此問題を眞面目に研究し、眞面目に解決しようとせず、一時の姑息策を講じて居つたものであるから、今日に至つては病膏肓に入つて、殆ど手の下しやうも無い狀態に陷つたのである。外國貿易は輸入超過の勢益々進んで來て、我國の正貨準備の將來に關して悲觀をして居る者も尠くないし、外國貿易不振、殊に輸出貿易の不振は我國經濟界に少らず影響して、不景氣の聲は益々烈しくなつて居るのである。否、再び恐慌が襲來するかも知れない狀態である。現に昨今の新聞では企業界に恐慌が起らんとして居る事を傳へて居る。果して如何なる狀態に變化して行くか分らないけれども、兎に角經濟界が今危機一髪の狀態に在ると云ふ事が出來る。それであるから私は、今となつては或は稍遲い憾はあるが、政府にも國民にも此問題を更めて眞面目に考へて貰ひたいと思ふ。

而して物價を調節すると云ふ事は物價を引下げる事であるから、何れの方面にもそれ〲犠牲の伴ふものであるのは申す迄もない。此犠牲を覺悟して掛るに非ざる限り、到底物價を引下げる事は出來るものではない。此犠牲を拂ふ事を避け、一時の偷安を求めようとしたら、必ず恐慌――而かも大なる恐慌が起つて、經濟界を大に攪亂して、より以上の犠牲者を出すに相違ない。加之、此恐慌が如何なる方面に起るか分らないのであるか

ら、其被害の及ぶ所は自ら濃淡がある。その最も甚だしきものになれば、全く破産等の悲境に陥らなければならぬ事になる。吾々が若し犧牲を覺悟して自ら進んで物價を調節して掛れば、謂はゞ各方面が平等に犧牲を拂ふ事になつて、其被害の程度は比較的少くて濟むかも知れない。加之、物價を調節して經濟界を常態に復せしめる事が出來たならば、經濟界は再び恢復の期に入る事が出來るのであつて、謂はゞ自ら迎へて此策を取る方が景氣恢復期を早くする事が出來るのである。然るに姑息の手段を以つて之を避けんとすれば、畢竟不景氣の時期を長くする事になり、恢復期の現はれる事が、勢ひ遲からざるを得ない。故に吾々が悉く相當の犧牲を拂ふ事は、其事自身に於いては喜ばしい事でないかも知れないが、斯くするに非ざる限りは、到底此難局を切抜ける事が出來ないと信ずる。此意味に於いて私は、今日に於いても尚ほ物價引下げ策を研究し、且つ之を實行せん事を希望して已まないのである。

我國の物價が歐米諸國に比べて寧ろ高位に在ると云ふ事は、既に多くの人の說いて居る所である。歐米諸國殊に交戰國は、戰爭の爲めに物價が著しく騰貴したのであるけれども、夙に物價調節の必要なる事を痛感して、朝野力を協せて物價調節に意を用ひたから、今日に於いては或る程度までは其目的を達して、却つて我國などよりは物價を低位にする事が出來るやうになつた。我國は戰爭に關係する事が少いから、此問題の爲めに苦しむだ程度も從つて少かつた譯であるから、政府も國民も物價騰貴の害に對して注意を拂はず、之が對應策を講じなかつたことの結果、今日に至つて却つて交戰諸國に比べて物價騰貴の爲めに苦しまなければならぬ狀態に居るのである。若し英米等の諸國が此問題を觀る事我國の如くに冷淡であつたなら、物價騰貴の勢ひは、蓋し我國の比ではなかつたであらうと推察する。

抑も物價騰貴の原因は、大體に於いて物資の方に在るものと、通貨の方に在るものとに分ける事が出來る。物資の方に在る原因は、云ふまでもなく、需要の增進、供給の減少に外ならぬ。歐米諸國の學者の中には、需要の方面を輕く視て供給の減少の方を重く視て居るものもあるやうであるが、我國の物價騰貴は需要の增進と供給の減少とが自ら並んで居るやうに思ふ。故に物價を引下げやうといふには、需要の減少と供給の增進と云ふ事より外に方法は無いのである。而してその需要を減少するの策としては、それも多くの人が云つて居る所であるが、財政の整理縮少が最も重なるものであると信ずる。何となれば政府は我國の經濟市場に於いては最も大いなる物資の需要者である以上政府が事業を縮少し、財政を整理するに非ざれば、市場に需要を

減少する事は出來ない。故に政府進んで其範を示して需要を減少する事を力めなければならないと思ふ。新聞紙の報ずる所に據れば、政府も行政整理に着手したやうであるが、之は我國に取つて最も必要なる問題であるから全力を盡くして此問題の解決に膺つて貰ふ事を希望する。國家の政務は、性質として、一として有用ならざるものは無いのであるから、大いなる決心と大いなる勇氣とを以つて事に膺るに非ざる限りは、到底行政の整理も財政の整理も其効果を擧げる事は出來難いと思ふ。

而して行政財政の整理を行ふに就ては、此處に幾多の犧牲を生じ、又之に關係して幾多の難問題を生ずる事になる。之を恐れて居たなら、到底其目的を達する事が出來ない。故に政府は他の事を捨てゝも此問題を成るべく速に解決せん事を希望して已まない。所謂巧遲は拙速に如かず、研究に多くの日月を費して居つたなら、遂に此問題を解決する事が出來ずに終るかも知れない。

政府に幾多の犧牲を拂つて財政行政の整理を斷行するを希望すると同時に、私は又國民にも亦大いなる犧牲を拂つて奢侈の風を棄てて、暫く儉約簡素を旨として貰ふ事を希望せざるを得ない。戰時景氣の好かつた以來、都鄙至る處に奢侈の風が行はれ、消費が甚だ増進して來た。消費を抑へて節約する事は、口では容易に言ひ得るが、之が實行は甚だ困難である。從つて經濟界が又昔日の如く景氣が好くないに拘らず、消費節減の程度は割合に少い。其上一方に於いては生産者又は商人は、需要が減退して利益の少くなるを恐れ、消費の減少を防ぐ種々なる方法を講じて居る。例へば東京府が催した博覽會の如き、一面から觀れば此主意に外ならぬ。從つて不景氣であると云ひ乍ら、消費がそれだけ減退しない。いよ〳〵以つて國民の生活上の困難を増加させる許りである。之が爲めに各方面に幾多の弊害が起つて來て居る。故に吾々が一旦増加した消費狀態を昔に復せしむるには、大なる覺悟を要する。之れ或る意味に於いて大いなる犧牲である。國民が此點を自覺して熱心に之に當れば、其効果は決して少くないと信ずる、又商人等も需要の減退によつて相當の犧牲を拂はねばならぬ事になるが、之れ亦此難局を突破するに必要缺くべからざる事であるから、之を忍んで貰はねばならない。斯くすれば經濟界の恢復期は、或は久しからずして現はれるに相違ない。故に此際一二年の間の犧牲を拂ふ事を覺悟して貰はねばならぬ。

供給の増加と云ふ事は、我國に於ては目下甚だ困難な事である。上にも述べたるが如く、我國の外國貿易の狀態は、輸入超過の結果、勢ひ外國品の爲めに我國の品が、獨り海外市場に於い

てのみならず、內國市場に於いても其販路が狹められて居る。從つて供給の增加は市場の維持並に市場の恢復を意味する。供給を增加し、從つて市場を維持恢復するには、物價を減少するより他に途が無い。蓋し市場の維持及び其恢復と物價の調節とは互に因となり果となつて、離るべからざる關係がある。故に此際供給を增加し、市場の恢復を爲さうとするには、生產費を成るべく低廉にする外に方法は無いのである。

而して生產費を低廉ならしむる爲には、經營に一大刷新を加へる外は無い。此事は第一、我國の種々なる事業の經營は、旣に多くの人々に注意せられて居る如く、比較的能率が低い。故に能率を高める爲めに全力を注がねばならぬ。其事に就ては、事業の組織にも關係して居るだらうし、又其他種々の事情もあらう。由來我國に於いては、名の知れぬ雜費と稱する費用が多い。此事は畢り經營が緊張味を缺いて居る事を意味する。故に事業の經營に當る人は、此點に非常に注意して、經營の大刷新を圖らねばならぬ。

第二には、株主等の資本家が從來少しにても配當の多きを求め、其他を顧ざる弊風があつた。之を除かざる限り、勢ひ經營の大刷新は困難である。故に此際は暫く少くとも資本家に配當の少い事に甘んずる覺悟をして貰はねばならぬ。又勞働者の如きも、物價が大いは低下せざる以上は、其賃銀を減ずる事は到底行はれず、又望むべき限りではないと信ずるが、併し乍ら此際勞働者に向つて希望したい事がある。近年我國の勞働者の勞働能率が甚だ減少した。勞働能率の減少は熱心に其勞働に從事しない事が主なる原因ではないかと思ふ。賃銀は多くなつた、生活の程度は稍々進んだ、之に伴つて勞働能率が高まらなければならぬ筈なのに、反對に低下したのは、我國の經濟界の爲めに實に憂ふべき現象だと思ふ。斯くては諸外國との競爭に於て敗れなければならないから、其結果は失業者も殖え、賃銀も下り、非常な困難を見ねばならぬ事は、火を睹るよりも明かである。故に此際勞働者は我國の經濟狀態は如何なる有樣であるかを考へ熱心に勞働する事を希望せざるを得ない。物價にして減少して行つたら、縱令賃銀が之に遲れて減少を見ても、生活上何の故障も無い。之に對して何の不滿を抱く必要は無い。同じ道理によつて會社の幹部に當る企業家も、一時の如くに種々の名義を付けて多くの收入を得る事を控へて貰ひ度い。幹部に居る者が之を爲して悔ひないとすれば、勞働者も賃銀を高くする事を欲し、上下交々之を爭つたならば、生產費を減少する事は到底出來ない。故に之も幹部は身を以つて範を示さねばならない。此等の點に就いても、皆相當に犧牲が伴ふ故、私としては之を云

ふ事が苦しいのであるけれども、生產費を少くする方法は之より外に無いから、敢て言ふ次第である。

之と同時に獨り一會社の經營を改めるに止まらず、同種の會社が合同して以つて經費を省くやうにしたい。事業合同の機運漸く盛んになつて、之を行ふ者が出來たが、之れだけで尙ほ足れりとせず、もつと大整理を行ふ事が必要である。合同を行ふには、實際問題として幾多の情實があり、從つて幾多の犧牲を拂はねばならぬ。然し之を忍ばねば事業界の整理は到底望まれない。生產費が安くなり、又從つて其價額を安くする事が出來れば、一面に於いて國民の生活を容易にならしむる事が出來ると同時に、市場の維持恢復が出來、供給の增加も起り、經濟界の恢復期を早くする事が出來ると信ずる。

次に通貨に關する問題としては、通貨が膨脹したが爲めに物價の騰貴を來せるは爭ふべからざる事實である。故に通貨を再び常態に復せしむる事に努めなければならない。之にも犧牲が伴ふが、國民は其覺悟をしなければならないと思ふ。通貨を常態に復せしむると云ふ事は、第一に經濟界の景氣不景氣によつて通貨が伸縮しなければならぬに、我國の狀態に於ては其經濟法則に叶はず、銀行等が比較的に緊縮方針を維持するに拘らず、通貨縮小の程度が著しくない。之は上に述べた財政の膨脹が大に關係するに相違ない。がそれ以外に幾多の原因があると思ふ。私は此際金融界が緊縮方針を改めない事を切望する。世間では不景氣に對する策として金融を引緩めやうと云ふ者もあれど、否近頃に於ては公債を償還して金融界を若干引めた傾向もあるやうだけれども、私は大體に於てそれは極めて危險だと思ふ。依然緊縮方針を持續して貰ひ度い。勿論恐慌が起らんとし、若しくは起つた場合には、之に對應する策を取らなければならぬ事云ふ迄もないが、然らざる限りに於て經濟界が困しいと云ふが如き場合に、此緊縮方針を擲つたならば、それこそ甚だ危險で、どんな危機に陷るか分らない。今日の我が經濟界はチブス等の病後の患者のやうなものである。食物を欲する念は強い。見て居ても氣の毒のやうな狀態であるが、此際宋襄の仁をなして之に食物でも與へたら、如何なる變化が生ずるか分らない。寧ろ心を鬼にして、緊縮方針を持續して貰はねばならない。故に金融引緩め策の必要を說く者あれど、私は絕對に之に反對したい。

次いで我國は依然として金の輸出禁止を繼續して居る。此目的は私には殆ど解せられない。縱令金の輸出を止めて置いても、我國の外國貿易の狀態今日の如きであれば、我國の在外正貨が減少する事は明かである。而かも此禁止は通貨を常態に復せし

めない一原因を爲すと信ずる。故に通貨を常態に復せしめるには、此等の戰時だけに行はれた策を速に放擲せん事を希望する。

又近頃輸出品を奬勵する策として、殊に爲替等に於て策を用ひて居るやうである。併し乍ら輸出を爲替策によつて人爲的に奬勵するは、輸出を奬勵するより寧ろ輸入を阻害する結果を來し、却つて經濟界に害を及ぼす方が多いやうに思ふ。斯くの如き姑息の方法を以てしては、到底輸入超過の勢ひを抑へる事は出來ないと信ずる。故に斯くの如き人爲的の方法を取るのは、昔行はれた貨幣を尊重するの風習を復活したものと思ふより外ない。斯くの如き人爲的の策は全く捨てゝ、金融はなるべく早く常態に復せしむる事に工夫を巡らして貰ひ度い。

以上述べた如くに、物價引下げ策に就いて特に名案と稱すべきものも無く、又若干姑息の策として考へ及ぶもの無きにしも非ずであるが、斯くの如き姑息の策を弄すると云ふ事は、實際に於て益する所極めて少いと信ずる故、特に之を擧げる事を欲しない。唯政府に向つても、亦國民の凡ゆる階級の者に向つても、此物價問題の我國に於ける最重要事たる事を眞面目に自覺し、多大の犧牲を拂つても此問題の解決を圖り、經濟界の恢復期を少しでも早く來さん事を希望する。

物價を引下げ國民生活を安定するは刻下の最大急務にして又政治の第一義

貴族院議員　上山滿之進

我國民の大多數は目下甚しく生活難に苦しみつゝある此苦境は今後益々劇甚を加へて終には社會全般が頗る憂ふべき狀態に陷ることは最早避くべからざる命數のやうである。この悲しむべき時機が何ケ月後に到來すべきやは固より豫言し得る限りでないが、極めて近き將來に迫つて居ることは想像に難くない。吾々は如何にして此窮境に處すべきか。これが今日の最も重大

なる國家問題の一つである。

生活難とは言ふ迄もなく一個人が生計に必要なる支出に應ずるに足るの收入を有たない境遇に名けた言葉であつて、此の如き個人が世の中に多數に出來ると、それが國家の問題となる、しかも問題が國民生死の岐路に立てる痛切のものであるが爲めに國家をして最も危險な立場に入らしむるものである。而してこの危險は今や我國に於て目睫の間に襲ひ來つて居る。

生活難の原因　生活難の原因は其時の社會の實情と個人の境涯とに從つて必ずしも同一ではないが、我國現時の生活難は支出の增加と收入の減少とが積極消極相呼應して國民を呵責するものである。

支出增加の主なる原因は物價の騰貴と國民生活の昂上とである。個人々々の立場からは此外に災難もあり病氣もあり其他種々の事情もあらうが、國民一般から觀ればこの二つが普遍的性質を有する原因であらう。

物價騰貴の驚くべきことは世界强國中我國に及ぶものはない。

歐洲戰亂の爲めに世界の物價は大に騰貴した。それは列國共に同樣である。騰貴の原因たる物資の需要增加と生産減少とのその又原因たる歐洲戰爭が世界的大事實であつたからである。

さりながら大正七年の末に一たび休戰條約の締結せられて以來各國の物價は漸次低落の步調を進めて今日に於ては既に大に下落してゐるに拘らず、我國の物價は下落するには下落したが戰前に比べての現今の騰貴率は尙ほ頗る高くて到底諸外國に比すべくもない。

日本銀行の調査に依つて東京の物價平均數を調べて見ると歐洲大戰前即ち大正三年七月を一〇〇とすると本年三月は二・一、一三である、即ち現時の平均物價は戰前に比べて二倍一分一厘餘となつてゐる。世界各國中今猶ほ此の如く物價の高い國が何れにあるであらうか。

茲に日英米佛四ケ國の物價指數を比較した表がある。これによると大正三年七月を一〇〇として十年十一月の物價は東京が二二五、倫敦が一七四、紐育が一三一、巴里が三三三である、即ち此時の我國の物價は戰前に比べて十二割五分も高いのに、英國のは七割四分、米國のは三割一分の高さに過ぎない、佛國でさえも二十三割三分高迄下つてゐる。

然　ば英米佛の物價の戰時中の騰貴率は我國程に高くなかつたのでもあるかと云ふと、決してそうではなく、戰爭中には各國共戰前の三倍四倍に上つたこともあつた。更に近　に於ける日英米佛物價の低落步調を比較して見ると、大正九年七月の對

戰前の指數は東京二五二、倫敦三〇七、紐育二二四、巴里四九六であつたのだが、十六ケ月後の大正十年十一月には前に陳べた通りに倫敦は一七四、紐育は一三一、巴里は三三三、我國は二二五になつて居ることを發見する、卽ちその下落步合は倫敦は四割、紐育は四割一分、巴里は三割三分であるのに、我東京のは僅々一割餘に過ぎない。我國の物價の底落が牛の步みの遲々として捗取らなさ加減は此の如く驚くべきものである。

如何にも歐羅巴でも獨墺露等の物價は戰前に比べて想像も及ばない程に騰貴して居る。乍併是等の諸國のは其の指數のみを取つて直ちに我のと比較することは出來ない。凡そ列國の物價を比較するには先づ以て眼を貨幣價値の相違に注がなければならないからである。

兌換制度の確立して居つた歐米諸國の戰前に於ける貨幣價値は爲替關係の爲めに多少の高下を見るの外は全然各國法貨の金分比率に從つて定まつたもので、我國のも亦同樣であつたことは誰も知る所である。この金分比率に依れば英の磅は我が九圓七十六錢强、佛の法と伊のリーラとは各三十九錢弱、獨のマルクは四十八錢弱、墺のクローネは四十一錢弱、露の留は一圓四錢强、而して米の弗は二圓一錢弱に當る。然るに今日の現狀は如何。世界第一の富國で戰爭成金たる米國は別として、各國とも總て兌換制度が崩れて、佛の法は十九錢强、伊のリーラは十一錢弱に下り、獨のマルクの如きは僅に八厘餘に過ぎない、墺のクローネの確實の相場は今は知らぬが一厘か二厘であらう、露の留に至りては殆と無價値である、英の磅でさへ金分比價より三十錢安の九圓三十九錢弱である。

此の如く貨幣價値の下落した國に於て物價の呼値の昂騰するのは固より當然であつて、その呼値を捕へて直ちに他の國の物價と比較することは出來ない。此意味に於ては前に陳べた英佛の物價騰貴率もあの數字よりは低い道理である、(昨年の十一月には英の磅は今日よりも數十錢の下位に在つたから猶更である)特に佛國の貨幣價値は金分比價の約二分一であるから對戰前騰貴步合二十三割三分なるものも實は十二割にも及ばないのであつて我國と伯仲の間に在るに過ぎない。獨墺露の諸國の物價呼値は勿論驚くばかりに高く從て對戰前指數は御話にならない程に增長してゐるが一面に於て貨幣價値が極端に低下してゐる爲めに眞正の物價から觀ると我國の騰貴率の如くに高いものはなく、寧ろ之より低いのが尠くない。墺露の統計は今持合はせないが、獨逸の對戰前物價は目今三十六倍であり、而してその貨幣價値は六十分の一であるから、結局實價から云ふと獨逸の物價は戰前に比べて二分の一近く迄落ちてゐる譯になる。

獨逸よりも一層悲慘の狀況に在る墺太利や露西亞のことは推して知るべしであらう。

要するに我國の物價の戰前に對する騰貴率は列國中類を見ざるの高位に在つて、しかもその低落の足取りが極めて遲鈍である。これが國民が生活難に懊惱せざるを得ない第一の原因でなければならぬ。

我國の生活難の原因たる支出增加の其の又原因を爲す所の第二の點は戰時中の國民生活の昂上である。

歐洲戰爭の爲めに突然異常に增加した世界的物資の需要と歐洲就中大陸の交戰諸國に於ける生產の減少とは、交戰國とは言へ、遠隔の地に在る我國の經濟界を賑はしたことは空前の有樣であつた。都鄙百般の工場の擴張新設は勿論、農家に於ても種々の副業的事業が出來て、是等の生產品は羽根が生えて飛んで賣れる、價格の貴いのは問ふ迄もない、玆に事業主と言はず勞働者と言はず生產に從事するものの收入は忽ちにして大に增加した、物資の分配に從事する商人や販賣業者も同樣の好運に際會したのである、特に國民の過半を占むる所の農家は此間米價が續いて高値を維持し加ふるに豐作續きであつた爲めに意外の收得を占めて鼓腹擊壤の歡樂境に入つたのであつた。

斯かる事情の下に於て各人の生活の昂上するのは當然である。日常必須の消費のみでなく必ずや進んで贅澤に陷るのは止むを得ない。何人でも一たび「三越」の雜沓を一瞥したものは必ずしも各地を徧歷するを要せずして全國民の消費力の甚しく强大になつたことを想像し得たであらう。

一たび向上せしめた生活は容易に引締めることの出來ないものである。休戰後急激に世界的に物資の需要が減じて漸次に事業界が萎縮した時期に至つても國民の大多數は依然として好景氣時代の餘勢に驅られて過去の昂上した生活を繼續して來た。幸か不幸か是等多數國民の財布の底には好景氣時代に使ひ剩した金が相應に多額に存在した、又勞銀も大小成金たる得意先が甚しき窮地に入らざる限り低下しない。これが爲めに國民一般の購買力は休戰後約四ケ年の今日に於ても猶甚しく衰へない。從て物價も容易に低落しないのである。或は政策を以て或は自然の經過の力に依つて國民の財布に在る消費資金が減り又勞銀が低落するにあらざる限りはこの購買力が衰へて物價の調節を見ることは所謂百年河淸を待つの類で、徒らに爲政者の唇頭から國民の反省を促がすこの冷淡な宣言を聞きつゝ終に國民が財布の底を叩くの日を心細くも手を拱いて待たざるを得なかつた。何たる情無いことであらう。

生活難の一面の原因たる收入減少は失業、減收等から來るこ

とは勿論であるが、消費資金の減耗も現代の事情に於ては收入減少の一大要目に數へることが適當であらう。

今日迄の我國の實情では收入減少が生活難に與へた程度が一般的にはまだあまり甚しくなかつた。それが物價低落の足取りを鈍らせた一つ大原因である。乍去今後は急速に又一般的に收入減が襲ひ來るの情勢がある。既に其の現象が各方面に見えてゐる。

物資は價の低き所より高き所に向つて動く、全く水の流と逆である。物價の無暗に高い我國の輸出貿易が沈んで輸入貿易が勢を得るは當然の數理であつて、玆に國內の生產業が衰へ、失業者が殖え、給料減額が行はれ、而して多數の國民が生活難に陷る。

戰前の我國の貿易は兎角に輸入超過勝であつたが、戰爭開始後間もなく輸出超過になつて大正六年の絕頂は超過額五億七千萬圓に垂んとするに至つた。之と同時に船賃傭船料保險料等の貿易外受取勘定も戰時中は非常に增加した爲めに、彼此合はせて年々多額の正貨が增加して、戰爭開始の大正三年末には僅に三億四千萬計りで稅關制度の基礎をも危まれた正貨の額が、年々著しく增加して六年後の大正九年末には六倍以上の二十一億八千餘萬圓に上つた程の勢であつた。然るに八年以後は年々輸入超過で其の額も益々增加して十年には三億六千萬圓餘に上り本年は年初四ヶ月丈けで既に三億五千萬圓を算ふるの逆勢を示し、又貿易外受取勘定も戰爭終熄後大に減少して本年の如きは一億五千萬圓位であらうとの觀測が各方面で一致してゐる。是に於て我國の保有せる正貨も昨年五月以來漸減の步調を辿り本年に入りては僅か三ヶ月末に一億六千萬圓も激減して三月末の現在は十九億二千萬圓になり終つた、四月以後本年分の正貨流出額が幾何になるかは固より確實には分らないが蓋し本年末の正貨は十七億圓位になるかと想はれる。此勢を以てすれば今後正貨減少の步調は益々迅速で多分數年の後には戰前同樣再び兌換準備に不安を感ずるに至るであらう。

叙上の事情の下に於ては生產品の不捌けと事業資金の調達困難との爲めに事業界が萎縮して工場の休止なり事業縮少なりが起り、工場以外の各般の生產業も同一の否運に遭遇するに至るのは自然である。而して玆に多數の失業者や減給者の生ずるのも免るべからざる成行である。我經濟界に於ても近年此現象が明かに見えて來たのであるが、前來陳べた事情の下に內地消費がまだ著しく減退しない爲めに內地向物資の生產業は今日迄は大打擊を受けたものが尠ない。

失業者の數は大正九十の二年間に工場で八萬人、鑛山で六萬

人、合計十四萬に上つた、この外に工場法の適用を受けざる小工場、土工其外の各種のものを集めたならば可なりの多數になるであらう、この以外に家庭の内職を失つた半失業者とも稱すべきものの數も決して尠少ではあるまい。此の如く既に業を失つたものが相當に多數であるけれども、今後はこの數字が更に多く又速かに增加せざるを得ない情勢に在る。蓋し我國の經濟界は英米と異つて今日迄思ふやうにまだ整理せられず、愚圖々々で其日暮らしに事業を無理算段で續けてゐるものが多く、且は物價が高く物資の國内需要が容易に減退しない爲めに内地向商品は相變らず相當多量に生產せられた、この時期に於て比較的失業者の少なかつたのは自然であらう、乍併今日は最早到底姑息彌縫を許さない程度に經濟界が行詰つて來たから、今後の事業界の混亂は頗る激烈なもので又それが眼前に迫つて來てゐる、從つて失業者も遠からずして大に增加するであろう。洵とに殘念千萬のことではあるが結局免るべからざる運命である。

全然失業はしない迄も或は仕事が減り或は給料を減らされて生活に苦しむものも今日迄はあまり多數でなかつたが、此後は恐るべき勢を以て其の數を增すであらう。この事情は失業者同樣である。

此の如く現に業を失ひ又は半失業の境涯に在るものは如何にしてこの物價騰貴の時に生計を立つるであらうか。更に又今後急速に多大に增加すべき同種の人々は如何にして殘忍なる生活難の惡魔と戰ひ得るであらうか。思ふて玆に到れば慄然たるを禁じ得ない。當路者は何と考へてゐるであらう。

消費資金の減亡は更に一層國民の生活難を鞭つて甚しからしむるであらう。好景氣時代に財布に殘して置いた金が日々減少するのを氣にはしながらも、不自然なる生活昂上の情勢は急には節約の昔に返ることを承知しないので、國民の多數は刻々に自から進んで貧窮の淵に向ひつつあるのである。近時に至つて彼等の財布の底がだん〳〵淋しくなつたことは何人にも見えるであらう。郵便貯金だけに付て見ても戰爭開始年即大正三年末の一億九千六百萬圓のものが同十年十月末に九億二千萬圓の巨額に上つたことは素破らしい景氣であつたが、それから漸次減少して半年間に二千餘萬圓を引出され本年四月末現在は八億九千六百萬圓に下つて居る。この事實を以ても如何に中產以下の多數者の財布が次第に輕くなるかの一斑を見ることが出來ると思ふ。而してこの輕くなる速力は今後更に强いことであらう。

此の如くにして消費資金を使ひ果した揚句の多數國民は物價は貴し收入は減り極端な生活難に虐げらるるに至るであらう。

生活難招致の責任者　我國生活難の狀況と原因とは以上

の通りであるが、借この窮狀を將來したのは何人の責任であらうか。吾輩は遺憾ながらそれが政府當局であると斷言するに憚らない。

戰時中に物價の騰貴したのは全く世界的大勢で何人の手柄でも失策でもない。乍併戰後に於て列國の物價は著々安定の位地に向つて下落しつゝあるに拘らず、獨り我國に在つてのみ今以て戰前に比べて十一割餘の騰貴率を示して居ることには我國に特獨の原因が無くてはならない。これが爲めに大多數の國民は先以て物價の高い爲めに困り次にはそれが高い爲めに貿易が衰へ事業が荒み玆に職業を失ふて益々困り、虎の子の儲け溜は財布の底に影を失つて、漸々窮極の貧苦に泣くことになる。若しも大正七八年の好景氣時代に於て政府が相當の物價調節策を樹て豫め今日に備ふる所があつたならば、國民の生活難が大に緩和せられたのは言ふ迄もなく、又貿易の不振も事業の萎縮も窮迫の極に達するやうなことはなかつたのである。當時貴衆兩院に於ては勿論、天下の識者が殆ど擧つて政府に物價調節を要求したのは實に國民の聲であつたのである。然るに政府は冷然たること氷の如く、常に言を左右に託して一切これに耳を假せなかつた。加之益々放漫の政策を取つて寧ろ却て物價の騰貴を挑んだ姿がある。今更政府の心事の詮議立をする積りはないが、如何にも不思議千萬なる當局の心理狀態であつたことが今でも忘れられない。

世の物價調節を說くものに對抗して當時政府者は必ず國民自省を要求した。吾輩はいつも此態度に對して深き嫌厭の情を禁じ得なかつたのである。

勿論國民の自覺は何事にも必要であり、又これに由りて自然的に事態の改良せらるゝことが最も有效にして且つ全く無害である。吾々國民は造次顚沛にも反省自覺を怠つてはならない。乍併當面の國家問題、就中異常の變態が產出した大問題に對して第一にこれが匡救の任に當るべきものは政府でなければならない。英米の物價低落は實に政府の努力に負ふ所が多いのである。然るに我が政府が戰爭の爲めに不自然に暴騰した物價の調節を一に國民の自覺に責めて獨り自から恬然たる爲政者の言動とも見えない、況んや景氣煽りの言動を縱にして却て國民の自覺を阻碍するが如きに於てをやである。凡そ國民の自覺に訴ふるは長き年月に效果を收めて足りる問題であるか、又は國家急迫の際に當つて愛國心の臨時的緊張を要求する問題の如きものでなければならぬ。物價調節問題の如きは各個人に取つては當面や慾求や利害や其他各般の社會生活と衝突する場合が數限りないものであるから、如何に反省自覺を要望しても國民全般少

くともその大多數が一齊に實行せざるを得ざる境遇になる迄はその效果を期待し難いものである。固より吾輩も國民自覺の宣傳を全然無益なりとは言はず、却てその大いに努むべきものであることを確信するのであるが、苟くも此宣傳を爲さんとするには國家の樞機を掌れる政府は自から全力を擧げて調節策を强行し以て一は實質的に調節の效績を擧げ一は精神的に國民をして當路に共鳴して反省自覺に進むに至らしめねばならぬ。然るに政府は何等の施設を爲さざるのみならず、寧ろ不自然の景氣附けを敢てしながら、唯國民に向つて反省せよ自覺せよ貯金をせよ消費を節約せよと要求するのみでは一利なくして却て百害を醸すことになる。今日の現狀は實にこの百害續出して社會上恐れて怖るべき事態が崛起せんとしてゐるのである。

今吾輩がしかく政府の過去を責むる所以は敢て死兒の齢を算へて無益の愚痴に耽らんとするものではない。今後の生活難對應の途に於て政府當局が無責任の覆轍を踏まないやうに豫め警告したいが爲めである。

生活難對應策　猛然として目前に迫つて居る國民の生活難に對して政府は如何なる政策を樹つべきや、國民は如何なる方法を以て之に對抗すべきや、これが今日の緊切なる案件であるが、未だ雨降らざる時には牖戸を綢繆する途もあるが、大雨沛然として來つた今日に在ては何としてもビショ濡れになるは免れ難い、せめて貴重品だけでも濡らさぬやうに注意すると共に濡れた後の仕末を考へて臨機應變の處置を取るの外には文珠の智慧を以てするも別に妙計は考へ出せないと思ふ。甚だ殘念千萬ではあるが致方がない。

吾輩は今日となつては生活難を緩和するに大なる效果のある方策はない、大體に於ては自然の成行に放任するの外はないと思ふ。然らば一切無策なりやと問はば、それは勿論ある、唯大なる效果を奏すべきものがないと言ふのである、父母既に爲すべからずと雖も藥を下さざるの道理はない。

生活難緩和策の第一は言ふ迄もなく物價の調節である、天下の識者が數年來熱心に唱道したのは即ち此の點であつたが、今日でも果して物價調節の手段があるであらうか。これを講究する前に大正七八年以來世間に現はれた調節策を此の場合一應點檢して見たい。

好景氣の眞最中大正八年七月に東京商業會議所の發表したる物價調節策は通貨の收縮であつて、その手段として次の三項目を擧げて居る。

一、貯金利子の引上

一、外國放資

一、公債の募集

昨大正十年の秋から本年の初頭に掛けて發表せられた纒まつた意見の記憶に新なるものに次の三つがある。

東京商業會議所の小賣相場引下策（大正十年九月）

一、公設市場を改善し標準相場を以て日用品の供給を爲すこと
二、庶民金融を緊縮する爲め小額公債々券等を發行すること
三、同業組合をして適正なる職分を遂行せしむること
四、消費組合購買組合を奬勵すること
五、小賣相場を調査して標準相場を一般に迅速に知らしむること
六、生産者消費者間をして直接取引若くは現金取引を實行する様奬勵すること
七、消費者の自覺を計ること

憲政會の物價對策（大正十年十月）

一、速に行政及財政（中央及地方）の整理緊縮を行ふこと
二、國税（關税を含む）及地方税の整理を爲すに當り成るべく生活必要品に對する課税の輕減に意を用ゐ生産費の減少を圖ること
三、投機思惑を助長し物價を釣上げ若は物價の低落を阻止する如き政策を行はざること
四、速に金の輸出禁止を解除すること
五、多數國民の間に廣く散布せる通貨を收縮する爲割増金附少額勸業債券貯蓄債券の類を發賣し且つ簡易保險金額の最高限度を適當の程度に引上ること
六、鐵道運賃を引下ること
七、生活必要品小賣相場の低廉を圖る爲小賣商の不當利益取締を勵行するの外模範的公設市場を設け標準價格を以て販賣せしむること
八、政府は極力低利資金を融通し公共團體をして住宅の建設を爲さしめ標準賃貸價格を以て主として勞働者に貸與せしむること
九、事業會社は生産費節減の目的を以て自制的に配當及重役賞與金を減じ且生活必要品價格の低落と相俟て勞銀の整理を行ふに努むること
十、物價不廉の原因が供給の不足に在りと認めらるるものに付ては操業短縮を緩和若は撤廢せしむるに努むること
十一、其他消費組合購買組合の普及、購買方法及商業機關組織の改善、取引所法の勵行、一般國民消費の節約特に上流階級の自制、從業員及勞働者能率の向上、企業

の整理、合同機械應用の擴張等

日本貿易協會聯合會の物價及貿易對策（大正十一年二月）

一、對外投資
二、金の輸出解禁
三、保護政策の排斥
四、財政行政の整理緊縮
五、物價調節機關の統一

以上の意見の中には急場の間に合はない根本的政策もあるが大多數は當面の物價調節應急策として考へられたものである。

此の外斷片的意見は大正七年以來團體や個人に依つて無數に陳べられて居る、又右の如き纒つたものも種々發表せられたことと思ふがそれは吾輩の不勉強と外國旅行との爲めに眼に觸れなかつた。乍去それ等の意見の中で實效を逐き將來に期すべき根本策は別として、目下の急に應ずる爲めの方策は蓋し前に擧げたものと大同小異であつたであらう。唯前の列記の中には無くて一寸眼先の變つてゐるものが二つある、それは小額紙幣廢止說と官公吏の貯金勸要說とである。

以上の諸說中物價調節に直接關係あるものを分類して見ると次の通りである。

景氣煽動行爲の抑制……政府の放漫なる樂觀、投機思惑の助長、不自然なる財界後援、不自然なる物價維持（例ば米及生絲）等の抑制。

通貨收縮……日本銀行利子の引上、公債募集、外國放資外債の買入銷却、金の輸出解禁。

物資の需要節減……行政財政の整理（國費地方費の緊縮）國民消費の自制、民間消費資金の吸收（勤儉貯蓄の獎勵、郵便貯金利子の引上、小額の公債債券等の發行、簡易生命保險金額最高限度の引上、官公吏の貯金勸要）、小額紙幣の廢止。

物資の供給增加……操業短縮の緩和又は撤廢、不自然なる保護政策の排斥。

生產費の節減……會社の配當及重役賞與の節制、勞銀の整理

分配費の減少……公設市場の改善、消費組合購買組合の獎勵、賣價協定の制壓、小賣商の不當利益の取締鐵道運賃の引下。

併是等の政策が今日に於ても猶ほ實行し得べきものであらうか、又此外に新規の方策があるであらうか。吾輩の考では新規の妙案が今更湧出づべき筈は勿論はく、前揭の調節策も時の宵盲に入つた今となつては實施し難いものが尠くない、實行は可

能でも効果の頗る乏しいものが多い。乍去實行も出來且効力の相應にあるものもある。又是非とも至急に實施しなければならないものもある。以下試みに卑見の概要を陳べて大方の敎を乞ふこととする。

第一に景氣の煽動は今日と雖も大に愼しまなければならないこれは贅辯を要しないであらう。大正八九年に亘つて物價調節の世論が囂然として起つた時、何の故か政府當局はこれに一顧を、與へなかつたのみならず、公衆の面前に於て慢然たる樂觀說のみを振舞はして、大勢達觀の能力に乏しき多數民衆の心を蠱惑したことが少くない、玆に民衆は安きに慣れて放縱の生活に耽り投機熱に罹つて一攫千金の空夢に有頂天になつたものも夥しく出來た。經濟界に於ては投機思惑が大に跳梁して株や米や綿の空相場が盛にはれ、濡手で粟を理想とする泡沫會社が每月雨後の筍のやうに多數に簇生した。是に於て物價は調節どろではなく却て益々押上げられたのである。これが實に今日の財界の破綻、事業の不振、物價の不安定、國民の生活難を將來した大なる原因である。大正九年三月俄然として恐慌風が經濟界を襲ふに至つて、政府は遽々として事業家に後援してその破綻を彌縫し、又米や生絲や其他の物資の價格下落を阻止する爲めに特別の手段を用ゐた。吾輩は一部の論者の如く是等の政府の處置を以て一々不都合極まりと絕叫するものではないが、政府の經濟觀が周密の思慮から出た確乎たる方針に基けるものでなく唯是れ放慢と呑ん氣の一天張で、行き當りバッタリのものであつたとの批評に對しては辯護することが出來ぬ。過ぎ去つたことは已むを得ずとして政府の斯かる態度は何れの世に於ても大の禁物であつて、今や國民の大多數が極度の生活難に脅かされんとする此の時に當りては最も恐るべきことである。

通貨收縮の大正七八年頃に叫ばれた目的はこれに由つて一には金融を緊縮して投機熱や泡沫會社製造熱を冷却し以て財界を落付かしめて未來の恐慌を避け且つ自然の物價を調節せんとしたことに在り、一には通貨の數量を減少して貨幣の價値を引上げ以て物價を引上げんとしたことに在ると思ふ。當時に於ては此方策は最も有效で又實行的のものであつたことは吾輩も全然同論である、然るに政府は毛頭此說を容れなかつた。若し當時此策が行はれてゐたならば目下の悲境を見ることはなかつたであらう。乍併今日に至つては最人爲の通貨收縮の如きは行ふべきものでなく、又行ひ得ざるものであると思ふ。其の理由は極めて簡單である。さらでだに輸入超過の激增銀行業者の警戒等で金融は漸次に逼迫しつつある今日は大正七八年當時通貨收縮に向つて期待した結果が不健全ながら自然に現されて來

て今更人爲手段を用ふるの必要なきのみならず、强て之を用ふることは瀕死の境に立てる事業界を驅つて絶望の淵瀨に突き擠すものである。人爲的通貨の收縮は今日では百損あつて一益もない。日本銀行利子の引上がそれである、公債募集の如きは既定計劃のものさへ今は滿足に成功し難いのに、假令通貨收縮が適當なりとするも到底これが爲めに新規募集を計劃し得ざることは明瞭である。外國放資外債買入銷却の如きも正貨の著々增加しつゝあつた當時には尤も必要の措置であつたが、今や正貨は前に陳べた如く毎月急速度を以て減少して行き最早數年後の兌換準備さへ心配に堪えない今の時に於て固より一指をも染むでべきない。況んや今後數年間に償還すべき國債の額が甚だ多大なる此時代に於てをやである。金の輸出解禁は以上のものとは聊か趣を異にする點はあるが、正貨の激減が氣遣はるる今日これも容易に斷行すべきものではあるまい。

行政財政の整理は物價調節の見地よりしても刻下の最急要務であつて且又其効果も大に見るべきものがあると信ずる。是非とも斷行して貰ひたい。蓋しこれは國民大多數の要求であらう。

吾輩の所謂行政財政の整理は政費の節約を目的とするものである。近頃政府でも兩政整理の準備に著手したのであるが、その目的は能率增進に重きを置くもので政費の節約には頗る冷淡である。能率增進も固より結構ではあるが、その實行は急ぎ得るものでも急ぐべきものでもない、來年の春永にても緩々と考へて貰ひたい。今日國民の切望する所は中央地方の政費を思ひ切つて緊縮して來年度の豫算に其結果を現はすは勿論、本年度に於ても緊縮せる實行豫算を立てて欲しいのである。

物價調節の見地から兩政整理を熱望する所以は國內の最大消費者たる政府及地方團體に消費を節約せしめて物資の需要を減却し以て物價を下落せしめんとすること、一つには物價調節の責任者たる政府に自から進んで範を垂れ眞劍に國民消費の節約を奬勵せしめんとすることに在る。

國民消費の自制は固より必要である。何れの時に於ても分度を守るは經國齊家の根柢である。特に消費の濫興が物價暴騰の大原因となつて玆に國民生活逼迫を將來したる今日に當つては國民各自の物欲節制が、やがて國民自立の途であり、又實に其の公の義務であらう。政府の措置に滿足すると否とは暫く別論として吾々國民は深く己れの責任を自覺しなければならない。吾輩は衷心よりこれを六千萬の同胞に至囑する。

勤儉貯蓄の氣風を作興することも消費の自制と共に國民の大いに努めなければならない所である。是等の事項に付ては在

軍人會青年會等の活動に期待する所が少くない。

郵便貯金利子の引上、小額の公債債券等の發行、簡易生命保險金額最高限度の引上の如き手段を以て民間の消費資金を吸收することは由つて物資の需要を減殺して物價を低落せしむる方法であつて洵に穩當で有効なことである、若し數年前よりこれを實行したならば物價調節上多大の効績を擧げたことと思ふがこれも今は無益の繰り言たるに過ぎない。

此の數項の中で簡易生命保險最高金額は最近に増加せられたから今は問題がない。

郵便貯金利子の引上は金融の逼迫しつつある今日では民間の金融業に及ぼす影響が甚しく、爲めに却て財界の整理を妨ぐる虞があり、又引上が貯金額に與ふる結果を考へても現に貯金引出を餘議なくせられつつある預金者が少々の利上の爲めにこれを思ひ止まり得る立場に在るとも思へない、まして此上に貯金額が増加すべしとは猶更に考へられない。旁郵便貯金の利上は一般の形勢に順應する場合は別として、消費資金吸收の目的を以て此際實施することは不適當のやうに思はるる。

小額債券類(公債を含む)の發行は今日でも實行して欲しい。一般國民が郵便貯金に手を附くるやうになつた時であるから、今ではこれにも多大の希望を繋ぐことは無理であるが、例へば郵便貯金を債券化するだけでも消費資金吸收の目的を確實に達するものであるから、物價調節上相當の効果ありと信ずる。

官公吏の貯金勸要は吾輩の屢々唱へた所である、これは今日でも相當の影響を物價に及ぼすものと信ずる。同じく國民とは言へ官公吏は特別の規律に服するものであるから、彼等には政府の欲する所が善く行はれて、貯金の如きも形式は任意でも事實は强制に類似した成績を擧ぐることが甚しく困難でない。現代の官公吏の數は可なり多く而して其階級は日常の生計物資を比較的多量に需要するものであるから、彼等の消費資金の減少が物價調節に多大の影響あることは何人にも異論はあるまい。玆に特に注意すべき一事は曾ては物價騰貴の爲めに最も苦惱を嘗めた彼等は一面には其後俸給を増加せられ一面には近來少額ながら物價も下落した爲めに國民の他の部分に比べると今日彼等は家政上比較的餘裕のある位地に居る。此境遇に立てる彼等に貯金を勸めることは割合に困難でなく、又此境遇の彼等に今後全俸給を傾けて物資を需要せらるることは物價調節の障礙となることも輕微ではない。須らく官公吏の貯金を一齊に奬勵する爲めに速に内訓でも出すべきである。

小額紙幣の廢止説は小紙幣が汚損の甚しい爲めに所有者に嫌惡せられ從て濫費せらるるから不必要に物資の需要を増加する

との論據の上に立てられた物價調節策である。一應の理屈もあり且は本來その發行が一時の機宜であつたことの事實に顧みても、これは速に廢止すべきであらう。幸に政府は本年から廢止に着手したので、此の上は成るべく早く全廢の實を舉げんことを希望する。

物價調節策の半面は物資の供給增加に在らねばならぬ、而して供給增加は普通ならば生產增加を第一に推すべき筈であるいに、大正七八年以來吾輩の見聞した所では之に付ての意見は格別發表せられなかつたやうである。吾輩にも亦所見が無い。蓋し生產增加の可否は各個の物品に付て定まるべきもので、彼の消費節減の如く一般的に策を立て得ない性質のものであることが、之に關する意見の出ない一の理由であらう。特に生產の增減は事業家の損益を基礎とすべきもので損失をも顧みずして生產增加に努めしむるには國庫補助でも與へねばならず、國庫補助迄もして生產を進めしめねばならぬ程に我國今日の物資は缺乏してはゐないのである。

前揭諸說の中に物資供給增加の途として操業短縮の緩和又は撤廢の一項がある。物品次第で時と場合に依つてはこれも必要ではあらうが、一般的の事項でないから玆には深く言及せぬ。

物資の供給增加を阻止するが如き不自然なる保護政策は何れの時に於ても用ふべきものでないが、財界は不況の極に達し國民生活は最後の脅迫を蒙れる現時に在つては最も排斥せなければならないことである。

今日の情態では資金調達に行詰つた事業家の政府や日本銀行に泣附くものが多いであらう、叉外國品の競爭に膽を寒やして居る工業家は關稅引上を要請するものもあらう。此際政府の取るべき態度は最も嚴正で特に國民生活を考慮の第一に置いたものでなければならない。事業界の情況も物價の程度も今日は全く不自然であるからである。

行詰つた事業家に回復の見込が確實ならば一時手を貸して窮境を脫せしむるのも政府の責務である。乍併到底見込のない者に對して漫然一時的の景氣附をして遣ることは益々財界を混亂せしむるものである。英米の財界が逸早く安定したに拘はらず我國は腐爛の極に達して猶ほ先きの見据の付き兼ねるのは、右の點に於ける政府の措置があまり適當でなかつたことも一の原因である。此上に過を再三せられては國家は災難である。

保護關稅の政策は固より一概に反對すべきものではないが、今日の如く物價が不自然なる高位に在る場合に於ては原則としては取るべき途でないと思ふ。

凡そ物資は有無相通じて玆に需要供給が調節せられ依て物價

が平準に歸するものなることは三尺の童子も知る所である。今日の我國は世界中最も騰貴せる物價が甚しく國民を壓迫してゐる時であるから外國の廉價の物資が著々輸入せられて物價を低落せしむることは、最も望ましきことである。然るに國内生產者の一時的困難に泣き落され、口を外國の不當廉賣などに藉りて濫りに關税を釣上げるが如きは生活に苦しめる國民を見殺にして私益に沒頭する少數者に阿諛するものである。但しこれは大體論であつて一々の物品に付ては國家的見地よりして保護の已むを得ざるものもないとは限らないから、吾輩は絕對に保護關税に反對するものではない、要は今日の場合に於ては物價を調節して國民生活を安定することが政治の第一義であるから、保護關税の如きは注意の上にも注意を加へて絕對必要のものでない限り新設增率すべきものではない、却て現行の關税中でも撤廢減率の出來るものがあるならばそれを斷行して貰ひたいのである。

生產費の節減は物價調節の上に大に必要ではあるが、これは事業家が個々別々に自から進んで鋭意經營してゐることであり而してその普遍的手段方法の如きは急に考も付かず、假令付いても効果を遠き將來に期すべきものであつて、今日の緊切した問題とは關係が薄い。會社の配當及重役賞與の節制の提議の如きも今は「至極結構」の一語を以て賛意を表するに止めて置くの外は無い。勞銀の整理も結局は實現しなければならないものではあるが、抑も勞銀なるものは人爲を以て左右すべきものでないのみならず、物價騰貴生活艱難の今の時に於ては主義としても提唱することは出來ない、畢竟此問題は經濟理法自然の成行に一任するの外はないと思ふ。

物資分配の費用を減少して物價を調節する手段として世に提議せられた所の公設市場の改善と消費組合購買組合の獎勵とは固より必要な善いことであり、幾分にても實行せらるればそれ丈物價を緩和するもので天下擧つて努力して貰ひたいのは勿論である。唯事態の急迫したる今日に於て斯かることに迅速の成功を望むことは出來ないと思ふ。

賣價協定の制限は今日大に必要である。同業組合は本來同業者の向上發展の爲めに設けられたものであるに拘からず、近來は賣價協定をする機關になつて居るやうである。同業組合の賣價協定は法規に觸るるのみでなく組合の性質上最も不當であるのに、近年それが盛に行はるることは甚だ不都合である。良貨廉賣が眞正の商業秘訣であつて玆に公正なる物價が出來、玆に善良なる商人が繁榮するのである。然るに法令の下に組織せられた同業組合が多數決で以て賣價を定めて組合員の自由競爭を

阻碍するとは驚き入たる次第である。近年物價就中小賣相場の容易に下落しない一の原因は實にこの不法不當の行爲に存するのである。政府が何故に思ひ切つてこれを制壓しないかが吾輩には不思議な程に分らない。これも吾輩は過ぎたるを咎めないが、今後此の場合政府の大に反省して非違を匡正せんことを切望する。

小賣商の不當利益の取締も主義としては贊成に吝かなる吾輩ではないが、商人は利に從つて進退するもので義俠心で賣買をするものでなく、利益の當不當を甄別する標準を定むることが難く、又之が取締の周到が事實上頗る困難で殆と不能に近ひ等の點からして、實行的政策としては容易にこれに左袒し兼ぬるものである。強いてそんな苦しいことをしないでも、賣價協定の如き惡風を撲滅して完全に自由競爭を爲さしめたならば良貨廉賣の店舗の名は響の聲に應ずるが如き勢で忽ち四方に傳播して暴利を貪る店先には直ちに雀羅を見るに至るものである。

鐵道運賃の引下論は吾輩には聊か了解が出來ない。國家事業であるとは言へ、鐵道の如きは營業眼を以て經營しなければならない、建設資金を公債に仰ぐを原則とするのは此道理からであらう。然らば無暗に運賃を引下くべきものではない。又貨物託送者の立場から見ても相當の運賃を拂ふのは當然である。特に又鐵道運賃の低下なるものは過去の事實の示す所では、由つて生産品の價格が上るでもなく、消費者の爲めに物價が下るでもなく、運賃低下額の全部又は大部分は中間に立つ商人の懐中を膨らすのみである。或は鐵道省が前年運賃を引上げたのが不都合であるから云々と論ずる人もあるが、一般に物價の騰貴した場合に一の營業たる鐵道のみが從前の低い運賃で滿足すべき義務は無いことと思ふ。但しこれも吾輩のは大體論であつて當時の運賃引上率の適否を言ふのではない。若し不當のことがあつたなら引下るが當然である。唯物價調節の目的を以て鐵道運賃の引下を主張する議論に首肯することが出來ないのである。

以上縷々說き來つた所を概括して玆に物價調節に關する卑見の要領を陳ぶることにする。吾輩は金利の引上、外國放資其他好景氣時代には極めて名案であつた物價調節策も形勢の大に變轉した今日に於ては最早施すに由なきことになつて、今やこの時局を救ふべき有效なる方法が甚だ手薄いことを痛嘆する、乍併目下の國民の生活難を緩和するの途は何としても第一に指を物價調節に屈せざるを得ない、從つて多少にても効果ありと認むべき手段は此際實行に著手するが宜しい、特に相應の効能ありと思はるるものは政府も國民も渾身の力を擧げてその實現に努力しなければならない。今この物價調節策の劈頭第一に擧ぐ

べきは政費の緊縮を目的とする行政財政の整理である、それよりも先づ以て確定せざるべからざることは財界整理と物價調節とに對する政府の誠意ある態度であらねばならぬ。これが萬策の基礎となる。この態度を定め倚自から進んで大に政費の節約を實行し、玆に始めて民衆に向つて勤倹貯蓄と消費節約とを奬勵すべきである、此の如くすれば奬勵の效果は必ず相當に現はれる、これと同時に吾輩は官公吏一般に毎月定額（例へば俸給の十分の一）の貯金を爲さしむることにして貰ひたいと思ふ、これは必ず成功する。次には小額債券類の發行を有利な條件で發行して欲しい、以前に豫期した程のことはないが、相當の成績は擧がるであらう。更に消極的方面に於ては同業組合を監視して苟くも賣價協定の奸策を爲さしめざることが最も必要であり、又不自然なる事業家救濟や漫然たる保護關税の新設増率等に指を染むべからざるは言ふ迄もない。此の外當面の目的に寄與する程度の多少は暫く別として公設市場消費組合購買組合等の奬勵改善は固より努むべきことで、且今日の如き場合に斯かる事柄は案外の效果を見るものである。

今の場合に於ける吾輩の物價調節策は貧弱ながら以上の外に出でない。此の上は大方識者の高説を待つのみである。

物價が高いと言ふが如何程になつたら宜しいのかと反問せらるることが折々ある。これに付て一言して見たい。

物價は國民の富力に相應しなければならぬ、我國の富力は成る程戰爭中に增加はしたが、到底今日の物價に堪へ得る程度のものではない。然らば如何なる位地が我國の物價に適當であるかと言はば、これは算盤で彈き出すことは出來ないが、大局より觀ると吾輩は戰前の三割增位のものであらう、迚も五割高以上で我國の物價が落付くことはないと信ずる。これは兩三年前からの卑見であつて今猶ほ之を改訂する必要を認めない。假りに數字を賴んでその空論でないことの證人になつて貰つて見ると、前に陳べた通りに物價の對戰前騰貴率が我國に於ては無法に高い、これは勿論大に低下しなければならない、而して世界第一の富裕國で又戰爭成金の隨一である所の米國に於てさへ今日の物價は戰前の三割增に下つて居る、富力に於て月と鼈より も違ふ我國の物價が米國同樣戰前の三割增に落付くべしとの卑見は必ずしも非望のものではあるまい。

物價引下以外に如何なる生活難對應策があるか。此れは最も困難な問題である。この答案には第一に失業者保護が揭げられねばならぬが、吾輩には迚も及第點を贏ち得る見込がない。

歐州大戰開始の時吾輩は產業行政當局の一人であつたから、景氣の一時に勃興した大正四五年の頃に同僚と謀つて未來の失

業問題に對する考察を立つることを企てたのであるが、何分問題が困難であるのと戰爭中は日々の雜務に維れ日も足らざる境遇に在つたとの爲めに、同僚も吾輩も何等の未定稿さへ案出するを得ないで年月を經過したのである。その後大正八年四月に農商務省調査として失業救濟施設なる項目の下に新聞紙上に現はれたものがある、これは企業者が失業勞働者に對する救濟手段として實施又は計劃せる事項を分類したものであつて、政府の計劃でも方針でもない、農商務省に今日果して何かの腹案でもあるか否かは未だ與り聞かざる所である。同年の十月に內務省の失業保護要綱なるものが同じく新聞紙上に發表せられた、その內容は詳細に親切に書いてはあるが、主要なる點は職業紹介所の新設擴張をすること、國及公共團體の諸事業の繰上や按配をして失業者に職を與ふること、失業者の移民を勸奬するとの三つに過ぎないやうである。誰が考へても應急の措置としては此の外にさしたる名案は出ないであらう。

大都會に於ける職業紹介所の成績は頗る良好のやうに見受らるる、この施設は此際大に擴張して盛に活動させて貰ひたい、これは全く失業者に取りて唯一の救の神である。國や府縣の事業を繰上げて勞働の需要を增加することは洵に望ましいことてはあるが、國でも府縣でも現時の財政狀態では實は言ふべくして行ふべからざることとであらう。今日の場合に移民の勸誘後援を爲すことは全般的效果の多少は別として蓋し一擧兩得の策であらう、南米の如きは最も有望なる移住地である。

此の外鰥寡孤獨衰老病癈の窮民に對する救濟施設の如きも此の場合一層考慮せねばなるまいが、問題が局部的であるから玆には陳ぶることを差控える。又萬一の時に臨んで行はざるべからざる應變の措置の如きにも今から周到に注意して置くべきこともあるが、それは其時の權變であるから豫め公けに論議すべきてはない。

之を要するに國民の生活難は眉を焦さんとしてゐる。その最大原因は直接にも間接にも物價の不當に高いことに在る。事をして玆に至らしめた責任の大半は固より政府當局に在るが、今は過去を糺彈しても當面の生活難を緩和するには何の役にも立たない。生活難は眼前現實である、日々倍加の勢を以て益々肉薄しつつある。兎も角も吾々はこれに對抗しなければならない。對抗の途は收入を增して支出を減ずるの外にあるべき道理が無い。收入を增すには國民一般に勤勉の氣風を作振することと失業者には新なる職業を與ふることとが必要である、乍去失業者保護策も實は是ならばと言ふ程の大效力のあるものも考へられない。支出を減ずるには國民の消費節約を奬むることと

物價を調節することとが必要である、物價調節の方法も今日となつては時機を失して效力を失つたものもあるが今猶ほ前に擧げた通りに數四の策のないでもない、朝野擧つて此事に當らなければならぬ。若し夫れ國民一般の勤勉と節約の氣風を鼓舞することは蓋し今日よりも急切な時はないと思ふ、ウカ〳〵と調子に乘せられて終にこの窮地に陷つた大多數の純朴なる同胞には氣の毒千萬の至りではあるが、今は氣の毒ながら沈著の態度を以て困苦缺乏に堪へつつ將來の樂天地を目標に一意勤勉努力して貰ふの外は無い。但し飜て考ふれば或は天が故らに此苦艱を下して大和民族の實力を試驗するのかも知れぬ、古人の語に天の將に大任を斯の人に下さんとするや必ず先づ其の心志を苦しむとある、今日の悲境に失望するが如きものは我が同胞には一人も無いと信ずる。

終りに一言附加へたいことがある。國民の生活難に伴ふて更に一の大いに恐れて憂ふべきは、虎視耽々として常に社會の罅隙を窺つてゐる危險思想の跋扈である。言ふも疎かではあるが內務當局が豫め十分の考慮を運らして臨機の措置に萬一の遺算なきやうに切望して已まない。これが爲めに第一に必要なことは當局が新思想を十分了解することである、過激社會運動取締法案の如きサーベル一本式の無理解な思想取締は却て危險を釀成激發するものであると思ふ。これが當局の再思三考を要する最も重要な點である。(大正十一年五月十六日稿)

現下の國民生活難と物價引下策

諸井四郎

一

我經濟界が、戰爭以來偶然の富を齎したる爲め、國民生活に著しき影響を與へて異常なる購買力の旺盛となり、之が爲め物價は昂騰して却て一般生活を脅威すること甚しい、然も九年三月財界の大反動以來世界的の不景氣は、廣く且深く近き將來に於

て到底回復の見込がない。由來不景氣は物價下落を始めとして、金融緊縮金利低落といふ諸現象が並び行はれて、始めて回復の道程を進めるのであるが、獨り我國は不景氣は愈濃厚を加ふるに、物價は低落の歩調を逸りつゝ尙世界の首位を占め、騰貴率も英國は一割五分、米國は四割六分なるに對し、本邦は實に十七割六分を示して居る、殊に五月上旬株式市場再度の暴落は再び恐慌の姿となり、金融は梗塞して金利は昂騰し、貿易の逆調益々著しく四月末までの輸入超過三億三千萬圓の多きに上り、尙益々逆調を繼續せんとする狀況に在る。然るに英米の財政經濟狀態は頗る順調に進んで、物價勞銀共に等しく低落して、對外貿易も英國は其總額に於て激減し昨年中の入超三億八千三百萬磅であるが、其内容も頓に改善せられ、米國の如き既に輸出超過額十九億七千萬弗に上り金融は緩漫にして各地準備銀行は客年七月以來三回の利下を行ひ、英國も昨年來已に五回の利下を行つた、如斯我財界は全く變調を來して立遲れの姿になつた、不景氣の特色は先づ中層階級に影響するといはれて居るが、今や次第に下層社會に浸潤せんとしつゝある。不景氣と物價とは反對の方向を逸り、國民生活は益々困難なる狀態に陷つた。然も政府は眞面目に之を調節するの策を施してない、國民も亦徹底的に自救の途を講じない、現内閣の存續する限りは到底物價の下落は覺束ないかと思はしむるので、政府は不景氣の襲來を以て國民性の持久心執着心に乏しく何事も政府に依賴するからであるといひ、日銀總裁亦財界整理の未濟と國民購買力の旺盛とに歸し、消費の節約を宣傳して何れも痛切に國民の弱點を指摘して居る。民間は頻に政府の放漫なる財政の膨脹を呼號して財政の緊縮行政の整理を徹底的に行はざるに依ると稱し、相互に責任を轉嫁して其日暮しの樣に思はれる。然るに米國の如きは千九百二十年の官民聯合委員會に於て、生産費原料品勞銀の引下能率の增進を期して、政府先づ財政を緊縮し資本家も其利子を制限して六七分となし、殊に産業を區別して生活必需品を援助し奢侈品を制限して、正貨政策の如きも輸出を防止するよりも如何に有利に輸出すべきやを研究して居る。英國も亦政府の任命したる有力なる主宰者自から局に當つて、戰時財政を平時財政に立て直し現實に之を勵行した。我國に於ては財敗經濟調査會を設け有數なる學者及實業家を網羅して之が研究を怠らないが、何等財界の回復に貢獻したるものがない。畢竟財界險惡となり物價の低落せざるは、政府國民共に其責任を負擔すべきであるが、何をしても最大消費者たる政府は先以て財政整理を徹底的に表明して、人心の向ふ所を示さなかつたのは誤りである、近頃漸く整理委員を任命したる如きは遲れたりと

雖も覺醒したりといはねばならぬ。國民も亦政府にのみ依賴せず國民自身の間に日常生活の改善に着手しなければならない、固より文化の促進と共に生活も向上して物價騰貴は到底免がれないが、國民自身が在來の生活方針を改めざる限り如何にしても此生活難から免かれて安定に入ることは出來ないと思ふ。

二

過去七年間國民一般に巨利を博するに慣れ、所謂成金氣分が放慢浪費の惡風を生じたる結果は、上下を擧げて緊縮の精神を缺き浮華輕佻の心となり質實勤儉の美風を失ひたるは事實である。個人は先づ其面目を一新することを斷行せねばならぬ。或程度まで自己を改造しなければ社會的生活に向つて進展して不安なる狀態から脫却することが出來ない、即ち無用の冗費を省き虛禮を廢し以て私的經濟の獨立を圖ることを必要とする。我國民は概して私的經濟の念に乏しく身分不相應の生活を營むは一般の通弊である、例へば富者の服裝も中層以下の階級の夫れも殆んど同一で區別することを得ない。本來日本人は歐米國民に比すると財產の割合に贅澤である、生活の困難なるは物價の昂騰にも依るが一には身分の如何を忘れ情實の爲め無用の濫費を爲すからである。先づ在來の習慣又は態度から脫却して、情實と虛禮の廢止を實行するの勇氣を必要とする、時勢の進步と經濟的自覺とは何時までも在來の生活の永續を許さない。健全なる國民の最大要件は僞りなき生活により、無垢なる精神を以て私的經濟に集注するに在る、愼むべきは虛榮の生活である。奢侈の生活である。虛榮奢侈共に一身を亡ぼし一家を破り延いて社會を毒し遂に國家を亡ぼすに至る。今日の綱紀頹廢官紀の紊亂も實は之より胚胎するのである、刻下の急務は物質的にも精神的にも節約の宣傳が第一義である、駐在英國大使館付の商務官一昨年來の年報を發表せしが、日本人は戰時巨利を博したる爲め國を擧げて奢侈浪費の風に流れ、衣類の贅澤なるを始め食糧品としても、洋酒五倍に上り寶石類は一年六百萬圓に增加し贅澤品の增加は勞働階級にまで及んだとある。然るに米國の如き國務卿は內閣組織の當初に於て官民協力贅澤品に對しては、一オンスたりとも節約せねばならぬと警告し、當時教育委員は一九一九年の奢侈品に要したる數字を發表して、實に二百三十億圓の巨額を示した、是が內譯を見るに白粉香水三・三、味付飲料水一・五、石鹼一・八、煙草九・二、寶石二・二、食事其他の娛樂贅澤費二三・六である、畢竟贅澤は國家を亡ぼすものであるといふことを警告したのである。爾來國民の覺醒により一般物價低落步調を辿つたが生活費は六割に下り之が爲め十年末は前年に

比し衣類は四割五分金物二割九分家賃二分方低落したといふことである。

三

今日各種の同業組合なるものが一種のトラストを以て、同業の利益を擁護して共同の利益を沒却して、余りに私利に走つて暴利を貪るといふことは事實であるが、見方によつては彼等の利己主により公益を無視するものとのみいへない。實は現代生活が暴利を得るべく餘儀なくするのである。之を仔細に研究するなれば彼等が暴利を貪るといふも。現代資本主義制度が合理的に、出來得る限り利益を收めて生産し販賣する事を得るのである。隨て現代の經濟組織に於ては成るべく多くの利潤を得ることは正當である。道徳的には或は云爲する事は出來ても、經濟的見地から決して不正な利益である、暴利であるとはいはれないのである。假令法律上彼等の暴利を取締ることが出來ても現代生活の缺點を補はない限りは、到底其效果を擧げることは覺束ないのである。舊時代に於て小賣商人の身分も生活の標準も殆んど一定したる場合に在つては、顧客との因襲的個人的關係も親密であつたから自然的に道徳的關係もあつた。然し思想の變化と文化の促進とは、小賣商人の在來の思想を維持することは出來ないのである。實際小賣商人も小資本を運轉し小量の貨物を取扱ひ、然も勞銀も昂騰し店舗の費用も增大したる今日の現狀に於ては自然暴利と稱せらるゝ程利益を擧げざれば收支が償はない。故に法律を以て之を取締るとするも、品質を粗惡にして數量を欺瞞するに於ては結果に於て效果がないのである。畢竟消費者は法律の施設に依頼するよりも寧ろ自己の努力と注意により良品にして廉價なるものを研究するの外途はないのである。茲に於て消費組合購買組合又は公設市場の必要を感ずる。勿論政府の安價なる商品を市場へ提供する方法として、配給制度の改善若しくは公設市場の施設につき計畫することも必要であるが差向き消費組合が適當である、然るに消費組合を組織して見ると社會の人々が如何に團結力が乏く社會的意識を持つてゐないかを感ずるか、若し徹底的に團結するなれば尤も有益なるものである、いふまでもなく組合といふものは組合員が多いほど消費物を安く得らるゝ。遂には生産機關すら持つことが出來るのである。尤も平穩に社會の經濟組織に反對し資本家の蹂躙することもない、此組合の單位は社會の最も純潔な個々の家庭を基礎とする故に、組合は各家庭の組合である。組合は營利會社でも商店でもない。隨て組合は賣買の場所でなく共同生産所共同倉庫である。消費組合を活用すると利益は共同となる、

商人は營利を目的とするが組合は營利を廢除するから利益もかはらない。物品の價格は實質的に低下する。又仕入も過剩せず生産も必要に止め自然相場の變動することが少ない。殊に生活必需品を主として贅澤品を制限することが出來るから、經濟上にも敎育上にも效果がある。實際上適當なる經營者を得て組合員が團結するなれば頗る有用なるものである。

四

國民生活上の組織的研究と科學的理想とを基礎とし、之を實際に應用し改良するの決心を要する。生活の改善は軈がて消費の節約と空費を防ぎ、間接に物價引下の因となるは勿論であると思ふ。本來個人は如何なる程度の生活に滿足すべきや、之は隨分永い間學者にも論ぜられて居るが、社會の各階級により其標準も異なる、然し一般に最高と最低との中間に在つて、社會の大部分を占むる所謂中層階級を標準として之を定むるといふことは一致して居る、然らば中層階級とは如何なる生活程度のものなるか之を決定することも困難であるが、少なくも多少の敎育を受け多少の責任ある地位に在つて其生活狀態も、勞働者より立ち勝つて居るといふことを條件とする、辛うじて人間生活を充實する貧民所謂露命を繋ぐといふ生活の絕對的必要條件以外に、身分に相應して奢侈に流れざる程度に於て享樂も出來るといふ生活を營むことが必要である。實際上適當なる快樂は元氣を昂進して人間の能率を增進することゝなり却て必要である。之も文明進步の程度やら時代やら場所等により殊に物價の昂低に依り其所得も變化するが、然し何程の收入あれば標準生活が出來るかを知るには家計統計の實施が必要である、之に依り一定の標準を見出し豫算の編制を爲すといふことは頗る必要である。之は日常尤も困難なる事業であり其成案必ずしも絕對的適當なりとはいへないが、一家經濟の管理者に對し收支を按排せしめ支出を增加することなく收入に餘裕を生じ適當なる消費方法を敎ゆることゝなる。生活の安定といふことも要するに收支の均衡を得るに外ならない。次に擧ぐべきは日常生活の便益の爲め新らしい生活樣式の建設に努力すべきである。衣食住の樣式に科學的知識を應用し、家人の勞働時間を節約し能率の增進を圖ることである。工場に於て勞働能率の增進により生産額が增加すると同じく、一家に於ても家人の能率が增進すれば之に伴ふて巧く時間を利用し同じ金額にて、より以上の能率を擧げることゝなる。家族の人數を節約することが出來る。我國の家婢の數は實に七十萬人といはれて居るが、米國の如きは家婢を置くのは余程高等な家庭であるといふことである、殊に科學

の理想を基礎とし之を實際に應用し改良するの決心を必要とするのである。之を實行する過程が即ち科學的態度である。即ち衣食住を科學の力に依つて生產し科學的に生活する事である、科學者は研究室に物資と勢力との理法を研究するが、我々は社會及家庭に在りて、科學的態度を以て、生活の一舉手一投足を經濟的に行ふのが科學的態度である。兎に角我國民は理論的に生きて居るが實際的に生きてゐない。殊に家庭主婦の如きは感情的であるが經濟的でない、家庭生活を改造するの自覺はあるが之を實行するの經濟的思想に缺けて居る。在來の習慣から脫して自から勞作するといふ、家庭の趣味を涵養し勤勞の神聖を自覺する必要がある。現下の社會問題も物價問題を基因とする。之を確實に穩健なる解決に導くは、時間と消費の節約になる。其根柢は家庭生活の改造にある。

五

上來述べたる處は朝野を舉げて既に論ぜられた處であるが、要するに國家の財政より個人の台處まで大いに緊縮して物價の低落を期するより外にない、然も物價の騰貴も決して永遠的のものに非ず遂に世界的に步調を一にするものとせば、政府は速かに財政行政及税制の整理を爲すべきである。行政に就ては其組織に根本的整理をなし重複せるもの又は無用なるものは之を廢し連絡統一を圖り、財政に付いては不急事業の中止繰延を行ひ、國民負擔の均衡を圖る爲めには税制の整理も斷行せなければならない。以て國家經濟を緊縮する爲め一大斧鉞を加へねばならない、國民も亦文化の理想に憧れて徒らに其生活難に煩悶して自己の努力を顧みず自己以外に責任を轉化するを避け、先づ以て生活の改善をなすことを要する、斯くして官民呼應し公私の經濟を緊縮するなれば物價の引下げ得て期すべきである。只然しながら我國民は徹底的に之を仕遂げるといふ鞏固なる意思に乏しい。歐米人が沈着にして彈力性に富み難境に處して冷靜な態度を以て、戰後の經營其緒に就きしは大いに我範となすべきである。私は財界の整理は今や論議の時代にあらず實行の問題であると思ふ。

物價昂騰の勢を促進して國民生活難を顧慮せぬ高橋内閣の責任

法學博士　堀江歸一

國民生活難の二方面

國民生活の困難は種々の事情に關聯して起るものであつて、其原因は之を一に歸せしめるを得ない。國の產業が遽に衰頹し、社會を擧げて、不景氣の狀態に陷らした場合の如き、確に國民生活に甚だしき壓迫を加へるであらう。又國富は增進し、產業は發展して居つても、斯く產出された富が社會各階級に向つて、公平に分配されず、或る階級に於ては、物價が騰貴し、生活費が膨脹するに拘はらず、所得の增加が之に及ばない場合の如きも、亦生活難の起ることを免かれないであらう。但し兩者の場合共に國民生活に壓迫の及ぶに至るとしても、後者の場合に於ては、政府の施設に依つて、或る程度まで生活難に對して、緩和の道を設けることを難しとしないが、前者の場合に於ては、斯る緩和は甚だ困難であつて、事實不景氣の下に生ずる各種の影響を國民生活難の形態で、社會の諸階級に及ぼすことを避け得られないであらう。

我國に於ける國民生活の困難は既往數年間を通じて、打續く一個の經濟的現象であつて、今日に於ては、其病根の存する所甚だ深いと共に、其影響の及ぶものも亦頗る强いと思はれる。而して其狀況も私の茲に揭げた第二の場合から、第一の場合に推移したのであつて、恢復策も容易なりとするを得ない。固より生活難は昨今に至つて、其端を發したものではない。歐洲戰爭中、我國の商工諸業が大に繁昌して、所謂好景氣の狀態に居つた時から、一部の國民は生活に其れ々々或る困難を感ぜざるを得なかつた。蓋し好景氣の時代に於ては、諸物價の騰貴する一方に、商工業が繁昌し、斯くて國民所得の增加するを以つて、自然の約束とする。隨つて國民が其增加した所得に就て、各自分配額を收める一方に、物價の騰貴が所得增加と併行して居つ

たならば、商工業者は必ず有利なる地位に立つのである。而して此の種の利益を受けるのは、啻に商工業の經營を擔當する者のみに止まらず、商工業に資本を放下して、利子配當金を得る者や、斯業に從事して、俸給を得る俸給衣食者や、賃金を收める勞働者にも及ぶのである。然しながら好景氣時代、に物價の騰貴する勢は急速であり、的確であり、又著大であるに對して、賃銀や、給料の增進する勢は緩漫であり、不確實であり、又微弱であることを免かれない、随つて好景氣の下に生ずる經濟上の利益は多く資本家や事業經營者に依つて、利益金や賞與金の形態で領有される傾向のあることを免かれないが、其れにしても、商工業に從事する俸給衣食者や、勞働者も早晩或る程度まで、利益の領與を受ける地位に就くであらうし、又既に商工業に從事する是等の人々にして利益を受ける以上は、他の非營利的事業に從事する人々も彼等に對する均衡上、相當の利益を與へられるに至るのである。

我國の實例

現に我國に於て歐洲戰時經濟社會の好景氣であつた際には、固より社會諸階級間に於ける富の分配の不公平であつたことは論を俟たないが、總ての階級が多少共に富の增殖に就て、其れ々々分配に與つた事實は之を否定するを得ない。斯くて物價は騰貴した、國民の生活費は增高したとしても、之に對抗する勢力の働いたことの結果として、是等の現象に基く國民の生活難は或る程度まで緩和され、全く之を關知しない階級の多くさへ存在したのである。斯くて經濟上に於ける思想の淺劣である輩の如きは、好景氣を以つて、經濟上に萬能の効果あるものと考へる、更に一歩を進めては、如何なる努力を敢てしても、一旦發生した好景氣の勢を未來永劫に亙つて、存續せしめようとし、又斯く爲し得られると信ずるのである。斯る思想の如何に誤謬に滿ちたものであるかは、多少なりとも經濟學の專門的知識を備へた者であれば、之を理解するに難しとしない譯であるが、我國に於て偶々好景氣の續いた期間を通じて、政治の局面に當つた政友會內閣の閣員殊に原敬とか、高橋是淸とか云ふような人々は極端なる好景氣萬能論者であつて、百方策を盡して、好景氣風を煽揚して、甚だしき投機熱を招致し、其間に何等の抑損を加へなかつた結果、好景氣や、投機熱の甚だしかつたゞけ、其反動として起つた恐慌の慘害を極端なる程度に至らせ、遂に大正九年春から、今日に至つて尙消散しない不景氣の狀態を我國に現出することゝ爲つたのである。

不景氣時代に於ける國民生活

不景氣の狀態の下に於て、國民生活は如何なる影響を蒙るであらうか。不景氣時代に社會に生ずる經濟的現象の重なるものは

第一、事業の衰微、之に續く縮小
第二、俸給衣食者並に勞働者の解傭
第三、物價の下落

等でなければならぬ。隨つて斯る現象に依つて、經濟社會の支配されて行く場合には、國民生活上に於て、有利なる影響を蒙るものと、不利なる影響を蒙るものと、相並立する譯であり、而して前者が勉めて不利の影響に堪へつゝ、之を回避する一方に、後者は有利なる影響を善用して、景氣恢復の端緒を開くのであつて、是れが不景氣の永く繼續することを許されざる根本の道理と爲るのである。即ち不景氣時代に物價下落と云ふ現象の生ずることは、一面から考へれば、不景氣の上塗を爲し、其勢を甚だしからしめるようにも考へられるが、物價が一般に下落すればこそ、不景氣の國民生活を壓迫する勢は或る程度まで緩和されるであらうし、事業家も亦物價の下落に乘じて、生産費を縮小し、將來に於ける事業發展の素地を作ることと爲る。誠に不景氣時代を轉回して、好景氣の時代に向はしめるには、物價下落を以つて、第一の政策としなければならぬ道理である。

然らば是等の見地から、觀察して、我國の經濟社會は今日如何なる潮流に向つて、動きつゝあるであらうか。事業の衰微、之に伴ふ事業の縮小は今や社會の到る所に及んで居る。個人の事業に就ては、未だ確たる統計の徵す可きものがないから、姑く之を措くとしても、會社事業に於ては、今日相當に利益金を舉げて、立派に株主に向つて、利益配當を續け得るものは、果して幾何を數へるであらうか、又今日東京にしろ、大阪にしろ、株式取引所に於て定期賣買に付せられる株式中、市價の額面以上に上つて居るものは果して幾種を數へるであらうかと云へば、其に其少なきことは、吾人の寧ろ喫驚する所である。固より會社の內には、無配當なり、損失金繰越なりの醜狀を暴露するものゝあると共に、一割とか、八分とか、或は五分とか云ふような配當金を株主に與へるものもある、然も是等の配當金たる、會社の營業が順調に居つて、眞實健全に生み出された利益金を財源に充てたものであるかと云へば、決してさうではなく、配當準備積立金を蠶食したものもあれば、土地其他の財産に對する評價を過大にしたものもあり、其內情は餘程窮迫して居るものと見ら

れる。昨今諸株式の市價が著しく低落し、拂込以下に落込んだもの丶少なくない原因は何れにあるであらうか。金融の一般に緊縮しつゝあることの如き、固より其一原因であるが、同時に諸會社の營業不振、利益の減少を以つて、其重なるものとしなけばならぬ。隨つて今日諸會社の期する所は極端なる經費の節約である。元來法人の會計に於て、經費の部門を爲すものは物件費と人事費との二種であつて、經費を節約し、生産費を減縮するには、是等費用の双方に斧鉞を加へることを以つて、捷徑とす可き道理である。然るに我國の現狀に於ては、物價は不景氣時代に入つて、少しも下落せず、小賣相場の如き、却つて騰貴しつゝある狀態であるから、會社が經費を節約する場合に、物件費に於て、之を爲すのは、事實に於て困難であり、又殆ど不可能であるとも認められる。茲に於てか會社の行う經費の節約は人事費に削減を施す形態に於て現はれざるを得ないのであつて、斯くて不景氣以來諸會社を通じて、俸給衣食者や、勞働者の解雇されることの頗る頻繁と爲つた次第である。而して今や海軍縮小の結果、海軍々人中にも多數の失職者の輩出することを免かれない勢であつて、失職の原因は異なるとしても、其生活上に壓迫を蒙る點に於ては、即ち一である。

生活難の責任者は誰れか

斯の如く公私の職業を通じて、多數の失業者があり、幸に職に留まつて居る者であつても、民間に於ては、事業不振の結果として、賞與金の形態に於ける所得は餘程減少したものと見なければならぬ。若しも一方に不景氣の爲めに、一般物價が下落して居れば、是等の人々の生活上に蒙る困難は餘程緩和されるであらう、少なくとも物價の下落が其ドン底とする所に達して、景氣の遠からず恢復する見込みが定まれば、假令ひ今日不景氣の下に、苦しめられて居つても、前途を待望して、自ら慰めるを得るであらうが、我國今日の事情は決して斯くの如くではない。即ち不景氣の慘狀は日に月に甚だしきを極めながら、物價は政府の經濟政策に大なる間違の存する爲めに、少しも低落しないのである。國民生活の立場から云へば、所得が減少して、一方に生活費が依然膨脹して已まず、國民は上下双方から壓迫を受ける趣を免かれないのであつて、是れは我國今日の不景氣に伴う一個の特徴であると云へるかも知れないが、同時に故態の特徴であることを否定するを得ない。

過日來高橋內閣には改造派對非改造派の紛爭があつて、我國內閣の歷史あつて以來、未曾有の醜態を外に暴露したが、新聞

紙の傳へる所に據ると、高橋首相が中橋文相に向つて、辭表の提出を求めた際、中橋氏は高橋氏に答へて、現内閣に對して、民心が今日の如く離反し去るに至つた大原因は經濟政策上の過誤に基くものであるから、人心一新の爲めに、内閣にして改造され可きものである以上は、當面の責任者たる高橋子自ら先づ辭職す可きを至當とすると言明し、首相に痛棒を喫せしめたと云ふことである。中橋氏は文部大臣に就任して以來、世評甚だ面白くなく、殊に學校昇格問題に蹉跌して、殆ど其政治的生命を絶たれようとし、甚だ影が薄いようであるが、右に掲げた高橋首相に對する駁論に至つては、誠に堂々たる言辭として、認む可きものであつて、如何に中橋嫌ひの人々と雖も、人に依つて、言を廢す可からざるの感を懐くであらう。原内閣と云はず又高橋内閣と云はず、三四年來連續して居る政友會内閣には内治外交の兩方面に於て、幾多の失政の存することは、今更喋々するまでもないが、其經濟上の方面に於ける失政は何であるかと云へば、詰り好景氣を人爲的手段で煽揚したり、物價を暴騰させたり、恐慌を誘致したり、恐慌後不景氣の時代が到來しても、物價の低落する勢を沮止したりする諸點を數へざるを得ない。而して是等の秕政は何人の發案に依つて行はれたかは、今更ら特に詮議立てをするまでもなく、其人は本來經濟上の知識の皆無である上に、多くの邪說僻見を盲信する高橋是淸子に外ならない。固より黨勢の擴張、政友會の膨脹を能事とする原敬氏が斯る高橋子の盲滅法の經濟政策の偶々自己の理想――寧ろ我慾を充す手段と爲るの故を以つて、取つて之を實際に施さしめたことにも、負ふ可き責任の重いのは勿論であるが、高橋子こそ我國經濟社會をして今日の如き混沌たる狀態に陷らしめた點に於て將た又國民生活に甚だしき壓迫を加へつゝある點に於て、第一の責任者であるとしなければならぬ。中橋氏が高橋首相の經濟政策の不可なることを認めながら、同じ内閣に居つて、共非を遂げしめたことにも、責任はあるが、是れは同氏の如き大臣病の患者には已むを得ないことゝしよう、兎に角氏が經濟政策上の失敗を擧げて、高橋子に肉薄した一事は今度の内閣内紛事件を通じて、私の最も興味深く感じた所である。

今後の政策如何

高橋内閣が愚にも付かぬ改造騷ぎを演出したのは、新政策の樹立に便しようとする目的に出たものと傳へられる。改造の失敗した今日に於ては、新政策も亦中絶せざるを得ざるものであるか、私共の迷う所であるが、假に高橋内閣が政策を一新するものとして、如何なる方面に改新を施す可きであらうか。行政

財政並に稅制に整理を加へると云ふことも、一個の問題と爲つて居るが、私は矢張り物價問題の解決から進んで、國民生活の安泰を謀ることを以つて、當面の急務と考へる。而して此點に於て吾人は如何なる政策の施行を急要とするかと云へば、

第一、經費の節約、財政の緊縮

第二、金輸出禁止の解除

第三、外國物資の輸入に對し、何等の妨碍を加へざること

第四、商業組織殊に卸賣業者と小賣業者との關係に於ける改善

を以つて之に充てたいと思ふ。然も是等の諸策を實行するに就て、政府に幾何の誠意の認められるものがあるであらうか。今日の財政に於て國家が物資に對する最大の購買者であり、勤勞に對する最大の需要者である以上は、經費の節約は自ら物價の下落を惹起す捷徑である。我國に於て物價問題の紛糾しつゝある今日海軍縮小の行はれて、海軍經費に莫大の緊縮を加へる餘地を生ずるに至つたのは、天與の惠みとも稱す可く、取つて以つて物價問題の解決に資す可き筈であるが、海軍部内に於ては、斯くて生ずる餘裕は成る可く海軍部内の事業に供用しようとする勢があり、今日の如き微力無援の內閣であつては、果して此勢を抑制し得られるかどうか、一個の問題であり、殊に始めは臨時議會に於て、一切の解決を爲すものと豫期されて居つた事が今日では通常議會の開期を待たなければならぬことゝ爲つた。是れは條約批準との關係上、已むを得ざる所と云へば、其れまでの話であるが、政府の決心次第では、今少し海軍縮小を經濟政策上に利用することも出來たであらうと考へて、私共は政府の所爲に不滿の念を懷くものである。

若し夫れ今日に至つて政府が尙ほ金の輸出禁止を解除するが如きは、甚だ陳腐の問題であつて、物價調節の見地から云つて當然爲す可き所に屬する。然も政府は此點に於て依然たる曖昧の態度を持し、爲替相場に干渉を加へたり、輸入稅の重課に依つて、輸入貿易を沮害しようとしたり、種々の干渉を試みて已まない。然し今日國內に於ける物資の供給を豐富ならしめる一事を閑却して、物價調節の期せられることを考へるが如きは、大なる間違である。成る程我國の貿易に於て、近年輸入超過の勢が現はれ、然も其勢の次第に強きを加へつゝあることは、經濟社會に取つて一個の脅威たるを失はない。經濟上に極めて固陋偏狹の思想を有する政府の當局者が往昔の「マーカンチリスト」と同樣の手段方法を以つて、此大勢に當らうとすることも、彼等としては、必然の歸着點であるかも知れないが、貿易の逆勢今日の如きに至つた所以は、要するに內國に於て物價の餘り

に騰貴したことの結果、輸出が減少し、一方に輸入の方は機會だにあれば內外物價の差違に促されて、我國に入り込まうとして已まない一事に存するのであつて、此大勢の赴く所を理解したならば、物價問題の解決の如き、必ずしも困難とす可きものではない。

商業組織の改善に就ては、既に曩日、本誌上に於て論述したから、玆には之を省く。

之を要するに物價問題に對して、解決の途が得られないと云ふのは、從來殊更に之を紛更錯綜させ、更に全體に於て物價騰貴の勢を助長することを以つて、策の宜しきを得たりとした政友會內閣の一私言たるに過ぎない。高橋と云ふ人は其風貌の怪異であるが如く、其爲す所も亦甚だしく常識を逸して居る。內閣改造を聲明しながら、改造困難と見るや、半途に其中止を宣言し、內心は兎に角、表面何事もなかつた如き態度を裝う其厚顏、其無恥に至つては、天下に何人の追隨を許さざる所であるかも知れない。斯る人物であれば、自家の從來信奉した經濟政策を一新するが如きは、何でもない事である可き筈であるが、內閣改造問題の如き國民の實利害に沒交渉の事には豹變を敢てしながら、國民生活に關係の密接なる經濟政策上の問題に對しては、飽くまでも當初の誤謬に膠着して　之を蟬脫するを得ない。是れが人間の賢愚肖不肖の岐れる所であると云へよう。高橋子の人物論は兎に角として、私は高橋內閣が存續し、政友會の傳統的政策の行はれる以上は、經濟政策の更新に依つて、國民生活に對する壓迫の除却されるが如きは、何としても之を望むを得ないと斷言するに憚らない。殊に其高橋內閣なるものが內部に龜裂を生じ、辛うじて餘命こそ保つて居るとしても、其以上に活潑なる行動の期待されない以上は、斯る內閣に向つては、一日も早く壞崩して、道を後賢に讓ることを待つ外に、何等言ふ可き所あるを見ないのである。

生活費より觀たる物價問題

男爵　伊藤文吉

一

物價騰落の狀況特に生活費の變遷に付て數字的に考察して見たい。

物價問題を論議するに當り、その騰落の趨勢に付て正確なる智識を有つことの必要なるは云ふ迄もないことであるが、只日本の物價が二倍になつたとか、米國の物價が五割下つたとか云つても、物價の大體論を試むるなら兎も角、これでは大切な國民生活費の變遷を見る上に不十分である。物價が果して如何なる步調で上騰し、若くは下落したのか、又その如何なる部分が騰貴し若くは下落したのか、國民生活に直接影響あるものと然らざるものとの間の關係等を識ることに依て初めて物價騰貴に由る國民生活上の苦痛の程度も見當がつき從て物價引下策を講究する上にも便宜となるのである。今多少手許に集めた材料に依て歐米諸國並に我國に於ける物價騰落の趨勢、とりわけ各國民の生活費の變遷の狀況を論述して見やうと思ふ。それから次に之が對策に付て簡單に私見を陳べて見る積りである。

我國民の日々の生活に缺くべからざる食料費は正確な數字は判らないが大約一ケ年五十億圓と推算せられてゐる。此内には米麥等の主食物から肉類、野菜等の副食物が凡て含まれてゐるが我國民の大多數が費やす食料費は全生計費の四割と見ることが出來るから之から算出して全生計費は百二十五億圓と見られる。そして國民の大部分は其の七割乃至八割を直接衣食住の爲めに費やすものと見られるから年々八十七億圓乃至百億圓と云ふ額が國民の衣食住に費やされる譯である。假りに此の一割が節約出來たとすれば十億圓、二割とすれば二十億圓、三割ならば三十億圓と云ふ額が貯蓄されて我經濟上に力を加へることになる。我國民の生活品の配給組織の現狀から見る時は之が改善に依て二割三割の節約は容易と思はれる。東京、大阪、京都等の所謂六大都市に於て最近消費せらるゝ副食物のみの額でも年々七億六千萬圓と推算せらるゝから之丈でも三割の節約を見ることが出來れば二億萬の金が浮び出て來る。如上の數字は極

めて大膽な推算であつて固より正確とは云へないが大體の見當はつく。如何に國民が衣食住の費用に年々巨額な金額を費すかが想像出來る。國民生活費の增減が國民經濟上惹いては社會政策上重大な影響を與へるものなることは多言を要しないのである。

二

先づ一般物價に付て其の大勢を觀るに歐洲戰亂と云ふ大事變に由つて、交戰國は固より中立國に於ても國內的並に國際的に財政經濟上の變動を受け、善きにせよ惡しきにせよ、其の物價は異常な昂騰を演じた。此事は私が玆にくだくだしく述ぶる迄もなく世人の熟知せる所である。其の騰貴の程度は各國夫々異つてゐるが英佛等の戰勝國よりも獨墺等の戰敗國に於ては一層著しいものがあるのは言ふまでもない。之等の國では戰爭中は食料品の管理や其他の强制經濟の制度を布いて人爲的に物價の昂騰を抑制するの政策を採つたにも拘らず其の物價は戰爭の末期には既に開戰當時の十倍以上に騰り、戰後自由經濟の復活と共に益々奔騰して最近に至つては戰前の四十倍を突破するに至つた。斯の事實は戰敗國の財政經濟狀態の如何に不良なるかを忌憚なく反映してゐるのである。

他の諸國では獨墺の如く著しくはないが年平均の指數に依て見ると大正九年の騰貴の頂上に於ては戰前に比し英國、三倍弱、佛五倍弱、伊太利六倍半、米國二倍弱何れも增加し、我國でも同年に於て二倍半強となつてゐる。然るに之等諸國では爾後低落の步調に移り、就中英米兩國の如きは著しい下落を示し本年三月には英國は戰前の六割八分、米國は三割四分となつた。けれども我國や佛、伊の國々では低落の足取遲々として進まず昨年來より本年の最近に於て佛國は三倍弱、我國は二倍強になつてゐるが英米に比して下落率が鈍いと云はねばならぬ。以上は一般卸賣物價の變遷に付て極く大體を示したのであるがさて我々の生活に直接、緊密なる關係を有つ生活必需品の小賣値段は如何なる步調を辿つて來たか、これも大體に付て研究して見たい。

三

米國に於ける主要食料品廿二種の小賣値段は戰爭開始の前年平均を一〇〇とすれば昨年十二月（平均）に於ては一五〇卽ち五割の騰貴に當る。騰貴の頂點は一九二〇年六月及七月で平均指數二一九を示し約十二割の騰貴であつた。爾後多少の反騰を見たるも大體穩健な步調を以て漸落し昨年六月に於ては一四四

となり九、十兩月に於て一五三に上騰したが再び大勢に復歸して前記一五〇に低下したのである。

食料品のみならず生活必需品全體の價格は如何なる變動を爲したか。生活必需品の內容は之を分つて食料品、被服、住宅、光熱、家具裝飾、其他の六項とする。

右六項の內住宅及光熱は其の騰貴の頂點に於ても六割(住宅)(昨年末)乃至九割四分(光熱)(二〇年末)に止まる。食料品は價格の變動、幅員廣く、最高十二割弱(二〇年六月)から最低四分(二十一年五月)で高低の差が可成大きい。被服、家具類は奢侈的分子の混入し來るを以て其の騰貴率も從て高い。最高十八割七分(被服)から十九割二分(家具裝飾)に上り共に二〇年六月に於て其の頂點に達したが爾來下落傾向を辿り昨年末には被服八割四分、家具裝飾十一割八分となつた。

今如上各項の總平均を見ると其の最高の時は矢張り二〇年六月であつて戰前の十一割六分、同年十二月に於ては十割、二一年五月には八割、九月には七割七分、二一年十二月に於て七割四分と順調に低落を示してゐる。本年に入つても同一步調を採りつゝあるは逐次報道せられつゝある處なるも未だ之を詳細に知る材料の無いのは遺憾である。要するに奢侈的分子の濃厚なる生活品に於ては其の騰貴率大なるも、生活必需品中最も重要なる食料品、住居、光熱等の費用は比較的安定し、且つ其の下落步合の比較的大なる事は同國に於ける一般生活の割合に安定しつゝあるものなることを示すものと云へる。特に住宅費の如き物價最高を示したる二〇年六月に於ても三割五分の騰貴に止り、最近稍騰貴したるも尙六割に過ぎないことは我東京に於ける現狀と比較して轉た羨望に堪えざるものがある。

	生活費	食料品小賣値段	住居費
一九一三 平均	100	100	100
一九一四 十二月	103	105	100
一九一五 十二月	105	105	101
一九一六 十二月	118	126	102
一九一七 十二月	142	157	缺
一九一八 十二月	174	187	109
一九一九 六月	177	184	114
一九一九 十二月	199	197	125
一九二〇 六月	216	219	134
一九二〇 十二月	200	187	151
一九二一 五月	189	144	159
一九二一 九月	177	153	160
一九二一 十二月	174	150	161

英國に於ける生活費の騰貴趨勢は大體米國と大差ない。其生活費の內容は、食料、住宅、被服、燈光の四項に分類せられてゐて米國の如き家具裝飾と其他の二項目は之を缺如する。英國に於ける生活費の調査は專ら勞働階級を其標準と爲した關係上奢侈品を含む家具裝飾其他を除外して最少の純生活費に付て行はれたものである。從て英米兩者を其儘比較するときは眞相を誤る虞れがあると思ふ。前述の如く被服と家具裝飾及其他の三項目は米國に於ては其騰貴率最も高かりしものであるから此等

の中より奢侈的分子を除外して英國に於ける調査の如く純粹の生活費をのみ算出する時は米國の指數は更に一層低下すべく、英國に比して遙かに低位となるべきは想像するに難くない。如上の用意の下に英國の統計の研究を試みたい。

英國に於ても騰貴の頂點は米國と同樣一九二〇年であるが月は少し遲れて同年十一月に現はれ開戰當時の一四年七月に比して十七割六分の騰貴を示した。爾後何等の反騰を呈することなく極めて順調なる低落步調を辿り、本年に入ては一月、九割二分、二月八割八分、三月には八割六分となり何れも其時期迄の最低値段に相當してゐる。

生活必需品中先づ食料品の値段の變遷を觀るに、卸賣相場の最高を示したる二〇年七月には開戰當初に比し十五割八分の騰貴を示したが其後卸賣相場と同樣順調なる漸落步調に移り二一年十一月には戰前の十割、昨年十二月末には八割五分、本年三月に於ては七割七分に下落した。其の低落の跡極めて穩健にして順調なるを觀取し得られる。之を米國の食料品値段の騰落割合と比較すると前述の如く其の最高は英約十六割、米十二割、最近には英七割七分、米五割であるから其の低下割合は大體近似してゐる、共に其の經濟狀態、特に其の生活關係が平調に向ひつゝあることを示すに充分である。

次に住宅費即ち住居賃借料に付ては正確なる計算困難なるも勞働者の住宅料は一九一四年七月に對比して本年三月頃には大體五割の騰貴に當つてゐる、一般生活必需品に比し其の騰貴率の著しく低位にある點は米國よりも寧ろ良好なる狀態にあると思はれる。

被服に付ても亦正確な數字は得難いが同國主要都市に於ける小賣業者の報告に徵すれば下級者向小賣相場は本年二月頃に於ては戰前に比して十五割、三月には低下して十四割五分見當となつて居り、又光熱費は一四年七月に比し本年三月に於ては、石炭十二割、瓦斯十割五分、燈油九割、其他蠟燭、燐寸等を合計する時は全體として十二割の騰貴に當る。

以上の生活費全體に付て其の變遷を概說すれば（勞働階級の一家計に付て各費目を按配して得たる生計費と言はるべきものの戰前戰後に於ける狀態を比較するに）其の最高に達したのは一九二〇年十一月で、一四年七月の十七割六分に當る。爾後漸落して二一年一月には十六割五分なりしもの同年末に於ては九割九分となり本年三月には八割六分と低下して來た。而して此の下落の最大原因は食料品値段の低下に基くものである。

	一九一四 七月	一九一七 七月	一九一八 七月	一九一九 七月	一九二〇 七月	一九二一 七月	一九二二 九月	一九二二 十月	一九二二 十一月	一九二二 十二月	一九二三 一月	一九二三 二月	一九二三 三月
生活費	100	180	205	210	252	219	220	210	203	199	192	188	186
食料品小賣	100	204	210	[illegible]	258	220	225	201	200	195	185	179	177

右表に依れば其下落の歩調は生計費に比し食料費が常に一歩を先んじつゝあることが明瞭であるが、其の下落歩合の開きの著しからざる理由は生計費は勞働者の生活を標準と爲したる、食料品の小賣値段は餘り勞働者の食膳に上るべきものに限らず一般の小賣値段の變動を示したものであるからである。

四

次に獨、墺の狀態に付て概說したい。英、米や我國等とは戰爭の爲に蒙つた打擊の程度著しく相違し、從て其の國內の經濟事情も餘程其の趣を異にしてゐる。獨墺の狀態をとりて遽かに彼此比較することは殆ど不可能であるが參考の爲めに其統計を揭げて見やう。

即ち獨逸に於ける卸賣物價指數、生活必需品小賣値段及食料品價格の變遷を簡單に表示すると次の如くになる。×

	一九一四 七月	一九二二 一月	一九二二 二月	一九二二 三月	一九二二 四月	一九二二 五月	一九二二 六月	一九二二 七月	一九二二 八月	一九二二 九月	一九二二 十月	一九二二 十一月	一九二二 十二月	一九二三 一月
一般卸賣指數	100	1.603	1.473	1.419	1.410	1.428	1.383	1.467	1.727	1.777	1.993	2.687	3.283	3.596
生活品小賣指數	(1) 100	944	901	901	894	880	896	963	1.015	1.062	1.142	1.397	1.550	—
食料品小賣指數	(1) 100	1.265	1.141	1.188	1.171	1.152	1.175	1.274	1.399	1.418	1.532	1.914	2.088	—

(註(1)一九一三乃至一九一四の一ケ年平均を一〇〇とす)―

×表に依て大體明瞭なる如く卸賣價格は經濟事情の變化に感應すること銳敏であつて其の騰貴歩調も急速で昨年末に於ては戰前の三十二倍に暴騰したが、生活必需品の小賣は之に比ぶれ△

△ば騰貴率は半ばにも滿たないで、十五倍餘に止まつてゐるが生活必需品の內、食料品のみに付て見れば二十倍以上の騰貴に當る。之は食料品管理の結果內地生產が著しく減少した爲め其の消費の大部分を海外よりの輸入に仰がなければならない狀態

に逢著したが馬克の對外價値の下落は此の食料品の價格の上に反映して暴騰を演ずるに至つたものであらう。

更に此の生活必需品の價格の昂騰に付て注意を要することは其の品質が何れも戰前に比して著しく低下したことで若し戰前と同一の品質を以て勘定するならば、其の指數は更に增大を免れないであらう。

尚獨逸統計局に於て人口一萬以上の都市に於ける五人家族の通常生活費として計算したるものを掲げて參考に供することとする。

	一九一四乃至一三	一九二〇二月	一九二〇三月	一九二〇六月	一九二〇七月	一九二〇九月	一九二〇十一月
麻ニテ計算シタ生活費	1[illegible]2 麻	6[illegible]7 麻	7[illegible]7 麻	895 麻	861 麻	794 麻	945 麻
生活費指數	100	623	741	876	842	777	925

家族の生活費に觸れた序でに墺國及波蘭に於ける一家族の生計費を表示する。

	一九一四年七月	二一年三月	二一年六月	二一年十二月
維也	100	8.100	9 800	20.500

	一九一四年七月	二一年三月	二一年六月	二一年十一月
ワルソー	100	17.000	20.300	39.800

五

扨て愈々我國の生活費の研究に移るのであるが、我國に於ける卸賣價格騰貴の趨勢に付ては既に簡單に述べた通り、其最高點に達したのは大正九年三月で、戰前の二十三割八分の騰貴に當り爾後漸落して十年三月に至つて最低となり十割一分、而して昨年下半期の中間景氣の爲めに又もや向上して十月には十三割となり、最近三月には十一割一分となつたが目下の處此の低落傾向を阻止すべき事情があるとは思惟せられないから此の趨勢は尚繼續すべきものと觀ねばならぬ。

小賣物價は最高九年三月に於て二十二割六分の騰貴で卸賣に比して騰貴率は稍下位にあつた。處が卸賣價格の方は爾後毎月一乃至二ポイント宛低落し、最近に於ては前記の通り戰前の十一割一分即ち約二倍の騰貴に當るも、小賣相場の方では其低落歩調極めて緩漫なるのみならず昨年下半期に於ける反撥的騰貴はかなり根强き勢力を有し十一月に於ては九年の八月と同程度まで引返して十六割三分の騰貴を示した。其後本年に入つても

低落の兆は甚だ微弱にして尚十五割九分の高位を占めてゐる。之を表示すると次の樣である。

	三年七月	九年一月	九年三月	九年五月	九年十二月	十年一月	十年二月	十年三月	十年六月	十年九月	十年十月	十年十二月	十一年一月	十一年二月	十一年三月
一般卸賣指數	100	317	338	286	216	211	205	201	201	218	230	220	216	214	211
小賣値段指數	三年六月 100	300	326	295	249	242	240	241	250	253	十年十一月 264	2[illegible]2	261	262	259

我國の生活費に付ては今日正確な統計が存在してゐないことは甚だ遺憾であつて玆に一々詳しく其の變動狀況を示すことは出來ないのである。尤も大體小賣價格の變動と生計費の變化とは一致するので英國邊りで同樣に取扱つてゐる樣である。併し生計費の內容に於て食料費、住宅費、被服費、光熱費及其他の費目の割合は各々異るを以て小賣價格の騰落と生計費の增減とは必ずしも一致しない理である。そこで私の手許で之等の點を考慮に入れて算出し、生計費の增減を知る表を作製して見たのであるがそれに依ると我國の一般生計費と食料費との指數は左の如くである。

	三年六月	九年一月	九年三月	九年六月	九年九月	九年十二月	十年一月	十年三月	十年六月	十年九月	十年十一月	十一年一月	十一年二月	十一年三月
生計費	100	273	298	260	253	241	236	232	238	239	247	215	248	243
食料費	100	269	281	257	260	249	248	254	272	261	272	269	271	266

右の表と前掲卸賣相場表とを比較して見るに小賣値段の下落步合は卸相場の下落に比して可成緩漫であつたが食料品小賣相場の下落は更に一層緩漫である。十年二月三月の頃に物價は最低となつた。其際に卸賣相場は十割一步となつたが小賣相場は尚ほ十四割の高位にある、然るに食料品小賣値段は十四割八分に止まつて居る。昨秋の中間景氣が現れるや再び小賣相場も卸賣相場も一齊に上騰傾向に移つた。卸賣相場は十月十三割を最高として低落し初めたが小賣相場も食料品相場も共に十一月十

六割四分（一般小賣）乃至十七割二分（食料品）まで騰つた。其後の低落狀況を見るに卸賣相場は大體順調な步調をとつて居るが小賣相場は一高一低と云ふ足取りで一向捗々しくない。卸賣に於ては其の指數は十月に比し最近十九ポイント低下して居るに反し一般小賣は僅かに五ポイント、食料品は昨秋最高時に比し本年二月は一ポイント、三月は稍低落して六ポイントの下向となつて居るが食料品小賣相場は前述の如く騰落區々であるから本月の六ポイントの下落を以て直に大勢を示すものと爲すのは早計であらう、食料品が如斯不規律なる騰落をなすのは其の中心をなす米穀の相場から影響せられるものと云ひ得るであらふ。

次に生計費全體と食料品値段との關係であるが、生計費の最高は九年三月十九割八分であつた。食料品値段の最高點も同月ではあつたが十八割一步に止まつて居る。而も同月以後の低下步調は食料品遲々として進まず九年九月に於て早くも其の最高時に於ける地位を轉倒して食料品は十六割生計費は十五割三分となつた。爾後逐月遲れて次第に其の差異は增加しつゝあつたが十年一月頃一時兩者は接近した。そして三月以後再び其の開きは增加して六月には食料品十七割二分生計費十三割八分と云ふ顯著な差異が出來た。最近に於ても十六割六分對十四割三分である。如上の說明に依て我國に於ける食料品が生活必需品中甚だ高價なることが明瞭である。食料品の價格の低下しない主なる原因として米を中心とする我穀物の供給が主として內地產に限られてゐること、並に食料品の配合制度の不備を擧げることが出來る。

我國に於ける住宅費に關する調査は割合に困難であつて未だ戰前戰後の變遷を知るに足るべき有力な材料が無いので玆には擧げない。併し戰前に比し非常な騰貴、特に都市に於ける騰貴率は異常なものなることは吾々の親しく承知してゐる處である。

六

以上は比較的乏しき統計上の數字から論述したものであるが諸國に於ける物價の大體の趨勢は之を知ることが出來る。我國生活費と英米等のそれとを調べて見、感ずることは先づ我國では一般生計費の下落步調が鈍いことである。殊に食料品に付て見ると、英米では一般生計費の下落に先んじて下落してゐるが我國では反對の現象を呈してゐる。又住宅費は前述の如く我國に於ける騰落狀況は明かではないが頗る英米等に比して騰貴の大なることは之を想像し得られる（英國では最近戰前の五割

程度の增加米國でも六割位である）

即ち大體に付て見るも我國に於ける物價特に生活必需品の價格が其騰貴率大にして其下落率少なきことを知り得た玆に改善策講究の必要が生じて來るのである。

物價昂騰の影響が奈邊に及ぶかと云ふことに付ては今更事々しく述ぶる迄も無い。國民生活の不安、國民思想の動搖、產業の萎靡衰退、貿易の梗塞、之等の現象が大部分物價の不當なる騰貴に基いて起るものなることは之を否むことが出來ない。之が爲めに國民經濟の基礎危ふからんとすと云ふも過言であるまい。

我國の貿易は一昨年を一轉機として戰後の變態期に入り其輸出入額は共に減退したに拘らず入超額は逐年逐月多額に及んだ。本年に入つても此の勢は却て盛んで本年中には相當多額の入超を見るに至ることと察せられる。國內の產業が振はざるは當然であつて失業者の續出も止むを得ないことである。

貿易の變態に關聯して少しく玆に所謂國際物價（國內物價に對して云ふ）の觀念を考へて見たい。國際物價は國と國との間の取引に於て初めて現はるゝ觀念で各國の貨幣價値は其の國の對外經濟關係に因つて平價を中心として騰落し其の價値は各々異るが此の貨幣價値の差異は一定の基準貨幣に對する平價と對外爲替相場とを比較して知らるゝから、玆に國際物價指數と云ふものが得らるゝ。（即ち國際物價指數は基準時に於ける爲替相場を其の時の爲替相場にて除したる商を以て更に國內物價指數を除すれば得らるゝ）。一體各國の貨幣價値が變動なく其の平價を以て換算せらるゝならば各國の國內物價指數は其の儘國際的物價指數と見る事が出來るが、前記の如く貨幣價値が各々異なるから之を比較するが爲めには一定基準貨幣に換算した各國物價を基礎として作出した指數に依らなければならない。此の指數が即國際的物價指數である。例へば獨貨一麻を戰前相場に於て四十八錢、今日の對本邦爲替相場に於て四錢八厘に相當すると假定すれば戰前相場を爲替相場にて除したる商は十となる。即ち今日本邦貨幣に對しては戰前に比して十分の一の價値に低落したことになるのであるから此の低落した麻を基礎として算定せられた獨逸の物價は圓を基準として算定する場合には十分の一となる理である。で此の樣な計算方法で圓を基準とした各國の國際物價指數を算出して見ると、獨逸の如き前に述べたる如く其の國內物價は本年一月に於て戰前を一〇〇とせば三、五九六といふ數字に上る即ち約三十六倍と云ふ途方もない昂騰であるが對外爲替相場特に我國に對する爲替關係を通じて觀た物價換言すれば圓を基準として算出した物價は九一にしか當ら

ぬ。即ち却て戰前よりも下落してゐる。然るに同期(本年一月)の我國內物價は二一六即ち戰前の二倍强である從て獨逸品が我國にどしどし輸入されて來ても別に不思議ではない。之は獨逸のみの例であるが其他の諸國に付て其國際物價を見ると國內物價の最も騰貴した獨逸が一番有利で我國が最も不利な地位にあることが判るのである。

(國際物價に付て私は去る三月廿八、廿九兩日東京朝日紙上に於て稍詳細な說明を試みた)。

此の如き關係は歐洲大亂に由つて起つた諸國の經濟財政上の變動に出づるもので對外爲替關係の有利な國は輸入が增加し、不利なる國が輸出に於て有利となると云ふ現象を呈することゝなつて共に誠に厄介な結果を招徠する。現に目下開催中のゼノア會議にても之等の國際爲替關係の恢復を研究しつゝあるが、兎に角世界の爲替關係が安定せねば何時迄も今日の如き國際取引上の不利益は之を免るゝことが出來ないであらう。

物價騰貴の國內の產業貿易の上に齎す不利益は固より輕視するを得ないが、更に一層憂ふべきは之が爲に國民生活の安全を害ふ點にある。而かも亦產業不振、不景氣の襲來並其の繼續に依つて二重に生活難が深刻になる。前にも述べた如く我國の生活費は比較的高位にありて其下落の度も速かならず、一般國民は固より、特に近時增大の兆候ある失業者の苦痛は甚大なるものがあらう。物價問題を背景とせる失業問題が經濟上、社會上の重大問題たるは勿論であつてそれが勞働階級より智識階級に迄及ばんとするに於て益々社會の不安を增す譯になる。

七

物價引下に關する方策として今日迄論ぜられたもの、又今日論ぜられつゝあるものは甚だ多い。假りに之を纏めて見ると第一生產增加に關する議論、此の內には食料品增殖奬勵、食料品原料品及機械類等の安價輸入、操業短縮等の生產制限の撤廢、等が含まれる。第二生產費低下に關する議論、此の內には勞銀の低下、勞働能率の增進、企業の合同、租税制度の改正、株主配當及重役賞與の切下等が含まれる。第三、運搬貯藏に關する議論、此の內には運賃の引下、交通機關の完備貯藏の設備等が包含される。第四。販賣組織に關する議論是には公設小賣市場の改善普及、消費組合組織の奬勵、中央卸賣市場の設備、不正商人の取締、投機の抑制等の事項が含まれる。第五消費節約に關する議論、此の內には財政の緊縮、民間の消費節約の奬勵、がある。第六は通貨に關する議論、で、金の輸出解禁、小額紙幣の整理、少額債券の發行、金利の引上等が含まれてゐる。

一體物價問題は其の範圍が甚だ廣汎に亙り且つ其の關係する處が複雜錯綜を極めて居るから局部的の施設や努力では豫期の效果を現はすことは餘程困難である。どうしても朝野上下を分たず國民的に一致共同して、根本的に之が解決を期せなければならぬ。

販賣組織改善の必要――我國現在の販賣組織は依然として舊來の商取引を踏襲し、複雜多岐に亙つて組織的の系統あるもの少い。從て生産者より消費者に渡る迄に無益な費用、手數を掛け、取引が不正確となると共に其の商品の價格が增す。之は特に生活必需品に付て其の改善の必要を認めるのである。而して之が改善策としては政府又は公共團體若くは政府其他の補助の下に公益法人又は株式會社等が卸賣並小賣市場の設備を完成し且つ之に伴ふ運搬貯藏並に取引方法等に關する改善を行ひ市場として統一ある組織を作らしむることを第一に擧げることが出來る。今日でも主なる都市に於ては公設市場の設備は割合によく整ひ尚漸次其改善に着手してゐるが、多くは單に小賣のみの市場であつて配給の中樞を爲す中央卸賣市場は全く其の設備を缺いてゐる。又運搬貯藏は食料品の配給上特に必要であるが之が細目に付ては玆には詳述しない。要するに生産者若くは大なる卸賣商と小賣商とを接觸連絡せしめて中間の機關の手を成るべく省かうと云ふにある。今日の配給組織の缺陷が如何に主要生活品の價格を不整、高價たらしめてゐるかを知らば一日も速かに之等の設備を完成するを要する。

生産增加施設の必要――生産增加の施設を爲したとて今と云ふ今直に效果が現はれるものではないが兎に角物價引下の根本は品物の供給の潤澤に存するのである。特に食料品に於て然りとする。我國民の主食物たる米の收穫の豐凶が如何に各家庭の生活の上に響くかを考へるとき、又或る學者の說に依れば我國民が獸肉、牛乳等の動物性食物の消費が非常に少いから之を一層增加せざれば我國民食糧の危險性を除去することが出來ないとのことであるが之等の動物性食物の供給は今日に於て魚肉を除いては大變な不足を示してゐることを思ふとき、吾々は食糧政策の必要の更に切實なるを覺ゆるのである。

諸工業の生産費節減、國家及公共團體の財政緊縮、行政及稅制の根本的整理、之等の項目が實行されれば物價引下に貢獻すべきは云ふ迄もあるまい。既に戰後の行政及稅制整理に關しては調査機關が設けられたのであるから折角權威ある調査を遂げ之を實行せられたいと思ふ。

消費者の覺醒、努力――今日迄我國民の多くは經濟的生活と云ふことには割合に無關心であつた。之がどれ位家庭生活の上

に不利不便を與へたか判らない程である。倫理上道德上から勤儉貯蓄の必要あることは隨分說かれてゐるが純粹の經濟的立場から、合理的に科學的に經濟生活の改善を圖ることは今日特に必要であり且つ有效である。前にも述べた如く我國に於て生計費の調査が不完全であることは一面に於て國民が生活問題に冷淡なりしことを示すものではあるまいか。最近に於ける家計調査の發達は勞働問題の發生に基いたのであつて家計調査と云へば卽ち勞働者の家計調査を意味するし又此の階級の生計調査は我國にても多少は出來てゐる。併し今日社會問題として重要なのは唯に獨り勞働者問題に限らず、官公吏、會社員、敎員其他の俸給生活者所謂無產智識階級の生活問題は國の社會政策上最注意を拂はねばならぬ事項である。

我國民の生活上食物と云ひ衣服と云ひ又住宅と云ひ改善すべき點は頗る多いが之は主として國民全體が消費者としての立場より之を硏究し、實行することに依て始めて偉大なる效果が現はれる。特に國民一般が消費者として直接關與する小賣取引に於て合理的な態度に出づるときは小賣價格の下落は必ず現はれて來る。上述の種々の改善施設、方策にしても國民の側で其の必要を高調して、政府や當業者の責任を問ひ之を督促する意氣込でなければ效果を擧げ惡くい。物價の騰貴は怖るべし。而かも今日の此の物價騰貴に由て國民が始めて其の怖るべきを痛感し、相率ひて今迄閑却してゐた消費經濟改善運動に努力するならば、禍を轉じて福となすことも出來やう。今日の物價昂騰は我國人にとつて誠に好個の國民的試錬である。(完)

(註)本文中の調査に付ては

英國、勞働省刊行　レーボアー、ガセツト誌

米國、勞働省刊行　レーボアー、レビユウ誌

獨逸、勞働省刊行　ウイルトシヤフト、ウント、スタチユチツク誌

日本　日本銀行及農商務省工務局調査の數字に據つた處が多い。」

暴風の世界へ

―「無産階級に生れて」下篇―

高須梅溪



(第二) 貧しい青年の一群

始めて見た東京の話

私が東京新橋驛に着くと、未だ東西さへ丸でわからぬ大都の一隅へ冷かに投げ出されたやうな心持ちがして、寂寞と孤獨の感じで胸が一杯になつた。過去十九年間の生活は、暗黒と悲愁との連續で苦い殘忍な運命と冷めたい不平等な社會の桎梏とが執念深く私を捕へて居た、今後も私の行く路には、荊棘が絕えぬであらうが、だが私は自分の志すところへ馬車馬のやうに突進するまでだ。人生の戰場に於ける一兵卒として、たとひ逆運の銃彈が蜂の巣のやうに私の全身に無數の穴を穿つとも、私は最期の一呼吸のある迄は人生の敗者の殘骸を飛び越え乘り越えて目ざす所まで突進しよう。

私は、新橋から、加藤紫香が住む神田一つ橋通の新聲社へ人力車を急がせる途中草が茫々と生えて居た三菱ケ原を見やりながら、かう考へた。そして『新聲』の主幹として、一部の青年を動かして、花々しく文壇に働いて居る紫香が立派な和洋折衷の家に住んで、二三人の書生を養つて居るであらう得意の姿を想像した。私は曾て紫香が新進歌人金田翠園らと共に撮影して贈つてくれた寫眞其の儘の風采で、海老茶色のカーテンを垂れた洋風の書齋か應接室へ私を引見するであらうと期待して居

た。

ところが、車が一つ橋通りへ着いて、始めて新聲社の玄關へ起つた私は、紫香の生活が丸で豫想とちがつて居たのに驚かされた。其處は、ある書肆の横にある路次を這入つた一番奥の裏長屋で、狹い玄關には、書生も誰れも居なかつた。紫香が私の聲を聞き付けて氣輕に出迎へた。

私が最初に受けた印象は、紫香が、思つたよりも、貧しい生活をして居ることであつた。だが、彼れがいつも『新聲』で濁富を咀ひ、清貧を讃美し、高調して居たことを思ふと、私は彼れの貧乏が、寧ろ彼れにふさはしく思はれた。私が最初通された八疊の室には、古い机が二つ列べて置いてある丈で、何の裝飾もなかつた。

紫香の風采は、曾て見た寫眞其の儘で、男らしい、引締つた顏をして居た。特に目立つたのは、彼れの强度の近眼と鼻筋の能く通つて居ることと、口を一文字にキツと結んで居ることであつた。彼れは、大分色の剝げかつゝた木綿の紋付羽織を着て、うす黑くなつた白金巾の兵古帶を締めて居た。

紫香と私とは、二年前から度々消息し合つて居たので東京で、最初逢つた時も、何となく、久しい間の友人だと云ふやうな親み深い感じがした。どうしても初對面の人だとは思へなかつた。

「よく上京しましたね。君の都合で、明日から社の仕事を手傳つて貰ひたいと思ふのですが、どうでせう。」

と紫香は、最初から打解けて、私に彼れの心の中を話した。私も自身の戀人のやうに思つて居た『新聲』のために働くことを此の上ない喜びと思つた。だが、紫香の貧乏な生活をして居るところへ、無一文に近い私が厄介になるのは、どうも、心苦しかつた。それよりも、他で生活費を得て、傍ら無報酬で『新聲』のために働いた方が宜からうと考へた。

「僕は君の厚意を嬉しく思ひますが、大阪を出る時、新聞社や先輩宛の紹介狀を五六通貰つて來ましたから、一應其の方面の人々に逢つて見たいと思ひます。何れにしても、君の御力に縋りたいのです。」

私は、斯う答へて、其の日は、牛鍋をつゝきながら、紫香と夕刻近くまで話した。其の時、紫香は酒に醉つて靑ざめた顏に沈鬱と激越の情を現はした。そして彼れが雜誌の上でいつも繰返してやまなかつた社會への不平、文壇への不滿を東北訛りのある言葉で彼れは强く叫んだ。其處には、二十一歲の靑年であるところの彼れの眞劍な銳い社會革新、文閥打破の意氣、信念が炎のやうに燃えて居る氣がした。

□

其の翌日、私はある人の紹介狀を以て、神田雉子町にあるN新聞社を訪ふた。N新聞は過度の歐化主義に反抗して、國粹思想宣傳のために發行された一勢力だつた。其の社内には、陸羯南、三宅雪嶺、志賀矧川、正岡子規らが居て、他社に見られない異彩を放つて居た。私は其の頃「亞細亞」や「日本人」などの雜誌を讀んで、突兀として奇氣のある雪嶺氏の論文を愛誦し、矧川氏の「日本風景論」などに共鳴して居たところから、N新聞社を訪ふのを一つの樂みに數へて居た。そして宏壯な三階か四階の大洋館のうちに、雪嶺、矧川らの人々が、豪傑肌のの記者に取圍まれて奇矯な嘲罵を政界の人々や、墮落、無自覺の社會に浴びせながら、筆を執つて居るのであらうと想像して居た。

ところが、此でも亦私の想像を見事に打破られた。N新聞社は、古着屋や洋服屋などがごた〳〵列んで居る町の中に、薄汚い煉瓦作りの、無趣味な家として介在して居た。受付へ紹介狀を出して、殺風景な應接室へ通されると、四邊が暗くて、じめ〳〵して居た。其處へは誰れも下駄穿きのまゝ上ると見えて、塵埃が白く積つて居た。私は雪嶺や羯南らの人たちが、どうして、こんな汚いところで、あゝした立派な論文を書くことが出來るのだらうと不思議に感じた。

暫く待つて居ると、紹介狀の名宛の人が來て、今缺員はないが、二三ケ月待つてくれるなら、月俸三十圓位で、記者として迎へたいと話した。當時、十九歳の私は、年少の客氣に逸つて、自分の力を過信しすぎた。五十圓以上でなければ、働きたくないと思つて居た。それで私は、N新聞の記者となるよりも、寧ろ「新聲」に力を入れた方が、將來のためになるであらうと思つた。それに「新聲」の方なら、一時無報酬でも宜い、自分の力の續く限り、紫香と一緒に行けるところまでは行からうと決心した。

N新聞社を出て、紫香の家へ歸ると、私は卒直に私の決意を紫香に告げた。紫香も、社の事業を擴張して、將來は、主として經營にのみ當つてゆかうと云ふ底意が、大分動きかけて居たところから、私が『新聲』の編輯を手傳つてゆくのを喜んだ。それで社で食事するほかに、一ケ月五圓の手當を受取る約束で私は『新聲』記者となつた。

『新聲』の主張は、社會革新と文閥打破とにあつた。未だ一般の思想が内的に精緻を欠いだ時代であつたから、可なり粗大な考へが當時の青年を支配して居た。社會、人生を通じて、質朴

であり、剛健であり、率直であるべきことを私等は漠然と熱烈に要求して居た。輕佻や、浮華や、濁富と云つたやうなことをひどく嫌つた。文學方面では戯作者風の態度を鋭く攻撃して、清純な心持から眞面目に創造されるところの作品を熱求して居た。だが、時代の傾向は、私等の希望と大分かけ離れて居たので、其處に葛藤や、矛盾を生じて、絶えざる不平不滿が、私等の胸に一杯になつて居た。かうした傾向から、私は北村透谷を中心とした『文學界』の高踏的な態度には、頗る慊らなかつた。私は『青年文』の田岡嶺雲などの革新的な文藝評論により多く共鳴した。

淋しい新詩人と酒の話

其の後『新聲』の勢力が少し宛増してゆくにつれて、いろいろの青年が地方から社へ集つて來た。富山南嶺、岡野長風、赤根六崑、水口春愁、小藤如絲などは一番私等に親んだ。其のうちで、特に強く私の頭に印象されたのは、水口春愁であつた。彼れは、打見たところから、如何にも生れたまゝの詩人だと云ふ感じを私に與へた。彼れは山形附近のある貧しい農家の長男で、十四五歳の頃から、詩歌に志した。そして彼れの詩想を『文庫』や『新聲』に於て發表した。彼れの詩には、暗い東北の氣分がはつきり流れて居た。憂鬱な沈んだ魂がさながらに表現されて居た。

彼れは、詩人として東京の詞壇に一席を占めるつもりで、兩親の留めるも聞かずに上京して、一時、紫香の許に身を寄せて居た。彼れの體格は可なりに宜く發達して顏の色が雪のやうに白く、眉目も鮮かだつた。漆黑の髪を長くのばして、それを頭の眞中から左右に分けた彼れの姿は、直ぐ秀才らしい人だと云ふ直覺を何人にも與へた。だが、全體に弱々しいところが彼れにあつた。積極的に自分の志した方へ突き進んでゆかうとする強力な意志に欠けて居た。始終、溢るゝやうな情感と詩的冥想のうちに浸り切つて、現實を顧みないと云ふ風があつた。

社へ集つて赤根六崑や、小藤如絲などが、紫香らと三疊ばかりの室で、頻りに座り相撲や、腕押しを競技して居る時でも、春愁は、私等の居るところから、稍離れて、夢見るやうな眼付をしながら、默々として詩の世界に魂を遊ばせて居た。私が痩せた腕で、雲を衝くやうな大男の小藤如絲を突き倒して、座り相撲に勝つた時、一同がわつと驚きの聲をあげた場合さへも、春愁はかすかに微笑して居たに過ぎなかつた。

其の後、春愁は頻りに職業を求めたけれども、事務を執るに適しない彼れの傾向が大きい障碍となつて、彼れを採用しよう

とするものがなかつた。そして國許の兩親からは、時々、手紙を彼れに寄せて頻りに歸國を促がして來た。それでも彼れは失意の境遇に刺戟されて、自分から、人生の戰場へ飛び入つてゆく丈の勇氣を出し得なかつた。また紫香の許にいつ迄も厄介になつて居るわけにも行かなかつた。彼れは、涙を呑んで、田舍へ歸つた。其の時、東京を出發する際の彼れの顏色は、死人のやうに眞青だつた。私は暗然として彼れの後姿を見て、ほろりとなつた。

　私が彼れを上野驛に送つて、別れを告げてから間もなく、彼れは歸國匆々、病床に就いたことを知らせて來た。國で農耕に勵まねばならぬと云ふことを彼れは心から嫌つて居た。失意の彼れは、詩作と冥想の世界から遠ざかつて、鋤鍬を手にしなければならぬのをどんなに悲しく思つたか。彼れは、左様した悲みを重ねてゆくうちに、ぶらぶら病み付いたのだ。

　彼れの病は、到頭癒えなかつた。日毎に重くなつて、二十三歳で世を去つた。彼れの訃報が私の許に達した時、私は薄倖詩人のはかない最期を悼んだ。生れながら抱いて居たすぐれた詩才を未だ十分伸ばし得ないで、空しくそれを地下にもたらした彼れの不遇は私の胸に深い悲みのあとを殘した。

「自分とても、どうなるかわからないのだ。人生は、悲痛の記録そのものだ。理想と現實との一致は極めて少いのだ。」

　私はかう思つて、春愁の死を忘れることが出來なかつた。私が曾て一滴も口に入れなかつた酒を飲むやうになつたのは、其の時分からであつた。

□

　新聲社へ日曜毎に集る青年のうちに、一人の酒豪が居た。それは岡野長風と云つて、ある私立の法政學校に居た。彼れは圓い、ずんぐりした顏にはち切れるやうな精悍の氣を現はして居た。彼れはいつも、日曜日には一升徳利と牛肉の包みとを携へて、紫香を訪ふた。そして晝頃から夜にかけて酒を痛飮した。醉ふと大聲を發して漢詩を呶鳴り散らした。

　私も紫香に勸められて、痛飮組の仲間入りをしたが、最初は、一滴の酒も飮まなかつた。ところが、紫香は、長風以上の酒豪で、一升五合位の酒量を持つて居たので、私が酒を飮まぬのを大分不滿に思つて居た。一體東北地方のやうに寒い國に住んで、毎年二三ケ月を雪の中に送る人たちは、暖かい芳烈な酒が何よりの慰めとなるので、誰れも彼れも酒に親み易かつた。紫香も國に居た時分から、早く酒の味を知つた。そして東京へ來て、一家を構へるやうになつて以來、彼れの酒量は、一段進ん

だ。

　彼れは、酒によつて、貧乏を忘れた、世帯の苦みを忘れた。胸中に鬱積して居る不平不満を一時酒の天地に浸ることによつてまぎらした。彼れは、機會があれば、ぐんぐん酒を飲んで、醉倒するところまでゆかなければやまなかつた。そして下戸黨に向つては「酒を飲めないやうな人間は、男性的ぢやない、女性的である。」と豪語して居た。

　牛肉會が始まると、紫香は長風と共に、酒盃を啣みながら、私に飲酒を勸めた。私はキリスト教の信者でないから、酒を飲んでも差支えなかつたのだが、心のうちでは、窃かに一個のピユーリタンを以て自任して居たので、酒は勿論、煙草も喫まなかつた。そして紫香らが、酒盃を私の前に置いても、矢張飲もうとしなかつた。

　ある日、長風が紫香と酒を飲み始めると、其の精悍な顔を私の方へ向けて、

「酒の趣味を解しない男子は共に事を談ずるに足りない。君も『新聲』同人ではないか、少し飲んでは如何だ。いつまでも下戸黨で居ては、仕様がありませんよ。」

と云つた。そして彼れは、元氣よく、酒盃に一杯の酒を注いで、私の前に置いた、

「君も男ぢやないか、潔く一杯飲み玉へ。」

　紫香も強制的にかう云つた。私は飲もうか、飲むまいかと迷つた。今までも再三、勸められ乍ら、固辭して來たのだが、此の上、紫香らの勸めに従はないと、いくらか彼等の感情を害するやうに思はれた。

「俺も男だ。みんなに云はれて、引込んで居たくない。飲もう、大に飲もう、飲んで苦しければ倒れるまでだ。」

　私は突嗟にかう決心して、長風が勸めた酒盃を手に取りあげて、ぐつと一息に飲んだ。ぴりつと舌を刺戟するやうな感じがしたので、酒の味が、未だはつきり分明らなかつた。うまくもなければ、まづくもなかつた。それから二三杯續けて飲んだ。それが私の飲酒の最初であつた。爾後二十余年、私は酒を飲み續けて來た。一寸したことが、人間の運命を支配し、習慣や嗜好の上に影響することを、今になつて、つくづく知つた。

□

　紫香は、酒のほかにこれと云ふ道樂を持つて居なかつた。唯近松情調を愛した金田翠岡と共に其の頃、流行して居た娘義太夫にいくらか熱中した位のものだつた。それも彼れのやうな品行の正しかつた男であるから、綾之助や美光らに接近しようと

か、娘義太夫のあとを追ひ廻すと云ふやうな欲望を全く持つて居なかつた。唯其の美しい姿と涼しい聲とを嘆美するに過ぎなかつた。私は東京へくると間もなく、紫香に伴はれて、ある寄席で娘義太夫を聞いたが、私には、其の時分、未だ左樣した趣味がわからなかつた。酒屋や、太十や壺坂などは、大阪で聞いて居た丈に娘義太夫の弱い語口が、どうしても、私の藝術的な感興を喚起す丈の力に乏しかつた。私は紫香のやうに、熱中する氣になれなかつた。

　紫香は、正式な文學的教養を持つて居なかつた。けれども文章の上では、一家の見識を備へて居た。彼れの云ふところは、學究的に組織立つて居なかつたが、鋭く、痛烈なところがあつた。彼れが文章を書く時は、深夜から曉明の頃にかけてであつた。彼れは懸命に想を練り、筆を搬んだ。時には、思想が湧いて來ない爲めに、隨分呻吟し、苦惱して居たとがあつた。かうして彼れは、文藝批評家として進んでゆける素質を少からず持つて居た。

　けれども彼れには、實際家としての傾向が遙かに强かつた。彼れは、文學を愛したけれども、文學者の生活が物質の上で、極めて惠まれないことを痛切に感知して居た。それは、早く妻を迎へて、近く愛兒を設けるやうになつて居た彼れに取つては、當然のことであつた。そして彼れは、齋藤綠雨が「筆は一本なり、箸は二本なり、衆寡敵すべからず。」と云つた警句をいつも繰返して、私に向つて感嘆して居た。

　彼れは、二年來「新聲」の經營に當つて、實生活の中核にぶつ付かつて見て、今更に文士として一生を送るには、妻子すら、滿足に養つてゆけぬかも知れないと云ふとを沁々感じたのだ。假りに左樣した生活苦を耐忍して、懸命に筆を執るにしても、正式な高等專門教育を受けて、學的根據を築きあげないと、文士としての生命が永續しないことをも考へた。そして彼れは、此の問題を解決するために、幾度も人知れず、煩悶した。

「どうも、自分には、十分の素養がない。それに又高等專門敎育を受ける丈の時間も餘裕もない。一生貧乏で押通すこともいつ迄我慢し得られるか、しつかりしたとが自分でわからぬ。少年時代から長い間志した文學を丸で見捨てることは出來ないが、私には翠園のやうに財産がないから文士として生活することは思ひ切つてやめよう。寧ろ文學書肆となつて、有爲な人たちの著書を出版するとに全力をつくした方が宜い。それが自分の力にも嗜好にもふさはしいやうだ。私は文士を斷念して商人にならう。」

　彼れは、かうして、思ひ切つて、文學書肆としての第一步を

開始することに決した。彼れが歩んだ道、彼れの轉機は、私の心に強い衝動を與へた。だが私は、實際的な傾向の多い彼れが、かうした迴路を辿つて、事業家となるであらうことは、當然の順序だと云ふ氣がした。それは、紫香が二十二歳の夏であつた。

私は、紫香のやうに、事業に對する興味を十分持つて居なかつたので、矢張、文學の一路を辿つてゆくことにした。其の時分、私は田島の叔父千右衛門が、島次郎の放蕩を心配した爲め、ひどく健康を害して、六十五歳で世を去つた訃報に接した。私は會葬のため、歸郷しようかと思つたが、叔父が周圍のものに「清之助は成業するまで歸るに及ばぬ」と固く遺言したので、唯香典を贈る丈に留めて置いた。晩年、私の性質を理解してくれた叔父を他日もつと喜ばせたいと私は思つて居たので、未だ成業しないうちに、彼れと永別したことを淋しく思つた。

生の春に目ざめた人々の話

新聲社が、紫香の努力と妻君の內助とによつて、次第に隆盛に赴くと、もう狹い裏長屋に居られなくなつて、錦町に相當の家を構へることになつた。此の前後に私の同志、小村秋雨、野山段之助、三田村醒夢、奧原梅龍、大石赤鱗らが上京した。

秋雨は上京匆々、早稻田專門學校（早大の前身）の哲學科に入つた。そして私の推薦で紫香に代つて『新聲』へ文藝評論を書くことになつた。野山は、田中智學氏の指導の下に宗教――主として日蓮宗に於ける新宗學――を研修するために鳥森で、ある印刷所の校締をする傍ら、頻りに經學に親んだ。醒夢は、『新聲』へ以前から寄稿して居た關係から、紫香と私とを手賴つて來て『新聲』同人の一人となつた。私は、かうして同志を東京に迎へることが出來たので、いくらか孤獨と寂寞とを減ずることが出來た。

それ等の友人は、文學や、宗教の方面に新しい世界を開いてゆかうとして居たが、其の傾向や、信仰は一致して居なかつた。秋雨、醒夢の二人は、キリスト教に皈依して居た。野山は、キリスト教に反對して、日蓮主義を信じて居た。梅龍、赤鱗と私とは、懷疑狀態に彷徨して、或は藝術のうちに安心を求めようとしたり、或は當面の社會問題や、文壇革新の上に實際の興味と努力とを集中しようとして居た。

野山は、私が大阪に居た時分から、四つ橋附近にあつた田中智學氏の立正安國會へ通つて、日蓮主義を信仰して居た上に、積極的な態度で、私をも同じ主義へ導き入れようと力めた。東京へ彼れが來て、最初に私と逢つた時も、熱心に日蓮主義を信ずべき必要のあることを力說した。

彼れは、聰明で、學問が好きで、頭腦の明晰な點に於て、識見の優れた點に於て、早くから一家の風格を備へて居た。けれども何となく、矜持するところが高く、直情徑行で、狷介な性癖があつたので、世間の俗人とは相容れることが出來ない傾きを持つて居た。だが、私と彼れとは、兄弟も及ばないほどの親密な間柄で、互ゐに助け合ひ、勵まし合つて同體一心となつて居た。唯彼れは、私が彼れと同じ信仰のうちに生きてゆかうとしないのをいつも嘆いた。

友よ汝は溫かなり、美しきなり、麗かなり、汝が音容、汝が歡語、いかに美しく麗かなる。汝と膝を並ひで語る、吾が世は春なり。吾が心花咲く。嗚呼友よ、わが運命は何故に汝と共にあるを許されざるか、吾胸に春を與へざるか、吾心に花咲かしめざるか。汝が信仰は何故に吾と異なりしや、わが信仰は何故に汝と異なりしや。友よ、寂寞たる吾が心をはかれ。(下略)

野山は、かう彼れの手紙に書いて、私が日蓮主義に歸依しないのを殘念がつた。だが、懷疑的で、すべての既成宗教を信じやうとしなかつた私の心は、野山の友情に感激しながらも、ひとり、文藝の天地に沈潛して居た。

野山は、それをどんなにもどかしく思つたか知れなかつた。

彼れは、私が彼れに文章上に於ける研修を勸めた手紙への返事に、

兄よ、僕が文章について兄の教示を受け入れしが如く、兄も亦僕が研讃になれる宗教靈心の事について淨き渴仰に進むを得べきか。かくて互にその得る所に於て相利益、增進することを得ば、嗚呼これ幾何の幸ぞや。

と述べて、私が宗教、哲學に至心を傾倒せんことを熱切に求めてやまなかつた。

秋雨は、東京へ來てからも、堅くキリスト教を信じて居た。彼れは、大阪時代と同樣、誰れに向つても、强ゐて、キリスト教に歸依するやうに勸めはしなかつた。ひとり、靜かに神の教へを守つて、自己の靈性に培ふことに力めた。私は彼れと兄弟同樣の交際をして居たが、其の心境は、丸で彼れとちがつて居た。私の胸には、始終輕浮な酷薄な社會を憤る感情が炎々と燃えて居た。一種矯激の念と峭直な思ひが、私を沈鬱にして居た。少しの事にも、私は激昂し易かつた。そして私は前途についていつも悲觀を抱いた。私の心境は、絶えず波立つて居たのだ。ところが、秋雨の胸のうちには、安心があつた、落著きがあつた、信仰からくる慰めがあつた。彼れの心胸は、秋の湖水のやうに靜かに澄み切つて居た。私は彼れを羨んだ。

「秋雨よ、君は何故そんなに落著いて居られるのか。俺は、今の不平等な社會が癪に障つて堪らないのだ。俺が貧乏に苦んで、うまい洋食の一皿さへ、容易に口に入れることが出來ないのに、あるものはあぶく錢を湯水のやうに女のため、酒のため、美服のため、費消して濟まし込んでるぢやないか。君は彼等をどう見るのか、神の道で直ぐ救へると思ふのか、一體、此の貧乏をどうしようと云ふのか、君は余りに落著き過ぎて居ないか。」

私は何だか、斯う呶鳴つて見たいやうな心持ちがした。私の眼には、社會が多く虛僞、譎詐、姦惡、醜怪、卑俗などの分子を以て、すつかり滿されて居るやうに思はれた。

「咄此の咀はれた不愉快な社會！」

私はかう云つて唾棄したいやうな暗い、憤りに滿ちた感情に打たれて居た。戲作の醜業を演出して居た文壇の不眞面目にも腹立たしくなつた。私は少しも落著いて居られなかつた。

□

私が一番親み易い心境を持つて居たのは、醒夢であつた。彼れは秋雨の感化によつて、キリスト教に入つたけれども、彼れの本能は稍もすると、彼れの信仰を裏切らうとした。彼れの內部には、いつも靈と肉とが烈しく戰ひ合つて居た。そして彼れは、肉のために、折々、靈を抑へ付けられ易かつた。

彼れは、新聲社の二階で、私と毎晩、床をならべて寢た。そして夜分就眠する前に必ず聖書の一節を讀んで、何事か神に祈りを捧げた。私はどう云ふものか、キリスト教徒が故らに聲を高くして、俳優じみた祈りをするのを一種嫌厭の感じを以て聞いた場合が少くなかつた。私は祈りを排斥しないが、默禱にこそ眞の力があると思つた。醒夢が形式に囚はれた祈禱は、私に輕い反感を抱かしめた。

だが、ある時、私は始めて彼れの力ある祈りの聲を聞いたことがあつた。それは、嵐が烈しく吹きすさんだ夜だ。彼れは、全身を慄はせながら、熱切に祈り始めた。

「神よ、どうか私が過古に於て、戀のために誤つた道を歩んだことを許して下さい。私は一時、燃ゆる本能に制せられて、愛慾の奴隸となつたのです。」

醒夢は、心の苦悶に堪え難いやうに、凄いなやまし氣な表情をした。彼れの眼の緣には黑い隈がかゝつて、血走つた眼が、どんよりして居た。

「君、あの嵐の聲を聞かないのか、實に物凄いではないか、僕は過去の罪業について鋭く鞭たれるやうな氣がする。僕が曾て

愛人と別れたのは、かうした嵐の夜だつた。あゝ嵐、あゝ嵐、僕はもう堪え切れない。」

彼れは、ちつとガラス障子を動かし、戸外に吼え、叫び、狂ひ、憤る嵐の音に耳を澄ましたかと思ふと、がつくり頭を机の上に置いた。私は左樣した眞面目な時の彼れを見ると、何となく、鋭い良心が、彼れの身體の何處かに潛んで居るのであらうと思つて、强い同感に打たれた。

だが、彼れは其の翌日になると、もう懺悔に慄えた一夜をけい、ろりと忘れて了つて居た。そして彼れが誇り顏に「僕は絕對に禁酒禁煙して居るのだ。」と吹聽して居る信條を時々破つた。ある時、彼れは私の留守中、卷煙草を取り出して、すぱすぱ喫んで居た、そこへ私が突然歸つてくると、彼れは狼狽てゝ、卷煙草を火の點いたまゝ机の曳出の中へ隱した。細い紫の烟が、蜘蛛の糸のやうに曳出の隙から出て机の下になびいて居たのを彼れは知らなかつた。私は默つて苦笑した。

醒夢には、左樣した脆いところがあつた。そして彼れは、早く遊蕩の味を知つて、酒を好み、狹斜情調を愛した。彼れの信仰は、いつも、ぐら付いて居た。彼れは、時々、覺醒することがあつたけれども、直ぐに肉の誘惑の方へ行き易かつた。私には、野山や、秋雨よりも、弱くて人間味の多かつた醒夢の心境が一番わかり易かつた。

彼れは、左樣した弱い人で、いつも愚痴をこぼし易かつた、何か心配なことがあると、直ぐに萎れたり、神に祈つたりした。私は一ケ月のうちに、幾回か彼れの愚痴を聞かされた、

「僕ほど、不幸なものはない。兩親を養はねばならぬ責任があるし、前途は、未だ何ともわからない。それに、此の頃は、頭がずきんずきん痛んで困る。」

彼れは、力のない聲で、私に其の苦境を述べた其の都度、私は彼れを慰め、彼れを勵ました。

彼れの心境は、私とひとしく、非常に動搖して居たが、早くから持つて居た多方面な才能は、漸時發達した。彼れは、父が國文學者であつたところの傾向をいくらか遺傳して、學究的に抽象理論に耽らうとする風がほの見えて居た。彼れは、高山樗牛の『近世美學』や、鷗外の『審美綱領』などを讀んで、ハルトマンの美學に心醉した、それから得た知識によつて、自然美や、人間美を解剖して、それを小冊子に綴めた。

だが、私は醒夢が社會革新の事に一向無關心であるのが不滿だつた。私は彼れとちがつて、社會と文壇との狀況を考察して、激情、氣慨を主調とした時流嘲罵に全心を傾倒せざるを得なかつた。當時、私はカーライルの『過去と現在』(Past and

Present)や『衣裳哲學』(Sartor Resartus)や『英雄崇拜論』(Hero Worship)などに共鳴して居た。勿論、難解なカーライルの文章は、未だはつきり私にわかり兼ねたが、私の詩と歴史とを好む傾向が、自然、カーライルの激越な、强い調子に感動しやすかつた。そしてカーライルと同じ時代の改革者であつたミルには親まなかつた。私の眼にはミルが冷めたいやうに見えた。

其の時分の私には、ミルの言説を消化する力が乏しかつた。彼れの科學的、論理的に開展した部分的な時代救濟の聲を理解するには私が余りに性急で、頭が熱し過ぎて居た。かうして、私はミルから遠ざかつて、ひとり、カーライルに心醉した。そして時弊を罵倒し非難する上にもカーライルの口吻を不知々々眞似た。

だが、今考へると、私はカーライルの神髓——永遠の眞理を闡明しようと熱中した點——を一向、學ばうとして居なかつた。唯其の皮相のみに觸れた傾きがあつた、時には、其の短所までも學んだ氣味があつた。野山は手紙で、其の事について「君常に自らカーライルを以て任ずるも、君の眼はカーライルの如く、奇拔警異の點を觀察し剔抉すること難し」と忠告した。けれども私は、尙ほ醒めずに、ともすると、カーライル熱に捕へられて居た。そして『カーライルの人物及び事業』と云ふ一論文を公にした。

（第二）生の闘爭

貧乏に惱んだ友人の話

其のうち、私は醒夢、梅龍らと、新聲社の附近にある安下宿屋へ移つた。其處は、古風な家で、體裁もよくなかつた。私は梅龍と一緒に二階のうす汚い六疊に居た。直ぐ階下に便所があるので、臭氣が時々私等の室までわかつた。私等は、室の中へ一個の本箱と二個の古い机とを列べた丈で、何の裝飾もしなかつた。未だ私には、左樣した余裕もないのであつた。

最初の下宿生活から得た私の感じは、無味、砂を嚙むやうであつた。朝夕の食膳に上る味噌汁は、多量の水が加へてあると見えて、まづかつた。肴は大方、腐敗しかゝつて居て、ぷんと惡臭を放つやうな下等なものが多かつた。暴食家と云はれた私さへも、粗惡な食物には可なりに神經を尖らせた。野山民之助などが尋ねてくると、私は彼れを蕎麥屋か、おでん屋へ同伴した。時には、彼れと共に一品五錢の安洋食屋などへ出かけた。

梅龍は、朝寐坊で、怠けものであつたが、愛すべきロマンチ

ストであつた。彼れは、其の中心興味を戀愛の上に置いて、近松巣林子とシエークスピヤの戯曲に現はれた戀を詳しく對照して論じたとがあつた。醒夢も、矢張戀愛に心醉して『日本情史』を書いた。彼れは一二度、もう戀愛を體驗して、少女の心理をある程度まで知つて居たので、戀愛の對照を作り出す事も亦早かつた。彼れは、下宿の主人の妹で、お絹と云ふ處女と心安くなつた。お絹は、別に美人ではなかつたけれども、十九歳位の大柄な女で、ぽつてりと肥えて、肉感的な顔をして居た。眼にうるほひを持つたところに、人をひき付ける魅力があつた。

　私は、戀を思ひながら戀を得なかつた。それがどの位、私の心を淋しく、暗くしたか知れなかつた。それに毎月、新聲社から受ける丈の報酬では、下宿料の支拂ひにいくらか不足があつたので、大阪のS書店から出る編纂物を引受けて、毎月、こつこつと筆を執つてやつと生活を支えて居た。左様した忙はしい中の二三時間を割いて、ある英語學校にも、通學して居た。どの點から考へても、私は慰められるところがなかつた。私は淋しさに堪えないで、其の時分、鎌倉のかためい山に居た野山段之助のことを思つた、大阪に居る船田らのことを偲んだ。栗閑の家を訪うて、彼れの温情に慰めを得た。私は友人を訪ひ、或は思慕することによつて、私の孤獨や、悲愁や、憤懣や、焦燥を忘れようとした。そして私と友人との間には、頻繁に書信の交換が續いた。

（前略）兄の書を拜見して此の返辭を書くにも、直ちに筆を執ると能はず。その友情の濃厚なる、わが胸を樂ましむるよりは、寧ろ悲ましめ又慰ましめ、思へず涙たゞに三行のみならず候。メソ〳〵と泣くのみが男かはとは生の平常口にせる所なれど、この世の中は思へば、泣かずには居られぬものに候。われは生來涙深く、もろきもの、母よりは男のくせに泣みそといはれ候ひき。されどわが涙は、わが身のみの悲しさには出でず。悲しさにも出です。唯義と情との衝突せるとき、義の至れるを見聞くとき、情の至れるを見聞くとき、吾覺えずして涙頬を沾ほすなり。われ泣かじとすれど、涙止め敢へぬなり。われ曾てわが祖母のために泣き、また戀人のために泣きまた老母のために泣き、また友のためにも泣きて、今はわれを重んぜし人の知遇に泣き、迂濶の性事を誤り、他の規模を害せる失に泣き、また人のわれを誤解せるに泣き、老親の雲山を隔てゝ、壯志沖々、日夕營々として、屢恙ありと云ふに泣くなり。而も今又兄が予のために泣くと云ふを見て、又涙更らに增さゞるを得ずなり候ひぬ。（下略）

これは、鎌倉の野山から來た手紙の一節で彼れは倘ほ言葉を

綴けて「この狷介なる吾に殆んど極度の同情を寄せて、一體也、同體也とて、不離を鴛鴦に比せる兄はそれ何人ぞや、前世それ奈何の因緣あつてか此に至れる哉、それ或は祐成、時致の如き骨肉、連枝の昆弟なりし乎」と云つて、溢るゝやうな友情を披攊した。

野山の手紙は、どの位、私を勵ましたか知れなかつた。また私に強い感激を與へた。私が彼れに注ぐ同情の深ければ深い丈、彼れの手紙も亦彼れの魂を直ちに紙の上に表現した。私は、彼れに對して、いつも口癖のやうに「悲しきとき、心配のとき、吾唯ありと思へ、東都の空に兄と共に悲み、兄と共に泣く友ありと思へ。」と云ひ送つた。

野山が、唯一人の老いた養母に對する至情は、血と禍とに渦した惡魔をも泣かしめるほどに思はれた。彼れの書信には、必ず養母のことが書いてあつた。彼れは「母氏早や五十七歲、朝また夕を計られず、一子遠く三百里外に在りて奉養の資さへ充分なる能はず、老軀を勞して活路に添ふ、以て能く養ふあるさへ能はず、況んや敬待給仕の誠、一分をだも盡す能はざるをや、念一たび此に至る、吾が寂寞たる孤身を推して如何にわが母氏老余の苦しかるべきかを想ふ、心腸焉んぞ安きを得んや。」と咲いた。すべてが彼れの血涙の流れであつた。私は彼れの手紙のすべてを、一冊に綴ぢて、幾度も、幾度も讀み返した。そして不知々々泣かされた。

船田からも、私の許へ度々、手紙が來た。彼れの家には、いくらか肺病の血統があると傳へられて居たが、彼れは、京都のある商業學校に居た時分、風邪が原因で、到頭、肺結核になつた。船田は、それがため、可なりに苦んだけれども、彼れは、いつも、病を樂觀して居た。其の心持が、彼れの手紙の上に反映して居た。私は彼れが悠々と天命を樂んでゆかうとするところに強く共鳴した。

□

かうして私が舊友と書信を往復して、僅かに慰めて居るうちに、『新聲』を中心として二三の新しい友を迎へることになつた。それは田井掬露、正田南陽の二人が新たに『新聲』同人に加はつた事である。恰度、其の時は、梅龍が私事のため大阪へ歸り、醒夢が社を辭して、K館の編輯局に入つた際だつた。

掬露が『新聲』の同人となる事については、最初社中に異議があつた。金田翠園などは、極めて純一で潔癖だつたから、掬露が田舍旅館の主人として、生活して居た時分の噂を聞いて、掬露を同人として迎へる事は、もう一度篤と考へて見る必要が

あると云つた。けれども紫香は、經營方面のことで、世才に長けた掬露を必要としたので、多少の異論を抑へて、掬露を社へ喚びよせた。

間もなく、掬露は東京へ妻子を携へて來た。彼れは、私よりも四五歲の年長者で、余程老成して居た。彼れの双頰は、げつそり落ちて、鼻の尖端が少し尖つて居た。闊い、大きい眼が銳く光つて、敏捷らしい風を示して居た。彼れは大分、世の辛酸を甞めて來たと見えて、人と話す時は、圓轉滑脱の妙を極めた。私は彼れの溢るゝばかりの才氣に魅せられて了つた。だが、彼れには、何處か冷めたいやうな、內心を容易く人に打開けないやうなところがあつた。

掬露が東京へ來て、二三ケ月經つと、正田南陽が突然、私を下宿へ尋ねて來た。彼れは「新聲」の誌友和氣謙太郎と同鄉の友人であるところから、其の紹介狀を携へて居た。南陽のことは、和氣から、ちらと聞いたことがあつた。南陽は、以前廣島に居た時分、ある小新聞の編輯長をして居たことがあつた。彼れの氣短かな、喧嘩早い性質は、ある日、社長と衝突すると直ぐに職工らを煽動して、ストライキを起せた騷ぎのうちに、廣島を去つた。其の以前にも、南陽は、ある雜誌に關係したが、矢張社主と喧嘩して、未だ入社してから一ケ月も經たないうちに、其の雜誌を見捨てた。左樣した噂だけ聞いても、南陽が破壞性と革命氣分に滿ちた過激な人物であることを略ぼ知ることが出來た。

南陽の話によると、東京へ來て、Y新聞の記者になつてからも亦喧嘩して退社した。そして今は浪人して居るとのことだつた。彼れは長身痩軀で、顏が馬のやうに細長かつた。彼れの鼻と口とは、小さくて格好よかつたが、眼は强度の近視のために、眼玉が外へ飛び出しさうになつて居た。そして其の眼をぎよろりとさせると、何となく、凄味があつた。彼れは、生活の資を得るため『婦人の側面』と題した一書を著はして私の推薦によつて、新聲社から出版したいとの希望を抱いて居る事を私に話した。

彼れが歸つてから『婦人の側面』を讀んで見ると、奇拔な女性觀はないが、手際よく、興味中心に纏つて居た。私は、これなら出版の價値があると認めたので、直ぐにそれを加藤紫香に推薦した。それが南陽と新聲社との關係が密接になる最初であつた。

其の後、彼れは、また或新聞に關係したが『新聞記者の裏面』を出版した爲め、社外に放逐された。それには、流石の彼れも、一時困つた。そして恰度、新婦と結婚しようとする際であつた

ので、當坐の費用にも苦んだ。其の時、彼れは、長文を私の許に寄越して救ひを求めた。當時彼れは芝の下宿に居たのだ。

増上寺邊、花樹を壓し、櫻雲勃々として遊意を催ほすも、不遇に泣く小生の心を慰むべくもあらず。小生は四疊半の陋居に唯獨り悶々の心を遣らんが爲め、朗々として、ソロモンの箴言を誦じ、僅に近來滿腔の不平を散ずるを得申候、靜に床をのべて身を横へしも、萬感交々至りて眠りを爲さず、更にマッチを擦りて大兄に一書を裁すべく筆を執り申候、

と彼れは書き起して、結婚事件のことに及んだ。

小生は十日程前までは、世界に於ける總ての幸福を享有したるものゝ如く見へ申候ひしが、筆禍は、小生の境遇を一變して、天國より墮落して、地獄の人と成らしめ候。これは單に職業を失ひたるを悲みての譫語には無之候。數年來の戀人は正に來る十五日を以て、小生の寓を新婦として見舞ふべく候。小生は最幸福なる時機を最不幸に送らざるべからず候。世界の何れにか小生ほど不幸なるもの有之候哉。新たに一家を組織するに要する金は少しも準備せられ居らず候。然れども假りに此の事は、萬難を排して之を爲すも、其後に至つて、妻を養ふに如何なる方法を以てすべき。殆ど當惑の極に有之候。(下略)

かうして彼れは、私に一定の職業を得たきことと、差當り、三十圓ばかりの金を要する事情とを述べた。私は彼れの逆境や、新婦の不幸に同情して、紫舟から、三十圓の金を借りて、直ぐに南陽の許に屆けた。そして彼れを新たに社の同人中に加へて、毎月若干の俸給を受取るやうに紫舟と相談した。此のことも亦順潮に纒つた。

新しい閨秀歌人の話

當時、ロマンチシズムの風潮が勃興して、バイロン、ユーゴー、ミルトン、ゲーテ、シルレル、シエークスピヤなどの作品を研究するものが漸次增加した　此の新興の潮流に棹した詩歌専門の雜誌「晩星」などが出た。それは、與田野鐵劍の主宰だつた。彼れは其の時分、覇氣と粗豪とを以て知られて居た。そしてバイロンなどの作風を渴仰して、自ら日本のバイロンを以て任じて居るらしく見えた。

彼れは『晩星』を出す前に先づ私と接近した。其の時、鐵劍は私に向つて「自分は、從來、兎角素行上のことについて噂の種となつたことがあつた。けれども今後は、左樣した誤解を受けるやうなことは斷じてしない。飽くまでも眞面目に進んで行きたいと思ふから、君の助力を得たい。」と云ふ話があつた。

「貴君が左樣した開放的な男らしい態度で新しい道を進んで行かるゝのは結構だと私は思ひます。今の文壇は余りに不眞面目で、濁つて居ますから、貴君はどうか私等が平素の主張のやうに、社會を淸め、文壇を淸めて下さい。私は微力ながら、『新聲』に據つて應援しませう。」

私は、かう答へて、鐵劍が過古を懺悔して未來の新らしい希望に生きてゆかうとするのを宜いことだと思つた。當時の私は深い同情を何人の上にも注ぐと云ふ上に私の生命があるのだと思つて居た。野山は曾て其の事を私への手紙のうちで評して「君の眼は同情の眼だ。屈曲しないで直線的に人と物とを觀る。側面や裏面に邪推を加へないで平面に觀る。而も深い同情を以て觀る。それが君の頭だ、眼睛だ。」と云つた。

私は、自分が長い間、窮乏に泣いて來たので、私と同じ貧しい人々や、營々と終日働きづめで居る下級勞働者や、見世物小屋で酷使されて居る玉乘りの少年少女や、街頭に新聞を賣る苦學生などに同情しないでは居られなかつた。玉乘りの少年少女を嘆いた私の感想は『闇黑境下の兒』と題した一文となつて『新聲』へ出た。すべての人、すべての物に觸れると、私は直ぐ同情の眼を以て見た。鐵劍に對しても矢張左樣だつた。

私は鐵劍の言葉をすつかり信じ切つて、彼れの事業の上に深い同情を寄せた。過古に於ける彼れに對する非難や、秋雨が彼れに對してある疑ひを抱いて居たことなどは、念頭に留めやうとしなかつた。野山が云つたやうに側面や、裏面から、鐵劍の心事を一度も邪推して見ようとしなかつた。直線的に鐵劍を見て居た丈だつた。後にある事件で、鐵劍が私を冷かに犧牲者として、牢獄へ投じ、私の上に讒誣や、中傷の鞭を『晩星』の誌上で加へるであらうと云ふことは、夢にも豫期しなかつた。

鐵劍の『晩星』へ私は、無報酬で時々寄稿した。また彼れが、其の支部を大阪に新設しようとした時は、懸命に彼れのために努力した。恰度、其の時分、村林天秋が、大阪で毛織物問屋をして可なりに成功して居たので、私は鐵劍を天秋に紹介した。天秋は一度人から賴まれて「宜しい」と引受けると、相當に力を入れる方であつた。彼れは織部周文や、大山松風らを勸誘して、大阪に『晩星』の支部を設けた。それは、明治三十三年の夏頃だつた。

私は、支部の設立のため、大阪の桃谷の家へ歸つて、下阪中の鐵劍に力を添へた。私の祖母は、私の歸省を非常に喜んだ。私は健かな祖母を見ると、少年時代に歸つたやうな歡喜の念で胸が滿たされた。始めて歸つた夜は、祖母のために酒を買つて、叔母の手料理の肴で、貧しい晩餐の食卓を圍みながら、祖

母の話を楽んで聞いた。

□

鐵幹は、支部設立と共に、歌會を濱寺に開いた。其處は、堺の詩人河合迷醉が「高師の濱」として、度々長詩のうちで歌つたところであつた。廣い松原を前に靜かな波が、囁くやうに、美しい岸をそつと洗つて居た。左様した背景の中に新しく建てられた料亭で晩星社の歌會が始めて開かれたのだ。神戸の廣瀬奇骨、大阪の大山松風、山口登女子、堺の小鳥春子らが、私と共に出席した。

私は始めて春子や、登女子のやうな女流歌人に逢つた。春子は、堺のある菓子屋の娘で二十四五歲位に見えた。顏の色が淺黒くて、別に美人と云ふほどでなかつたが、物の云ひ方などが一體に才氣走つて居て、擧動が、きりつとして居た。登女子は、十九歲位だつた。若狹の海岸に生れた彼の女には、京都の女のやうに、優しくて、美しいところがあつた。

歌會は、晝前から夕刻頃まで續いた。絶えず吹く松風の涼しさに夏を忘れて、靑い海を見ながら、いくらかの歌を作つた。其席上で、豪傑笑ひをして、能く騷いだのは大山松風だつた。鐵幹は、如才なく、輕い洒落を云つたりした。春子は、稀(たま)に奇警なことを云つた。そして歌會を終つて、堺で私等が春子と別れた時、彼の女の紺飛白の單衣と紫繻子の帶とが、長く私の眼に殘つて居た。

私が春子や、登女子を知つたのは、歌會があつた時からではなかつた。大阪の同志の手で作られて居た『關西文學』――それは『よしあし草』の改題したもの――に早くから、春子の歌が出て居た。また登女子は、久しい以前から『新聲』へ歌や小品文などを寄せて居た。かうして、私と彼の女らとは、丸で知らぬ間柄ではなかつた。

私が大阪に居るうちに、春子から二三回手紙が來た。後に『黑髮』の女詩人として、上田敏、森鷗外らに嘆賞せしめたところの春子は、もう其の頃の手紙にも、鋭い才氣の閃きと奇矯な働きとを示して居た。

名に執著はゆめさら〳〵おはさず。いよ〳〵六日七日頃にな
ゝせ給ふとか。近くとも、相見えまゐらす事かたき身をよ
や幾山川のへだてありとも、まさきくとだに承らばと存じな
からも、胸いたき心地するは、女なればにおはすべし。

この月のやがてまどかにならん時
　　百三十里君をこひむとき
姉君のとがめくるしくはなむけに

贈りわづらふ紫リボン
胸よわき女なればと許しませ
調と〻のはぬはなむけの歌

白百合を君手になして浪高き
破にたゝすとよべ夢に見し

山口の君（登女子）御つゝがあらせらるゝと承り、心細く思ひ候ひしが、はやおこたりつときのふ消息ありつうれしと思ひ居候。

いつもながらの御歌の姿高きは人まねならぬ處と拝しまゐらせ候。批評などと思ひもよらぬ事に候へど、山百合の御歌は殊にすぐれて拝し候「ロづけしけん百合の花びら」は「ロつけませし白百合の花」と遊ばしては如何にや。

あなた様の御歌を粗豪體といはゞ、私のは常識欠乏體とや申すべき。神戸の奇骨君より明月の夜に消息せよと申越され候ひしが、舊派の歌人俳人の如き、さるわざとらしき事するは、私きらひに候まゝ、その夜ともならば、

きよき月みせ風流の君などへ
おくる歌なし小鳥香子

と申しやらんと思ひ居候。御歸京遊ばさば、與田野の君へよしなにさきの日のなめげの罪をとりなしは給れかし。迷醉の中に御逢ひ遊はされ候はゞ、よろしく御傳へ下されたく候。

さらば君ゆき給へ、やませ給ふな。後の御さち美しからん事を神守り給へ。

世の人のなさけうき時つらき時
君よゆるさせ文のおとづれ

香子の手紙には眞情と才氣とがいつも溢れて居ると云ふ感じがした。其の後、私が東京へ歸つてから、彼の女が寄越した手紙のうちには「何となく、君病みおはすとのみ思はれて、與田野様にまで伺ひ申すべきかと思ひ居り候をりふし、まこと風めし居給ふとか。母なる人にしか語りしに、アンチヘブリンのみ給はゞいかにと申上げよとなり。われはさることゝ思へど、老ひし人の心のみ傳へおきまゐらせ候。」と記してあつた。

登女子は、一度桃谷の家に來たことがあつた。丸で始めて若い女性と逢つたのであるから、私の胸には彼の女の優しい姿が、強く印象された。けれども見すぼらしい風をして、一向修飾しないで、ごつごつして居た私は、到底女性の愛を得られないことを知つて居た。唯ひとり、胸のうちで、登女子を思つたことがあつた。

東京へ歸つてからも、私は登女子と度々書信を往復した。だが、私は彼の女に戀を話したことは一度もなかつた。彼の女も

亦戀に就ては、一語も記さなかつた。彼の女には、別に意中の人があつたのだ、私と彼の女とは唯同情し合つてゆく間柄に過ぎなかつた。私は彼の女の周圍に彼の女の新しい思想を理解するものがなかつたことに就て、深い同情を寄せた。彼の女は、私が早く兩親や、弟妹に別れて、孤獨の生を送つて居る境涯に同情したのである。私は、彼の女の手紙を見て、却て淋しく思つたこともあつた。其處には、私の核心に深く觸れてくるものが何もなかつた。

　かうして居るうちに、時は流るゝやうに過ぎた。『晩星』に出した春子の短歌は、批評家たちを驚かして、彼の女を鬼才だと云ふものがあつた。春子が、歌壇の新しい女王のやうに輝き出した時、鐵劍と結婚した。それと前後して、登女子も、ある若い醫學士と新しい家庭を作つたと云ふ噂を聞いた。

文壇を聳動せしめた秘密出版の話

　其の時分、私は正式に文學的教育を受けるため、早稻田大學の文科に入つた。それは、東京專門學校が、早大となつて、始めて大學部文科を設けた時であつた。愈々、學校へ出て見ると、私は寧ろ失望した。けれども坪内博士の講義を聞くことが出來るのを幸福に思つた。其の講義から、私は時々新しい暗示を得た。

　私は新聲社へ、日曜日に時々出かけた。そして社の二階で、每月出る小説や、單行本の合評などをした。時には、南陽らと歐洲文藝について研究したりした。國木田獨歩、德富蘆花、押川春浪、小栗風葉、菊池幽芳らの人々が、社へ來たこともあつた。

　私は獨歩と始めて土藏造りになつて居た社の薄暗い二階で逢つた。彼れは當時、貧乏に惱んで居たので、古びた洋服を着て居た。私等と話す時の彼れの聲は冴えなかつた。けれども彼れが、硯友社の首領尾崎紅葉を非難する時は、熱力にみちた口吻で、私等を強く動かした。

「紅葉の書くものは造花のやうなものだ。彼れの小説は手先ばかりの技巧から成つて少しも眞實がない。」

　彼れは、燕麥を喰べながら、紅葉を葬らねばならぬことを主張した。私が獨歩と逢つたのは、前後唯一回だつた。それより、私は彼れの姿に接しなかつた。

　其のうち『新聲』が二萬余の讀者を得て、全盛の頂點に達した時、突如として、文壇の耳目を聳動した一問題が起つた。それは『文壇照魔鏡』事件で明治三十四年三月頃のことであつた。『文壇照魔鏡』は何人が書いて、何處で發行したか分明らない秘密出版の小冊子であつた。そして其の書の第一編には、與田

野鐵劍の放恣な素行を彈劾する旨を記して、全紙痛烈な語を以て、鐵劍を攻撃して居た。それを何處からか包裝して、文壇諸名士の許へ寄贈した。私の許へ來たのには、横濱邊の郵便局のスタンプが捺されて居た。それが文壇のゴシップの種となつて、一時皆が騷いだ。

「一體、誰れがそれを書いたのか」

と云ふことが一つの問題になつた。また『照魔鏡』によつて、鐵劍の人物を知つたものは頻りに眉をひそめて、非難の聲をあげた。鐵劍は、それ迄、時々、彼れと同門の新派歌人として謙虚溫厚、珠のやうな人格者の金田翠園をいぢめたり、彼れに對抗して居た正岡子規一派に當りちらしたり、最も深い同情を彼れに寄せて居た私の文章に對して、月の舍とか云ふ歌人が非禮のことを『晩星』へ書いて寄越した時も、冷かに私を見て居て、辯護しなかつたりした彼れも「照魔鏡」の不意討ちには、度を外して狼狽した。或人は「小策士が尻尾を出した」と云つて苦笑した。

鐵劍は、血眼になつて『照魔鏡』の筆者を探し出さうとあせつた。中には、鐵劍にバイロンの素行のことを話して、暗に彼れを日本のバイロンだとして、鐵劍を煽動したものもあつた。其の時、鐵劍が眼を付けたのは、新聲社であつた。

其の頃『新聲』と『晩星』とは、既に競爭の形にあつた。此の二つの雜誌は、淸新な體裁や、いくらか藝術味のある編輯法などの上に能く似たところがあつた。そして若い人たちの間に多く讀者を有するところも似て居た。『新聲』では、いつも烈しく風紀刷新のことを叫んだり、鋭い人物評を掲げたり『三十棒』と題して痛烈な罵倒を社會や文壇に向つて浴びせかけた單行本を出したりして居たので鐵劍は、漠然、其處に疑ひを挾んだ。

晩星社と新聲社との間に起つて、私は一番迷惑した。私は『照魔鏡』を見た時、鐵劍が左樣した非難を受くべき暗い影を有して居たことを心から悲んだ、不滿に思つた。だが一面に於て、私は暖い同情の眼で彼れを眺めて彼れの自省を切に祈つた。そしてたとひ、鐵劍にいろいろの非難すべきことがあつたとしても、秘密出版によつて、匿名で彼れを非難することの不公明な遣り方を快く思ふことが出來なかつた。私が鐵劍に逢つた時、左樣した考へを卒直に述べて、彼れを慰諭した。だが鐵劍は、私が『新聲』の同人で、平生、鋭い筆を以て、文壇や、社會の暗面を烈しく攻撃して居るのを見てるので、却て私を疑ひ深い眼で眺め出した。また私の事を彼れに讒誣したものもあつた。」

□

それから、間もなく『曉星』で、鐵劍が『文壇照魔鏡』について揣疏した時、苦しまぎれに私を其の筆者と斷言した。私は始めて私の至誠に對して、殘酷な鞭を以て酬はれた。『曉星』發刊當時、彼れが私に向つて「自分は爾後公明な道を行く」と告白した態度とは、丸で打つて變つたのは、ひどく驚かされた。私は何だか賣られた氣がした。そして鐵劍が、先づ自省しないで、自己の存在のため、何の確かな證據もないのに彼れの事業に誠をつくして來た私を犠牲とするのを何とも思はない冷めたさを始めて知つた。私はいつも、正面から彼れを見たのを悔ゐた。秋雨が、鐵劍について疑ひを抱いて、私に警告したことがあつたのを新たに思ひ出した。私は嚇と激昂した。

「鐵劍は『曉星』を出す始めに素行上、人の噂に上るやうなことは斷じてしないと私に盟つたではないか。而も今度、何の證據もなしに『照魔鏡』の筆法の鋭さが、いくらか私の筆に似て居ると云ふ丈で、此の兩三年、彼れのため、骨身を惜まないで、懸命につくした私を他に賣り、公然、私を讒誣し、中傷し、辱かめるとは何事だ。彼れは盲目であるまい。小策士と一部の人に云はれて居るほどの彼れに私の誠實と愚直とがわからぬ筈はないのだ。私の性質をよく知つて居て、私を烈しく鞭つとは何事だ。それは、彼れが精神的に未だ正しく、目醒めないからではないか。のみならず『照魔鏡』の記事の十分一だけを事實だと見ても、彼れの人格には疑ふべき點がないとは云へない。聰明で考へ深い秋雨が彼れに接近することを力めて避けて居たことは、至當のやうに思はれる。私は最早默つて捨てゝ置けない。私は進んで鐵劍の反省を求めなければならぬ。文藝の上から、多くの若き人々を指導してゆく彼れの責任を自覺させて内部からの肅正を促がさねばならぬ。」

私は、かうした信念から『文壇照魔鏡を讀みて江湖の諸氏に愬ふ』と題した一文を『新聲』四月號で發表した。そしてそれには、河野淸之助と明かに私の本名を記して、責任の所在を明かにした。此の本名を出すことについて、友人中に法律知識を持つて居た人たちは、心配さうに固くそれを留めた。

「先方は策略本位で、最初から少しも誠意がなくて、君のやうに眞劍になつて『曉星』のためにつくした人を冷酷に犠牲にしたのだから、今度、君の公明な直言を見ると、或は名譽を毀損されたとして、法廷に訴へ出るかも知れない。左樣なると、君は一層迷惑しなければなるまい。だから、せめて匿名にして出したらどうか。」

から親切に忠告したけれども、私は斷乎として、本名で、鐵

劍の反省を促す一文を公にした。それは、私の主義に基づくのであつた。私は匿名で、人に反對したり、攻撃を加へたりするのを一個の罪惡だと信じて居た。またそれは男子として卑怯の所爲だと思つて居た。恰度、暗討ちと同じ事だと見た。それで私は、たとひ、鐵劍が私に向つて、誹毀の告訴を提起しようとも、私は毫も恐れないと思つた。寧ろ私は潔く私の信念に殉しようと決心した。

「私は社會のために鐵劍を戒め且つ自省を促がすのだ。現代の詩人中には、放恣、耽溺は未だしも、無垢の處女を汚して恥ぢないやうなものが往々ある。詩人の名にかくれて、不正を働くやうなものもある。廣くそれ等の徒の覺醒を求めることは、決して無意義ではない。社會のため、極めて必要な提言だ。」

私は左樣した信念によつて、社會の風紀を肅正しようとする點に起つて、率直に公明に私の考へを述べた。それは非常に强い反響を起した。「晩星」はそれがため、大分打擊を受けたといふ噂が高まつた。

法廷で勝敗を爭ふた話

四月中旬頃のことである。ある夕刻、私が其の頃、新たに轉居したばかりの早稻田の下宿へ威めしい官廳の提灯をさげて小倉服の小使が來て、宿の主婦に何か一片の書付を渡して去つた。私は晩餐の膳を前に箸を執つて居たが、頰の赤い主婦が、障子をあけて、眞青になつて、私に其の書付を渡した時、私も何事であらうと吃驚した。能く見ると、それは「明日午前中に東京地方裁判所檢事局へ出頭せよ」との命令だつた。

私は生れて始めて左樣した召喚狀を手にしたのである。若しそれが何か不當なことをした爲めに呼ばれたのなら、私は强い不安に打たれねばならなかつた。けれどもそれは『文壇照魔鏡を讀んで江湖の諸氏に愬ふ』と云ふ一文のために、鐵劍が法廷へ訴へ出たのであらうと推察したので、別に驚きはしなかつた。だが、それを聞いた同宿の大石赤麟や、近所の喜久井町の下宿に居た小村秋雨などは非常に心配して私を訪ふた。そして私を慰めて一層勇氣付けてくれた。私は心から、彼等の友情を感謝した。

其の翌朝、私は檢事局へ出頭した。私は大分待たされてから、ある靜かな、冷めたい感じのする一室へ導かれた。其處には、椅子によりかゝつて居た若い檢事が一人居た。彼れは私に對して、與田野鐵劍が、誹毀の告訴を提起したことを告げた。

「一體、あの文章はどうした積りで書いたのか。」

と檢事は、割合に物柔かに私に問ふた。私は丸で法律知識を持つて居なかつたが、私の所信を卒直に述べるについては當の苦澁を感じなかつた。私は撿事に向つて、現時の風紀が頽廢しつゝあることや、詩人の名にかくれて、處女の節操を弄ぶやうなものが往々あることを述べ、廣く社會のために、左樣した弊害を除きたいと云ふ至誠の下に執筆した心持を話した。撿事はぢつと聞いて何か書き留めた。

「ではそれで宜しい、お歸りなさい。」

と撿事が云つたので、私は嚴めしく、冷めたいやうな撿事局を出た。

それから一週間ばかり起つと、愈々誹毀事件の公判が、地方裁判所の法廷で開かれた。私は、發行署名人であるところの赤根六崑と一緒に朝早く裁判所へ至つた。其の日は『晩星』派の策士や、聲援者が控室の一隅に陣取つて、私等を睥睨して居た。また私に共鳴した關谷紫園や、内田朝波を始め、社中同人の群が一方に陣取つて居た。紫園の手には、私の勝利を祈る花束が目さめるやうに匂うて居た。朝波は、桂の冠に擬した花輪を持つて居た。それ等の花束や花輪は、私へ贈られた。

法廷で、公判が愈々開かれようとする少し前に『晩星』の一策士は、私の方へつかつかと歩み寄つた。

「河野君、君は玆で與田野君に謝罪した方が宜いよ、東京の五大新聞や二三の雜誌へ謝罪廣告を出せば、それで簡單に濟むぢやないか。此で痩我慢を張ると、君のためになりませんよ。二週間以上、牢へぶちこまれて臭い飯を喰べねばならぬからね。」

と私を威嚇した。彼れは、かう頭から敵を抑へ付けるなら愚直な私が直ぐに鐵劍に降服するにちがいないと見くびつて居た。ところが、私は固く其の交渉をはね付けた。

「左樣した威嚇の前に屈するのは、信念のない男のすることだ。私は信ずるところがあつて、鐵劍の『照魔鏡』事件を機會として、風紀肅正の叫びを發したのだ。牢獄へ投ぜらるゝのを恐れ乍ら書いたのではない。正義そのものゝために書いたのだ。正義のためなら、俺は地獄の底迄も行く。」

と思つた。そして私と一緒に居た赤根六崑も矢張、同樣の考へで、私と運命を共にしようと強く決心して居た。

□

やがて法廷は開かれた。

私は大阪に居た時、控訴院の給仕を勤めたことがあるので、法廷や、判撿事の樣子は、飽くほど見て居た。だが、赤根と被告

席に着坐した時は、何となく、異樣な感じがした。私等の側には、法服を着けた原被兩告の辯護士が一人づゝ控へて居た。

其のうち、判檢事が扉を排して、粛然と現はれて、壇上の席に着座すると、今まで囁き合つて居た傍聽者は、水を打つたやうに靜まり返つた。私の眼には、裁判長の温厚な重味のある樣子が映つた。間もなく、簡單に私等の身元調べがあつてから、原告の辯護士が起立して私の文章について非難を加へた後、新聞雜誌へ謝罪廣告を出すやう、其の費用何百圓かを要求した。

次ぎに私等の辯護人となつたN氏が起つて老練な雄辯で、私等の公明な精神について、明快に論述した。彼れは『照魔鏡』を中心として起つた論議の多くが、鐵劍に非難を加へて居ると云ふ事を一々『新公論』其の他の新聞雜誌の切拔きによつて證明して、被告が鐵劍に警告を與へ、嚴正批判を加へたのは至當である。それは、私心から出たのではなくて、社會風紀の矯正と云ふ大きい目的のためにしたのだと云ふ旨を痛切に論述した。そしてN辯護士は、聲を勵まして、

「鼠小僧を以て泥棒と云ひ、石川五右衛門を以て泥棒だと云つても決して誹毀と云はれない。況んや鐵劍の罪惡は、社會が認め且つ鐵劍自身も認めて居るのである。それに對して制裁を加ふるに何も不思議はない。」

と激語した。

それから、檢事の手短かな論告があつて、輕い求刑をした後、裁判長は靜かに口を開いて、原告の辯護士に「つまりこれは、謝罪文を新聞雜誌へ出す費用を請求すると云ふわけですな。」と問ふた。

「はい、左樣です。」

と辯護士は輕く答へた。かうして、其の日の公判は終つた。『新聲』派の人々は「あの樣子では、勿論わが黨の勝利だ」と云つて、何れも凱歌をあげさうな勢で、裁判所の門を出た。

其の後、間もなく、私等についての宣告があつて、證據不十分と云ふ理由の下に、私等は無罪になつた。此の事件は、かうして、私等の勝利に歸したが、其の苦い印象は、終生忘るゝことの出來ないものであつた。それは私が鋭い直言を以て文壇や社會と戰つて多くの敵を作つたとや、愚直のために余りに人を信用し過ぎたのが一原因となつて居たにちがいないが、それにしても、余りに殘酷な報酬であつた。ユダに賣られたキリストのやうに偉大な心の所有者でなければ、かうしたひどい目に逢つて、人心の險惡測り難いのに絶望して、慨き、憤り、咀はないわけにはゆかなかつた。私は自分の正直一圖なのが悲しかつた、迂愚で人に欺かれ易いのを悔いた。自ら恃んだ誠實は他

の土足に踏みにじられたのだと云ふ感じが沁々身にこたえた。此の事は、私の性情の上に一時、暗い影を投げかけた。

スツルム・ウンド・ドラングの話

誹毀事件が起つた前後は、高山樗牛らの鼓吹によつて、文壇の一角に個人主義、天才主義を高調したところのニイチエ思想が蔓延し始めて居た。それに續いて『美的生活』の提唱や『見神論』などが起つて、旺んに論議された。文學の上からも、思想の上からも、スツルム・ウンド・ドラングの時代が來た。

私等は、在來の文學や、倫理や、哲學、宗教に對して滿足して居なかつた。もつと意義あり、新生命あるものを頻りに求めて居た。かうして時代精神は、烈しく動揺しつゝあつた。樗牛や、梁川などは、其の急な流れに觸れた若き時代の代表者だつた。そして彼等の說を見た青年のうちで、より多く文藝に親んで居たものは、ニイチエ思想の方へ赴いた。より多く宗教に親んで居たものは『見神論』の方へ至つた。かうして當時の若き群は、其の前途に新しい意義ある生命の路を追ふた。『新聲』同人の一人、正田南陽は、星亭の死に少し先立つて『時代思想の權化』と題した一小冊子を出して、星亭が徹底個人主義者であることを論じた。

其の時分、私は大阪から田島の叔母を迎へて、早稲田南町に小さい家を始めて持つた。私は始終、この叔母を私の母のやうに思つて居た。ところが、田島の家は、島次郎の放蕩のため、すつかり零落したので、叔母は、其の身を寄せるところがなくなつた。私は、叔母の窮愁を見かねて、急に東京へ迎へたのである。私は少年時代に叔母から受けた恩義に聊かでも酬ひることの出來る日が來たのを心から喜んだ。

私等は、二疊、六疊の二間しかない狹苦しい家に居た。けれどもそれは、少しも苦にならなかつた。貧しい乍らも、叔母と一緒に質素な食卓を圍んで、朝晩、いろいろの話をするのが私に取つては快かつた。叔母も亦長い間、義理の子であつた島次郎のために苦められて居た時代よりも、淸貧のうちに平和に暮してゆけるのを喜んで居た。

私は讀書のほかに、友人と話すのを樂んで居た。私の家に近いところには、秋雨、醒夢らが居た。醒夢は其の時分、K館を出て、新たに早大の國語漢文科に入つた。それに、堺から上京した河合迷醉や、靜岡の方から來た鹿野天醒らが、早大の聽講生となつて、矢張私の家に近いところへ定住することになつた。私は暇があると、時々彼等を訪ふた。

私等の交友の中で、最年長者は河合迷醉であつた。彼れは小

鳥春子と共に堺が生んだ代表的な詩人で千葉浩濤らと『文庫』に執筆して居た。其の時分、三十歳位になつて居た。私は彼れを見ると、何となく、イギリスの詩人ワーヅワースを連想した。彼れは、長い間、呉服屋の主人をして居たのだが、途中商賣をやめて、全く詩の世界に沒頭するやうになつた。天醒は、彫刻に趣味を持つて居て、何處かに名人肌らしいところがあつた。彼れは露伴氏の『風流佛』などに共鳴して、一時、彫像師とならうとしたことがあつた。

私等は、隔月一回位、牛肉會を開いて、隔意なく話し合つた。かうした時に、一番よく酒を飲み、肉を喰べ、盛んに騷ぐのは醒夢だつた。

「をい、天神樣!」

と云つて、鼻下に少しばかり髯のある迷醉に戯れた。

「法螺吹先生!」

と天醒が醒夢をひやかした。

「仁王閑、得意の詩吟をやらないか。」

と醒夢は、仁王のやうにぬつとして居た秋雨に聲かけた。

「俺は出來ない、詩吟は河野の方がうまい。」

と秋雨は、私の方へ油を向けた。

「まあ、醒夢からやれ。」

と私は逃げた。醒夢は、賴山陽の『本能寺』の詩を吟じて、起ち上つて舞つた。

私等は、左樣した無邪氣な戯れのうちに、牛鍋をつゝいて、陶醉の快さに浸つた。そして食後、醒夢は「何か甘いものが欲しい」と云つて、定例のやうに砂糖を嘗めた。そして番茶をがぶ〳〵飲んだ。

□

其のうち、夏季休暇がくると、秋雨は北海道へ、天醒は房州へ、醒夢は伊勢の生家へ、迷醉は奈良へ、私は叔母と共に大阪へ歸つた。私は其の一夏をドイツ語の研究のうちに送つた。早大では、大學部文科の第一期生から、英語のほかに、必修語學として、更らにドイツ語を加へた。ドイツ語を好まないものにはフランス語を授けた。私はドイツ語の方を撰んだが、講師が急激に私等の語學を進歩させようとして、無暗に注入した爲め、すべてのものが困つた。

後にロマンチストとして文壇へ出た大川白明は、矢張、ドイツ語組の一人だつたが、頻りにドイツ語無用論を主張した。

「僕等は英語さへ知つて居ればそれで十分だ。ところが、其の英語さへ未だしつかりした素地が出來て居ないのだ。其處へ

無暗にドイツ語を詰め込まれても消化し切れないではないか。それに英語にもせよ、ドイツ語にもせよ、文學上、創造の天才を作る能力は丸でない。外國語に上達したからとて、猿眞似が最上の到達點だ。」

と白明は、激昂して、教場で反抗の氣焰を揚げた。私もある程度までは、白明に共鳴した。だが、同級生の多くは、矢張、ドイツ語の必修を正當だとして、白明の言葉に耳を傾けやうとしなかつた。かうしてドイツ語は、矢張廢止されないので、私は大阪へ歸つてからも、毎日、鰡の子のやうな歐字と睨み合つた。

祖母は、私が一人前の大學生となつて居ても、矢張小供のやうに思つて居た。私が外出する時は、羽織の襟が折れて居ないとか、帶の結び方がよくないとか云つて、祖母自分で、それを直してくれた。私は堪らなく、うるさかつたけれども、祖母の深い愛を思ふと、どうも怒るわけにゆかなかつた。

祖母は、阿波座時代に大分長い間、貧乏のどん底に居て苦んだ。桃谷へ來てからも、足らぬ勝ちであつたが、それでも、阿波座時代のやうな事はなかつた。それは私の従妹美代が、もう十四歳になつて、いくらか家事を手傳ふやうになつた上に、叔父は郵便局で叔母はある工場で働いたので、どうにか衣食にだけは困らぬやうになつて居た。そして祖母は、三日目か四日目位に二合の晩酌を樂み得る丈の余裕を得た。

だが、祖母の晩酌は極めて質素なものであつた。食膳には、二三種の蔬菜が列べてある丈だつた。酒も祖母が近所の酒屋へ徳利を提げて、自分で買ひに出かけたものだ。それは並等で質が余りよくなかつた。それでも、祖母は滿足して居た。そして小盃に注いだ酒をうまさうに、ちびり〳〵飲んで居た。もう祖母は七十歳を越えて、前歯と奥歯とが一本宛しかなかつたが、澤庵漬や、蒲鉾などを手で引き割いて口をもぐ〳〵させ乍ら喰べた。

そして少しほろ醉ひ加減になると、私等の顏を見て、にこにこした。

「清之助も大きくなつたし、お美代もこんなに成人したよつて、こんなに嬉しいことはない。私は毎日、天照大神さまや、土佐堀の御稻荷さんの方を向いて、家内安全を祈つてるのや。」

と云つて、ぐつと一杯飲んだ。

祖母が酒を飲む時には、いろ〳〵の癖があつた。いつも、酒がこぼれても宜いやうに、新しい手拭を四角に折つて、膝の上に載せて居た。そして誤つて、酒を膳の上にこぼすやうなことがあると「勿體ないことや、捨てゝ置くと、罰が當ります」と云つて、膳の上をぬらして居る酒の雫を綺麗に甞めた。祖母は久しい間、貧しい生活を續けて來たので、一粒の米、一片の菜

樂、一滴の酒をも輕忽にすることが出來ないものだと深く思ひ込んで居た。それで粗酒でも粗食でも、深い感謝の念を以て、味はねばならぬと云ふ一個の實踐哲學を抱いて居た。

叔父は昔の通りの善人だつた。そして何の野心も持たないで、毎日版で捺したやうな生活を繰返して居た。叔父は根氣よく、郵便局へ通勤して、休日には、寄席へ出かける位のものだつた。他に何一つ、贅澤なことをしなかつた。またする丈の余裕がなかつた。ある日、叔父は、郵便局の歸途、肴の干物を少しばかり求めて歸つた。それを燒いて、晩餐の時に喰べるのを最上の樂みのやうにして居た。時には、緣日の屋臺で、壽司を買つて歸つて皆のものに頒つて、うまさうに喰べながら、無駄話をするのを喜んだ。叔父は、淸貧を天命だと思つて、少しも、それを悲まなかつた。貧乏のうちに、かすかな樂みを見出した。

だが、私はもう貧乏には飽いて居た。絶え間のない窮乏は、始終私の心をいら〳〵させて、不安と焦慮とを感ぜしめた。そして臨時に金が要る時は、毎日、朝から晩まで、原稿を書き續けねばならぬので、疲れることが多かつた。私は日毎に私の心身が烈しく消磨しゆくやうに思つた。それに思考力や、記憶力も烈しく減退して、空虚な激情のみが、私を支配することがあつた。ドイツ語を覺え込むのにも、私は可なりに苦んだ。

「せめて私が眞實な戀の相手を得たら、これほど淋しくはあるまい。」

私はかう思つて見たけれども、左樣した戀が得られさうにもなかつた。曾て私の片戀の對照となつた隣の娘は、矢張家に居て、大分大きくなつて居た。従妹の美代よりも二歳ばかり上だと思はれた。私はいつも、彼の女の姿をちらりと見たり、其の美しい聲を聞いて居たが、どうも、私から進んで、彼の女と接近する氣になれなかつた。私は到底、片戀で終らねばならぬのか。

(第三) 戀の渦巻から離婚の悲みへ

新婚前後の話

其のうち、暑中休暇が盡きやうとしたので、私は叔母と共に大阪を出發した。其の間際に濱田の叔父が、前非を悔ゐて私を尋ねて來た。そして一尾の大鯛を私に呉れて、前途を祝福した。私は歡喜に滿ちて、東京へ歸つた。

東京では、富久町のある寺を借りて、其處で山井一秀らと僧房生活の禪味と法悅とを味つた。其後、私は若松町に轉宅したが、頻りに家を能く移した。若松町では、土佐出身の酒豪、民

田菊水と小さな新しい家の二階で叔母の手料理を肴に獨酒を痛飲した。最後に私が落着いたのは、今の夏目漱石邸の附近にあつた新築の瀟洒な家であつた。それを私は小村秋雨と一緒に借りたのである。

秋雨は、其の頃、哲學科三年になつて居た。彼れは同志のうちで、一番早く成功した。それは『大毎』の懸賞小説に應じた作品『無果花』が、第一等に入選して、頓に新進作家中の花形となつたからだ。彼れが、多年培つて來た藝術的素質と久しく沈潜して研究を積んだキリスト教思想との合體は、自然彼れを新しい家庭小説、宗教小説の作家たらしめた。それで秋雨も、體面上もう下宿屋生活をやめねばならぬ事になつて、私と一緒に世帯を構へたのである。

其の時分、秋雨や私をよく尋ねて來たのは、早稲田文科を出たばかりで、未だ『何處へ』の傑作を書かない前の正倉赤鳥であつた。彼れは、當時『讀賣』に居て『よみうり抄』の材料を毎日あつめて歩いて居た。其の頃から彼れは、幻滅的な虚無的な人生觀を抱いて居たやうに思はれた。打見たところ、何となく、すね者、偏人と云ふやうな感じがした。けれとも岡山人のことだから、外面は、何處となく、如才がなかつた。時々、輕い皮肉を云つて、むつゝりして居た秋雨を笑はせた。

赤鳥は、いつも『よみうり抄』をあつめて歩くことについての不平や愚痴をこぼして居た。

「こんな仕事には、何の興味もない。然し今やめると、直ぐ飯が喰へなくなるからね。」

と退屈さゝに欠伸をしながら云つた。そして時によると、彼れが乘つて來た人力車を半日も門外に待たせて置いて、私等と雜談に耽ることがあつた。彼れは氣が進まぬのを我慢して、欠伸のうちに、社の仕事をして居た。

秋雨は、幸福な日を送つて居た。『無果花』によつて、文壇へ出ると、四方から彼れに執筆を依頼するものが續いた。そして彼れの創作熱が將に高潮に達しようとする時、彼れは優等の成績で、早稲田の哲學科を卒業した。其の時分、彼れは『密航婦』を書き、脚本『司法大臣』を書き、其の他いくつかの短篇を書いた。彼れの勢は、滿帆に風を孕んで、大江を下る巨船のやうであつた。

やがて秋雨の新婚の日が近付いた。青春時代に誰れの心をも強く打つのは新婚だ。彼れは、あるキリスト教信者の媒介によつて、彼れと同じ信仰を抱いて居た閨秀音樂家琴子と結婚することになつた。琴子は、二十五歳位の美人で、女子高師で音樂を教へて居た。新進作家中の花形と云はれた秋雨と女流音樂家

として名ある琴子との新婚は、早稲田邊の文士仲間で、ゴシップの種となつた。

□

秋雨の結婚式は、本鄕壹岐殿の會堂で靜粛に行はれた。秋雨は、其の日、綺麗に髯を剃つて、新調のフロックコートを着て、見違えるやうに、若々しくなつて居た。花嫁の琴子は島田髷に結つて、目ざめるやうな打掛姿で、長く裾を地に引いて居た。愈々午後四時頃式が始まると、A牧師は、新郎新婦のために祝禱を捧げて、二人に永遠の愛を盟はせた。それが濟むと、彼等は直ぐに新婚旅行のため、箱根へ赴いた。それは月が冴えて居た夜だつた。

箱根に居た秋雨からは、長い手紙が私の許へ屆いた。それには、美しい新婚の夢に醉ひつゝある彼れの心境がはつきりと出て居た。

（前略）函根山中の冬籠り、實に人寰を絶す。溪韻は天の妙筆の響にあらずや、松籟は無絃の琴の音にあらずや。山は高く聳え、月は小さく冴え、欄頭風無くして、橋上人を見ざる處、椅子に凭れるものは彼の女と吾とのみ。ヴアイオリンの響きは忽ち絹を擦り、金を磨するの音を傳へて讚美の歌は幽韻縷の如く、絶えず哀婉咽ぶにも似たるものあり。「別有天地非人間」と新婚は實に樂しきものぞ！（下略）

秋雨は、かうして得意の一週日を送ると、東京へ歸つて、本鄕駒込邊に新しい家を構へた。其處で幸福な新しい春を迎へようとして居た。そして私の早稲田南町の家へは、下宿から醒夢が引越して來た。私は喜んで彼れを迎へた。

醒夢と私とは、未だ前途が、どうなるのかはつきり分明らなかつた。互ゐに先づ學校を卒業すると云ふことが、一つの目途だつた。私は當時、空しく地方青年に虚名を讚美せらるゝのみで、硯友社派や、赤門派からは、ひどく睨まれて居たので、新聲社以外からの收入は殆どなかつた。

貧乏、不平、寂寞と云ふやうな、どれもこれも、私の心を腐らせるやうなものが私を取卷いて居た。戀を求めて戀を得ず。功名を追うて功名を得ずと云つたやうな物足りなさが、私をいつも苦めた。私は不知々々、自棄的となつた。私は叔母にかくして、ある夜、そつと新宿の女郎屋へ出かけて、始めて私の童貞を破つた。最初、私は女郎屋からの歸途、どんなにそれを後悔したか知れなかつた。今まで清く身を保つて來た誇りが僅かに一夜のうちに破られて了つたのだ。私は、二三日、その事を考へて良心の呵責を感じながら、鬱々として樂まなかつた。

たが一週日も經つと、私はもう懺悔の心がうすくなつて居た。そして月が朗かに空に澄んで居た夜に、不圖何心なく、洲崎へ出かけて見た。其處で私は再び遊蕩の味を覺えた。若しそれが叔母にわかると、どんなに心配するかわからぬと思つたので、妓樓に一泊しないで、洲崎から早稻田まで、月を踏んで歩いて歸つた。家へ着いたのは翌日の午前二時頃だつた。

叔母は、未だ私の秘密を知らなかつた。私はそれを宜い事にして、一週一度づゝ、深川へ通ひたいと思つた。けれども衣食だけにすら追はれて居たから、素より遊蕩費の出やう筈がなかつた。と云つて物固い秋雨にそれを話すことも出來なかつた。私は失望した。そして淋しくて堪らなくなると、未だ宵の中でも、頭から、すつぽり蒲團を被つて、早く寐た。

醒夢は、また別のことで、うんうん苦んで居た。彼れは、故郷の兩親へ毎月若干の養老費を送るほかに、自分の學費をも稼ぎ出さねばならぬので、學校から歸ると、雜誌や地方新聞の原稿を書き續けた。彼れは非常な早筆だつた。十五枚や二十枚位の原稿は一夜のうちに書きあげた。そして一方では、學課の下調べや、復習をした。彼れは大抵、午前二時近くまで、讀書したり、執筆したりした。朝は九時か十時頃に起きた。かうして間斷なき努力の結果、彼れは、烈しい神經衰弱に罹つた。時々、幻覺のうちに幽靈を見るやうなとがあつた。彼れは毎日、亡靈に憑かれたやうな顏をして居た。

其の後、日露の國交が破裂して、戰爭が始まると、醒夢は、輜重輸卒として、滿洲の野に赴くことを命ぜられた。彼れは、一切の事を私に托して、東京を出發した。私は一種悲壯な感じを抱いて、彼れの出征を見送つた。後にひとり取り殘された私は、叔母を大阪へ返して、鶴卷町にあつた下宿へ移つた。

「愈々俺は元の孤獨に戻つた。」

私はかう嘆息した。

自己革命についての話

日露戰爭は、日本の運命を賭したばかりでなく、東亞全體の運命をも合せ賭した空前の大戰である丈に私たちの關心も亦大きかつた。私は、毎朝、新聞がくるのを待ちかねて、戰報に注視し、日本の勝利を心から祈つた。そして開戰の序幕にわが水雷艇隊が、敵艦『パルラダ』『レトウヰザン』『ツエザレウイツチ』に致命の打撃を與へた勝報を得て踊躍した。

だが、此の戰爭は、出版界にわるい影響を與へた。一時、圖書の出版が著しく減つた、雜誌の癈刊したのもあつた。唯戰爭のことを書いた單行本や、雜誌が、僅かに出版界を賑はしたの

みだつた。それに新聲社の內部にも、一つの革命が起つた。社主の加藤紫香が地方書肆から回收すべき金を踏み倒されたりしたので、破産狀態に瀕したのである。それを機會に正田南陽が其の友人らと共に、新聲社の事業を繼承することになつた。私は紫香の失敗をどんなに惜しんだか知れなかつた。だが「彼れも行くところまで至つたのだ」と思つた。

南陽の破壞性は、社を主宰するやうになつてから、著しく現はれた。それに彼れの性格は、ニイチエ思想のわるい方面から影響されて、極端な唯物的なエゴイストとなつて了つて居た。彼れは久しい間、抱いて居たキリスト敎の信仰を捨てた。ピューリタンの假面をかなぐり捨てゝ、美的生活の讚美者となつた。謙遜とか友情とか報恩とか云ふやうなものを寧ろ卑むやうになつた。

私は思想上のエゴイストとは、或は合致したであらうけれども、それを實際の上に移して、すべて『新聲』同人を自己の犧牲としなければやまない南陽の態度や、私への忘恩の振舞には、強い反感を抱かないわけには行かなかつた。それに當時私の恩師として尊敬して居たある先輩のことを南陽が『新聲』で平氣に惡口したので、私はそれを機會に怫然、社を去つた。私は彼れの暴虐の下に呻吟することを好まなかつた。

それ以來、私はまた生活難に襲はれた。仕方がないので「日露戰爭畫報』などに、時人の傳記や、英米の戰爭小說の飜譯などを寄稿して、やつと生活して居た。私の內部生命の發露でもないものを書いて、僅かな稿料に有り付いて居ると云ふことは、可なりに堪え難かつた。けれども私は、一身の困窮を人に打開けて、其の助力を求めるのを好まなかつた。私は齒を喰ひしばつても、ぢつと我慢して居た。

かうして、僅少な必要の金に私が苦みぬいて居る一方には、戰爭を利用した、御用商人が、不景氣知らずに、少い金で、職工を虐使して、どしどし不當利得をやつて居た。彼等には、戰地に於ける將卒の苦みも戰爭の犧牲となつて失職したもの丶悲みも、筆硯勞働で血汗を絞り出して居る私等の惱みも一向わからなかつた。彼等は傲然として巨大な邸宅や、美しい愛妾を誇り顏に有して、貧乏に泣く正直な罪のない多數人の不幸を冷視して居た。

其のうち、私の窮乏は、益々加はつた。もう學資が續がなくなつて、一時癈學しようかと思つた。そして其の事を小村秋雨に始めて打開けた。秋雨の盡力によつて、私は大阪に居たある文士から、若干の學資を供給して貰ふやうになつた。そして小學時代の同窓の一人であるところの西田も、幾分の助力をして

くれた。かうして私は、途中廢學する運命丈は、やつと免れた。

□

戰地に居た醒夢のことを私は時々思つた。暇があると、彼れの許へ風景や、美人の繪ハガキを贈つた。時には、滿腔の不平や、孤獨感を彼れに打開けた長い手紙を送つた。ある日、彼れからは、悲しい手紙が來た。

（前略）われ病後の經過よからず、再び腎臓炎に罹りて顔面腫張し、全く氣息奄々たらんとす。事によれば入院なり。後送さるれば兄らと逢ふことが出來るならん。若し長官が吾に同情せず、强ゐて尙ほ吾に執務せしめん乎、桎梏は有爲の一青年をして死地に陷らしめん。かくても醒夢は服すべき乎、そは Impossible なり。（下略）

私は多感な醒夢が、灰色の滿洲で、寒暑と戰つた末に、健康を害ねて、今病にやつれて居るであらう悲痛な姿を胸に描いた。吾知らず、涙がぽろぽろ出た。だが、悲痛の底に居るのはひとり、彼ればかりではなかつた。「醒夢よ、君の境遇には、深い同情を寄せる。僕も亦生活苦に泣く不運の子だ。苦しい、實に苦しい。それを君も思うてくれ。」と私は獨語した。そして左様した感じを醒夢の許へ書き送つて彼れを慰めた。

私はもう學校を卒業する時機か、眼の前に來て居たので、それを僅かに慰めとして居た。暇があると、卒業論文「海洋の美學的研究」を書き續けて居た。それを百五十枚ばかりの長さで、やつと脱稿した。間もなく、卒業試驗があつて、私は大川白明、高野塔谷、吉井孤鶴らと共に得業證書を貰つた。それは明治三十八年の夏だつた。私は白明、塔谷と蕎麥屋で祝盃を擧げた。

學校を出ると、間もなく、私の戀愛時代が來た。私は長い間、自分の享樂生活を力めて制して居た。遊蕩しても、半年に二三回位に留めて、自己を放縱にしなかつた。だが、學校を出ると、私の生涯は、籠の中から拔け出た小鳥のやうに、解放の喜びに浸つた。今まで强ゐて抑へ付けて來た自己を思ふまゝに伸張させてゆかうと思つた。

スツルム・ウンド・ドラングの時代に逢つて以來、私の人生觀は、酷薄な人情に刺戟されたのと相俟つて漸次、異端的にならざるを得なかつた。『新聲』に關係して居た時分、私は享樂を抑へ付け、本能を抑壓して、何處までも、ピユーリタニズムに、終始しようとして居た。嚴肅と硬直とのうちに、緊張した意力を以て、社會と文壇の革新へ進んだ。だが左樣した漠然とした思想だけでは、もう滿足することが出來なくなつた。それに今まで正しい道を歩んで、却て人に欺かれたり、裏切られたり、

踏み付けられたりしたので、自己を犠牲にして人のために働かう、進んで世を淸めようと云ふ考へが稀薄になつて來た。

「先づ退いて自己を凝視したい、自己の充實を計りたい。在來の傳習や、範疇のうちに拘泥して居ないで、自己の本性の赴くところに伸びてゆきたい。そして飽くまで靑春の特權を享樂したい。」

私はかう考へた。

「神があるか、神がないか。それが見えるか、見えぬか。肉にゆくか、靈にゆくか、肉靈合致の第三帝國にゆくか、また永劫にわたる眞理の探求、不滅の正義への道、左樣した問題が、私の前に横はつて居ても、今のところ、寧ろそれ等を對岸の問題として置きたい。先づ實人生に於けるあらゆる體驗の累積、それから自然に歸納し、發明し、創造してゆく自己の新しい世界！　それが今のところ、私には一番必要だ。一切の虛僞を抛て！　虛飾を取り去れ！　赤裸になつて、先づ自己が行かうとするところへ暴風のやうに突進せよだ！　その方向は？　戀愛だ。戀愛が、今のところ、私の一番關心する問題だ。それにぶつゝかつて見て、始めて私の新しい生命の曙がくるのだ。

キリスト教に囚はれて了つて居る秋雨や、既成倫理に拘束されて居る醒夢や、日蓮主義を以て私を導かうとする野山などが、何と云はうとも、私は私のゆかうとする所へ行く迄だ。先づ自己に忠實でなければ、どうして、他に對して忠實であり得よう。」

私は又かう考へた。そして先づ何を描いても、憂鬱な靑白い思索の世界から離れて、情感が生きて動く赤い戀の世界へ突入しようとした。當時、私は戀愛の正體や、戀と本能との關係や、左樣した問題を考へて居る暇がなかつた。私が憧憬れて居たプラトニック・ラブの追求に全心を傾け出した。

差當り、私は戀の相手を頻りに物色した。私のやうに丸で親戚を東京に持たないものは其の周圍に若い美しい女性を見出すとが困難だつた。秋雨の妻君のところへは若いピアニストが四五人くるやうだつたが、新年のカルタ會を秋雨の宅で開いた時によく見ると、これと云ふやうな美しい女性が居なかつた。風采が平凡で、冷めたい理智の結晶のやうな女ばかりだつた。私はそれにひどく失望したので、別に自分の力で、戀の相手を見出さねばならなかつた。だが、それが純な處女のうちに容易に得られないのに、私はいらいらした。

秋雨は、左樣した問題については極めて冷淡だつた。彼れは、これ迄私の貧しい生涯に同情し、私の孤兒であるところの淋し

さに同感して、處世の相談相手になつてくれたが、戀愛の問題になると、彼れは見向きもしなかつた。彼れは一種の嚴肅なエゴイストだつた。彼れの仕事をすべての中心として居た。そして仕事のためには何物をも犠牲にしようとする冷鐵のやうな固い、強い意志を以て居た。それで青春の特權として享樂すべき戀愛の美果を彼れは丸で味はなかつた。唯其の妻さへ愛して居ればそれで面倒がなくて宜いのだとして居た。かうした彼れであつたから、私の孤獨や、寂寞や、煩悶の樣子が彼れにわかつて居ても、それを沈靜な讀書やキリスト教の信仰からくる神の愛に浸ることによつて慰めてゆくが宜いではないかと云ふだけで、少しも私の核心に觸れて來なかつた。私には、それが、ひどく物足りなかつた。そして彼れの妻君も私にいくらか同情し乍ら、冷靜に遠くから私を眺めて居た。

戀愛の美酒に陶醉した話

其の後、私はある友人の紹介で、若い女の寫字生を雇ひ入れた。それは、私が學校卒業後、早稻田の下宿から京橋の旅館へ移つてから間もない時だつた。其の女は鶴代と云つて京橋のある町にわびしく住んで居た。彼の女は、運命に咀はれた女だつた。彼の女の父は、某省の屬官で、家は下宿屋を營業して、可なりな生活をして居た。

ところが、鶴代の父が亡くなつてから、突然、火災に罹つて、すつかり家財を燒いてしまつたので、それ以來、鶴代の家は、不如意な境遇に落ちた。彼の女の母は涙のうちに、一家のものを引きつれて、ある家の二階を借りて、貧しい日を送ることとなつた。鶴代は亡父が生きて居た時分の幸福な、美しい夢のやうな日を思ひ出しては泣いた。だが、鶴代は母の胸のうちを察すると、泣いてばかり居られなくなつた。彼の女は、家事を手傳ふ傍ら、裁縫や、寫字などをして、家の生活を助けた。

最初、鶴代が私を訪ふた時は、ほつそり痩せた小柄な身に稍色の褪めた黄八丈の袷を着て、洗ひさらしたメリンスの帶を締めて居た。いくらか貧苦にやつれたらしい憂欝な心持が、眉のあたりに見えて居た。鶴代の容貌は細面で、卑しくなかつた。目鼻立が小じんまり整つて居た。だが淋しかつた。

私は一目見て、鶴代に同感を寄せた。私が最初に東京で始めて得た戀の對象として、彼の女は多少の滿足を私に與へた。だが、其の當座は左樣したことを考へて居る余裕もたかつた。鶴代に逢つて、私の孤獨と寂寞とを時々、忘れることが出來たから、それで宜いと思つて居た。鶴代は、最初から、私に信頼を置いて居るやうだつた。そして私が書いた見にくい原稿を持ち

歸つて、綺麗に淨書してくれた。

それ以來、鶴代は一週に一回位、私の宿へ尋ねて來た。彼の女がくる度に、私は其の貧苦にやつれた姿をいたましく思つた。彼の女は私と話して居る間も、沈鬱な氣分が容易に去らぬと見えて、時々思ひ出したやうに、美しい眉をひそめた。それが鶴代の癖だつた。そして彼の女の弟が眼を病んで困つて居る事、妹が、M呉服店の茶汲女に出て居ることなどを私に打開けた。私は收入の少いうちから、成るべく、寫字に對する報酬を余計に出すことにした。

私は鶴代と次第に親しくなつた。時には、一緒に晝餐を喰べてから、夕刻近くまで話すことがあつた。だが二人きりで、對して居ても、私は少しも、卑しい肉感を起さなかつた。それは、プラットニック・ラブを追求して居た私としては、當然であつたが、一つは、鶴代が瘦せて、乾いたやうなところがあつたからだ。私は、鶴代が、私の戀の對象であるよりも寧ろ妹と思つた方が宜いやうな氣がした。そして一度、鶴代の妹の登美江に逢つて見たいと思つて居た。

ある春の日永に私は反物を買ふについて、鶴代に柄を見立てゝ貰ふつもりで、M呉服店へ一緒に出かけた。其の時、始めて私は、喫茶室で登美江に逢つた。彼の女は、姉の鶴代よりも、二つ下の十七歳で、ぽつてりと肥えて、もつと美しかつた。そして快活な、屈托のない様子をして居た。紡績飛白の袷に赤いメリンスの帶を締めて居るのもよく似合つて見えた。だが、勝氣で人に負けないと云つた様子が、はつきり顔に出て居た。

其の時、私は、登美江と同じ服裝をして居た一人の茶汲女を鶴代から紹介された。彼の女は暖かい南國の女を想はせるやうな感じを以て居た。彼の女の大きな眸は、夢見るやうにうつとりして居た。私を見て、牡丹花が綻びたやうに、につこり笑ふと、何とも云へない柔かい愛嬌があつた。彼の女は富士川咲子と云つて、品川邊から、毎日此へ通勤して居るのであつた。

かうして私は、次第にいろいろの女を知るやうになつた。それから間もなく、ある日曜日に登美江と咲子とが、私の宿へ遊びに來た。私は、登美江を愛したが、より多く咲子を愛した。咲子は、文學が好きで、多感なところがあつた。彼の女の家は、以前、靜岡の有力な資產家だつたが、亡父が商業で失敗した爲め、今は東京へ出て、品川邊の裏長屋で、淋しく暮らして居るのであつた。

「先生、私は一番小說を讀むのが好きですわ。『無果花』のエミヤ『不如歸』の浪子には泣かされました。」

と咲子が云つた。

「小説が好きなのは結構です。だが小説に食傷して、センチメンタルになり過ぎないやうにしたいものです。」

と私は答へた。それから、シエークスピヤの『ハムレツト』や『オセロ』などの梗概を彼の女らにわかるやうに話すと、咲子は、狂亂のオフイリヤにひどく感動した樣子だつた。私も滿足だつた。そして彼女らに洋食を馳走した。

□

其の後、咲子は、M呉服店の歸途、時々私の宿へひとりで來た。彼の女の夢見るやうな大きな眸と快活な悧巧さうな話振とは、いつも私を魅した。私は雪が積つた夜、電燈の下で彼女と火鉢に當りながら、罪のない話に夜のふけてゆくのをも知らずに居たことがあつた。

私はひどく咲子を愛して居た。だが唯一つ大きな不滿があつた。それは、彼の女が物に熱し易い代りに、また直ぐに醒め易いことであつた。私は處女の操を重んじ、其の童貞を尊み、プラトニツク・ラブに終始しようと思つて居たので、熱情と眞實とが、しつかりと持續されてゆく處女を求めて居た。ところが、咲子は、どうも此の要求にはまらなかつた。親み易く、美しい代りに、浮いたところがあつた。私はそれを不安に思つた。

咲子は、其の後、折々、長い手紙を寄越した。其のうちには、彼の女が私への愛に就て記して居た熱切な言葉を見出すことが出來た。私は彼の女の醒め易いことを忘れて、次第に彼の女の方へ心を引き寄せられた。それにしても、彼の女と結婚することに、未だ篤と考へて見なければならぬと思つた。それは、現在の收入では、妻子を安全に養つてゆく見込が第一になかつたからだ。それにも少し咲子と交際を續けて、彼の女の本質を理解したいとも思つた。

ある夜、咲子が私の宿へ來て、遲くなつた時、私は初夏の月光を仰ぎ乍ら、彼の女を電車のところへ送り屆けてゆく途中、彼の女がそれとなく、私に結婚を迫る意味をほのめかしたのをぢつと聞いて居た。だが、私はそれほど、結婚を急ぐ必要がないと思つた。

「もう暫く待つて下さい。私に少し考へがあるから。」

私が、かう云ふと、咲子は、不快な顏をして、もう眼に涙をためて居た。彼の女は、私に嫌はれたのだと早合點をしてしまつたやうに見えた。

「先生が私をお嫌ひなさるなら、これで御別れいたします。」

と彼女は、悲し氣に云つて、足早に電車の方へ急いだ。私は彼の女の余りに性急な態度に驚かされて、ぼんやり彼の女の後

姿を見送つた。私は彼の女が、私の胸のうちを知らないで皮相な誤解をしたのを殘念に思つた。一概に私を冷かな男だと思ひ込んだのを憾んだ。

咲子は、其の後、もう私の宿へ來なかつた。私は淋しかつた。私には、咲子の心持がどうしてもわからなかつた。だが、熱し易く、醒め易い女にちがひなかつた。私は左樣した女と一時戀の熱情に驅られて結婚しても、早く破綻の日がくるにちがひないと思つた。淋しいけれども、今彼の女と手を分つた方が寧ろ幸福かも知れないとあきらめた。

鶴代と登美江とは、尙ほ時々、私の宿へ來た。そして彼の女らに聞くと、咲子は、もうM呉服店を去つたさうだ。何でも、赤阪邊の料理屋へ至つて居るとの事だつた。私は心でそつと咲子のために其の幸福を祈つた。そして一度逢ひたいと思ひ乍ら、空しく、日を過して居た。

其の時分、私は何となく、落着きがなかつた。始終、戀の幻影を追うて居た。冷靜な思索や物をずつと深酷に考察するやうなことが出來なかつた。ロマンチツクな感激と一種の纎細な感覺との世界に呼吸して居た。夜は色彩と音樂の巷へさまよひ出て、美しい夢のうちに時を費して居た。

かうして、私が戀愛の美酒に陶醉して居るうちに、醒夢が戰地から歸つて來て『血汗』と題した從軍記を書いた。秋雨は、新婚當時から豫定して居た歐米留學の途に上らうとして、頻りに其の費用を作ることに熱中して居た。天醒は、日露戰爭の勝利に感激して「それは日本人の自信力を强くせしめたに相違ない。何れ何處からか偉大な天才が出現して、此の千載一遇の文運を背負つて立つだらう。」と緊張した心持を旅中から書いて寄越した。そして舊『新聲』同人であるところの掬露は新聞小說の方で新しい道を見出し、翠園は『片われ月』の時代にくらべて、見ちがえるやうに歌の上に於ける創造の國を造り上げて居た。

醒夢や、秋雨は、私が奔放な生活をして居るのを見て、いくらか心配し出した。『新聲』の寄書家で私の一年あとに早大文科に入つた片垣小紋などが、民田菊水と一緒に私を宿に訪ふた時、私がもう文學から全く離れてゆくつもりだなどと放言したのを聞いて、ひどく私の前途を憂ひたやうに見えた。だが、私は一切、それ等のことに頓着しなかつた。私は最初の考へ通　、自分の行かうとする方向へ暴風のやうに突進しなければやまなかつた。深く內に顧みて、省察すると云ふことを丸で忘れて了つて居た。

「俺はどうせ異端者だ。男子一生の事業とするに足るか、足ら

ないか、頗る疑問とすべき文學よりは、もつと花々しい政治の方へゆくのだ。それと共に社會問題の解決へ急ぐのだ。」

と私は醒夢らに向つて豪語して居た。

最初の結婚に失敗した話

かうして私が深い内省を忘れて、文學から政治の方へ轉移しようとして居た動揺期に私は人生に於ける一大打撃に逢つた。それは『照魔鏡』事件で、烈しく鐵劍と爭つた時よりも、一層私の心の上に激動を與へた。私は自己の浮華な考へから、結婚の上に失敗したのだ。此の事を懺悔するのは、今後、結婚しようとする人々に何等かの暗示を與へ得ると同時に、私が一歩を踏み誤つた悲みの印象を何人にも再び經驗して貰ひたくないと思ふからだ。

明治三十九年春、私が大阪へ歸つて、久振に手土産を持つて、舊師大原秋水を訪ふたのが、私の苦い失敗の序幕だつた。秋水は、私が文壇に一席を占めたことを喜んで、私に早く新家庭を作るやうに勸めた。そして曾て彼れが教へた女のうちに、文學趣味を有するものが居るから、其の女を私の妻に勸めたいと云ふ考へを私に話した。私は稍心を動かした。

ところが、愈々、秋水の勸めた女に逢つて見ると、溫和で實意がありさうだつたが、少し年が多いやうに思はれた。それに容貌が稍老けて見えた。私は、も一度篤と考へ直さうと思つた。秋水には云い難いが、寧ろ最初から辭退した方が將來のために宜いと思つた。私は、それとなく、婉曲に私の心持を秋水に打開けた。

ところが、秋水は、それを皆まで聞かないで何でも私の自由意志を除外して平凡な媒介人のやうに深く將來を考へずに强ゐて此の緣談を纏めやうとした。彼れは、私の友人西川と一緒になつて、頻りに此の結婚の前途が光りに滿ちて居ることを力說した。

「君は未だ若いから、年齡や、容貌のことに拘泥するけれどそれ等は、年を取ると、すべて問題にならなくなりますよ。まあ資産がある家の娘さんで相當實意があつて、文學がわかれば、宜いとせねばなりません。それに新婦となるべき婦子さんは、經濟の方が非常に上手だ。中々のしつかりものだ。此の際、貰はれた方が、君の將來のために宜いと思ひます。」

と秋水は、何處までも私を說き伏せようとした。だが、私は矢張、氣が進まなかつた。

「今、大原先生の云はれる通りだ。まあよく考へて見給へ。君は近き將來に洋行するつもりやろ、それに文學から政治の方

へゆくと云つてるやないか。洋行するのも、政治上で活動するのも金が第一やぜ。そうすると、どうしても、相當の家から嫁はんを貰ふ方が宜いな。雪子さんのお父さんは、ある大きな店の支配人や、君が雪子さんと仲よくしてゆくなら、洋行費位は出してくれるかも知れん。その邊も能く考へて、大原先生の云はれる通りにしたら、どうやね。」

西田は、かう云つて、頻りに結婚を勸めた。洋行！ それは、かねて私の望むところだ。何れにしても、有力な親戚を持つて居ない私のことだ。將來相當の後援者が要る上から考へると、雪子と結婚した方が宜いかも知れない。私の考へは、漸くぐら付き出した。其處へ大原、西田らが再三、私に勸めたので、不圖結婚する決心になつて了つた。嗚呼もう取返しが付かぬ。

かうして私は、間もなく、大阪で雪子との結婚披露をして、東京へ歸つた。そして江戸川の附近に小さい家を持つた。だが、最初の不滿が、何處までも、私に附いて廻つた。雪子にはひどく氣の毒だと思ひ乍ら、私は自棄的になつて、勤先のP社から家へ歸ると、猛烈に酒を煽り付けた。酒の力で、私は僅かに不滿を忘れやうと力めた。それがまたどの位、私の身心を傷けたか知れなかつた。

□

雪子は、略ぼ私の心持を知つた。そして私を慰めてくれた。私が彼の女に向つて、不滿を現はすのを氣の毒がつて居たやうに、彼の女も亦秋水が好意的に無理に纏めた結婚の破綻が、既に眼前に現はれたことについて、私を氣の毒に思ふ色を見せた。私等はかうして互ゐに不幸な物足らぬ日を送るのを悩ましく感じた。そして幾度も幾度も「これではならぬ」と心を新しく持ち直して、雪子と睦じく暮らしてゆかうとしたが矢張、不滿からくる破綻をどうすることも出來ないで、深い溜息をするやうな日が多かつた。

結局、不幸な私等は穩かに相談した上、双方快い諒解の下に三ケ月目に家庭を解散して別れた。この事は、どんなに私の心に深い手傷を與へたか知れなかつた。私は結婚について、自由意志を守ることが出來ないで、徒らに周圍から動かされて、氣が進まなかつた緣談を受け入れたことを悔ゐた。そして何も知らぬ雪子の胸に悲みと悔ゐとを與へたのを非常に心苦しく思つた。嗚呼若き日の惡夢！ 私は雪子に對する義理から爾後一生、獨身を押し續けて、どんな事があつても再び結婚すまいと固く決意した。私は熱から醒めた人のやうに、ぢつと敗れた自

己の姿を凝視した。（完）

附記、本稿は、これで一先づ完結といたします。私の第二の結婚と共に展開してゆく複雜な實生活の時代、友人船田や川田の死、祖母の死、叔母の死、いろいろの窮乏と苦闘、人生の戰場に於てひどく傷付いた私の一家に於けるさまざまの不幸、長男を喪つた飯田町時代、二男三男が前後して病死した辨天町時代のことなどを書いて居ると、もう三四百枚位は、どうしても費さねばなりません。だが貧しい空虚な私の生活記錄をいつ迄も續けてゆくことは、讀者諸氏に迷惑だと思ひますから、他日機を見て、改めて發表いたしたいと思ひます。茲に本篇の完結に臨んで、心から謝意を捧げます。尙ほ以上のやうなわけで下篇の題を『槃楓の世界へ』と改めました。

繪踏

渡邊庫輔

1

愛する者を失ふは哀しく、敬する者を撃つは悲しい。然も、是非それを成さねばならぬに至つては、慘であり酷である。長崎並に諸國の切支丹信徒に對つて、徳川幕府は、かうした場合を示した。すなはち、夫は宗門改である。宗門改は、切支丹信徒並に諸人に對つて、其信仰有無を檢察する方法であつた。寺請證文、囑託金、禁書、起請文、鎖港、穿鑿式、一紙證文、二季屆、繪踏、此九法は宗門改の方法である。

2

南蠻繪、又は、南蠻佛の繪、或は、御影、かうした言葉は、キリストの像であり、サンタマリヤの姿である。後期に至つて、繪板と稱したのも、決して異なつた意味ではなく、等しく是を指したのである。而して、是等のものを下に置き、足を以て夫を踏むを、エフミ、或は、フミヱといふ。

エフミなる言葉は、古くより有、外國の文書も是を認め、專ら民間で用ひられ、フミヱなる言葉は、專ら公間に用ひられた。しかし、確たる區域あつての相違ではない。夫は場合と時期である。

エフミは其儀式の如く思はれ、フミヱは其物件の如く推される。わたしは好んで、エフミなる言葉を用ひやうと思ふ。

わたしは以下に、繪踏、並に、その雰圍氣の情緒を、師匠古賀十二郎先生の教示によつて、書いて置かう。

3

長崎の繪踏は、一月四日にはじまる。先、正月の長崎に就いて、書かねばならない。

年が明けると、西山口の若い衆が、獨特の妙技ともいふべき、チヤウメラを吹き鳴らし、これにシヤギリ太鼓を交へ、松飾立ち並ぶ町々を、流して歩く。チヤウメラは、後轉訛してチヤルメラといふ、一種の長き喇叭である。斯て春陽の氣分は、人の心の紐をとき、暖いふところにとろかして了ふ。

長崎市役所藏本。長崎古今集覽附錄長崎名勝圖繪には、珍らしくもかうした有樣を描き殘した一枚がある。

かくて、諏訪明神にはおかぐらがはじまり、峨眉山上に赤々とした日輪が昇つて、扇嶼蘭館の紅白靑の旗に輝り映え、港の波はゆつたりと打ち返す。それと共に、唐人船のドラの音は、こもる霞の中に迷つて、空高く微音をひく。

この日は、船津や蚊喰原の非人達も、網笠に顔をかくし、その女達は、黑木綿で顔を覆ひ、槌を振りながら、大黒舞や松囃しを謳つて、一軒一軒とたづね廻るのである。これらの中には、烏帽子姿の萬歲なども雜つて居た。

大晦日には、木綿カツパに白木綿の脚絆といふ、異様ないでたちで、貸方までも掛取りした人達も、かうした騷ぎには、もはや目を覺さなければならなかつた。そして、氣早き年賀客の爲に、家一體を淸掃して、手掛台や居り鰯などの、用意をするのに忙しかつた。

手掛台は、三寶に紙を敷き四邊を垂れて、餅の上に、根引の松、橙、昆布、ゑび、包鹽、かうしたものを載せたものである。是を賀客の前に差出せば、客は、是に手を掛けおし頂くのである。居り鰯は、鹽鰯、すなはちカラガキを腹合せにして二枚、モロモキを敷いた小皿の上にのせたものである。是も亦客に出すのである。

この風習は、現在の長崎に、尚ほ殘存して居る。

この日、特殊の風習は「用器恩報じ」である。平常使用する、

茶碗、皿、かうした家具を、元日は用ゐない。そして、穢れて秘蔵の品のみを使ふ。元日には、無性の家具さへも、一年中使はれた骨休みをさするとの所以である。

次ぎは二日である。吉書初、讀み初、彈き初、などの賑かな音と、俵子賣の呼聲に夜が明ける。

俵子賣は、町の大家では、出入の魚屋が丁寧に、正月の賀詞を述べて差出すと、家人は、又丁寧に答禮し、盆の上に紙包の一封をのせてこれに報いる。賣る者價格を言はず、買ふ者又それをとがめず、一見商賣でなく、正月の贈物の如き觀あるものである。一般では、此の者を呼び込み、それを選んで買ふ。しかし値段は同じく定めないのである。

俵子賣が來ると、町の家では金が使用された。子供達も、正月の小遣錢が貰へた。かうしたことで、床の中から子供達は、俵子賣の來ることを、幾度か氣にするのである。

4

かくて長崎人は、悠長で平和な正月の、一日二日を送るのであるが、三日になると、一種の恐怖と緊張に滿された氣持になるのである。それは繪踏行事がはじまるからである。

繪踏は、多くの哀しみを加へて現代に物語られる。わたしたちは、俳諧の一季題として、それを傳へてはならない。やはり、華やかな哀しみによつて、この事を傳ふべきである、それには繪踏する人の心持まで、わたしたちの想像を、浸潤させたい。さうしてこそ、繪踏は永遠性を持つのであらう。

三日は町年寄の繪踏である。行事は此日に初まる。

四日から八日までは一般の繪踏である。

九日は銅座町に於て、諸役人の繪踏である。行事は此日に終る。

5

市中の繪踏は、この三日から九日まで、七日間である。

踏繪は、長崎奉行所から町年寄の年番に下附される。町年寄は、これを各町の乙名に配附する。乙名、組頭は、踏繪を持つた小役人を從へ、紋服姿で町内を廻る。小役人は、家々毎に、「お出でてございます」から挨拶する。すると、その家の主人は、紋付羽織をつけて出迎へる。そして、主人以下家族は、足袋を脫ぐ。

踏繪は、家の框に置かれ、主人をはじめ、順々に家人が踏む。赤兒並に病人は、踏むに都合よくして踏ませる。

繪踏行事は、大體に於て以上の如くである。

かくて、總ての不安と恐怖は、町の至るところから掛けられ、目出度い正月氣分が、再びよみがへつて來る。

家には、ナマス、ニシメなどが作られ、四つ竹、三味線の賑やかな騒ぎが、改めて成される。

6

前記の如くして、長崎の町に繪踏が終ると、宗旨改踏繪帳に、各人の印をとり、各町の乙名、組頭が奥印をなし、これを奉行所に納むる。

次に、繪踏に就て、非人其他の特殊場合があつた。

寺社方は、寺社家内門前の者まで、殘らず寺社掛りの手代。すなはち代官の手代が廻つて、繪踏をさせた。しかし、諏訪神社の宮司、及び士分の者は、これをさせなかつた。

旅の者には、旅人方が廻つて、繪踏をさせた。

異國漂流船入込みの者には、最も嚴重にこれをやらせた。

唐人は、荷役の際に、先づこの儀式を行つたが、文化前後は始終往來する唐船の船客に對しては、決して行はなかつた。

オランダ人は、殆んど行はなかつた。

非人たちは、やはり嚴重な方であつた。といふのは、吉利支丹の殘黨が、多くひそんで居るといふのである。これは、牢守たちが監督した。

四日から九日まで、七日間に於ける長崎市中の繪踏が終ると、これは長崎の近村を廻る。その日程を次に記して置かう。

自十二日至十三日　長崎村十三郷
自十四日至十五日　浦上村山里
自十六日至十七日　淵十三郷
二月七日　日見村
二月八日　古賀村
四月十日　茂木村、川原村
四月十一日　樺島、野母村
四月十二日　高濱村

長崎、並に長崎近村の繪踏が終ると、九州諸地方十ケ所、すなはち、肥前の、島原、平戸、大村、五島、筑後の、久留米、豊後の、杵築、竹田、府内、日田、日向の、延岡、これらの地に、繪踏が施行されるのである。

繪踏行事が、完全に履行された時、長崎奉行所の宗門庫に、あけの年まで薄氣味惡く、鐵の鍵が閉められるのである。

7

踏繪が、長崎の町に配附さるる時、それは、大町に一枚、小

町には二町に一枚、かうした割合であつた。そして、何町が何日と定めてあり、大町は一日に十町、小町は一日に十五六町、と平均されてあつた。

長崎では、朝繪、夕繪、この二つの區別があつた。また、前繪、後繪、かうもいふ。朝繪が前繪、夕繪が後繪であること勿論である。これは、繪踏が午前中に終らず、午後にかかることがあるので、そこから生じた言葉である。

踏繪は、聖母の像、聖子の像、聖母聖子及び禮拜者數人の像、かうした種類があつた。そして、聖母聖子及び禮拜者數人の像あるものを踏むことは、その年の緣起が惡いとされた。この迷信の爲には、よく萬歳が呼び入れられ、各戸特に待遇した。萬歳は、鶴を描いた素袍のやうなものを被て平袴をつけ、やゝ三番叟の如き服裝をなし、瀬戸物の大黒または惠比須の面をかぶり、烏帽子或は頭巾を冠り、右手に扇をもち、宛も江戸あたりにある厄拂の文句に似通つたことを唱へ、しづしづと舞ふのである。も一人は、袖頭巾を冠り、多くは鼠色の紋附を着流し、太皷をとことこと叩いた。長崎の萬歳は、他の地方の萬歳と違つて、かうした特殊性質をもつて居た。

浦上の信者たちは、繪踏を行つたあとで、その足を洗ひ、その水を飲んで、瀆罪を詫びるの慣習をつくつた。

8

繪踏行事は、寛永の中頃から明治の初頃まで致された。

明治になつて、教部省からの布達により、明治七年九月、長崎縣廳はこれを東京に送附し、更に、教部省から博物館に轉送された。博物館に現存するは、すなはち是である。

博物館所藏のものは、板をはめたもの十枚と、寛文九年に新調された、二十枚の內十九枚である。不足の一枚は、近年和田千吉さんによつて、發見されたといふが、博物館に所藏されるや否やを知らない。

紀念すべき踏繪の、博物館に保存せられるものに付、左にそれを錄さう。

×板の踏繪十枚

○第一號

繪像、サンタマリヤ。頭に七星。足元に弦月。板の上端に鐵の環あり。木質樫の木。

板　長七寸　幅四寸八分五厘　厚一寸二分五厘

銅牌　長三寸四分五厘　幅二寸四分五厘

○第二號

繪像、サンタマリヤ。七星弦月。四隅に童兒あり。

板	銅牌
長八寸二分五厘	長三寸一分
幅六寸二分五厘	幅二寸一分八厘
厚一寸二分五厘	

○第三號

繪像、荊冠縛手のヤソ（金釘で打ちつける）上部の中央に穴あり。

板	銅牌
長八寸一分	長三寸一分五厘
幅六寸二分強	幅二寸二分
厚凡ソ三分	

○第四號

繪像、サンタマリヤ、ヤソ、及び拜者數人。周圍にジユヅあり。木質不詳。上端に鐵の環あり。

板	銅牌
長七寸八分五厘	長三寸五分八厘
幅六寸二分強	幅二寸五分
厚一寸二分	

○第五號

繪像、荊冠縛手のヤソ、木質不詳。

板	銅牌
長八寸一分	長三寸一分五厘
幅六寸三分五厘	幅二寸二分
厚一寸四分五厘	

○第六號

繪像、サンタマリヤ、ヤソ、及び拜者數人。周圍にジユヅあり。

板	銅牌
長八寸九分	長三寸五分八厘
幅六寸三分五厘	幅二寸五分
厚一寸二分五厘	

○第七號

繪像、ヤソ十字架にある圖。背景ウエルサレム。

木質不詳

板	銅牌
長八寸三分五厘	長六寸
幅六寸三分	幅四寸二分
厚一寸四分	

○第八號

繪像、荆冠縛手のヤソ。裏面上部に二ケ所の切込あり。

板	銅牌
長八寸三分	長三寸一分五厘
幅六寸三分	幅二寸二分
厚一寸二分	

○第九號

繪像、荆冠縛手のヤソ。上部中央に穴あり。

板	銅牌
長八寸一分五厘	長三寸一分五厘
幅六寸二分五厘	幅二寸二分
厚一寸三分	

○第十號

繪像、サンタマリヤ、ヤソ、及び拜者數人、下部に穴あり。中央にキレツアリ。

板	銅牌
長七寸九分五厘	長三寸五分八厘
幅六寸三分五厘	幅二寸正分
厚九分五厘	

×眞鍮の踏繪十九枚

○第一種　五個

繪像、荆冠縛手型

長六寸二分五厘
幅四寸五分五厘
厚七分五厘

○第二種　四個

繪像、ヤソ十字架より下れる圖。背景ヱルサレム遠景。略第一種に同じ。

○第三種　四個

繪像、サンタマリヤ、拜者數人。

○第四種　五個

繪像、ヤソ十字架にある圖、足元よりヱルサレムの遠景

○第五種　一個

繪像、第三種に同じ、周圍にジュヅあり。

木下杢太郎さんは、これらに就て、かう書いて居られる――

美しき聖母の顔、十五世紀伊太利亞畫家の常套を襲ひたる褶多き其衣、或は身勞れて母(マアテル)の膝に倚る受難者のジェズス・キリシテの裸の肩は、古來幾億の人の足蹠に磨滅して硬澀の銅版、猶護謨の如き滑澤柔軟の面を現して居る。

9

惡鬼の跋吹したやうな苛責が發明された時、若し、これを拒んだならば、如何なる脅迫と苦難が來るか知れなかつた。

このころの踏繪は、金屬の表面に、繪具で聖像を描いたものであつたと信ずる。シカルド時代に、メキシコのサンタ・クルーズに、オーガスチニアン派の寺院に、蘇教徒が献納したといふのは、按ずるに是れであらう。

長崎の古記錄は、要するに、史實ではなく傳說であつて、聖像の掛物、または、聖像の紙片、かうしたものを踏んだといふ。

帝室博物館所藏に係る、歷史課第四區附屬の耶蘇教關係遺物中、第四六二號から第四七〇號に至るうち、眞鍮板に油繪を描いたもの、または、上部中央に環の附着して、掛物として使用するに適當な形狀を保つたもの、かうしたものがある。長崎の古記錄は、おそらくさうしたところに發生した誤謬であらう。

金屬の表面に描いたものは、きつと油畫であつたに相違ない。

天正年中、大村、有馬、大友、この三侯の使節が、長崎を發してローマに着し、その歸途に、チントレツトなどの、ローマン派の油畫をもつて來たやうである。而して、有家、加津佐、長崎などの殿堂で、油畫研究をはじめた。また、一方に於ては、銅版製造をはじめた。かうしたところから推して、油畫であつたと斷じてよからうと思ふ。

筆者は、南蠻人も居つたらう。日本人も居つたらう。

わたしは、色彩心理の群衆心理に作用する影響を思ふ。是は飽くまで此時の特徴である。

10

繪踏が、一般化したのは寬永六年である。時の奉行は竹中采女であつた。そして、一般的制度となつたのは、是からすこしく後と思はれる。

銅版、または眞鍮版のものを、信者から沒收して踏したのは、ずつと古い、それを利用して板にはめこんだのは、其次に古い。そして此物十枚と、萩原祐佐が新調した二十枚と、これを踏したのは、後のことだと思ふ。

わたしは、踏繪製作者萩原祐佐と、踏繪考案者澤野忠庵に就いて、ここに筆を入れやう。

11

澤野忠庵は、南蠻歸化人で、背教者クリストフアン・フエレエ

ラとして知られて居る。

もと、ゼスイツト派の宗務長として、幾多の苦難を嘗めて布教につとめたのであるが、のち、我朝の禪宗に歸依した。そして、耶教徒を奉行所に密告した。その爲に、西坂の刑死に會ふ者數千名に上るといふ。晩年に至つて、罪業あまりに深きを悔ひ、狂氣の如くなつて奉行所に走り、その信者であつたことを自首し、西坂に於て、逆吊にされたといふ。しかし是は、一つの說話である。その法名は記載して、長崎皓台寺の過去帳にあれば、壽を完うしたと思はれる、その住は長崎本五島町であつた。

12

萩原祐佐が、踏繪を造つたのは、寛文九年である。これは、銅版、または眞鍮版のものによつて、その型に從つたといふ。これが所謂繪板であらう。

祐佐が造つたものは、飽くまで踏せるだけである。そこには、信仰も、感謝も入らない。從つて、造られたものは夫だけのものである。

わたしは先に、色彩心理の關係を書いたが、あれは飽くまで、信徒の尊崇から造られたものであつた。

あれとこれとを比較すると、踏繪に添ふて左右された、思想の變遷がはつきりして來る。

祐佐は、此製作を終つて、いつたんは其技術を賞せられたが、のち却つて、宗門改の役人の睨視するところとなり、斬罪に處せられたといふ。その住は、長崎本古川町である。

13

繪踏は、强ひて踏ませやうとする者、已むを得ず踏む者、かうした氣分が、初期には存在したと思はれる。これは、後年の場合と同一視してはならぬ。

この時、踏むと踏まぬとは死活の問題であつた。次に、かうした氣分の二つの場合を書いて置かう。

14

第一。

寛永八年である。伴天連ヴヰンセント・カルヴアルホウは、島原で繪踏を强ひられた。カルヴアルホウは、幾日と續いた責苦の爲に、半死半生になつて居た。そして、小屋の中に休んで居た。其時役人は來つて聖像を示し、是を踏むことを命じた。若し、拒むに於ては、恐るべき溫泉の熱湯に、突き落すといふ脅

迫である。

カルヴァルホウにとつて、かうしたことは何でもなかつた。衰弱しきつた手で己れの足を示し、足は腐爛して鮮血に浸んで居る。この足で神聖な聖像を踏む位なら、自分の兩脚を切斷したがよい、と答へた。

この場合、斷命すなはち涅槃であつたのである。信仰に生きやうとする人にとつては、生命を超越して、天國へ赴くことであつたのである。これは、道は只一つと信づる人にとつて、無理からぬ致し方と思はねばならぬ。

15

第二。

正保二年である。肥前波佐見村生れの女で、おかこといふのが居た。もと長崎に住み、十年餘りを長崎で暮した。これは二十年以前の話である。そのころ、おかこは禪宗であつた。のち、波佐見村に歸つて、おかこは眞言宗になつた。しかし、おかこはもともと吉利支丹宗であつた。繪踏は毎年行ひ、禪宗になり眞言宗になつたけれども、吉利支丹宗に心は殘つて居た。從つて、吉利支丹道具、木像、其他いろいろその關係物を隱して居た。これらの品物は長崎酒屋町に住した、おぢ宗ぜんの持物でその歿して後、宗ぜんの娘から貰つたものであつた。

かうして、吉利支丹宗は遂に忘れることが出來なかつた。

この場合、生命を欲するか、信仰を捨てるか、嚴密に其立場をせんじつめれば、生命を失つてまで、信仰に沒しやうとする者ではあるまい。この信仰は、すこしくいかさまである。

16

繪踏する氣持は、これを致すは、汚らはしきことである。また、自己の品格を底下するものである、といふのが初期の大部分であり、次に、これを致すは、祟りがありはしないか、といふところにうつり、更に、これを致すは、心のうちでは濟まぬと思ふけれども、一身の利害には換へ難いといふところに、變化して行つたやうである。

カルヴァルホウの如きは、その精神的苦痛を誤魔化して、肉體的滿足を欲しやうとしなかつた。絕對的信仰に生きて居た。これは初期の信仰心理である。次に、先記の如く、繪面に示された聖子、聖母、それに加はる諸聖人を見つめて、薄氣味惡くなつてゆく心持、それからうける苦痛、それが如何ともなし難くして、萬歲を呼び入れたる如き、これは次期の信仰心理である。浦上村の住民らにあつたのは、この信仰であらう。更に、

おかこの如く、さまで精神的苦痛を感ぜず、その節は繪面にある頭をよけて踏めばよいといふやうな、程度にまで到達した。これは終期の信仰心理である。

とにかく、繪踏に對する氣持は、時代に添ふて朦朧となつて行つたやうである。

17

いま書いたのは、踏む方であるが、踏ませる方に於ても、多少の變遷があつた。

先記の如き方式で行はれた繪踏は、すなはち、奉行所から申請け、且つ、宗旨帳面も直接に奉行所に納めたのが、寶暦三年に至つて、代官手限りとなり、更に、天明年間に至つて、代官手代中から是を致させ、村方百姓同様の改め方をした。そして、もと踏むを例とした代々は、踏まぬこととなり、これに反して、宗旨帳面に印形のみをなし。從前踏まなかつた御船頭方が踏むことになつた。

18

すなはち、繪踏行事は、神事祭禮同様の場合に心得られ、事々しく衣服を飾り形容に流れ、踏む踏まぬも、權力如何によつて自由にされたのである。

19

終りに特筆すべきことがある。夫は丸山遊女の繪踏である。江戸の文化が吉原で代表される如く、長崎も亦、唐人蘭人と共に、丸山によつて代表さるべき一面を所有する。

丸山遊女は、日頃、優美婉麗の姿をして、唐人船の送迎に出かけ、または、蘭館の饗宴に侍つて、かねて慇懃を通じてゐた。別離を惜しんで紅袂を絞つた人情噺、朱唇に語られた綿裏の睦言が織り作す綺物語、これは吉原文學よりも、或ひは勝れて居らう。

されば、この女達の繪踏である。嚴肅な緊張された場面に、悠長と華美な氣分を失ふことはない。

20

德川時代に於て、天和、元祿、享保、天明、寛政、天保、安政、と數度の風俗戒飾令があつた。これは大影響を各階級に及ぼした。しかし、幾多の戒飾令も、丸山遊女に對しては、一般市民に比較して、大いに手加減があつた。

故に、大體に於て、わたしはその風俗を書くだけである。

21

丸山遊女の裲襠は、阿蘭陀船特渡の、最良の黒羅紗か黒天鵞絨に、五彩の絲と、金絲銀絲を以て、全部を繍ひつぶしたのである。

勿論、吉原遊女の裲襠も、このやうなものであつた。けれども夫は、江戸の商人が長崎から買こんで持上つたものであり、時代はずつと末の、天保から嘉永のころである。

頭は、長崎自慢の龜甲簪である。それを兩方から四本宛、都合八本差合せ、それに銀簪を加えた。

繪踏の時は、繪踏衣裳とて、これらの物になほ一層のみがきをかけ、その扮粧には、市中の貴賤遊冶郎をして、姿を變じ面を掩て見物させた。

艶陽たる美觀は、長崎古今集覽附錄長崎名勝圖繪に、また一枚殘されて居て、自由なる追憶を展開させる。

江戸の唐來參和が洒落本和唐珍解は、この繪踏衣裳に就いて記載し、感興ある說明をする。

丸山遊女の繪踏は、乙名の宅でなされた。その夕繪を終つて、ほの昏い石道を歸る時、淡く點つた紅燈のほとり、みづみづしい門松の下をくぐるのは、一入艶やかなものであつたらう。

その夜は、繪踏の後祝がはじまり、絃歌亂舞のさんざめきは、おぼろの月のかげくらくここ一ところ不夜城をなしたであらう。

刑事志願者の初捕物

淺海鰒庵

「同じ命懸けでも、大事を取つてばかりゐる德川家康なんかよりは、無鐵砲で、熱のある國定忠次の方が、餘つ程自分に親しい」さう考えて來た石田少年のことであるから、中學へはいつても、友達の頭に瘤を拵えたり、自分の手足に生疵を絶やさぬ

位は當然のことだつた。それで首尾能く中學を逐出されてからといふものは、給仕にさせられたり、會社の會計の下廻りをしたり、税務署の小役人になつて見たり、或は鐵道にはいつて車掌見習を遣つて見たりしたが、何處へ行つても、矢つ張何かが詰まらなくて、馬鹿々々しくて仕方がなかつた。

何か浮雲つかしい事に出逢つてゐないと、生きてゐるやうな氣のしない彼は、二十四の春、意を決して巡査を志願した。教習所を濟ますと、K廳詰になることが出來たが、希望のK課へもはいれず、H課で詰まらない事務を執らされたので、是から面白いづくめで遣つて行けると思つたのが案外だつた。それに見慣れ聞慣れして來ると、刑事事件ももう彼れには大して珍らしくもなくなつてゐた。でも宿直の晩は、何時もK課のS掛へ入り浸つて、各方面の夜半の出來事や、被害者の告訴の電話を受ける手傳ひをすることを已めなかつた。事件は、有り振れた强竊盜や、賭場の手入や、でなければ、大して効果も擧らない非常線の手配などをすることだつた。自分自身が當事者になつて、出張が出來るなら、それでも面白いかも知れぬが、人の出て行く跡を眺めてばかりゐりたんでは、全く何にもならなかつた。

その秋の或る夜の未明だつた。埼玉縣のK署から電話がかつた。浦和在の木崎の植木屋老夫婦が、昨夜の十一時頃に、何者かに殺害されたといふのだつた。その犯人はその家の奉公人の吉五郎であるらしく、三十五六の、顴骨の高い、角顏の、黎黑な、中背の男で、荒川の岩淵の船橋を渡つて、東京方面に入込んだ形迹があるといふことだつた。石川には大して珍らしい事件とも思へなかつたが、主任警部が「太田に蹤いて、搜索の手傳に行つて見たらどうだ」と云つてくれたので、大に乘氣になつた。太田刑事は、輕井澤で米國人の牧師夫婦を殺した犯人を擧げたといふ腕つこきの刑事であつた。

二人を乘せた廳の自動車は、驀直に大塚を拔けて、岩槻街道を走つた。太田刑事は、卷莨を啣へて、腮を突出して、搜索の工夫に耽つてゐた。石川が面白がつて持掛ける事犯の想像談を、蒼蠅さうに遇らつて、眼を瞑つてゐた。仕舞には返辭もしなくなつた。

自働車は岩淵の渡へ着いた。太田は橋番を叩き起した。犯人らしい男は、午前一時頃船橋を渡つて、東京方面へ入り込んだに相違なかつた。十一時過の犯行の後、二里の道をひた走りに走つて來ると、彼是一時になる譯だ。太田は赤羽から東京方面への地理を頭で描いて、その三線の街道を比較して見た。最も早く東京附近にはいれる線を擇んだ。それは四十分で達する板

橋だつた。

「オイ石田！　板橋だぞッ」

から太田は石田に呶鳴つて、運轉手を急がせた。自動車は僅か十分でI署へ着いた。太田は目星を板橋遊廓に附けたのであつた。然しいきなり自分で板橋遊廓に手を入れることを避けた。土地の警察の手でないと、宿場は兎角云ふことを聽かないのだつた。

I署の刑事が十三軒の貸座敷を廻つて、二時から三時までに登樓したであらう三十五六の男を物色した。

新富士樓といふのに、それらしい男のゐることが判つた。石田が主任の太田とI署の助の山口刑事に連れられて、新富士樓に乘込んだのは、彼是五時近くだつた。石田は山口と共に隣座敷に潛んでゐるやうに吩附かつた。妓夫に變裝して、嫌疑者のゐる座敷を明けたのは、云ふまでもなく太田だつた。

太田は、深い眠りに落ちてゐる吉五郎？の寢相を其處に見た。相方に眼配ばせして、男を揺り起させた。鋭い眼の覺め方をした男の眼球を見た太田は、多年の經驗で、恐らく間違のないその犯罪性を直覺した。意外に獰猛な手剛い相手らしかつた。短兵急にやつては仕損じるに相違なかつた。

「親方、お眠い處を誠に濟んませんでしたが、鳥渡その、間違ひがあつたんださうでげして、ヘイ、全く馬鹿々々しいんでげすがネ、どうもするを極める譯にも行きません……ヘイ」

男は眼を据えた。

「どうしたつてんだい。助からねいな、朝つぱらから」

「ヘイ、全く濟んません。からツきしどうも、手前共でもかなひませんでげすよ。その何ださうです、巢鴨邊でね親方、三時頃だつてんです、例の賭場の上げ何の喧嘩でね、怪我人が出來たつてんで、それがその、逃附けたヤツが土地へ這入つたとか何とか云つてるんですよ」

男は險しい眉間を段々に狭めて行つた。

「なアんのこツたい」と聢り納まつて了つた。

隣座敷で山口と一緒に、捕繩で身構ひをしながら、透き見をしてゐた石田は、腹で「太田のヤツ手溫るいことを遣つてゐやがるな。四の五の云はせないで、縛んぢまへばいゝに」と思つた。

「それがその、どうも申し兼ねますが、廻つて來た下手人の人相風體といふのが、失禮でげすが、親方に鳥渡似てゐるんで。なアにね、それや親方の人品で判つてゐるんです。そんなどじを踏む親方か親方でないか位に判つてまさア。第一宵に伺つた所番地からして、地割りで入らつしやらないことア判つてゐま

す。でも、まア、一應はね、親方……。本當に弱い商賣ですよ、全く」

かう云つて太田は變な手附きをして、頸筋を撫でた。さうして安ッぽいお世辭笑ひをして見せた。

「俺に似てる? 厄けいなヤツだな。難有てい仕合せだ。で、何時頃だつたけな、その間ちげいのあつたつてなア」

「ヘイ、三時頃だとか云ひましたよ」

「フン、馬鹿だなア。俺が登つたなア一體何時だと思つてるんだい。俺は二時だぞ。考げいても見ねい。赤羽くんだりから來てだ、二時に登つてだ、女郎を抱いてる人間がだ、いくら腕が長くたつて、巣鴨で人が斬れるけい。いゝ加減にしろよ」

太田は固より赤羽を聞逃がさなかつた。

「全くですよ。手前共でも小面倒でげすから、それを言立てに、突歸したんですがね、相憎その御人體が、かう云つちやあ何ですが、能く親方に似てゐらつしやるもんでげすから」

「箆棒め、こんなお粗末な御面相はザラにあらアな」

「それがその、御身容がまた、そつくりなんで、エヘヘ」

「何だつてんだへ」

「双子縞の筒袖で」

「フン双子縞の筒袖で」

「茶メリンスの三尺帶で」

「フンそれから?」

「紺股掛で」

「フン」

「白メリヤスの襯衣で」

太田は當人を前に置いて、その通りに風體を讀んでゐるんだから、樂なものである。透き見をしてゐる石田は、山口を顧みて、聲を飲んで笑つた。中老の山口は、唯むツつりしてゐて、笑ひを返してくれなかつた。石田は物足らなく、首を元へ返して、また透き見を續けた。

「尤も親方! かう、云つちやまた失禮ですが、親方のやうなお身容だつて、あんまり珍らしかアありませんやね。唯それだけぢや、何にもならないに極つてまさア」

心易くなると、妓夫の物云ひも段々ぞんざいになる。

「ヘイ、一體その馬鹿野郎てなア職は何だへ」

「何でも植木屋だつて話です」

男はまた心持眼を瞬つた。太田はその眼に注意した。でも男は大體に於て安心し切つてゐるので、雜談を仕掛ける餘裕は優にあつた。それは肩先へかけて三寸程の深手であつたこと、喧嘩の題は場銭に困つて入れる質草の素破拔であつたこと、立上

りがどうで、どう逐ッ掛けられて、と、想像混りの話は、段々にだれて行くばかりであつた。「おめい、大部詳しいな」なぞと調戯つてはゐたが、から氣の緩んでゐるのでは、片附く處へも行かなかつた。男は、蒼蝿がりもしないで、極めて鷹揚に調子を合せやうとする、それがまた自分の潔白を立てて行くことにもなつて行く善い機會であると思つてゐるらしいことも、太田には猜せられた。太田は益々さうさせるやうに話を誘つて行つた。

「氣の利かねイ野郎ぢやアねイか。俺もこれで植木屋をしてるが、俺ならそんなどじは踏まねいな」男はこんなことをウッカり云ふまでになつてゐた。

順々に確證を擧げつつ相手をいゝ加減油斷させて行くことに成功しつゝある太田の老巧を石田は快よく味はつてゐた。さうして薄闇の中で、顔を小刻みに左右に振つては敬服してゐた。彼は焦つたくもあるが、面白くて堪らなくもあつた。

太田はもうこの上巫山戯てゐる必要はなかつた。

「アッ、忘れてましたよ。話が餘んまり彈んじまつたもんだから。それでその、その犯人に一番肝腎な目星といふのは、何ださうでげすよ、背中一面に、何でも、朱入りの大變な龍が刺つてあるツてんです」

「刺青?、ハハア、憚りながら親讓りの軀に傷なぞをつけて堪るかイ。念のために見て行けよ」

男はニタ〳〵しながら筒袖の肌を脱いだ。さうして、手を上げて、背中の腹掛のぶッちがひを摑んだ。「ホラどッこいしよ」と掛聲をして、右の腕をぶッちがひに挿せるために、身を撓めて、その利腕を拔かうと焦つた。その自由の利かない瞬間を捕へることに一秒の遲速もなかつた太田は、飛鳥の如くに飛附いて行つた。飛附いたと思ふと、もう太田の手には、男の手首を括つた捕繩の端があつた。眼にも溜まらぬ早業だつた。

「オイ出ろよッ」と鋭く呶鳴る太田の聲と同時に飛込んだのは、石田と山口だつた。

「この野郎のどんぶりの匕首を取上げてくれ」

太田は男が匕首を吞んでゐることを見拔いてゐたのであつた。石田は眞先に飛附いて、どんぶりに手を差込んだ。その途端に、チクリとした指ざわりを感じた。石田は初手柄に人差指と中指に負傷したのであつた。獰猛な吉五郎は、匕首を拔身で吞んでゐたのである。

太田に羽搔締になつてヂタバタしてゐる吉五郎を潛つて、石田は漸くにして、手垢の附いた白鞘の九寸五分を取上げた。

「太い郎だ」「こん畜生」と口々に罵りつつ、三人は難なく吉五

郎を高手小手に縛しめて了つた。中で石田が最も强く敵意を持つて締附けたのは勿論である。「チエッ」舌皷を打つた吉五郎の顏には血の氣がなかつた。石田の指の血がなぞられて、それが更に吉五郎の顏を凄ましいものにして見せた。太田にグイと押潰された時には、男は悔し泣きに泣いた。

「野郎共、たばくりアがつたな」

「神妙にしろ、植木屋殺し」

「何にッ」

と一振り振つたのを最後として、吉五郎は段々に惡黨らしい度胸を見せる落附きを恢復して來た。

「前科八犯の齋藤吉五郎さまだ。貴様等に苛められる俺ぢやねいんだ。運が盡きりやア觀念すらア。……チエッ、こんたどじを踏んだなア始めてだ」

から捨臺詞を云つて、植木屋殺しの吉五郎は抵抗の氣勢を納めて了つた。

石田は遣手の持つて來てくれた古手拭の端を裂いて、指を繃帶しながら、何とも云へないグロテスクな歡喜を覺えた。さうして英雄的な誇りを總身に感じながら、吉五郎の後腿部を、膝で蹴上げつゝ、この初陣の大捕物を引つ立てた。

酒前茶後

村松梢風

陰囊の辨に對して

本誌四月號に寄せた僕の惡文に對して二三先輩の示教を賜はつたから、一寸御披露することにしましよう。

陰囊の記事に就いて、河瀨蘇北氏と、今一人無名氏から手紙を頂戴した。蘇北氏からの書翰は四月の始め頃に僕の手許へ屆いた。甲州へ旅行の汽車中つれ〲のまゝにあの隨筆を讀まれて旅先から寄越された手紙である。卷紙へ二た尋以上に亘つて

ゐて、他の事にも多く言及されてゐるが、茲では陰嚢に關する部分だけを錄して置く。

(前略) 第二にお話したい事は、貴君の陰嚢の話です。小生は子供の時にこの大陰嚢の所有者を見た事があるのです。そのお話を申ませう。小生は父が地方官をして居りました關係から、九歳から中學の三年までを肥後の天草ですごしました。大睪丸を見たのはその時分です。天草の名物は出稼女と薩摩芋とですが、今一つはこの大睪丸です。一種の風土病だらうと思ひますが、實にその大睪丸が多いのです。町の風呂になぞ行くと浴客の二三分位は睪丸が片方だけ大きい、それも大抵はながしに座つてあらつて居て、ながしの板に充分すわる位でした。おつとながしは板でなく石をならべたたたきです。そのうちでも今日おぼえて居るのは小生の小學校の同級生のお父さんで、町でも指折の藥屋の主人でした。歳は五十位でしたらしいが、いつも臆面なくそれを出して湯に這入つてるので、評判になつて居ましたが、大きさは何でも五合位の水は這入るだらうと今思はれます。然しそれは左程に珍らしくもありますまいが、隣り村の龜川と云ふ處に住んでおり／＼町へやつて來てゐる通稱大睪丸――大睪丸は双方決して大きくならず必ず片方が大きくて片方は全くの形のない位について居るもの丶樣です――と云ふ乞食をはじめて見た時は驚きました。貴君の隨筆中の市ケ谷田町の先生は米五斗の袋とありましたが、小生の記憶する處では少なくとも大一番の桐の火鉢位はあつたらうと思ひます。米五斗と云へば五斗俵ですから、その二分の一强即ち二斗五升入か三斗位はあつた樣に思ひます。なんでも一番はじめに見た時はその大桐火鉢の樣な睪丸をだいて往來に座つて居た樣でした。全くうそか作りものの樣で不思議でたまりませんでしたが、二度目に見た時はそれを地上を引ずつて歩いて居た時で、三本の足をもつて歩いて居る樣な狀態に驚かされました、一間歩いてはやすみ二間あるいてはやすみ、それは滑稽ですがまた氣の毒なものでした。お隨筆のはなしとそつくりです。從つて睪丸の下の方は丸で松の木の樣になつてコケがはへ石の樣にかたくなつて居ました。然しそれが見もので同時に財産で、その爲めに先生食つて居るといふ事でした。

この男がまだ生きて居るかどうかは分りませんが、その時分五十位でしたからもう多分生きては居りますまい。天草にはその當時外にもこれに類似した大睪丸が二人や三人居た樣で、よく村々を渡り歩いて渡世をして居た樣に聞いて居ました。(後畧)

無名氏の手紙はつい四五日前に受取つた、

(突然手紙を差し上げる失禮を御許し下さい。貴君の御文章は

毎度中央公論で面白く拜見して居ます、本月の同誌に陰嚢の事が御書きになつてありましたが、それに就いて私の持つてる大陰嚢のリテラツールを二つばかり御參考にも大してなりますまいが申上げて見れば、一つは或は御存じかも知れませんが此前の大正博覧會に衛生展覧會へ出品された品で、正しく米なら五斗も入りさうな物で石川縣立金澤病院の出品と言ふことでした。一つは私の少年時代の記憶で私の郷里（駿河國志太郡藤枝町地方）にキンタマ爺さんなるものがありました。少年時代のこととてあまり好くも記憶しませんがなんでも陰嚢の大きいこと腰をかければ陰嚢の先きが下へつくのです、兩足は常に廣げて居り其の間に偉大な陰嚢が存在し到底歩行は出來ないので常に鐵の乗るやうな車を拵へてそれに腰かけを乗せて腰かけて其の車に乗り、車は妻（で多分あつたらうと思はれる女）に曳かせ大キンタマを外へ出し、たゞ丁度梨の軸みたいな陰莖だけは隠し、自分は車の上で三味線を彈いて唄を歌ひつゝ戸毎に門へ立つて錢を乞ふて居ました。子供の時分のことゝて年齢などどの位であつたか好く覺えませんが何んでも爺さんに違ひが無く、それが來るとキンタマ爺さんが來たと言つて子供同志ゾロゾロ後を尾いて歩きまはつたものでした。此の爺さんも正しく陰嚢に祟られて生活して居たのです。ヨハンネスみたいな人には出會つたかどうか知りません、其後どうなつたかどうして終つたかも知りません、御參考にもならば幸甚。）

此の稿を茲迄書き掛けた處へ中央公論社から「一物ズキ出年」と署名してある葉書が廻送されて來たので見ると、是れも矢張り同じ問題に關する特志家の通信だ。今年は餘程睾丸の當り年と見える。僕が狸だつたら八疊敷のやつを廣げて腹鼓でも打つところだ。

（中央公論の四月號で貴下の陰嚢の話を讀みました。小生は以前某醫專にゐたもので（今は肺病で止めました）すが、在學當時やはり大キン玉の話を先生から聞きました。それは明治か大正に住んでゐた人間で、象皮病と稱する病のために陰嚢の皮膚が厚くなつて大キン玉になつたものです。職業は籠作りで一の陰嚢を臺にして籠を作つてゐた由。參考書に其の人の寫眞があつたのを記憶してゐます。（三輪博士の外科總論）何んでもこんな風でした。）

として別に裸體で地面迄達する大陰嚢をぶら下げて立つてゐる圖が畫かれてある。

以上の三氏の通信に依つて、世には往々異常な大陰嚢が存在してゐる事實が證明されたわけだ。是れに依つて考へて見るのに、市ケ谷田町の大陰嚢の名を後世に傳へ乙想山書聞書集いた

者は、決して事實以上の誇大の筆を弄したわけではなかつたのに違ひない。然るに、自家の見聞の狭小を顧みず、早合點にもそれを江戸つ子の誇張癖であるかのやうにほのめかし、得々として物識り顔をしてゐた僕に至つては、これが所謂きん玉の小さい男であることを自ら暴露したわけである。

※

大島紬の記事に對して、近松秋江氏から次のやうな手紙を頂いた。

(拜啓――僕の事をいはれて、御調子に乘つていふやうですが、職業の文藝の事でありませんから、罪もないでせうと思ひますから申します。實際大島つむぎは好ましいものであるけれど、今日の如く、みんな人が着るから自分も好いものだと思つて着ると云ふやうになつては、大島その物が、恰も請負師に限つて冠るパナマ帽のやうに思はれます。――小生も文壇切つての貧乏人ですけれど、大正三年まだ物價の安い頃調製した大島を一とそろひ持つてゐますけれど、まだ一度も手を通しません。却へてそれより後に拵へた物が、もう二度も仕立てなほして着てゐるくらゐです。)

先般國民新聞社の招待を受けて博覽會見物に行くと、秋江氏も矢張り來て居られたが、近年鬢髮は頓に霜を加へたけれど、血色もすぐれて若々しく健康さうな顔つきをした秋江氏は、其の日はお召か何かのぞろりとした拵へで懐ろ手をして、ぬーつとしてゐた。これも矢張り着物道樂の松崎天民氏が例の近眼二度といふ望遠鏡のレンズのやうな厚い眼鏡の奥からそれを覗いて見て「秋江氏の仕度はいいですなあ!」とさも〳〵感心したらしく僕に向つて云はれたほどだ。僕は決して先輩を煽てるほど惡る氣のある男でないが、假初にも近松の姓を冒す秋江氏が大島紬なんかをおめしになつたらそれこそ世は闇だ。そんなものは早く誰れかに遣つてお仕舞ひなさい。お得意の世話淨瑠璃式の濡れ場に大島紬の拵へではどうにも芝居になりません。

處が、ある口の惡るいのが、右に載せた秋江氏の手紙を讀んだあとで「ハハア」と云つたやうな顔をして、僕に向つて恁ういふのだつた。

「併しだね、秋江君については恁んな話もあるんだよ。それは、秋江君が餘程前の事だが上等の着物を買ひ込んだのさ。處が、折角の其の反物も、着物に仕立てないうちに金に窮(こま)つて質に入れてしまつた。それを長い間利息を拂つて漸う請け出したかと思ふと、又直ぐに入れてしまつた。さうして何遍も〳〵出したり入れたりしてゐたけれども到頭着物にはならずじまひだ。何んの事はない質屋へ利息を拂ふ爲めに反物を買つたんだ

――といふので可成り有名な話だつたが、ことに依るとそれが此の大島かも知れないぜ。だとすれば、成る程一度も手は通さないに違ひないが、其の代り質屋の門は何遍通つたことか分らないのだ――」

どうもけしからん噂で、是れは必ず日頃秋江氏の盛名を嫉む者の流言に相違無いが、假りに百歩を讓つて多少の痕跡を認めたにしたところで、さとの金には詰るがならひと古人も云ふてあれば、云ふはふが野暮で、僕の尊敬する秋江先生の名譽を毀損する畏れは毛頭あるわけではないのである。

鑄掛屋から警視總監まで

此の頃僕の親類の者が、ニツケル製の菓盆の一部分が取れたので、丁度表を通り掛つた鑄掛屋を呼び止めて繕はせると、默つて繕つた後で、繕ひ賃を四圓五十錢呉れろと鑄掛屋が云ふ。ほんのちよとした繕ひで高々四五十錢位が相場だ。第一五圓も出したら新が買へるのだ。そこで驚いて、そんな無法な値は無いと云つて談判したところが、鑄掛屋の方ではどうでもそれだけの値打のある仕事だと云つてきかない。果ては玄關へ腰を掛け込んで「こちとら長え物を短かくして着てゐる職人でござんす、場合に依れあ只でもいいが、それぢや今日のお飯が食へねえのだ。見れあ立派なお邸だが、しがねえ鑄掛屋風情に仕事をさせて、錢を拂はねえと仰しやるんですかへ」と六代目の鑄掛松の科白みたいな事を云ひ出したので、到頭うるさくなつて四圓五十錢拂つて歸してやつた。ふりの鑄掛屋に豫め値を訊かずに鑄掛をさせる方も勿論手落ちだが、默つて仕事をして置いて後から恁んな無法な要求をする鑄掛屋の心情は實に憎むべき極みである。大正の今日東京市中を恁んな奴がいくらも横行してゐるのだから呆れるの外はない。警察は何をしてゐるのかと思ふ。近來餘りやかましく云はなくなつたが、奸商取締りなども思ひ切つて政府でやつて貰ひ度い。一體あんな事では處罰が輕過ぎる。何百萬圓も暴利をむさぼつた奴が僅々一月や二月の懲役で事濟みになるやうでは、藝者が豊川様へ行つて一錢のお賽錢を上げるよりももつと手輕だから、どんな事にも奸商の絕えつこはない。全體刑罰は新しい學說なぞによるといろ／＼むつかしい理屈があるやうだが、僕等のやうな法律知識の無い者から見れば峻嚴であればある程其の意義が徹底して來るやうに思へる。刑罰だの勝負事だのに人道主義を加味するのァ矛盾で、刑罰其のもの、勝負其のものの意義の衰退を意味するものだ。其處へ行くと舊幕時代の法律は徹底してゐた。憎むべき奴はギユーと云ふ程えらい目にあはせてゐるから痛快だ。

文化文政の巷說を集めてある「街談文々集要」といふ書物に、新吉原京町二丁目松岡屋萬五郎といふ遊女屋の者が、羽州吉澤村の百姓長蔵外三名の田舎者を引つ張り上げ、法外の散財をさせた上に難題を吹つ掛けたといふ廉でどゑらい目にあはされた記錄が出てゐる。それで見ると亭主の萬五郎は「引廻しの上於淺草獄門」番頭千代三名は「入墨重敲の上中追放」相方の女郎は四人とも「過怠永牢」其の他の女郎共も「過怠六ヶ月入牢」善五郎と云ふ松岡屋の店請人までが卷き添へを食つて「中追放」に處せられてゐる。此の男ばかりはいい面の皮である。現今ならせい〱罰金か營業停止位なのが此の調子だから堪らない。

現今でも此の筆法で遣つ付けたなら、彼の籠掛屋なども先づ遠島位は免れまいが、東京中のあきんどの半分位は首が飛んで、善良な人間だけがあとへ殘つて、物價はメキ〱安くなるであらう。議會などでも彌次が止まらなくて奥議長が泣く程困つてゐるさうだが、是れなども登院停止などといふ生ぬるい懲罰法だから演說の使へない陣笠などはせめて懲罰に遇つて新聞に名前を書いて貰ひ度いと碌でもない考へを起すのだ。是なども懲罰法を改正して、院內で彌次を飛ばした代議士は「引廻しの上於日比谷獄門」といふ事にでもしたなら、あれで命は人一倍惜しがる連中だから、議會は忽ち葬儀場の如く靜粛になり議事の進行の捗る事請合だ。奥議長が泣いたで思ひ出した方、原敬氏が暗殺された當時當面の責任者たる岡警視總監が泣いたといふ新聞記事が數回出た。ほんとに泣いたかどうか僕は側で見てゐたわけではないから斷言は出來ないが、新聞だつてさう〱噓ばかり書きもしまい。美しい女が眞珠のやうな泪を零すのは必ず藝術的だが、警視總監が髯むじやの顏に泪と洟とを一緒くたにして泣いてゐる圖は、鬼が念佛を唱へる程の洒落も無く、いかな官僚贔屓の僕の目で見ても非美術的である。是れなども矢張り舊幕式に默つて切腹する方が手輕でよかりさうに僕等には思へるけれど、腹を切るのに比べると泣く方が痛くないだけ衞生的で、罰俸と云つた處で是れも高々一晩藝者の纏頭を節約したら足りる事、切腹などといふ野蠻時代の遺風は弊履の如く捨てて猛烈なる生の執着を示した所は、さすがは岡喜七郎君だ、新時代の政治家はあゝなくちや不可ないと、ひどく感心してゐた人もある。して見ると、僕なぞは齢は若いが所謂若耄碌といふやつで、餘程頭が舊くなつたと見える。

香爐と火いけ

ある茶人が大層結構な香爐を手に入れて、それを火いけにし

て使つてゐた。すると一日懇意な法師が訪ねて來たのでそれを出すと、法師は手で撫でさすつて非常にほめた。ある時又來て、其の香爐をつくづく眺めて「あなたは是れ程の名器を何んで火いけなどになさつてゐるのです」と言つた。すると茶人が笑つて答へることには、「此の器を火いけにして居ればこそあなたのお目にもついたのです、香爐にして床に置いたならば左程にも思し召さないでせう」と答へたといふ話が雲萍雜誌の中にあつた。

人間も矢張り此の香爐と同じ理屈である。其の人の實力よりも常に一段低い地位で働いてゐるとまことに床しく見える。そして自然人の眼にもついて樂々と出世が出來る。處が殊に現代の人間は丁度それと正反對だ。何んにも出來ないくせに無闇にゑらがりたがる、實力以上に見られるやうな工夫ばかりしてゐる。だから直ぐにメツキが剝げたりボロを出したりして愛相を盡かされてしまふ。せめて香爐を香爐に使つてゐれば無難だが、火いけを香爐にしたのでは道具にならない。

蠟燭のあかり

先般ある地方へ旅行した時、宿屋へ着いた晩退屈しのぎに雜誌などを讀んでゐると、不意に電燈が消えてそれから二時間近くも停電した。其の宿屋は頗る行屆いた家だつたので、直ぐ樣女中が籠の雪灯へ蠟燭をつけて持つて來た。雪灯などといふものは殆んど使つたことのない僕にはそれが莫迦に珍らしく、結句此の方が風流でいいと喜んで、其のあかりで雜誌を讀み續けた。處が、風流はいいがどうも暗くて讀みづらい。そこで女中に頼んでもう一つ雪灯を持つて來て貰つて、兩脇へ置いて見た。かうすると前よりは幾らか明るくなつたが、矢張りトボトボして活字がはつきりと見えない。少し讀むと眼が非常に疲れる。併し昔の人はみな是れで本を讀んだのだ、と僕は思つた。だから讀めない筈はないと思ふのだが、矢張りどうにも續かない。僕は不思議な氣がした。「視力に變りはない筈だのに昔の人はよく恁んなあかりで書物を讀んだものだ」と考へた。さうして、其のあげくに漸う次の理由を發見した。それは昔の書物は文字の型が大きかつたから、種油や蠟燭のあかりでも讀めたのだといふ事である。恁う云つたならば諸君はさだめて僕の迂遠さを笑ふであらう。が實際それ迄僕は此の明瞭過ぎる程明瞭な理論に就いて考へ及んだことが無かつたのだ。昔の書物の文字が大きいのを見ても、それは木版だからで、詰まり今日の鑄造活字の發明されなかつた時代の特産物であるといふ風な見方ばかりしてゐた。勿論それに相違無いが、同時に一面に於てあれ以上小さ

い文字は油や蠟燭では讀めなかつたのだといふ事をも考慮に入れなければならないのである。だから假りに日本に於て百年二百年前に鑄造活字が發明されたとしたところで、其の活字の大きさは必ず木版本の字と大差はなかつたに相違ない。蠟燭の火で讀むのには現今の二號活字位の文字が一番適當してゐる。然るに、行燈が石油ランプになり、石油ランプはやがて電燈や瓦斯となり、燈火の進化につれて書物の文字が次第々々に小さくなつて來たのである。詰まり燈火と活字とは常に相並行して發達を遂げて來てゐる事を忘れてはならないのである。活字は益小さくなる傾向があるが、燈火は年一年と明るくなる。僕等が中學時代迄は大抵ランプだつたが、下宿屋で電燈をつけるやうになつたと云つても、當時書生の机上を照らす電燈は殆んど五燭ときまつてゐた。十燭を付ける書生は餘程の贅澤者だつた。それが近頃では、五十燭のタングステンが、夜會場のホールを照らすやうに、下宿屋の四疊半裡に晃々と輝いてゐるのだ。活字が針の穴ほどになつたとて差しつかえはない。

ついでに思ひ出した事は、歌舞伎劇の扮裝である。歌舞伎劇の顏の拵へを見ると、往々不可思議極まる化粧や隈取りをした奴が出て來る。歌舞伎劇に對して何等の智識をも有つてゐない人間が始めて是れを看たならば、無論怪物と思ふやうなのがある。何故あんな莫迦々々しい顏を拵へて出たのかと云ふと、往時は蠟燭のあかりで狂言を踊つたのであるから、あれ位强烈な彩色を施した處が看客の眼にはてうどよく見えたのである。しぐさでも同樣である。所謂見えを切るといふやつで、ギックリバッタリやつてまるでバネ仕掛の機械で動かしてゐるやうに、直線的に、出來るだけ大きな動作をして見せたり、それからお椀のやうな眼を剝いて見せたりするが、あれも詰まりは光線の關係から、あゝした誇張した動作や表情が必要とされたのだ。單に是れを人形芝居の影響のやうにばかり考へてゐるのは一知半解の觀察である。其處で、現今の如く舞臺の光線に著しい變化を來してゐる時代に、依然として在來の儘の扮裝やしぐさを踏襲してゐるといふことは、非常な不自然な事だと云はなければならない。人形振りだの繪畫的だのと云つて喜んでゐるのは大間違ひだ。もし純粹の古典劇を演じやうといふならば、一切電氣もランプも使はずに、昔の儘の蠟燭のあかりをたよりにして演じなければ無意味である。面あかりの代りにフートライトで照らして見せた日には、晝間出たお化よりも間が拔けて、時代錯誤の點では、木版刷りの新聞紙を發行しようと云ふのと同列である。

地震

地震、かみなり……と云つて、地震は古來こわいものの筆頭に擧げられてゐる。雷もこわいには違ひないが、地震のこわさと比べたら格段の相違がある。あの大地がぐら〳〵と動き出す時の感じは、怖ろしいとか、不安とか、さう云つた言葉だけでは説明が出來ない。もつと根本的で、謂はば萬物の生存意識の核心を脅やかすところの譬へがたい戰慄である。萬物は地上に生存してゐる。そして各自が自己の存在を意識するに就いての基礎觀念となるものは、地の上に居るといふ事である。其の他の觀念は皆其の基礎の上に築かれるところの建築物である。我れ〳〵にとつて何が確實だからと云つて、大地に足を觸れたほど確實なことはない。それほど大地は搖ぎのないものなのである。然るに、地震の場合には、其の唯一の確實性をもつてゐる筈の大地がぐら〳〵と動き出すのだから、耐らない。是れがこわくないと云ふ者があつたら、それは死んでゐるのである。

僕は子供の時分から地震が一番こわかつた。僕の生れた家は、茅ぶき家根の古い家だつた。すべて田舎のさういふ家といふものは無闇に大きくて、そして仕切りの板戸などが多いせいか地震といふと屋鳴り震動が殊に劇しかつた。一寸した地震でも怖ろしい屋鳴りがした。

多分僕が四つか五つの年だつたと思ふ。年代を調べて繰つて見ればわかる事だが、あるひはそれが有名な濃尾の大震の餘波を受けたのだつたかもしれない。それは朝のことだつた。僕はまだ寢床の中に居たが、他の家族は皆とうに起きて朝飯を食つてゐた。そこへ地震がやつて來た。みんなは直ぐに表へ飛び出した。が僕だけが寢て居るので、父は納戸の間から僕を曳きずり起して來て、一番遅れて外へ出た。

表には米を入れる藏があつて、其の南側から母屋の横手の方へかけて一面に竹藪があつた。一同は其の藪の中へ避難した。藪の中でも搖れることは搖れるけれども、竹の根が張つてゐるから地面が裂けるおそれはない。地震の時には一番安全な避難所である。其處から見てゐると、母屋の屋根でも、屋敷の戌亥ずまにたつた一本聳えてゐる大きな杉の木でも、それがみんな風に吹かれてゐる張子細工のやうにぐらぐらと動いてゐた。藪の中には、ふだんから殆んど倒れかけてゐる大きな松の木があつた。幹の太さは二た抱え近くあつて、それが四十五度位の角度で大蛇がのたつてゐるやうな恰好をして竹藪の中を貫いてゐた。僕はよく其の幹に跨がつて遊んだものだ。何故此の松の木は恁んなに傾いて生へてゐたのかと云ふと、それは安政の大地

震の時半分倒れた儘枯れもせずにゐるのだつた。

僕は其の松の木につかまつて、譬へやうのない恐怖にうたれて顫へてゐたことをおぼえてゐる。此の朝の事が、僕の地震に關する一番最初の記憶である。

去る四月廿六日の地震の時は、僕は朝飯を食べたばかりで、茶の間で新聞を讀んでゐた。學校へ行つてゐる長男と二男を除いてほかの家族はみんな家にゐた。六つになる三男の子は、是れもまだ半子供の女中を相手に朝つぱらから玄關で岩見重太郎の狒々退治をして遊んでゐた。妻だけが二三日前から病氣で臥つてゐた。別に重病といふわけでもないけれど、病氣のために足が利かなくなつて自分の力では起きられない狀態だつた。其處へ親戚合ひの醫者が來てゐた。醫者は病人を診てしまふと矢張り茶の間へ來て茛をのみながら母と何か世間咄をしてゐる。

スワ地震といふと、僕は眞つ先にゴム鞠のやうに飛び上つた。ミシミシ、ガタガタといふ音だけがきこえた。僕はいきなり廊下へ驅けて行つて庭へ向いた硝子戸を明て戸外へ飛び出した。そして今度は庭木戸を明けて更に遠くへ遁げようとしたが、其の時ふと玄關にゐる岩見重太郎の事を思ひ出したので、慌てて驅け戻つて來て、靴脫ぎの石の處から子どもの名前を呼び立てたものだ。すると其處へ僕の母が孫の其の子を抱えて出て來たので、先づ是れで安心とばかり再び元の方へ遁げて行かうとした時、是れも慌てて飛び出して來た醫者が頻りに僕の名を呼んで「病人々々」と叫んだ。其の聲は僕の耳にもはいらずにはゐなかつた。僕はそれに依つて始めて病妻の事を思ひ出した。そして、妻を連れ出しに行かなければならないと考へた。

「併し、萬一其の間に家が潰れるやうなことがあると、自分も妻も兩方とも死んでしまはなければならない——」

突差の間にさう考へた。屋根がまつ暗く僕と妻との頭上におつ冠さつてくる光景を想像した。併し、此の場合躊躇してゐる餘裕は無かつた。僕は驀地に家の中へ飛び込んで行つた。妻は仰向きに床の上に寢て、大きな眼をあいて天井の方を見てゐた。僕はそれを見ると非常に濟まない事をしたやうな氣持がした。そして直ぐに彼女を横抱きに抱えて廊下へ飛び出した。併し其の時はもう地震も鎭まりかけてゐた。

地震が治まつた後でみんな茶の間へ集まつて、今の地震がどんなに怖かつたかといふことを話し合つた。併し、其の談話の仲間入りをしながらも僕は絶えず妻のことを念頭にうかべてゐた。すべての人から閑却されてたつた一人あとへ取り殘されてゐた場合の妻の心持を想像して見た。其の時彼女は、地震に對する恐怖を感じると同時に、もう一つ非常に大きな寂寞の感に

裂はれたに違ひ無い。

妻の寢床には、まつ白い敷布の上に汚ない泥足の痕がありありと二つ殘つてゐた。其の足跡は、彼女の夫が、彼女を打ち捨てて自分ばかりが逃け出したといふ事實を、誰れの口からするよりも有力に物語つてゐるのであつた。僕は妻の顏をまともに見られないやうな氣持ちで、テレ隱しに恁んなことを云つた。

「どうもいざといふ場合になると子どもの事つきり考へないもんだ」

が直ぐ其後から、「嘘をつけ」と自分で自分を冷笑した。

去年の十二月八日の晩の地震の時には、僕は二階で原稿を書いてゐた。其の時の住居は今の家ではなかつた。其の家は古くて粗雜な普請だつたので、地震の時には餘計こわかつた。

地震が搖れ出すと同時に、僕は例によつて疊の上に飛び上つたが、震動が劇しいので體全體がグラ〳〵とした。其の時は他の家族はまだ起きてゐて階下の茶の間に居たが、二男と三男のふたりの子供だけは、二階の僕の部屋で一つの夜具にくるまつて寢てゐた。階下では雨戸を明けて戸外へ逃げ出す氣配がした。僕は慌てて二男の方から搖り起して見たが、子供はすや〳〵睡つてゐて眼を醒さなかつた。其の二つのやすらかな寢顏を見ると、僕の心は不思議にものどかに落ちついて來た。さうして子供に對する強い愛情が白い湯氣のやうに吹き出して來た。とにかく其の場合としては、子供達の無心な睡りを破らせて驚きを與へたくないやうな氣持がした。それともう一つは、同時に二人の子供を連れて此の不自由な二階から降りて行くことの困難と、それに伴ふ餘分な危險をも考へないわけにはいかなかつた。僕は無意識に、夜具の上から二人の子供の上に自分の體をおつかぶせるやうにした。萬一家が潰れて上から木が落ちて來るやうなことがあつても、さうしてゐれば自分の脊で支へるから、結局は親子三名押し潰されて死ぬまでも、たとひ一秒間でも子供達の命を先へ延ばすことができると考へたのだつた。さうして死ぬ場合を想像して見ても、其處には更に恐怖の觀念は起きて來なかつた。

其の地震では、僕は自分の子供に對する愛情を具體的に確かめることが出來たのだつた。

最近の地震の翌日の事、電車の中である青年紳士に會つた。それは僕の親しい友人なので、隣合つて腰掛けていろんな話を始めたが、どうしたわけか友人は頻りに口のあたりへ手を遣つてさも話しがしにくさうな容子をしてゐるので、口をどうかし

たのかと云つて訊ねると、實はきのうの地震で餘りに吃驚したために入れ歯をこわしてしまつたのだと友人が答へる。この友人は齢は若いけれども歯がわるくて、前通りは全部入れ歯をしてゐるのだつた。「それはどうもお困りでせう」と僕は云ふには云つたが、地震の災害が入れ歯にまで及ぼさうとは嘗て考へられなかつたところだから、氣の毒やらおかしいやらであつた。

斷酒より節酒へ

大町桂月

大正七年十月の本誌の上に、余は『鐵窓の三十日』といふ一文を發表して、余が酒精中毒の狂者となつた次第を語つた。之を治する方法をも語つたが、まだ不十分であつた。酒を飲んで愉快になるのが、既に酒精中毒の門に及んだものである。それからメートルが上れば、上るほど、門内に深く進むのである。怒上戸、笑上戸、泣上戸の域に達した頃は、慥に酒精中毒の堂に上つたものである。然し醉覺の水一杯で、其毒が直に消える。『昨夜は大醉して失禮を致しました』と頭を下げれば、一度や二度は世間の人が大目に見てくだされる。もしも胃腸が弱つて、宿醉をするやうになつたら、警戒を要する。指を開いて、兩手を身體と直角になるやうに伸ばして、指先が顫へるなら、大に警戒を要する。斷酒して酒の氣を抜かねばならぬ。抜けて仕舞つたら、又飲み給へ。それを怠つて、數年も飲みつゞけたら、それこそ大變。物忘れをする。仕事がにぶる。女房が泣き出す。知已の人が迷惑する。自暴も起る。是に至つて、いよ／＼酒精中毒は其室に入つたのである。そのまゝ進んだら、唯死の門に達するだけである。酒精中毒に梅毒が加はつたら、唯飯を食ふ屍體となつて、何事をも感ぜず、何事をも知らぬやうになる。用心し給へ／＼。然し酒を恐れ給ふな。酒精中毒其の物は決して人命を奪ふものでは無い。如何に重き酒精中毒でも、然るべき専門醫の手にかゝれば、必ず半年以内で全治する。余は全二箇月で全治するほどの酒精中毒に罹かつたのであつた。然るに療治を托した院長が舊學友であつたが爲めに、全一箇月で余の退院を許した。中毒の七八分は抜けたが、まだ二三分は殘つて

居た。初めは細君の監視の下に、東北地方の溫泉を廻つた。後には單身となつて、富士見三景を廻つた。わざと案内者を雇はずに二貫目ぐらゐの荷物を肩にして、登山者の大に減じたる八月の末つ方、路伴れもなしに、孤杖飄然として富士山に登つた。下つた頃には、酒毒が全く消えた。富士の山靈が余の酒毒を消したでもあらうが、酒毒の全く消える頃、富士山に登つたのも、事實であつた。家に歸ると、細君は喜んだ。子供は喜んだ。親戚は喜んだ。知己は喜んだ。友人は喜んだ。獨り親友の東川楊卅だけは、絕代の酒豪であるだけに、『大町君は一二合は飮んだ方が却つて心身の爲めによからう』と言つて吳れた。『楊卅我を知る』と、心中には感謝したが、其言には從はなかつた。多年天下の青年諸君に說法した身が、酒精中毒の爲めに、狂者の群に投じたでは、青年諸君に申譯が無い。大町何某なる者は、唯酒代を得る爲めに、文を賣つて、天下の青年を說法したかと云はれては、余は天地の間に身を容るゝの地なき思がする。せめて罪亡ぼしに、酒を口にしてはならぬ。退いて一身上より云ふも、愚頑にして、自らはそれと氣付かざりしが、後から思へば、余は決して大正七年に始めて酒精中毒に罹つたのでは無い。それよりも十年の前、既に酒精中毒の室に入つて居たのであつた。宿醉を十餘年も續けた。餘りに多く身體を虐待した。その身體に休息を與ふるのが、余に取つても得策である。それで余は斷酒を天下に公言した。然し余は一回も一言も決して禁酒とは云はぬ。斷酒と禁酒とは、どう違ふか。一寸聽いて下され。

禁酒とは、酒を仇敵とし、若しくは酒を毒物とし、若しくは酒を惡魔とする者の云ひ草である。耶蘇教の禁酒はこれである。米國の禁酒はこれである。余は愚にして酒精中毒に罹つたが、罪は余にあつて、酒には無い。余は酒を仇敵とせぬ。毒物とせぬ。惡魔とせぬ。禁酒など〻、西洋人の口眞似して堪まるものか。さらば絕酒か。絕酒の人は誠に氣の毒千萬である。酒が飮みたくて、喉がぎゆう〳〵云ふが、生憎酒を買ふの錢を御持ちにならぬ。余は貧乏では御座るが、酒を買ふの資力もなきまでの赤貧では御座らぬ。是に於て斷酒と云はざるを得ぬ。斷酒は斷食より思ひ付いたのである。斷食は決して御米を憎みも、恨みも、笑ひも、何もして居らぬ。唯思ふ所あつて、面會謝絕をして居るのだ。余の所謂斷酒は、これと同じ意味だ。斷食斷酒と云へば、世の淺き人は、別物かと考へるが、斷食の食は、我日本國民の祖先以來食ひ來れる御米だ。斷酒の酒は、その御米の水だ。西洋かぶれの半可通の御醫師殿は、唯酒精の中の一部の毒のみを公言して、世の愚人をだまして御座る。世の中の

弱き者を戒めて御座る。耶蘇教の宣教師の眞似をして御座る。御志は難有い。世の中の弱い者は、おかげで助かりまする。但し余の如き馬鹿者には、ちと難有迷惑に存ずる。話が支路へそれた。酒と食とは同一物で御座る。酒にも毒があるが、米にも毒がある。三杯の飯を定食とする人が、六杯も食つたら、必ず腹が痛みます。酒もその通りだ。そこで断酒、断食も起る。断の意は、さつとこれだけにして、絶の字に後戻りしましせう。断食をしても、生命は大丈夫だ。絶食をしたら、人間は死ぬる。禁食をしたら、猶更死ぬる。死ぬる上にも、罪がある。如何に愚劣な耶蘇教の宣教師でも、肉をくふ本國と違つて、米を食ふ日本國民に向つて、絶食とは言はぬ。それが禁酒といふのは、日本の酒と西洋の酒とを同一に視るからだ。酒は酒でも、日本の酒は『さけ』だ。西洋の酒は『さけ』でなくて、『さけ』だ。その捉へ所は、いくらもあるが、手つ取り早く申さば、日本の『さけ』は少し温めねば、眞の味が出ぬ。西洋の『ざけ』は少しでも温めれば、味が無くなる。人情の温かい、神に近い、米を食ふ日本國民でこそ、『さけ』を造ることは出來る。人情の冷たい、獸類に近い、肉を食ふ西洋人は、『さけ』は造ることは出來ない。せい〴〵『ざけ』を造り出すのである。『さけ』を飲む西洋人には『酒狂病院』の必要が御座るが、『さけ』を飲む日本國民を『さけ』を飲む西洋人と同一に取扱はれて堪まるものか。

断酒の御説法が大に長くなつた。一寸富士山へ後戻りして、直に前進する。余が富士山へ登つたのは、一は『さけ』のほんの少しの餘毒を退治しようといふ考もあつたが、更に大なる目的があつた。余は日本第一の靈山、否、世界第一の靈山なる富士山に登つて、自分の精神、氣魄、身體を試して見ようと思つた。その結果、自信を得た。これなら大丈夫だ。余の精神、氣魄、身體は、少しも『さけ』の害をうけて居らぬ。それで、富士山を下つてより、間もなく旅裝を整へて、滿鮮の旅に向つた。斯く申すと、如何にも余の家に金錢の餘裕があるやうに聞えるが、實際の所を白状すると、當時、家に一文もなかつた。當時滿鐵の理事長をして居た國澤新兵衛君が、余を憐んで、數月の間、余に旅費を給し、余の爲めに滿鮮旅行その他いろ〳〵の便を圖つて下された。

飯田橋畔の富士見樓で、情けある人達が、余の爲めに送別の會を開いて下さつた。一同『さけ』を飲んだが、余獨り『昆布湯』を酒に代へて、自ら甘んじた。奉天では赤塚總領事の厚遇を受けて、平生耳にした燕巣を始めて口にした。赤塚總領事は痛飲を解する快男子だ。余の酒を口にせざることを憐んで、

『男子、酒が飲めぬやうになつては駄目だ』と壯語した。『共に談ずるに足る快漢』とは、心中に思ひ、なほ支那の酒は『さけ』か、『ざけ』か、一口嘗めても、たいした罪は無からうと思つたが、然し酒は口には入れなかつた。大連では、石川寅治畫伯と偶然邂逅して、共に田岡淮海先生を訪うた。先生は同郷未知の先輩で、支那通の豪傑で、漢學者で、詩人で、而かも一代の酒豪だ。先生は、『大町も酒を飲むか、話せる奴』か位に思つて居られたらしい。遇つて見ると、先生大に失望した。先生は快飲して、談論風を生ずる。余は酒を口にせぬ。氣焰が揚らぬ處では無い。何事をか言はんとすれば、口がどもつて、何事も言へぬ。終に先生大に怒つた。『どの面さげて、我輩の家に來た。汝の酒精中毒は汝が飲み過した汝自身の罪だぞ。決して酒の罪では無いぞ。汝を譬ふれば、美人に戀れて、財産を無くして、それで美人を棄てるやうな薄情漢と同じやうな者だぞ。天下何人にも妄りに酒を勸めぬが、汝は常人とは違ふ文人だぞ。わかつたか。一杯のまぬか』と敎へられた。天下の眞理だと感服したが、唯『許して下され』と頭をさげた。

間もなく歐洲の大戰亂が終局に近づいた。休戰の報告が傳はつた。大連の有志は、一堂に會して祝杯を擧げた。余も其席に列した。『今夜だけは、よし〱』と深く覺悟して、大洋盃に滿々と酒をうけて、唯一口に飲み干した。

家に歸つてから伯母の八十八歲の祝宴があつた。一家の事を申して、恐縮に存ずるが、唯一言許されよ。父は四十八歲で死んだ。長兄は三十一歲で死んだ。次兄は四十二歲で死んだ。余短命かと思つたこともあつたが、短命でないと自信することを得た。それには可也長い年月がかゝつた。それで四十九歲の時の腰折に

父よりも一歲多くながらへて生れたる日を祝ひぬるかな

生命の長いのを自慢したつて何にもならぬ。何故に余がこの腰折を作つたか、それは讀者諸君の賢察に任せる。一家の一方を顧れば、父の長姉は九十歲まで生きた。次姉は大正十一年、九十二歲で、まだ、ぴん〱して居る。前に申した八十八歲の祝は、事情あつて、その實際の八十九歲の時であつた。大町家の爲めに、どうしてもと考へた結果、又『よし〱』と深く覺悟して、再び一杯傾けた。

罪は亡んだか、亡びぬか、それは知らぬが、ともかくも、一年半は斷酒を實行した。然して熟考した。斷酒の當座は宿醉十年の時よりは、頭が少し明かになつた。その後は一向に明を加へぬ。嗚呼余は愚鈍の質だ。文を書くより外には、何も藝能の無い身だ。少しでも世の爲めになる文章をかくより外に、余の天

職は無い。酒をのむ、のまぬは、余に於いては末節だと、これだけの事、考ふるにも、可也長い年月が掛つた。

いよ〳〵断酒を破るぞと決心した。細君を始め、附近の人達は驚いた。泣いた。悲んだ。『また氣違病院におはいりなされるか』。『妻子をお泣かせになるか』。『家計を何となされる』。『天下の信用を何となされる』。『子孫に及ぶ累を何と思はれる』。一々御尤だ。然しそれくらゐの事は、考へに考へた揚句だ。『一度酒精中毒に罹つたものが、酒を始めれば、酒精中毒に罹り易い』ぐらゐの事は、ちやんと心得て居る。『世間の余を知る人は心配するだらう。余を知らぬ人は嘲笑するであらう』ぐらゐの事も、心中では心得て居る。然し心配するな。まかり間違つたら、舊學友の石川博士にお頼みさへすれば、ほんの二三週で、全治して下されるぞ。大町家に狂者の名を二たび負はするがいやなら、石川博士の門に及ぶ邊の處までは進んでも、玄關にまでも進まぬ方法を實驗上、ちやんと承知して居るぞと、説いても、諭しても、一向通ぜぬ。云へば云ふほど、中毒になりかゝつたと、益驚く。益泣く。益悲しむ。あゝ困つたものだ。

然し、賢明なる讀者諸君は、必ずわかつて下さるであらう。余は他日『酒』といふ題で、一篇の書を世に公にするから、この邊で筆を留めて置いてもよいが、一寸許して下され。一寸皮肉も申しまする。今の原稿料制度は、世間一般に、一枚何圓、何枚何十圓といふ事であつて、從つて今の文章は飴細工になる。余は飴細工は致さぬが、まだ少し言ひ度い事がある。

断酒の間、酒樓へ上らぬほどの氣の小さい男では無いが、上つてから一寸こまる。口はどもる。歌は歌へぬ。止むを得ぬ窮策と致して、歌は歌へぬが、歌を作くる事は知つて居る。

酒は藥よ萬年いきる龜に飲ませりや踊り出す

少年時代龜に酒を飲ました實驗もある。事實に間違は無い。どうだ。歌へるかと、世間あまたの三味線の絲に活きる人に試みて見たが、誰も歌へる者は無い。その筈だ。形は都々逸のやうだが、わざと都々逸でないやうに作つたものだ。都々逸といふものは、必ず第二句の末で切れる。この歌は、第二句の末で切つては相成らぬといふやうにしてある。これが都々逸なら、『酒は藥よ』で短く切り、『萬年いきる』で少し長く切り、『龜に飲ませりや』と又一寸切れば、都々逸の節になる。然しそんな節では此歌は歌へぬ。『酒は藥よ萬年』と、息を長くせねばならぬ。『いきる龜に』で一寸切る。『飲ませりや』で切らなくても、よいが、切つた方がよい。それで始めて、この歌が歌へる。然し、こんな歌では、世間一般には、まだ手ぬるい。それで少しづゝ込んで、

アメリカ禁酒は貧乏人いじめ金持やこつそり舌ぺろり

これは米國禁酒後の事實で御座る。間違は無い。『ひと』ならこそ『さけ』を飲む。『ざけ』を飲む者は、『ひと』でなくて、『びと』である。『ひと』ならこそ、誠實が通ずるが、『びと』には、誠實が通じなくて、僞善だけが通ずる。ついでに、今一つ、つツ込んで

酒を禁ずる耶蘇教の坊主は御免アーメンおゝ厭やだ

『びと』の米國でも、宣教師の中には、多くの『ひと』がある。『ひと』が『ひと』を相手にするなら、骨も折れぬが、『ひと』が『びと』を相手にすると、罵られる。叱られる。笑はれる。ぶたれる。たゝかれる。御氣毒千萬に存ずる。その上の窮策に出でたものであらう。元來耶蘇教は酒を禁じたものでない。米國の宣教師が之を禁じた。歐洲本國の識者は意識してその眞似をした。日本の識者は意識せずして、その眞似をなされる。困つたものだ。余はわざと米國の惡口を言ひたくもないが、山の高さを知らする爲めには、谷を深くせねばならぬ。谷もこれだけで切りあげて、山に移らう。

何處の宮でも日本の國は御神酒下さらぬ神は無い。

いくら日本の神でも、貧乏では御困りなされる。萬人の口をつけた土器を神前に供へつけねばならぬやうになる。然るべき神の前では、賜つた酒は魂に入れ、土器は袂に入れねばならぬ。一旦口をつけた土器を神前に置かるべきものでは無い。然るにお氣の毒だから御名前は申さぬが、さる處の官幣大社で貧乏神の眞似をせられるのを實驗して、實に驚き入つた。土器が惜しく御座るか。土器が惜しいでは、日本國民を誤りまするぞ。神酒の眞意を失ひまするぞ。我日本にては、現つ神の天皇陛下から、天盃を賜はりまする。酒が毒なら、神は神酒を下されぬ。天皇陛下は天盃を賜はらぬ。今の醫界の諸先生は、唯世俗に媚びて、とぼけた顔して、『さけ』の害を說いて、『さけ』の益を御說きにならぬ。米の飯を食ふ日本國民が、米の水を飲んで、心身を養ひこそすれ、度を過さぬ以上は、少しも害の無いことは、我日本國民が數千年來實驗した天地の眞理だ。節酒が出來難いから禁酒とは、利口さうだが、神酒を馬鹿になされる。天盃を馬鹿になされる。碎けて申さば、蟲が好過ぎまするぞ。合ツ點か。

余は十二歳よりこの方、東京に住んで居て、却つて空らに住む心地して居たが、長命はすべきものだ。この頃大に寂しさを減じた。如何なる風の吹きまはしやら、少年時代より敬慕せる恩師杉浦梅窓先生は、余の斷酒を破ることを聞き知られて、一瓢に酒を充たされて、余に下さつた。その瓢は賴山陽の師なる

肯茶山の愛瓢である。それを得ること、それだけでも、余の家の實物である。況んや梅窓先生の手澤を印せるものである。瓢量を量つて見ると、三合八勺、四合には少し足らぬ。はゝあ、汝はこれだけの酒なら、飲んでもよし、これ以上を過すな。わかりました。先生の高情には感泣せざるを得ぬ。先生の存生中は、必ず余の別腸をこの酒量に限ることを天地神明に誓つた。同時に天下に發表する次第である。無理やりに四合を酒豪に引つ掛けて、

酒豪にはならぬともよし御情のこもる瓢に我れは醉はなん

地震考

附 震源爭ひの事

中央氣象臺技師 國富信一

序書

先づ私は地震の専門家でない事を斷つて置く。

地震の専門家でない私が地震の事に就て書くと云ふ其の事が既に僭越であるかも知れない。事實私と地震學との交渉は、中央氣象臺の地震掛主任たる中村左エ門太郎博士の洋行中、私が地震掛主任を代理した事に依つて偶然にも、私の經驗した最初の大地震である昨年十二月八日の東京地方激震に、所謂震源爭ひと云ふ樣な不可思議な經驗をして、地震其のものに關する私の考へが幾分歪曲を受けたものとして私の腦裡に刻み込まれて仕舞つただけである。其の歪曲は然し私に取つて地震學の本體を知る上に却つて好都合であつたと思ふ。

何故ならば或學問を極める上に於て最低の段階から着々と一歩一歩進んで行くのと其の學問の最も弱い部分から飛び込んで行くのとは假令へ其處に幾分の變形された不純さが含まれたとしても、後者から行く方が着々と進んで行つたものの經驗出來

なかつた不可思議を知る事が出來ると云ふ特典を有するからである。

專門家でない私は又地震其のものに對しても全く無經驗者である。只僅に明治二十七年の東京の激震を貴重な唯一の經驗として持つて居る筈であるが、之れとても、私が二歳頃の事で母に抱かれ、然も屋根から落ちる瓦の危險を防ぐために、頭から蒲團を冠せられて、庭へ避難をしたと云ふ事を幾度となく聞かされたと云ふ心細い經驗に過ぎないのであるから、寧ろ歴史や傳說による安政二年の大震の方が私には比較的强く印象されて居る位である。實際其の中でも私が中學時代に見た地震の芝居の方が何の話にも增して、其れが事實らしき假面を冠つて居るだけに深く私の頭に刻み込まれて居るのである。

之れは確かに吉右エ門の地震加藤であつたと思ふ。はつきりと覺えて居ないが何だか馬鹿に廣い部屋が大なる音響と共に垂直に舞臺の下へ埋滅して仕舞ふと大きな屋根だけが其處に殘されて其の古風な破風を破つて憔悴した髯の長い淸正が長刀をもつて出て來た。さうして彼が桃山へ主君の安否を尋ねるべく花道を驅けて行く途中、彼も亦彼の從者も全く步行の自由を奪はれたかくの如く、游ぐが如く走り去るのである。

此の凄じい光景を實際地震に經驗のない當時の私は如何に驚嘆な眼を持つて凝視した事だらう。さうして假令其處に多大の誇張が含まれて居るとしても私には地震の慘害が恐しいものゝ隨一として腦裡に刻み込まれて仕舞つたのである。

斯ういふ樣に地震に對して全くの無經驗者であつて然も地震學の專門家でない私が地震の事に就て茲に書かうと云ふのであるから讀者に取つては迷惑至極な事であるに違いない。然し又他方から考へて見るとまだ幼稚と云つては語弊があるかも知れないが、尙進步の途中にある地震學を其の弱點から見て淺薄な私の感じを述べるのも地震其のものに對する幾分の了解と幾分の疑問とを讀者の頭に殘して、其れが他日專門家の示敎を仰ぐ種ともならば此の稿を草するのも强ち徒勞ではなからうと思ふのである。

序に斷つて置くが地震の一種として地の脈動と云ふものがある。之れは極めて倍率の大なる地震計即ち微動計に依つてのみ觀測し得らるるものであつて、勿論人身には感じない。さうして時には數日か繼續することもあるし又數日間にして止む事もある。原因は多く氣壓の變化に依るもので、低氣壓の襲來する時には特に著しく現れる。故に高氣壓が其の地を支配して天氣晴朗な時などには現はれる事が少ない。此の外に原因となるものは降雨、溫度の變化、などであつて主として氣象上の變化に

伴ふ現象である。然も又土地に依つて現れない所もある。例へば硬い岩石から出來て居る地方には假令現れたとしても極めて輕微であるが東京の如き地盤の軟弱な所謂沖積層の土地では顯著である。何れにしても普通の地震とは全く趣きを異にしたものであるから玆には述べない事とする。

地震の歴史と統計地震學

　地震の記錄として最古いのは矢張り文化の最も古い埃及であらうと思れるが、斯ふいふ古い事になると私には何等の智識もない。第一地震が天體にある日月星の如く太古から既に研究的態度で見られたか何うかと云ふ事が私には第一に疑問である。元來科學は其れが數量的に調査される迄には必ず不確實と迷信とを作ふものであるが特に地震の場合には日月星の如く時に對する整然性がないから迷信が殊に劇しかつたであらうと思はれる。即ち太陽にしても、月にしても、太古の人々の迷信の對照とされた記錄は澤山にあるが其れは或部分の人々に限られたものでそういふ人々は今日でも尙絕えないから別に問題にもならない。斯ふ云ふ迷信に取卷かれて居る一方では又眞面目に日月の運行と云ふ事が研究せられつゝあつたのである。

　所が地震に於てはあまりに慘害が著しく且不動と信じて居る大地が、突然、何の豫告もなく震動するのみか、時には陷落龜裂を生ずるのであるから、大部分の人が神の仕業として認容して仕舞ふのは無理もないことゝ云はねばならない。

　其れ故後日、地震の調査が始つたとしても地震の豫知と云ふ事にのみ心を奪はれて居たのである。

　例へば支那では後漢の順帝の時即ち今から千八百年程前に張衡の作つた地動機と云ふのがあつてこれは一種の感震器とも稱すべきもので、銅の周りに八つの龍頭を作り其の口に丸をのせたもので地震があると其の一方向の玉が落ちて、地震のあつた事と其の振動の方向とを知る事が出來る裝置になつて居たらしいものである。

　其後に支那では最近迄地震の研究は無かつた。我が國でも地震の記錄は多いが其れは只慘害の大小と迷信の幾多とを列記したに過ぎない。只二三の人が普通振子を垂下して置いて其の振動から地震の回數を測定したり、又は水盤に水を張つて、其の水の溢出程度から地震の大小を知つたなど云ふ事があつたのみである。

　玆に面白いのは私が嘗て古本屋から求めて來た安政見聞誌中にある地震時計と稱する物で今其中の一節を拔萃して見やう。

『…………といふ眼鏡屋に三尺有餘の磁石を所持す。

然るに彼の二日の夜、五つ時とかや、彼石に吸つけ置きたる古釘古錠其の他金物、悉く落ちたりとなん。亭主は見るより大きに驚き、我、强に此石を賣んとは思はねども見世の看板或ひは又珍らしく大きなる故大名衆の目にも留らば幸ならんと据え置きしも鐵を吸はねば只の石也、定めて多くの年を經たれば自然其の氣の薄らぎたるか、大きなる損毛ぞと心よからず更る夜の四つ時の大地震なり。其の後彼石に鐵を吸はすに元の如くに付によつて、大地震ある其の前には磁石は鐵を吸はざ事を發明せりとの咄しのよし、是について或人の地震時計といふものを造らんとて、圖を顯すを玆に寫して妙工を得。』とて地震時計の圖解がしてあるが其れは丁度頭をねぢつて鳴らす呼び鈴の如き裝置で、捩るのは其の心棒に獨樂の如く糸をまきつけ其の糸の一端に垂下した錘りの落下によりて心棒が回轉し、鈴を打つ裝置になつて居る。又此の錘は平素は一端を釘にかけ又釘は別の臺上に据えた自然磁石に吸はせてある。故に前文の如く地震の前に磁石が鐵を吸はなくなれば釘がはづれて錘が落下し其の爲に鈴が鳴つて、近く地震のある事を豫告せしむるのである。尙見聞誌には「是等は諺に云ふ畠水練巨燵兵法とやらいふ者に似たれ共若し工夫を創しなば、成就せざる事やあらん。將後の世の益ともなり云々」とある。

之れは元より地震前に磁石が鐵を吸はなくなつたと云ふ根本の事實に誤謬があるのだから、實際の用には供する事は出來ないが只大地震の後の恟々たる人々が、何とかして地震を豫知出來ぬかと苦心した跡が見えて面白い。元來吾人は或る變動があると當座は其の變動に全く心を奪はれて仕舞ふ弊がある。例へば昨年暮から引つゞいて三回一寸した地震があつただけでも、近頃は大地震がありはしないかとの電話が絕えず氣象臺へ掛かるのでも判る。然し之れも健忘性の我々日本人の事だから半年も經てば忘れて仕舞ふには違ひないが。

所で地震が、學問として發達を示したのは矢張り西洋であるが然し地震學が物理の一部門として數量的に研究され始めたのは近々三十年前の事で、特にミルン氏が自己考案の微動計を以て遠地に起つた地震を記錄させてから、著しい發達を來たしたのである。尤も之等ミルン。グレー、ユーイング等の大家は皆々日本に滯在して研究した事のある人々で、一面からは日本の地震學に大な刺戟を與へた恩人とも云へる。爾來我國の地震學は大いに發達した筈であるが未だ列國のそれが遲々として居ると同樣に行きつまつた狀態にあると云はねばならない。故に更に新生面が開けて今までの陋殼を破つて進まねば大いに天下に雄翔する事は出來まい。斯くて地震學の第一歩は他の學問のそれ

の如く統計的研究から始められた。即ち大地震の記錄を遠く舊史に遡つて其れが略何年の週期を有するかを見出し、或は如何なる氣象狀態の下に大地震は多く突發するかを見、其れに依つて來るべき大震を豫知せんと試みたのである。

佛蘭西人であるモンテシユ、ド、バロルは、約十七萬の地震に依つて其れが如何なる地方に如何なる狀態の下に如何なる時刻に起つたかを研究して所謂地震帶なる假想的の線を國内に求め、其の線上には週期的に地震が起り易き事を論じて居る。

我國にも大森博士は多年此の種の研究に沒頭せられて、我國の地震帶と稱すべき地方を指摘して居られるが、之れも單に研究の一方法に過ぎないもので、萬全の策でない事は、此の種の統計が如何程までに理學的に理由を有するかを考ふれば自ら判明する所であらう。例へば我々の狹い記錄にて若し東京の地下に發したる地震なしと云ふ根柢から將來も東京を震源地とする地震は起るものでないと斷言する事がどうして出來やう。然も我々の有する日本古來の地震記錄は地震學から見ては殆と無意義とも言ふべき迷信と不確實に彩られて居るといふ事に思ひ至らば、尙々此の種の統計的研究に誤謬の多い事を察するに餘りがある。加ふるに後に述べる如く大震の際最も被害大なる所必ずしも震源地でないのであるから。

然し私は必ずしも統計地震學が無意味だといふのでは無い。確然たる理學的材料を以てしたる統計は寧ろ重要缺くべからざる物であると信ずる者であるが、然らざるもの、即ち我國の明治以前の地震記錄の如き理學的色彩の頗る不鮮明なる材料を以つてする統計は危險を伴ふものであると云ふに過ぎない。

地震の强弱と地層

地球の地質を等質性のものと考ふれば、地震の研究も頗る簡單であつて、震源地の決定にも、何等困難を伴ないものであるが、地質學上の研究に依る時は、地表より三十里乃至四十里以下にある岩石と、其れより地表近く存在する岩石とは漸次其性質を異にして居ると云ふのであるから、地震學の發達には是非共地質學の研究を伴はねばならぬ事となる。

地質學上では地球の最下層にある岩石層を始原層と云ひ、其の上にあるを古生層、更に其の上のを中生層と云ひ最も地表に近き層を近生層と名付ける。而して、又近生層を分けて第三紀層と第四紀層とに類別し、更に第四紀層を沖積層と洪積層とに分つ事は讀者の多くが既知の事であらう。然し斯く云ふものゝ必しも各層は何處でも此の順に配列して居るのではない。又各層の時代を知るには、其の各層中に散在する動植物の化石によ

り、其れが何時代に生息して居た生物であるかと云ふ事から判定する。

各層が此の順に配列せざる一例として關東平野を擧げて見やう。關東中でも武藏野は第四紀層で最も新しい地層であるが、房州はこれよりも古く第三紀層よりなり、更に秩父地方は始源層により構成されて居る。

又之等各層中の岩石は古い程が比重の大なるのが通例であるが又同一種類の岩石も產地により比重を異にするに至つては、如何に地殼の構造が錯雜したるものであるかを推し得られるであらう。

一般に地震の强弱と云ふも、亦土地に依つて變るものである。而して其の强弱は其の地方を構成する岩石の彈性率に依つて定まるものであると云ひ得る。

今或る物體に或力を加へた時、其に伴ふ變形は其の力に比例すると云ふフツクの法則が岩石に或範圍迄適用し得るならば、岩石の彈性率は、新しい岩石程小であると云ひ得る。而して彈性率の小なる物體は卽ち小なる力を以つてしても大なる變形を生ずるものであるから、斯くの如き物體に力を作用させる時は、其の力の大部分は周りの物體へ移つて行つて仕舞ふ。

地震の强弱は卽其の地を構成する岩石の彈性率の大小に依つて定まるものである。

地球が若し等質體よりなるものならば、其の彈性率も從つて各所に等しい値を有するものであるから、地震による變形も震央を中心にして四方に一樣でなければならない故に若し、震害の等しい、地方を連ぬる等震線を畫くならば、其れは震央を中心とせる圓でなければならない。

然し不幸にして自然は斯くの如き簡單なる解決を吾々に與へる事を許さないのである。卽ち我々の地球は等質である事は絕對にないのである。隨つて彈性率の小なる岩石よりなる地方はたとへ其れが震央より遠くあるとも、頗る大なる被害を蒙らねばならない。之れを以つて見れば、東京市の內部に於てさへも被害の大小を指摘する事を得るであらう。卽ち埋立地等軟弱なる地盤の地にあつては地震の勢力を自ら吸收して、大なる變形を來し、他に其れを傳へる事が少ないから、震害の劇しい事思ふに勝るものがあらう。

昨年十二月八日の劇震に際しても、被害大なる土地と小なる土地と頗る錯雜せる狀態を呈したるは、私共の非常に面白い事實として、今更に地震學の發達に是非共伴ふべきは地質學でなければならぬ事を思はせた程度のものであつた。之れを以つても等震線によつてのみ震央を定めんとする樣な事は最早識

者の採らざる所であると云ふ事が出來よう。

地震の原因

地震の原因として主なるものは之れを三つに分ける事が出來る。第一は地殼の冷却に依つて起る變動で、第二は地表上の物體の移動に依つて起る地殼内の變動で、他の一つは火山爆發の際の震動である。第一の場合には地殼の冷却度が表面より内部に至るに從つて小であるために地殼の一部に歪を生じて地震を起さしむるもので、之れには地殼の構造が一樣で無い爲めに種々な場合を構成する。例へば地殼の一部が水平に左右から壓力を受ければ、其土地は自然隆起を來すし又地殼内に弱點がある時には、其の部分で、或る線に沿ふて上下に差を生じたり又は水平に土地の移動を生じたりなどする。之等は卽ち、斷層と稱するもので、明治二十四年の濃尾地震の際に、上下の斷層が頗る顯著に現はれて居るのは有名な事實である。又外國にも此の種の例は少くない。

第二の地表上の物體の移動に依るものゝ例としては、河川が絶えず土砂を山から海へと流し込んで、河口に之れを堆積せしむるために、河口に當る地盤では、漸次壓力を增すに反し、其の河川の源地方たる山地では、漸次土砂の流失し去る爲めに、次第に壓力を減じ、遂には兩者の平衡を失して地盤の變動を來すものである。印度ガンヂスの河口、北米ミシシツピー川の流域、支那の黃河、揚子江の如き大河の流域に於ては其川幅の大なるだけに、又莫大なる土砂を絶えず河口に向け運搬するものであるから、遂には河口地方の地盤の陷沒を來して大震を生ずる事となる。

第三の火山爆發に伴ふ地震に至つては世に多くの誤解を生じ易いものである。

世人の中には、地震は必ず火山の爆發に伴ふものであると考へて居る人が少くない、が然し火山の爆發は比較的地殼の表面に近い所に於てのみ起る現象であるから、四方へ傳播する程度も亦僅小であり、隨て被害も其の火山地方の一部にのみ限られて地震としては大して恐るべきもので無いと云ふ事が出來る。

此の事に就ては我國にて多年火山の研究に沒頭せられたる大森博士も、火山性地震の恐るべきで無い事を說いて「明治二十六年の吾妻山破裂の地震は、僅々、平均五里迄しか震動を傳へ無い、故に此の破裂の二千倍程の破裂が起つたとして其の破裂の勢力が全部地殼に激動を與へるものとして費されても、明治二十四年の濃尾の大震と比敵する位なものである。而して斯くの如き事は實際、決して起るもので無い」と云つて居られる所

を見ても火山爆發に伴ふ地震の決して恐るべきもので無い事を察するに餘りある。

然し實際の場合に、地殼の變動に依る地震が火山爆發に前後して起る事が多い、と云ふのは、地震も火山爆發も共に地殼内の變動である以上、殼地内に於て此の二つの現象が何等かの因果關係に依つて結び付けられて居て、一方の變動が他方の現象を誘發する如き作用をなすものではあるまいかと考へらるるからである。

近頃地震が頻發する爲めに或は新火山が出來る兆ではあるまいか、とか、筑波山が爆發するのでは無いかとか、甚しきに至つては櫻島火山が爆發して東京に大激震があるとか云ふ流說が頻々として耳に入るが、之等は元より單なる流言に過ぎないのである。

我々が科學の力も及ばぬ、來るべき地殼内の大變動を伺うして豫知する事が出來やうか。何時の時代にも、亦何の國にも、古今を通じて斯かる流說は有り勝ちな事で、敢て咎めるにも當らないが、我々は須からく、斯かる流說に惑はされ無い様に準備をして置く事が肝要ではあるまいかと思はれる。

地震の觀測と其の記錄

地震の觀測と云つても、單に其の有無を知る丈ならば、頗る問題は簡單である。例へば圓形の池の水の振動を見て居ても、何の方向に地盤が振動して居るか、略々推定する事が出來る。

然しながら、其の振動を絕對的に調査するとなれば、玆に莫大なる困難を伴ふ事は云ふ迄も無い。

我々が動くと云ふ事の定義は、何に對して動くのか、適當なる對稱物を定めた上で無くば、下し得ないのである。卽ち絕對運動と云ふ事を我々は、全く經驗すべき自由を與へられて居らぬが如く、已の體系中にある物體の運動を、何に對して定義すべきかと云ふ事が第一に問題でなければならない。

此の故を以て、地震の定義は、地球上に或る不動點を設けて其の不動點に對する地の振動を調査すると云ふ、頗る困難なるものになつて來なければならない。

振動せる地上にあるものは凡て又、振動せるもので有る可き筈である。故に其の中に不動點を作る事は實行上に頗る困難を伴ふものであるが、現在の科學は幸にも、比較的簡單に斯かる不動點に近いものを作る可き道を示して居る。

今、我々が野球をして、バットで球を打つ際に、或る時は弱い球を打ちながら掌の痺れる位反動を受けるのに、又或る時は可なり強い球を打ちながら、さのみ反動を感じない時もある。

それは何も我々の手がバツトの振動に耐え得る様に訓練された爲めでは無く、棒の掌で握れる部分が不動點として動いたのに過ぎないのである。

更に、長い棒を水上に浮べて、其の一端に棒の長さと直角な向きの力を急に作用せしむるならば、棒は決して、全體として平行に移動せず、棒の中の或る一點を不動なる中心として回轉するであらう。それが即ち不動點を得る簡單なる方法で、然も地震計の根本の理論に外ならない。

即ち地震計は大なる錘りを不動點として、其れを貫く腕の短かき一方を、地に固着せる柱に懸け、他の長き一方にペンを附けて水平に保たしめたもので、地盤と共に柱が振動する時、錘の中心は不動點となり、ペンを附けたる一端が其の長さに比例して動き、紙上に地の振動の様を擴大して畫かしむる如き裝置をしたものである。故に全體を一種の複振子と見る事が出來やう。

元より不動點とは云ふものゝ完全に不動なる點を得る事は不可能であるから、地震計も初めこそ、錘の中心は不動點として、ペンは紙上に實動を畫くが、遂には自己に固有なる週期を以て振動し初むる事は必然である。故に、一般の地震計にあつては其の固有振動に妨げられて、地の實動を畫かせる事の出來ぬ恨みがある。

斯くの如き固有振動は、然しながら、制振器なる裝置に依つて或る程度迄は阻止せしむる事が出來る。即ち、振動せる腕の一端を油中に入れて、油の粘性に依り制振せしむる油制振器（オイルダンパー）とか、又は電磁的裝置を用ゐて銅版中に生ずるフーコー電流を利用して制振せしむる電磁制振器等の方法に依るのである。勿論、不完全とは云ひ條、制振器を有する地震計は、制振器なき地震計より實動に近きものを記象する點に於て、後者に勝る事數段である。

扨斯くの如き地震計を以て自記せしめたる結果を見るに、比較的遠地に起れる地震にあつては、主要動と稱する最大なる振動の前に極めて微なる振動が、恰も主要動の先驅を爲すが如くに、然も二段に分れて、數秒乃至數分に亘つて現はれて居るのである。之れは初期微動と稱するものであつて、其の二段に分れたる始めの部分を第一初期微動、次の部分を第二初期微動と稱する。

第一初期微動及び第二初期微動の性質

遠地地震の示す記錄が顯著なる三つの相に分たれると云つたが、此の中第一初期微動及び第二初期微動は地殼の內部の變動のあつた處から直接四方へ傳播される波動であつて、其中でも

第一初期微動は地殼內部を傳はる疎密の波卽ち縱波に依り、第二初期微動は同じ橫波に依つて現はるゝものである。然るに主要動は地表を傳はつて來る地震波である。勿論、第一初期微動も橫波を含み、第二初期微動中にも縱波を含むでは居るが、只其等の中で主なるものが、第一初期微動にては縱波に依り第二初期微動にては橫波に依るものであると云ふに過ぎないのである。

地殼の內部では例へ縱波のみが傳はつて來ても、岩石から岩石へ、土壤から土壤へと傳へられて行く中に其れが橫波をも生じて仕舞ふ故、結局純粹なる縱波は絕對的に得られぬと云ふ事になる。同樣な事は橫波の場合に就ても云ふ事が出來る。

但し、縱波と橫波とは元來速度を異にするものであるから、震央から遠い距離、例へば、震央から七里以上距つた土地では、若し其の土地が等質體から構成されて居るならば、全く速度の差の爲めに縱波が先きに來て第一初期微動を構成するから、純粹に近い縱波を得る事が出來るのであるが、これとても地殼の構造が、實際錯雜して居て、地震波が其の通路にて何回かの反射、屈折を受けて來るから、其の度毎に縱波と橫波とを生じて矢張り純粹なものは得られないのである。

今私は第一初期微動の波と第二初期微動の波、卽ち縱波と橫波との間に速度の差があると云つたが其れを實際に測定した結果は、平均第一初期微動の波の速度が一秒間に七・一粁、第二初期微動の波の速度が一秒間に四・〇粁である。但し此の速度も、地震波が弧の上を傳播して行く場合と弦の上を傳播してゆく場合とに依つて少し宛變つて來るのである。

例へば弧の上を傳はる場合に於ては、波の速度は弧の長さに隨つて增加するが大體第一初期微動の波が一秒間に八粁から十四粁迄の速度を有し、第二初期微動の波が一秒間に、五粁から八粁位迄の速度を有する。然るに地震波が弦の上を傳はる場合にあつては第一初期微動の波が一秒に八粁から十二粁、第二初期微動の波が五粁から七粁位迄の速度を示すのである。

如斯、地震波が傳はる速度は、震央からの距離が增すに從つて大となるのであるから、これから考へて其の徑路は必ず直線でない事が判明する。而して又其の徑路は地表から見ると中凹なる曲線でなければならぬ事も、次に斷定出來るのである。

然し以上は外國の地震學者が多くの地震を統計して得たものであつて其の地層が如何なる時代のものか、又如何なる岩石で出來て居るかは全く不明であるから、其の速度の値だけに就ては、何の位迄信用し得べきものかを知らない。

實際彈性波の速度は、嚴密に云へば、其の媒體の比重及び彈

性率に依つて定まるべきものであるから、地震の波の如く錯雜せる地層の間に通過する波の速さを、簡單な公式を以て論じ樣とするのが既に大なる誤りで無ければならない。一般には古生岩石程速度が大であつて、新生岩石を通る時程速度は小である。

斯くの如く考へる時に、初期微動繼續時間は、震源から、直接に來る縱波、橫波の主要動に先き立つべき時間を示すものであるから、其れは、其の地と震源迄の距離、及び其の間の地殼の構造に依るものであつて、地震の大小には全然無關係なもので無ければならない。

故に斯くの如き性質を有する初期微動繼續時間を用ひて震源迄の距離を決定する事も、地殼を等質體より成るものと假定せば、又可能な事でなければならない。

震源地の推定と震源爭ひ

震源地を推定するには今まで四種の方法が用ひられて居た。それは一、初期微動繼續時間に依る方法。二、初動方向に依る方法。三、發震時に依る方法。四、等震線に依る方法、等であつて私に忌憚なく云はしむれば何れも正鵠を得た決定法でないと云ひ得る。只之等の凡てを一時に適用した時に或は實際に近いものを得るかと思はれるに過ぎないのである。

一、初期微動より求むる方法。之れは前述した如く、初期微動繼續時間の長短により、震源迄の距離の遠近を決定するものであつて、數々の地震の記錄と其の震源地までの距離より計算して初期微動繼續時間と震源迄の距離との間に關する一種の實驗公式を作り、其れを用ひて、爾後の地震の震源を決定する方法である。

此の方法はミルン氏が初めて用ひた方法であつて、氏の公式もあるが其れを直ちに我國の如き、地質の全く錯雜せる所に適用する事は不可能である、又斯くの如き方法は日本國内にても各所で唯一の同じ公式を用ひて震源を決定すべきものであるまいと思はれる。

即其の地質に從つて、縱波橫波の速度は異るのであるから、各所にて夫々に特有なる公式を一々算定して置かねばならない、又其の公式も嚴密に云へば各方面に就いて一々異る式を算定する必要もあらうかと思はれる。

然も地震波が波動する際に地質の錯雜せる地方では數回の反射屈折を受け、恰も光線が諸種の媒體中を通過する際に幾回かの反射屈折を受けて徑路を曲げらるゝが如く、彎曲せる徑路を通過して來るのであるから、尚々初期微動繼續時間と震央迄の

距離との間に、そう簡單な關係があらうとは思れない。

初期微動の時間より算定した震央距離が、各地の記錄により夫々に判明したならば其れから震源を求むるには其の算定した距離を半徑として夫々に圓を描き其の交點を求むればよいのである。

斯くして得た交點は一般に一點には交はらない。三ケ所の觀測所の結果を以て圓を畫けば一般に三點に交つて來る。故に其の三點を頂角とする三角形を作り、其の重心を求めたるならば其れが震源であると云ひ得る筈であるが斯くの如きは決して正鵠を得たものとは思はれない。如何となれば、先づ初期微動繼續時間其物が決して記象紙上に於て判明なる境界を有するものでは無く、同じ記象紙により求めるとしても觀測者により幾分の差を許さねばならぬ程度の物であると共に、前述した樣な地震波の速度が頗る複雜なものであるから之れを平面三角法や平面幾何學の如き簡單な方法で處理するのは只單なる近似的値を求むるに過ぎない事を示して居るのである。

つまり此の方法を以て求めたる震源は決して狹い範圍に限られる事は無く可なり廣い區域に亘る場合が多い。又一方觀測所の多ければ多い程正確なものを得らるべき筈であるのに却つて結果は錯雜して來る場合が多い。之等は皆此の方法の不備を語る事實では有るまいか。

斯くて求めたる震源は、假令其れが地表に近くありとしても常に十里以内の差は許さねばならぬのであるから昨年十二月八日の地震としても氣象臺は松戸我孫子を境とする一帶の湖沼地帶を震源地と云ふに對し大學地震學教室の發表たる江戶崎は其處に何れ程の差を認める事が出來やう。私の眼から見れば震源爭ひなどは新聞紙上に玩ばれたる蝸牛角上の爭ひであつて眞に地震學を解する人は寧ろ一笑に附し去る事に違ひないと思はれる。

又我々の側から考へても、震源を爭ふ前に先づ地震學の見地よりして何處の程度迄正確に震源地を定め得るかと云ふ事を考へて見度いものであるし、又世人にしても現今の地震學の發達程度を知り何の程度迄震源地は正確に決定し得るかと云ふ事を了解するならば決して新聞紙上に五六里の差を爭ふ事も無くならうし、又何れが勝つかに興味を引かれる事も無からうと信ずる。

二、初動方向より求むる方法。地震が初めて動く方向は卽ち縱波の來れる方向を示すもので、引いては震源地の方向を示すものでなければならない、故に東西動地震計及南北動地震計の各々から測定した初動方向により震源地の方向を略々推定する

事が出來る。此の方法はガリツチン氏が初めて唱へた所で可なりの正確さを示す事が出來るが、矢張り地震波の反射屈折のため幾分傳播の途中に於て其の方向を曲げらるるのであるから矢張り十里以内の程度迄は信用出來ぬ事となるのである。

之れも勿論初期微動の場合と同様一ケ所の觀測だけでは頗る怪しい結果を示す事は勿論であるが、多くの場所の正確な結果を成るべく多く蒐集する事が出來るならば可なりの程度迄正確さを保たしめる事が出來るのである。

三、發震時に依る方法。之れは各地に感じた初めの時間を測定して其より震源地の遠近を定めて震央を求めんとする方法であるが、勿論地殼を等質體と考へた上での仕事であるから假令、發震地を測定する方法と其れに用ひた時計とに誤がなくとも、根柢に幾分の誤りあるを如何とも爲するとが出來ないのである。

四、結震線に依る方法、此の方法の事は前にも略記した事であるが、蓋し最も拙劣な方法と云はねばならない。又實際僅に參考として用ふる程度のものであつて、之れを主として震源を決定するなど云ふは確に事の本來を知らざる業と云はねばならない。然し此の方法とて、一地方にて、數百年來確實な材料により、各部分部分の地質を研究した上ならば寧ろ優良なる事もあらうが、現今の場合にては私は此の方法に多大の疑問を殘すものである。

要するに、震源地の決定は之等の四法を適宜に用ひて爲すべきものであつて、何れか一つに依る事の正しからざる事は論を俟たない。

又ある一ケ所の結果のみを用ひて震源を定むるなども、あまりに器械と方法とを過信せる行爲と云はねばならない。

故に私は「現今の地震學の程度を以てしては震源爭の起る道理がなく、假令二者說を異にした所が其差は器械と方法の不備とによる誤差の程度のものであつて怪しむに足らぬ事である」と斷言したいのである。

昨年十二月八日の大震は圖らずも私を震源爭ひの渦中に陷れ帝大地震學教室に對して新聞紙の所謂「當の敵」として仕舞つたのである。而して私共は當時、震源地として終始松戸、我孫子附近を固執したのであつたが私としては現今の震源地決定法を用ひて之れ以上の範圍を狹める事も出來ず、又此の土地以外に震源地を見出す道を知らなかつたのである。

然し新聞紙上に傳へられた震源爭ひは事の眞相を明かにするにはあまりにお祭り騷ぎであつた。

私は此の震源爭ひに限らず、神聖なるべき學術上の論爭が新聞紙上に現はるゝ時あまりに、其れがお祭り氣分になるを悲し

むものである。

地震と迷信

地震に限らず、凡て自然界の珍奇なる現象には必ず迷信の作ふものである。

地震に關する迷信は、蓋し其の中の主位に置かるべきものである事は、震地が多くの災害中最も恐るべきものと見做されて居る證據に外ならないのである。

我國では昔から、火山爆發の際には其の山神を鎭めるために位を授け、又は時の年號を變へなどしたものであるが、地震の際には流石に位を賜はる事は無かつたが改元をした例は、時々に見受けられる、と云ふのは大地震のあつた年が元年に多い一事を以てしても、推察出來やう。例を擧げるならば、京都の大地震は天慶元年、貞元元年、文治元年、慶長元年、天保元年等に起つて居る、中にも天保元年の地震は、實に文政十三年にあつたものであるが、改元して天保とした理由など、事細かに記された文書などを時折り見受けるのである。

又、地震に關する解説も、古來色々な書物に見えて居るが、何れも大同小異であつて一々玆に列記するのも、徒に煩雜を來すばかりであるから、其中の一つを訓蒙天地辨より引いて見やう。

「地震」

問ふて云、地は天の中に居して永靜不動也としるに、地震其の多少あつて、其の强きものは家を倒し、地を裂き、あるひは郷村を陷れ、山を崩し海中俄に一小島を湧出するが如き、頗る奇怪なり。又云、地底に大鯰魚あつて國土を周回す、時有つて鰭をうごかす時、多少に從つて地震ふ、其の首尾を合して石釘を以て貫く、常陸國鹿島なる要石是也。其大に震はん事を恐れ、神力を以て然すと、粗荒唐に似たり、實理を聞ん。

答へ云、大概雷と地震と、理を同じうして、上は虚なるがゆえに聲百里に聞ゆれ共震はず。地は實なるがゆへに地を激動す。然ふして地の體は元、氣の渣滓の凝れるものにして、周圍に氣を通ずるの竅あつて、たとへば蜂の巣の如し。水火の氣其の中に伏す。其の氣舒んと欲しのびがたきものは地を震つて發出す。凡て天地の間陰陽昇降する事、冬至に一陽來復し、次第に陽來て、四月に至つて陽充滿し、陰退き盡す。よつて孤陽無陰の月とす、五月一陰生じて十月に至つて陰のみ純にして陽なし。陽(カミ)なし月も、之れが爲めの名なり。

十一月に至つて陽來る事又始の如し、如此二氣出入往來するが故に、多は上に陽少しと云へ共、下に陽あるが故に井水あたゝかに土中温なり。

夏は陰上に微く下に多きゆえ井水冷し。二氣入かはる事、春夏陽地中より發し、陰潜る時は先、うかみ昇る氣出て、沈む氣跡に入るを順とし、秋冬陰出で陽かへる時も、先發する氣出て沈む氣後に入るが順なり。然るに先、沈まんとする氣至つて、土竅を閉る時は發する氣塞り、舒るを得ず、地下に凝蟠り終に迫り戰ふて、先臨む氣を突き破つて發する時地震となる。二氣地下に和合せざるゝの也。

其のつよきものは地を裂き、海を揚るの變をなす。大なる地震は風なく快晴にして靜かなる時にあるもの也。風雨あれば、其れがために、やゝ下伏の氣を發する故、大地震なき也。

國語周語に「陽伏而不能出、陰逼不能蒸、於是有地震」と云かし。餘の說のごときは日本の外には國土なしと考へたる人の、天地の大を知らずして云へるなるべし。唐土、天竺、紅毛、それぞれに大小の餘あつて、其の國土を周廻すべきや。然らば要石も萬國に一づ宛有るべし。」

即ち地震は雷と基を同うするとの說で、今から思へば滑稽とも見られるが、又捨て難い風情も見受けられる、凡て之等昔の說は當時にして見れば仲々の卓見であつたに違ひないので、此の陰陽說も仲々一笑に附するべきものでない事を思はしめる。

次に我國では、地震の發現した時間により來るべき天候等を豫知しようと云ふ頗る蟲の善い歌があつて私なども、よく祖母に聞かされたものであつた。

九は病　五七が雨に　四つ旱り
六つ八つなれば　風と知るべし

勿論刻限は昔の時に依つたもので、九つが十二時、八つが二時で順次四つが十時になつてゆくのである。今年四月二十六日の强震が十時十二分頃の發震であるために、丁度四つ旱りに相當し此の分では今年は天氣が善く夏は雨が少からうと今から井戸水の涸れるのを頭痛に病んで居る人がある事と聞く。

此の歌に就て、中央氣象臺の中村博士が暇を見て調査せられた結果を紹介して、昔の統計上に立つて此の歌が何れだけ信用出來るかを述べるのも亦一興であらう。但し中村博士の調査は一ケ年間の材料を以てしたのであるから、勿論正鵠を得たものとは云ひ難い、只其の大勢を伺ふに過ぎない事を豫め御承知ありたい。

先づ第一の九は病であるが、之れは九を苦と語呂に依つて合はせて苦は病としたものであらうから、先づ信用すべきものでなく地震があつたから疫病がはやるとも受け取り難い。若し地震が疫病に關係するならば其より以前に、先づ他の氣象要素に關係すべきであるから之れは問題外として觸れない事とする。

そうして他のものを調べられたのでは次の如き結果を得たとある。

時刻	豫想	適中	偏中	不中	(百分率適中に偏中の半を加へしもの)
五ツ。七ツ。	雨	十二	一	五	六九
四ツ。	旱	三	三	七	三五
六ツ。八ツ。	風	十〇	四	三	七一

雨の適否は翌々日迄に降つたものを適中として翌日降らず、翌々日に其の測れない程度の雨があつたものを偏中として居る。風の方は翌々日迄に毎秒六米以上の風が吹いた時を適中として翌日中に五米以上に成つたものを偏中としてある。又旱の偏中とは短時間の雨を見た時、及び一度地震後に天氣が回復して又降つた場合を取つてある。

之れに依つて以上の結果を見ると旱の場合を除く外は七割の適中率を有する故、萬更、荒唐無稽と一笑し去る事は出來まいと思ふ。

又地震に依て天氣が變る事も調査してあるが、變り易いと云ふ傾向は見えぬ樣であつた。

即ち地震の歌などは餘の說と同一すべきもので無く長い間の統計に依り案出されたものであると云ふ事から既に相當の敬意を表すべきものであらう。

結論

要するに地震學は、其の歴史が極めて新らしきだけに、今猶過渡期にありと信ずる事が出來る。而して最近には舊來の型たる複振子型地震計とは全く異つて、ピエゾ電氣を利用せるガリツチン氏の新式地震計も案出せられ、更に我國にても、新進の專門家に依つて震央を求むる新方法の研究せられつゝあるを聞く。現今の地震學の不備を說いた私の此稿も一兩年の中には既に一笑に附せらるべき機運に向つて居るのではあるまいか。

全然不可能と見做されて居た、地震の豫報も、或は近く實現せらるべき運命を有するのではあるまいか。

然しながら人體の內部の疾患を見出すのに、醫師は始め打診を以てして居る。現今の地震學は丁度此の程度のものではあるまいか。

地震に依つて地殼の構造を知り、地殼の構造を知つて更に地震を豫知するには、人體に於けるX光線(エツクス)に比敵すべき地殼の構造を知る何等かの方法の發見を待たねばならない。

私が斯くの如き世迷言を並べて居る時にも眞摯なる專門學者は着々として高遠な理想に近づきつゝある。私が他日再び地震に就て豫言を爲す日の來る迄、私は地震豫報の適否でも夢見つゝ靜かに眼を閉ぢて移りゆく世界を待つとしやう。(一一、五、十六。)

小杉未醒の日本畫

初期の文展洋畫部に於ける數回の最優賞受領者としての未醒氏。日本美術院洋畫部の主腦としての未醒氏。春陽會の牛耳を執りつゝある未醒氏。即ち洋畫家としての未醒氏については世已に定評がある。併し氏が數年前より殆んど其全力を傾けて精進しつゝある日本畫については、時々の小展覧會などにあらはれた少數の作品によつて、一部の鑑賞家の稱讃を博したる外、一般に餘り知られて居らぬ。氏は六月十二、十三の兩日に亘り、日本橋倶樂部に於て、其日本畫の製作約三十點を展觀して大方の批判を仰ぐことにした。編者は氏と親交あり且つ氏の畫に最も理解ある三人に乞うて、其下見會を開き、其忌憚なき批評を公にして、氏の日本畫の本領を明にし、且つ此個人展覧會を見る人の參考とすることにした。編者は氏の日本畫が必らず我畫壇に貢獻することの尠からざるべきを思ひ、編者も亦氏と親交あるの故を以て其好む所に偏愛せりとの譏りを免るべきを信ずる者である。（編者しるす）

未醒氏の日本畫を瞥見して

平福百穗

未醒氏の作に親しむのは、もう二た昔しにも近い、豪快な男性的な氏が作の、洋畫日本畫を通じて常に一種沈欝とも見るべき、靜寂な世界を現はさうとしてゐる。怪力亂神を喜びさうな氏にして不思議にも思はれる。而しこれは氏が生れながらにして培かはれたる趣味と、内に邃く湛えたる詩才の發露ともいへよう。

氏が近年描かるゝものは、洋畫よりも日本畫の方が多い。嘗て油繪具を捨てて、東洋の筆硯に親しまるゝのではないかと思はれる。思想感情の表現もこの方が適してゐるかも知れない。自然作風のすべてが著しく南畫の枯淡の境に入つてゐる、四王呉惲を貶し寂美雲林を擧げ半千に贊することに、その傾向を覗ひ知られる。近時日本畫に非常な勢ひを以て擡頭して來た、洋風の逐條描寫と正に逆行してゐる。氏にあつては元より、何等顧慮するに足らぬことと思ふ。また一面に滋晦的とか神秘的

ともいふべきものを持つ點は、美術院の或る一部の人と共通してゐる、氏が感化を受けたるものか或は却つて感化したのかも知れない。

前年第五回文部省展覽會に出品された『水郷』(油繪)と『暮江釣歸』とには、心持ちに於て可なり徑庭を見るが美術院出品の油繪『老子出關』と『行脚芭蕉』とは同じ心持ちを以て見らる。洋彩の濃厚より、邦畫の赭石、藍綠の補綴に、蒲塘秋閑はなる『秋莊訪客』『幽居新綠』の清新自在なるを看取される。『寒烟樵夫』『漁樵問答』の詩情豐かなる『山海十種帖』『水國八種帖』の素描の含蓄ある、所謂墨を惜しむと金の如しといふものか、方寸のうちに江山の靈氣を鍾め得たるものとして、優に日本畫壇に特異の境地を拓いたものと思ふ。

『玩成』『藥草』などの高踏的のものは、一見したところ、ただ一刷のやうにも見ゆるが、細心苦澁の痕がいまだ氏のほんとうのものが表現しないやうに思はれる。『一閑人』の竹椽の右に二本の竹の幹の直ぐならざる點に、その才の迸りを見ることが出來る。

『梅花小禽』『桃花鳴鳩』や草花などは手法聊か平面に失しはせぬかと思ふ、他の風景畫などに對し、幾分苦勞が足らないといひ得るかも知れない。

長條幅より横物に、横物よりも長卷に、その豐富なる構想の自由な力を發揮される、自然の推移倏忽の變化、限りなく展開さるる一部とも見るべき『湖村初秋卷』『古事記三題』がある。

僕には矢張り實相觀入の作に無限の感興を惹く、近來一部に稱へらるる甘き情趣(氏には絶無)に泥し、濫晦夢幻に獨り興じるときは極めて危きことと思ふ。氏の行くとして可ならざるなき才と、獨自の境をふかく押し進め行く力とは、年と共に刮目すべきことと思ふ。

構圖の畫的興味と詩趣

森田恒友

未醒氏は約三十點の絹紙作、即ち日本畫を見せようとする。之れは私から見れば精力家である。精力といふ言を聞く未醒氏は苦笑するであらうが、私は之れを羨ましい心を持つ。氏の場合にあつての精力といふ言葉は、從來日本畫家の健腕多作の意とは違ふ。可成り怠りのない仕事を、可成り怠りなく吾々に見せる。其間に起り醒めが無い。世間では之れを勉勵家といふかも知れぬが、實はそうでない。藝術は勉勵から生れない。精力

發散といふ本然からで無ければ生れるものでない。又そう無ければならぬものだと思ふ。

未醒氏の畫に接して、私の先づ感ずることは、畫面の整ひに就いて注意深いことである。中には描き過ぎたと思ふ作もあるが。整然とした完成を期する上から、其處まで持つて行かねば氣が濟まぬのであろうと思ふ。整然と完成しようとする。それは未醒君の信念でもあり、趣味でもあると思ふ。

完璧の信念、趣味は、當然藝術家の誰れもが持たねばならぬものではあるが、それを一に置くか二に置くかの多少の相違はある。私は未醒君の信念を、一に置く例とする。今度の「暮雪」「湖村初秋」は共に最も之れを語つて居るようだ。二作共構圖が整ひ、用墨用筆が練られ、空の無い作であり、趣の多い整つた畫面であるが、何となし寛ろぎが乏しい、語を更へて言へば、趣が整えられて居るが、氣合が缺けて居る。之れが固苦しい感を與へるのであろう。詩趣充分であつて、而も詩情の乏しいのは此の爲めであろう。私は之れを此の二作に惜まねばならない。

作者の自任するものを見物が割合に贊しないといふことは數々あることだが、未醒氏の場合にもある。作者はあまり重きを置かぬかと思ふ小品、「山海十種」「水國八種」の二つの畫帖、「漁樵問答」の小帖を私は好む。氣持よい詩情のある小品ではある。之れ等には寛濶清楚、氣と情と趣とが、程よく存在して居るといふ感じをうける。好ましい小品である。

未醒氏の畫心の出立を一と口に言ふことはむづかしいが、畫の心を一貫して最も多く支配して居るものは、構圖の畫的興味と詩趣とであろう。此の言葉は未醒君に於いて相當に當たる言葉かと思ふ。詩といふ言葉には語弊があつて、本當の意味での詩無き畫は藝術で無いと言へるが、一と口に詩趣、詩情と云つても、質はいろ／＼ある。筆にあるもの、色にあるもの、構圖にあるもの、作者の意識して存在するもの、意識せずして存在するもの、それ／＼違ひ、それ／＼其人々の畫心が畫面に發展する。未醒氏にあつては、主として私は構圖にそれが存在すると見る。未醒氏の畫心は詩趣を意識して先づ構圖が整へられるであろう。「一閑人」のような省筆の畫面も、「暮雪」のような水墨作も共に構圖に最も興味を持ち、從つて骨折つて居ると感じる。恐らく此の詩趣の意識があつて、構圖を整へる人として、未醒氏は現代の畫界に異數の人である。

文人趣味と云ひ、書卷の趣と云ふ。此の言葉も不完全な言葉だが、未醒氏は私の知る範圍での趣味の廣い人であり、讀書を好む人であることも、幾分未醒君の畫を裏附ける處もある。氏

の畫材は割合に多趣であり、多様である。此點私などゝは違ふ。畫心と畫興とを多種に働かせる。「一閑人」も「四季草木」も「秋林」もといふ風に、何れも構圖に一貫した好みがあり、趣を多種に働かして居るのである。

「古事記三題」「波旬三女」といふような畫題は、未醒氏が好んで數々撰ぶ畫題である。之れ等が最も明確に構圖に興味を持つ人である證左ともなるものだ。それは構圖上の畫的興味からと神話の不可思議といふものに興味を持つことから來る現はれであると思ふが此の二作は失敗の作と見ねばならい。

構圖に興味を持ち、詩趣を愛する。それが未醒氏の畫の多様の如くして、どれにも含まれて居る氣持である。此の氣持が一貫して畫面が練られる。それが未醒氏の大きな特色であると思ふ。

現在日本畫界は隨分動揺して居るようだ。日本畫界の若手の間を風靡して居る如き寫實主義は、反つて洋畫畑に育つた者からは賛しにくいものが多い。畫界を通じて一人一技が明らかに證されるようになれば、畫は面白くなるであろう。東洋畫の前途などいふむづかしい題を出されても即答は出來ぬ時代だ。凡ては時間が解決するであろう。作者は性に從ふか、好みに行くか、此の二た道に決められて行くであろう。

未醒君の軌道

山本鼎

倫敦のバルカン人の定宿、マイルスホテルの食堂で或露西亞人に話しかけられた事がある。親切な中老人で、モスクワの見ものをいろ／＼敎へてくれたのだが共人が、

「自分はデイビジオニストだ。デイビジオニストは歐羅巴諸國に亙つて澤山に居る、――アンリイ、ルーソーなどが其偉なるものである」

と云つた。まつたく氣をつけて見ると、デイビジオニストは歐羅巴には限らず、世界中に生れて居る。分裂派（デイビジオニスト）とは一體何か？其仕事の藝術的體系は如何なるものか？僕の淺識は仔細にそれを詮明し得ないが、例へば、初期印象派とか、後期印象派とかもしくは未來派とかいつたやうな劃期的な畫派でない事はたしかだ。つまり、傳統の繫縛を斷つて各人が獨特な軌道をつくらうとし、殆ど個々に分裂した二十世紀の廣汎な運動に與つたすべての人をデイビジオニストとするのであるらしい。併し彼れらの軌道にはたしかに共通な方面があり位置がある。彼れらの軌道は實相耽美の側よりも美術的機巧の側に位置して居る。彼

れらは、おしなべて、臨物的眞實には冷淡だ。例へばモネエが血道をあげた、太陽下の現象とか、カリエールが努めた立體的なトオンとか、又は物質美、解剖學的迫眞、などといふ事はまるつきり閑却して居る。それに比して、畫面の幾何的な構成、物體の抽象的誇張、筆や繪の具の諧調的な新使命に智慧を絞つて居るのである。要するに彼れらは、寫實に倦きたのである。ちやうど文明の利器が必ずしも人間の生活を幸福にしないやうに、自然の諸相に迫眞するに便利なあの油繪の具といふやつが厄介になつたのである。

×

未醒君の軌道は、仕事の上に樂しみ多い自由さをもつたデイビジオニストの軌道だと思ふ。デイビジオニストの軌道といつても、グロテスクな處のない、寫生の眼を母體とするものではあるが、畫面の構成に工夫の多い事を指摘してさういふのである。僕のやうに常に實相と併行して臨物に執着し、屢々寫實の餓鬼となる者は、苦しい幻滅を味ひ、美の二つの觀念（實相の美と美術の美）の間に錯迷するのだ。——認識や感覺が複雜ににになればなる程、簡潔な表現（油繪よりは鉛筆畫といふやうな意味）に據るべきである——千萬無量の思ひは決して多辯では表れない、なんかと考へるのである。

×

未醒君の製作の現在には注意を惹く二つの傾向がある。詩的な畫と畫的な畫だ。詩的な畫とは例へば、近作『暮雪』や『水邊春意』や『秋霧』のやうな細いふるえのある線から成つて居る寫實的なデツサンで、模糊なトオンと點景人物の風情に情緒を寓してあるものだ。畫的な方の例は、「幽居新緑』のやうなもので、僕は、此方が好きである。構圖にたるみなく全幅の筆致に生彩があり、そして色が涼しく香ぐはしかつた。（五月十九日）

本誌の口繪

平福百穗　森田恒友
小杉未醒　小川芋錢
安田靫彦　小林古徑

本誌の口繪は本號より
の六畫伯の快諾を得て其揮毫に成る文人趣味を主とする畧畫の複製を附することとなれり。本誌の大なる誇として此旨讀者諸彥に謹告す。

想華

亡友四匹

長谷川如是閑

彼れは人間よりも犬が好きだつた。それを白状する度に、彼れは誰れからも非難された。此の非難ほど彼れにとつて受取り難い非難はなかつた。勿論理窟は非難する方にあると思つた。けれども實際世間の大多數の人間が彼れと同樣なのに、彼れだけが非難されるのに不服だつたのである。

『人間が、人間以外のものを人間よりも愛するといふのは非人道だ』から云つて彼れは非難されるのだが、彼れはその道理に敵し得ないだけ、すべての人が非人道の人間としか思はれなかつた。善い人も惡い人も一樣に非人道であつた。眞面目な職人は、仕事を注文する人間よりも、自分の作つた作品を好んだ。忠實な科學者は、人間よりも研究を好んだ。――従つて人間の中でも、自分の妻君よりも助手を好んだ。――商人は、お客や使用人よりも金錢を好んだ。愛國者と陶器の名人とは人間よりも土を好んだ。掏摸は、人間よりも人の懐の財布を好んだ。大名の妾は――偶然私と同樣に――人間(殿樣)よりも狆を好んだ。武士は自分の命――人間中の最も大切な人間――よりも名譽を好んだ。鐵道省は口

やかましい人間よりも獸つて乘つてゐる貨物を好んだ。……そんな例を數へ立てたら際限がない。實際眞劍の力士は、人間を、土俵へ叩きつける肉塊と思へばこそ職業が成り立つ。眞劍の僧侶は、屍となる前の人間は穢れた生物だと思つてゐるといふことだ。出來上つた人間よりも半製の人間を好まなければ教員は勤まらない。今の軍人が兵士よりも馬を尊重したといつて非難されてゐるが、昔孔子が馬よりも人間を大事にしたといふのが一つ話になつてゐる位だから、聖人以外の普通人が、人間を何う取扱つたかは察するに難くない。

それ等の事實を見ないふりをして、偶彼れが犬を人間よりも好きだと云つたのを非難するのを、彼は不服に思つたのである。然しさういふ場合、彼れは、相手方を不服に思ふ代りに、自分が相手方の不服なのだと感じて、その不愉快を相手方に移轉せしめた。從つて彼自身は寧ろ愉快だつた。――彼れがもし、他人を不愉快に思はせることを喜ぶやうな人間だつたら、一層愉快だつたに違ひない。

『僕は人間よりも犬が好きだ』――で彼れは、さうでもない時でさへ、態とそんなことを人に云つた。人がそれを非難すると、益々得意になつて、多くの人が人間以外のものを人間よりも好いてゐる事實を數へ立てた。そんなことをいつてゐる時分に、友達と一緒に松井須磨子のマグダを見た。その友達は、急に、

『マグダは親爺よりも人間が好きぢやないか。それほど人間は人間を好くものだ。』と彼れに云つた。

不意打を喰つた彼れは、ヨロけた自分を立て直す暇もなかつた。彼れは口惜しいのを蔽さうとして大きい聲で笑つて、近所の御客にシツシツを喰つた。

所が不思議なことには、そのマグダは、幕の下りるべき時に下りずに、死んだ親爺に頻りに不心得のお詫をし出した。さうして一分間前とは正反對に、親爺の方を人間よりも大切にすべきであつたことを、母と二人で述べ立てた。僕は何

意になつて、友達に、

『それ何うだ、マグダは人間を好いたことを後悔してゐる。此調子だと須磨子のノラも屹度、今頃は家出をしたのを後悔して、家に歸つて亭主に詫を云つてゐるだらう。』

今度は友達が大聲で笑つた。而してそれは東京か大阪かの――此の芝居の話は大阪の何座かだつた――警察が、不認可にするといつたので、島村君が、何うすれば好いのかと尋ねたら、警察では、あれだけの科白をアトに加へれば認可すると云つたのである、といふ内緒を彼れに話した。彼れは、人間を好むことを禁止したのが警察であることを聞かされて、大にテレてしまつた。

然るに間もなく同じ一座の、中村吉藏氏の『飯』といふ芝居を同じ友達と見た。さうして彼れは得意になつて、友達にいつた。

『ソレ見たまへ、餓もじい人は、人間よりも飯や馬肉を好くのだよ。「ソップにもならぬ親爺の肋かな」と或る道德家の老人もいつたよ。』

で彼れは澤山の犬を親友に持つてゐた。或る時は、五六匹の犬を一時に家に置いてゐた。勿論貧乏な彼れは、犬を友達に持つ爲めに高い金を出すことは出來なかつた。人間の友達を持つのに一錢も出さうとしない人達が、犬の友達に限つて高い金を惜しまないのを、彼れは別に攻擊する氣ではなかつた。何へでも金を出すのは出さないよりも篤志だと思つた。たゞ彼れは貧乏でそれが出來ないまでゞあつた。或る時新聞でブルドックの子供を讓るといふ廣告を見たので手紙で問合せたら、早速その犬の寫眞を送つて來た。それは好いブルらしかつた。で讓り受けや　と思つたら、その寫眞

について來た手紙に金百五十圓とあつたので驚いてやめにした。然し此の場合、彼れはつくぐ金が欲しいと思つた。尤もその犬をたゞで吳れたら此場合、金は一文も欲しくはないと思つた。

彼れの友達は皆ロハだつた、犬の友達も人間の友達も皆ロハだつた。從つて碌な友達はなかつたらうなどといふものがあるかも知れないが、そんな人には、昔の支那人の言つた『斷金の交』といふ言葉を敎へてやりたいと彼れは思つた。彼れは自分と犬との間柄をその斷金の交だと信じてゐた。――彼れは、『斷金の交』とは、聯合の堅いことを意味する言葉と解さないで『金錢を超絕した交際』といふ意味だと思つてゐた。無論、易の繫辭傳の、『二人同ㇾ心其利斷ㇾ金』がその典據であることなどは、知る筈も必要もなかつた。――彼れはさういふ交際を誇るに足るものと思つてゐた。尤も人間同士の間では、彼れの所謂斷金の交には、彼れも時々愛憎を盡かすこともあつた。偶切迫詰つた時に相談を持ちかけても、てんでに『斷金の交』だよテナ顏をして、資本の要らない同情だけでご免蒙らうとする。何んな好いものでも濫用はいけないが、斷金の交の濫用は殊に惡いらしかつた。尤も此方が受身の時にはいけなくはなかつた。彼れも多くの場合に斷金の交を濫用した覺えがあつた。

彼れと犬との斷金の交は、人間同士の場合と違つて徹底的斷金であつた。金百五十圓也のブルと交際を結ばかつたのは、その百五十圓がなかつたからであつたが、もしその金があつてブルを手に入れたならば、それは確かに失敗だつたらうと思つた。自分の子供でも、母が、『サア產んであげるから百五十圓お出しなさい』と云ひ、父が『モウ二三十圓まけて置けよ』といふ取引の結果手に入れたのでは、產れてから少し高かつたと思ふこともあらうし、よし安かつたにしても、何だか變手古で、調子が違うに相違ないであらう。

持參金の妻を貰つた彼の友人が、嘗て彼れに、自分と妻との間は全くの懸中で、持參金は二人とも少しも考へてゐな

かつた偶然の附帶條件だつたのだが、それでも結婚後經濟上の話が二人の間に話される度に、二人とも、それが持參金のことに觸れやしまいかといふ暗默の不安があつて、その時に限つて、妙な他人同士らしい眼付が二人の間に取交はされるのが何よりも不愉快だ、と告白したことがあつた。其時、彼れは、『そんな不愉快な想をするよりも、一層その金を俺に呉れてしまはないか。』と戯談らしく云つたら、その友人は、『二人とも持參金なんかは眼中に置かないと云つてゐるし、又事實決して眼中には置いて居ないのだが、さりとてそれを人に呉れてしまはうといふ相談をしたこともなければ、今後しさうにも思はれない。』と云つた。二人は恐らく死ぬまで、その薄氣味の惡い陰法師を眞中に据へて、お互に何氣ない態を見せ合つてゐるだらうと彼れは思つた。

オルガ・ミハロウナは姙娠の爲めにヒステリーに罹つた時に、その夫ピヨトル・ドミトリッチが外の原因から憂鬱になつてゐたのを、自分の持參金の故にして、『あなたは私を嫌つてゐるのだわ。さうです〳〵、あなたは私があなたよりも金持なので、私を嫌つてゐるのです。あなたはその事で私が癪に障つてならないのです、さうして私に嘘ばかり吐いてゐるのです。今ちああなたは私を笑つてゐるのだわ。あなたは私の財產と馬が欲しかつたので私に結婚したのだわ。エヽ私は情けない。』と金切聲を揚げた。さうしてもしその時彼女に虫がかぶつて來なかつたら、彼女と夫との間は取返しのつかない破綻に終つたに違ひない。それでも命がけの難產だけは脱れなかつた。さうして、始めての可愛い子供を殺してしまつた。

彼と百五十圓のブルとの關係は、持參金とは少し違うが、ブルがヒステリーになつて『あなたは、百五十圓が惜しくて私を大事にしてゐるのです。さうです〳〵。エ、私は情けない』と嚙み付きでもしたら、立派なチエホフの材料である。ブルは殊に顎の力が强いので恐ろしい。

斷金の犬に名犬のある筈はない、と誰れでもさういふのが、彼れを笑はせた。彼れは、人間が犬の善惡を定めるのを笑つた。元來何ういふ犬を名犬と呼ぶかといふと、それは人間が勝手に犬の種類の異なるに從つて身體の各部についてそれ〴〵採點標準を定めて、それに合つたものを百點とするのである。それは例へば、人間で云へば、鼻の高さは三寸、眼と鼻の間は一寸、口の大き三寸五分といふ風に定めて、それを標準として、人間を採點するのだが、それによつて代價の高下が定まるのは、女優か藝者か娼妓か、何れにしても友達としての人間の採擇ではなく、商品としてか妻君としてかの人間の採擇の場合に限るものである。彼れは犬を商品とするのでも、妻とするのでもなく、全く友達とするのであるから、普通人間の友達を撰ぶ場合と同じで、鼻や口の高さや大きさを計算する必要は少しも感じないのである。從つて彼れの犬は、その點からは、甚だ採點標準の低いものが多かつたのである。それは彼れの人間の友達の多くが、共點で落第者であつたのと似通つてゐた。

彼れの亡友の一匹であつたペチはポインターであつたが、少しブルでも雜つたものと見えて、纖弱なポインターらしい優しさがなくて、いやに頑丈で、犬に關する書物に、百年前のポインターとして掲げられてゐるものに似てゐた。もう一匹の亡友のジョンと云ふのは、セッターとニューハウンドランドとの合ひの子らしい深い毛の渦卷いた犬であつた。もや〳〵戸籍の明瞭らしいのは、これも亡くなつた『ブル』と稱するブルテリアであつた。これは耳朶を切斷されてゐた、それはブルテリアの昔風の習慣に從つたのである。最後に亡くなつたダンと稱するのもイングリッシ・セッターといふことであつたが、無論怪しいものであつた。

そんな風に血統の怪しいことも、亭主か妻君かにするには考へものだが、友達にするには一向差支なかつた。

ペチが始めて彼れの所へ來たのは、生後五六日しか經たない時であつた。その大きさな鼠位しか無かつたペチの皺だらけの顔や、頭だけしかないやうな恰好などを、彼れは今でも能く覺えてゐるが、その小犬を持つて來てくれた男のことは、全く記憶から離れてしまつた。それは出入の牛乳屋か何かだつたが、實際其男が犬を持つて來てくれた時には、犬に氣を取られて男の顔なんぞ見ずにしまつた。その後は、もう犬も持つて來ない男の顔を見る必要もないので、とう／＼見ずに終つた。

その時男の持つて來てくれたのは二匹だつた。全く同じやうで何方が何方だか見分けがつかない位だつた。二匹とも餘りに小さくて、食物も牛乳さへうまく飲めないので、育つか何うかも疑はれた。で元の持主に今少しの間預つて貰らつて、親犬の乳を飲ませるやうに、婆やに持たせてやつたら、何ういふ譯か拒絶されてしまつた。先方では犬の兒の始末に困てゐた時、幸ひに貰はれて安心してゐたところへ又持ち込れたので、いゝ加減のことをいつて返しに來たのだと直覺して預からなかつたのだらうと彼れは思つた。さう思ふと彼れは急に、此の小さな二つの動物の生存權を擁護する責任を感じて、苦心して牛乳を呑ませる工夫をした。が彼れは晝間中留守で夜も遲く歸るので思ふやうに行かなかつた。結局一匹は死んで、辛うじて殘つたのがペチであつた。

彼れは決して自分で犬に食物を與へなかつた。彼れの人間の友達は皆めい／＼自分で喰つてゐるので、彼れはその誰れ一人に食物を與へることはしなかつた。彼れは犬を友達にする場合にも、食物で繋がる友達とはしたくなかつた。で食物は下女にやらせてゐた。ペチも、自分で飲み喰ひの出來るやうになつてからは、婆やだけが食物をやつてゐた。それだのにペチは婆やよりも彼れを慕つた。朝婆やが彼れの寢てゐる座敷の戸をあけると、その椽の下の箱の中に寢てゐ

たペチは、廊下へ上げてくれと叫ぶのであつた。婆やが上げてやると、婆やには一寸挨拶しただけで、座敷に寝てゐる彼れの所へ入らうとしてクン〱いひながら、閉つてある障子の腰板に足をかけてヒツ掻くのであつた。まだ硝子まで背が屆かないのに、ペチはその中に彼れの寝てゐることをよく知つてゐた。障子をあけてやると、ペチは轉ろげながら入つて來て、彼れの顔をペロ〱舐めるのであつた。ペチは婆やよりも私を好んだ。私は婆やよりもペチを好んだ。が二人——正確には一人一匹——ともそれを婆やに隠してゐた。

犬を友達としてゐた彼れは、犬の容貌や形に自分の採點標準を作らなかつたやうに、その性質をも、彼れ自身の要求を以て律することをしなかつた。彼れは友達を、その友達自身の個性に於て尊重した。

主人にとつては、奴隷が個性を持つてゐることは不必要であつた、場合によつては迷惑であつた。士官は、兵卒が個性を有つことを許す譯に行かない。小銃がめい〱の意志を持つたら戰爭は出來ない。馬の意志や氣質を人間の意志の奴隷にしやうとすれば、轡をはめる。然し何人もその友達に轡をはめることは出來ない。その必要も感じない。彼れは友達のめい〱に違つた意志や氣質やを面白いと思つた。

ペチは、非常に彼れの感情を氣にする友達であつた。ペチは彼れと一緒に居る時には、折々人間がするやうな横目を使つて窃かに彼れを見るのであつた。その眼が何うかして彼れの眼と合うと、ペチは慌てゝ、然し何氣ないやうな顔で眞ともに彼れを見直すのであつた。

かういふ氣質の爲めに、ペチは外のどの犬よりもよく彼れの命令を聴いた。『座れ』といへば座つた。『入れ』といへば小屋の中へ入つて行つた。『止れ』といへば止つた。ダウンといへばスヒンクス形に座つた。『後から』といへば彼れの

左側の後について歩いた。ペチは彼れと河を隔てゝ相對してゐる時でも、彼れの號令のまゝに動作した。いや〳〵それをする時には、クン〳〵と鼻を鳴らしながら不承〳〵にそれをした。遠くに遊び歩いてゐる時でも、家で呼笛を吹くと何處からか歸つて來た。

が彼れは、ペチをそこまで順從にする爲めに、始めのうちは屢鞭を用ゐた。彼れは人間の友達には鞭を用ゐたことはなかつた。犬の友達だけにそれをするのは矛盾であつた。然し人間同士の友達でも、何方か一方が動物に近い時には、鞭や、鞭よりも殘酷な刑具の用ゐられることが普通でさうして已むを得ぬことであると、澤山の豪い人がさう云ひ、代々の世の中がそれを實行した。況して、一方が動物そのものである時には、鞭だけ位ならば紳士交際である。それでも彼れは、音だけ高い皮鞭の外は用ゐなかつた。さうして、犬の友達に對してよりも、人間の友達に對してその鞭を用ゐたい場合の方が多かつた。

ペチは彼れが毎日出勤先きに出掛ける時に、彼れを電車の停留場まで見送る習慣であつた。ペチはその歸り途に、そこら中で道草を喰つて、通りすがりの家で犬のゐる所には必らず入り込んで、喧嘩を買つたり、方々の庭を荒らしたり、田や畑を驅け廻つたりするので村中で有名になつてしまつた。さうして、すべて犬が荒らしたらしい場合には、みんなそれはペチの所爲にされたのであつた。彼れは屢々村の人がペチのことを訴へるのを、下女を通して聽かされたのであつた。彼れは自分が他人の犬の被害者であつた場合には、可なり強くそれを感ずるに違ひないに拘らず、ペチの場合には、ちつともそのことの爲めにペチに制裁を加へる氣にはなれなかつた。さうしてそれを、不思議とも身勝手とも思はなかつた。

彼れが長い病氣の回復期に在つた頃のことであつた。或る日彼が茶の間で粥をたべてゐると、村の植木屋の男が臺所

へ來て、何か妹や下女にこそ〳〵話してゐる樣子であつた。妹が茶の間へ來たので、彼れは男が何の用で來たかを尋ねたところが、妹は、それには答へずに、實際悲しいことを泣くやうな泣き方で泣き出してしまつたのであつた。彼れは自分達の身の廻りに何か惡いことが起つたことを直覺して、妙に胸が躍つた。で慌てゝ、繰返して尋ねて、ペチが村の或る家の庭で死んでゐたといふことを知つたのであつた。植木屋の男は、多分ペチは村の者に毒を飲ませられたのであらうと云つてゐた。彼れは惡い事が人間の上に起つたのでなくて、犬の上に起つたのであつたことを知つて安心したのであつた。けれども喰べかけてゐた粥がもう一口も咽から下へ行かなかつた。人間のするやうなペチの横目使ひの眼が、凝つと彼れを見詰めてゐるのを避けることが出來なかつた。――その眼は今でもはつきり彼れを見詰めてゐる。――彼れは二階へ上つて、大椅子に凭れ込んで、その日一日ポカンとしてゐた。

ジョンは年頃になつてから彼れの友達になつたのであつた。往々人に嚙み付く癖があるといふので、前の持主から彼れの所へ渡されたのであつた。彼れはその惡癖を矯正しやうとはしなかつた。實はペチも何うかすると人に嚙みつくのであつた。然もペチのは、全く知らん顏をして相手に近かづいて、御世辭を使ふやうな風で、その鼻面を相手の身體にスリつけるやうにして、ワンとも何とも斷らずにガブリとやるので始末が惡かつた。だからペチが他人に御世辭を使ふ時には、彼 は警戒してペチの頸輪を押へるのであつた。知らぬ人にお世辭を使ふ人間に警戒するだけの用意があれば、ペチに嚙まれる虞はないのであつた。兎に角彼れは、嚙まない犬は嚙む人間と同じく不台理のやうな氣がするので、ペチやジョンを嚙むことの爲めに制裁する氣にはなれなかつた。尤も孔雀鳩を外から貰つて庭に放したのを見て、ペチがいきなりその一羽に嚙みついて、尾の羽根を夥しく嚙み取つた時には、彼れはペチをT氏の訓練所へ托して、そ

れを矯正して貰つた。一週間ほど經つて歸つて來たペチは、鳩を鼻面へ押しつけても、知らん顔をしてゐた。

ダンも亦嚙む犬であつた。ダンは知らない人に頭を撫でられると、猛然として吠へながら相手に嚙みつくのであつた。その外の場合には決して嚙まなかつた。それは恩に報ゆるに仇を以てするやうでもあつたが、そんな風の人間もないではなかつた。彼れ自身も實は、知らない人に頭を撫でられると餘り好い氣持はしないのであつた。――撫でられた覺へはないが、此方が犬だつたら屹度嚙んだに違ひないと思はれる場合はあつた――でダンには多少同情した。彼れは、ダンが人間の形をしてゐたら、知らぬ人に頭を撫でられても、彼れと同じく、好い心持がしない位で我慢したであらうにと思つた。

ジョンは始めペチと烈しく嚙み合つた。然し一日二日ですぐ妥協して、二匹で遊び廻つた。その頃T氏の所から送られた大いセッターを、ペチと二匹で猛烈に攻撃して、溝に落し込んで散々の目に逢した。此セッターは世界に有名なT海軍元帥のところにゐた犬で、非常に溫和な犬であつた。そんなに烈い目に逢ひながら、平和の時には二匹首輪を鎖で繫ぎ合はされて、ロシヤの馬車馬のやうに列んで驅け廻つた。

ジョンとペチとが首輪を繫ぎ合はされて遊び廻る時には、二匹とも堂々たる强犬なので、力が平均して、互の脫線式運動が不可能になつて、丁度西洋の夫婦のやうに、くつつき合つて傍目もふらず步くのであつた。其時敵でも見かけると、二匹が非常な勢で驅け出すので、萬一その中途に人が居ると、二匹がその人の左右に分かれるつもりで鎖をその人の足に引掛けて捧倒しに倒してしまう處がある。一度八百屋の爺さんに後ろからそいつを喰はして仰向けに倒した。爺さんの倒れ方が餘りに烈しいのと容易に起き上らないのとで、彼れは爺さんが死んだのぢやないかと思つて驅け寄つたら、さうぢやなくて、爺さんは、自分が何うして倒れたのか解らなかつたので、倒れたまゝ考へてゐたのであつた。

ジョンは、見るからヤンチャな若者であつたが、それで中々艶福家であつた。村の或る別莊——それは去る大家の令孃の閑居であつた——に飼はれてゐる雌犬がジョンでなければ夜も日も明けないとかで、屢々その別莊からジョンを招待する使が彼れのところへ來た。彼れはその別莊が、婦人ばかりの世帶であるといふことを聽いて、そこの使に引張られながら得意になつて出て行くジョンを二階から見送る度に、くすぐつたいやうな氣がしてならなかつた。彼れは、ジョンとその相手とが人間であつたら、そこに創作される小說についていろ〳〵に考へて見たりした。

このジョンは、元氣よく園内で遊んでゐる最中に、心臟痲痺で頓死した。可哀相ではあつたが、然しジョンは彼れの友達のうちでは幸福な一匹であつた。

ブルと呼ばれたブルテリアは、眞面目な滑稽家だつた。眞白で、耳を切られて、頭が小さく尻の太い恰好が、まるで眞綿細工の白鼠そつくりであつた。犬ほど感情の現はれる動物はないといふのに、ブルに至つては、喜怒哀樂を色に現はさないで、やつぱり眞綿細工のやうな顏をしてゐた。所が彼れの所へ來て間もなく、外に迷ひ出して行方不明になつた。一週間ほどして出入の酒屋が引張つて來てくれたのを見ると、妙に口が歪んで、よく肝持の人間に見るやうな口つきになつてゐた。それが爲め始めて表情が變つて、たゞ眞面目だつたのが、何だか非常に困つたが間拔けで名思案も浮ばないでやうな顏付きになつてゐた。迷兒から歸つて來た時、何とも相濟まないやうな顏付で、この歪んだ口を御覽下さいと彼れを見上げた時には、皆吹き出してしまつた。口の歪んだのは、電車に轢かれ損こなつたのぢやないかと誰かが云つてゐたが、ブルはたゞ恐縮してゐた。

ブルテリアは元來鬪犬の性質があるので、ブルも敵を見ると容赦しなかつたが、その時だけは權兵衞が種蒔きのやう

な顏に似合はず猛烈だつた。けれども間拔けを演ずることも屢々あつた。或時往來で猫を見つけて飛びついたが、あまり拍子が付き過ぎて猫にぶつかるはづみに、自分の身體がもんどり打つて二つ程回轉した、その間に猫はとうに逃てしまつてゐるのに、餘程經つてから漸く身體を立て直したブルは、猫が居ないので怪訝の顏をして、消えてなくなつた怪物でも探すやうに薄氣味惡さうに、こそ〳〵とそこらを嗅ぎ廻るのであつた。

ブルは神經質なペチが死んだ後に彼れの所へ來たので、殊にその對照が彼れを喜ばせた。絕えず彼れの顏色を覗つて、何うしたら彼れの感情を毀けないだらうかと苦心してゐたペチと、『お前は人間で俺は犬だ』とでも云つたやうに、彼れの顏さへ碌に見やうとはしないブルとは、彼れにとつて別々に、それ〴〵好い友達だつた。ペチは彼れが二階にゐると、能く上つて來て、お客のゐる前などで、盛に御世辭を使つて、彼れの友人として振舞つて見せたりしたが、ブルは階子段を獨りで上ることも出來なかつた。無理に二階へ連れて上ると、餘計なことをするものぢやないていふやうな顏をしたいのだが、それも面倒臭いといふやうに、ポカンとして、根つから面白ろくもなさうに固くなつてゐるのであつた。騷々しいジョンと濟しこんだブルとは、何時まで經つても他人同士で、死ぬまで――お互に人間だつたら、――碌々口も利かないといふ間柄だつた。夜も晝も一つ圈内に入れられて一つ小舍に寢ながら、時々向ひ合つては、兩方で、『一體誰れだい』といふやうな顏つきを一寸しあつて、分れてしまうのであつた。

このブルは遂に喰はれて死んだ。殺されるまでヂッと遂に喰はれてゐたのは矢張りブルらしかつた。

ダンは彼れが東京に歸つてから、同じく東京に舞ひ戾つたMN畫伯が一緒に連れて歸つて彼れに贈つたのであつた。ヒラリアに罹つてゐるのでもうあと五年位しか生きないと云はれたのは數年前のことであつたが、果して彼れの所へ來て三年足らずでその病氣で斃れた。彼れの父は、ダンの爲に裏庭の隅に深い穴を掘つてくれた。彼れは父と二人で

ダンをそこに葬つた。その時、彼れの年取つた父は『南無阿彌陀彿、南無阿彌陀彿』と繰り返し唱へた。彼れはその上に薄を植へた。

彼れはこれらの友達──その外にも、ロック、太郎、ガロー、曾て猛犬ジャクと呼ばれたジョット、ポンチ畫のポインターそつくりの二代目ロック、なども居た──と生活してゐる間に、その間に友達に對して、濟まないと思つたり恥かしいと思つたりすることのあつたのは、人間の友達と交際つた場合と譯はなかつた。殊に彼れは、犬が自分に從順であるのを喜んだり得意がつたりしてゐる時に、それを感ずることがあつた。

ペチは、始め自分に氣の向かない事でも、彼れの爲めに、屢それを強制されると、終ひには自分の意志よりも、彼れの意志に從ふ方が容易であるかの如き行動を取るのであつた。鎖に繋がれるのでも、彼れが鎖の茄子環を振て見せると、ペチは自分の意志が無力になつて、まるで催眠術にでもかけられたやうに寄つて來て、その鎖を受けるのであつた。山國人力車の手傳をする犬がさうである。上り阪へ來て、車夫が綱を見せると犬はそれを引かけて力の限り引張り始める。木曾の福島の犬は、車の下に入つて車の眞棒にかけた帯に自分の肩を引かけて押すのである。彼れや車夫はさういふのを名犬と稱して賞めるのである。

所が彼れの初代ロックといふ雜種犬は、同じやうに屢々鎖に繋がれたが、終ひには鎖を見ると逃げてしまつて決して捕まらないのであつた。呼笛を鳴らして呼んでも、屢駆け歸つて見ると、それは却つて監禁される爲めだといふことを知つてしまつて、もういくら吹いても歸つて來ないのであつた。惡い事をした時に懲戒すると、その惡い事を已めないで、懲戒者を恐れて逃げ廻るのであつた。かういふのは、犬の訓練所では、不良種と稱して殺してしまうのであると

いふことを彼れは聽いた、無論彼れも、ペチを良種として愛し、ロックを不良種として疎んじたのであつた。

然し、犬の立場から、ペチとロックとの何方が正しい態度であるかは別の問題であつた。彼れはペチの從順を喜びながら、時々それを思つた。ロックの不良を憎みながら、何となく、それに同情することを禁じ得なかつた。

優越者は、自分が優越を濫用してゐるのに氣付かないものだ、と彼れは考へた。彼れは、自分の相手が、永久に何も訴へられない犬であつて仕合だと思つた。もし彼れの人間の友達が、彼れの手にしてゐる鎖を愛し、鞭を愛して、尾を垂れて寄つて來るのを、彼れ自身誇りとしたならば、長い間には、何んな運命が、彼れと友達とを襲ふかを考へて見て、變な氣がした。

彼れは猛惡な彼れのブルドッグ、ジョットが自分の同類に片端しから噛みついて、それを殺すか半殺しにするかしなければ承知しない癖に、人間に對しては雌猫のやうに從順で、人間崇拜觀念と、同類虐殺の慾望とが、少しの矛盾もないやうに、その身内に燃へてゐるのを不思議に思つた。同類を惡んで人間にあこがれるジョットの心理は、同胞を蔑んで神佛に奉仕した昔の暴君の心理であつた。然かも神佛が、往々かやうな暴君の禮拜を受け入れたやうに、彼れもジョットの崇敬を喜んだのであつた。

彼れは自分が神佛を氣取つてゐるのに氣付いた時に、驚いて自分をつねつて見た。さうしてジョットが淺ましくなつた。それでも彼れは、鎖を見ると寄つて來るペチを愛し、鎖を見ると逃げ出すロックを憎んでゐる自分を何うすることも出來ないのであつた。

彼の示す鎖を見ても、寄つても來なければ逃もせず、殊更ら人間を好きもしなければ嫌ひもせず『俺は犬だよ』と澄ましてゐた間抜けじみたブルは、案外間抜でなかつたかも知れないと、彼れは今でも時々さう思つた。

時論

法學博士　吉野作造

○現代政局内面觀

或る老政治家から、政友會の——否故原敬氏の隱れたる大効績なるものを說き聞かされた。要點を略記すれば斯うである。政界の樞機を握つて天下に經綸を行はんとせば、どの道尠からぬ金が要る。而して最近數年前までは、要り用な金の大部分は實に軍閥の供給に仰いだ、玆に軍閥跋扈の禍根が潜むのだが、この弊根を絶たんとしたのが原敬氏だ。尤も彼は他の方面に之に代るべき金を作らんとて幾多の過誤を重ねたが、併し軍閥を幾分抑へたと云ふ功績をおもへば、それは亦大に恕すべき點もある。

政局の疏通と金との關係を少しく遡つて歷史的に考へて觀る。憲法創設の當初、政府側は民選代議士の無責任た反對に依て大に政務の進行の妨げらるべきを憂へた。議會を開いて見ると、果して反政府熱が恐しく高い。如何にしてこの困難を切り拔けんかに頭を惱ました結果、最初に取つた方策は腕力を以てする干涉であつた。明治二十五年の騷動が卽ち其の一例である。併し之は見事な失敗に了つた。腕力干涉の到底成功す可からざる事を十二分に見せつけられた。然らば之に代るに何の方策に出づべきやに思ひなやんだが、圖らずもその際そは買收策に限ると獻策したのは故の陸奥宗光伯であつたと記憶する。之よりいよ〳〵政界の腐敗が始るのであるが、民主政治には多數が最後の力だと云ふ信念の下に目的の達成の爲には手段を擇ばなかつた一代の怪傑星亨氏が、偶々民間に在つて政府のこの誘に甘んじて應じたが爲に、金と政治とは瞬く間に豫期以上に深甚の關係を結ぶことになつたのである。

斯くして政治には莫大な金が要ることになつてしまつた。買收策を採る前でも、例へば夫の選擧干涉の跡始末の如き、財政的の大穴が明いて金の必要が新に痛感さるゝことになつては居た。此の必要を如何にして充さうか。差し詰め何百萬といふ大

穴をどうして塞がうか。先輩政治家が寄つて之をもてあぐんだ時に、兎も角も之を彌縫しおふせたものは故伊藤公であつた。明治天皇の御信任の格別に厚かつた故公には、其間に思ひ切つた策を講ずることが出來て兎に角這般の難關を切り拔け得たのであつた。

伊藤公の時代はやがて去る。公に代つて出て來た人々には、殘念なことには故公のやう、藝當は出來ぬ。山縣公にした所が同じ事だ。桂公が伊藤公と似た樣な事をやらうとして渡邊千秋男と危くボロを出し掛けたことも、一部の人には公知の事實である。斯くて結局外の何處かに財源を見出さなければならぬこととなる。而してこの要求に應じて新に現れたのは軍閥の實庫である。

軍閥が金を出したからとて、之を官金を不當に使つたものと速斷してはいけない。道德上から云へば立派な不正支出になると信ずるが、法律上では少しも私曲がない樣になつて居るさうである。例へば支那に武器を賣る。官が直接賣つてもいゝのだけれども、一旦之れを泰平組合に拂ひ下げる。安い値段であることは勿論である。之を高い値段で支那に賣る。政府が其の間色々便宜を與へるは言ふまでもない。斯くて泰平組合は大に儲ける。而して其の利益の若干は政府の或種の運動費に寄附さるゝといふのである。尤も斯うした特別の財源は、軍閥以外でも最近大に作られたさうだ。鹽。砂糖。米。數へ立てれば際限もないと玄人筋は云ふ。併し矢張り何と云つても一番大きいのは軍閥方面にある。だから、日露戰爭後十數年の日本の政界は、軍閥の御蔭で運用がついて來たと謂はるゝのも無理はない。

世人はよく軍閥の外交干渉を難ずる。之も否認はしない。併し軍閥の壓迫の感ぜらるゝのは啻に外交ばかりではないのだ。外交はまた特殊の理由に依て軍閥の壓迫を蒙つては居るが、外交以外の一般內政も亦實に軍閥に頭が上らないのである。何となれば軍閥は實に今日の日本といふ政治會社の謂はゞ大株主だからである。重役の代ることに依て多少營業方針の變る事はあつても、軍國主義を基調とする根本方針に異變ある能はざりしは畢竟之が爲ではないか。

原敬氏は實にこの狀勢に革命的動搖を與へんとしたのである。一つには彼の努力の下に築き上げた政黨の實力に自信の出來た爲でもあらう。其の實力も實は議院操縱の爲に提供された軍閥の財源に依つて養はれたものかも知れぬが、兎に角實力は出來た。他人の御陰で大きくなつた子供でも、何處となく其の養ひ人に遠慮しつゝ、而かも何時までも盲從しては居りたくないと云ふ樣な氣になる。況んや其養ひ人がまた可なり無遠慮に

僥倖なるに於てをや。この機運に乘じた原氏は、また實にこの方面に於て異常卓拔の手腕家であつた。彼が無用の波瀾を軍閥との間に起すまいと用心しつゝ、着々として其の壓迫を押し退けた手際は實に鮮なるものだ。但し其の爲には今まで軍閥から得た丈のものを別の源から作らなければならぬ。彼の辣手を以てして猶ほ無い袖は振れぬから。是れ彼が滿鐵なり、阿片なり、瓦斯なり、砂利なり、手當り次第に手をつけた所以である。彼の部下が十分彼の愼重に倣ふことと能はずしてボロを出したのは、自業自得の沙汰ではあるが、とにかく彼が之に依て軍閥跋扈の勢を大に制したことだけは認めてやらねばなるまい。

彼の軍閥抑制の手際は中々巧妙なものであつた。彼は自ら決して矢面に立たない。彼の內閣で公然軍閥に楯ついたものは高橋藏相と內田外相とである。此の二人の功勞には大に認むべきものがあるのだが、案外世間からは評判がわるい。軍閥に取つて一番厄介なだけ其の方面からの無能の宣傳に累されても居るが、又政府としては、露骨に軍閥を抑へてゐるなどと辯解し得ぬ事情もあつたのだ。孰れにしても、原內閣になつてから軍閥の專态は大に抑制されたのは明白の事實である。公然と言はなかつたとて之を無視してはならぬ。若し軍閥の跋扈が日本政界の一大弊根であると云ふなら、原內閣が之を抑へるの端を開いた事は、何と云つてもその一大功績と云はねばならぬ。

毒を制するに毒を以てせるの譏は免れないが、事實は事實として有りの儘に承認せねばなるまい。

○

以上の話はどれ丈け眞相に觸れて居るものか僕には分らない。假りに本當の話だとしても、軍閥抑制と云ふ事だけを離して考へていゝものなら、成程見事な效績だと云ひ得べけんも併し之が爲に他に著しく國民の良心を傷けたといふ事實を思ひ合はす時、僕達は果して之に感謝していゝものかどうか分らなくなる。昔の物語本などに、年頃になつた大家の獨り息子の憂鬱性を癒さんとて、出入りの者が遊女買の手引をして兩親を安心させたといふ噺があるが、原氏の效績なるものは、果して老政客の說くが如きものとせば、夫の出入りの者の淺墓な差出口程度のものに過ぎないのではあるまいか。

併しそんな事は別個の詮索に任かすとして、右の話でも明白なるが如く、今日我國の政界に金の毒が驚くべき程廣く且深く浸み込んで居ることは爭ひ難い。姑く上下兩院を例に取つて見る。多年金がこの兩院を毒した結果、議員が如何に自由の判斷に迷つて居るかは讀者の既に明白に知る所であらう。議員の多くはある特定の問題に對しては常に必ず或る特定の態度を執る

べく餘儀なくされて居る。そは斯くすることが實に彼等の私的生活と密着に關係して居るからである。もつと露骨に云へば、彼等の或る特定の態度を政府が金で買つて呉れるといふ所に、彼等は生存の道を見出して居るのである故に、若し政界に少しでもの動搖を見るの恐れあらん乎、こは彼等に取つて生存上の一大脅威である。表てにはどんなに侃々諤々の論陣を張つても、結局に於て彼等の多數は、現狀の紛更を好まない。我が國の政界は實に斯んな所に覺束ない一時の安定を得て居るのである。

僕の知人に貴族院議員某といふがある。歳費だけでは喰つて行けぬ程の贅澤な生活をしてゐる。他の財源を何處に得て居るかと云ふに、一つは某々調査委員とやらの囑託手當である。も一つは某大官の口添にて某大會社の顧問となつて巨額の報酬を得て居るのである。仕事は勿論何もあるのではない。政府が變れば之がどうなるか分らない。現狀の紛更を恐るゝ所以である。

相識のも一人の議員は、もと清廉の人であつたが、娘の嫁入りの時金策に窮した餘り同僚の好意を求めたのが緣となり、其後年の暮などに一二度また融通を與へられた。金持でもないのに何處から持つて來たらうと或る時尋ねて見て、始めて其の金が某大官から出た事を知つたといふ。流石に某大官は金のことをおくびにも出さないが、夫れ以來彼は議院で猛烈に反對し得なくなつたと自ら述懷して居つた。

下院に籍を置く知人某の話に、或る代議士金に窮し、是亦某大官の紹介によりさる銀行より手形の割引に依つて若干の融通を得た。書き換を重ねて其儘借りて居るが、政府でも變ると乾度拂込を強要さるゝに違ひないとて、政變說の起る度每にビク〱してゐるとの事であつた。

斯んな話を數へ立てれば際限はない。上下兩院を通じ、議員の大半はこの種の腰弱の連中だといふのは酷評であらうが、何れにしても、議論では強いことを云つても一種言ふ可らざる感情として政府の者に頭が上らず、且つ現狀の動搖紛更に極度の危惧を抱く者の多いことは、見逃す可らざる事實であらう。

ア、現狀の固執！。日本の政界の大なる弊害の源は一つはこゝにある。萎靡停頓頽廢を極むる一つの原因は慥にこゝに在ると思ふ。

○

政府よりする買收の手は、自ら政黨に供するに多數を結束するの便宜を以てするの結果となつた。斯くして結束した政黨の力は案外に强いものだといふに氣づいて、遂には政府を逆に引き廻さうといふことになる。否、今日では自ら進んで政府の實

權を握ることにさへなつた。之といふも詰りは多數の力である。而して其の多數は要するに金で出來たものだから、更に盛に金を使つて、多數をかため、又之を擴張せんと圖る。政府に立てば金を作るに便宜だといふ事も、此の勢を大に助けたことは言ふまでもない。夫からいろ／＼の政治的罪惡は生れる。

善良なる國民は、併し乍ら、此の狀態を何時までも默過する筈はない。今日偶々政權の衝に當つて居る政友會が、殊に世上の惡評を蒙つてゐるのも畢竟之が爲である。かくて世人は擧つて彼等の惡辣を憎む。が只何と謂つても彼等が權力を握つて居るので如何ともし難い。丁度昔の暴虐な大名の樣なもので、憎い／＼と思ひ乍ら、長いものには卷かれろと諦めて居るのが今日の狀態である。而して其の根本はといへば、彼等が多數の力を極度に大事がる所から來るのである。

云ふまでもなく現在彼等に與へられてゐる地位は、彼等の內面的な道義的な努力でかち得たのではない。金で拵へた多數の御蔭に過ぎぬ。內在の力で得たものは、一時之を喪つても、また之を恢復するの希望があるから、左まで悔いないが、外面的の力で獲たものは、一度失ふと容易に二度と得られないと云ふので、無理にも之に取り縋らうとする。是れ彼等が政權の維持に手段を擇ばざる所以である。尤も彼等の間にも、一つには世間の不評を苦慮し、又一つには多少良心に疚しい所もあると見へ、進んで積弊を一新せんなどゝ心掛くるものはある。政府の改造だの、綱領の立て直しだの、將たまた幹部組織の改革だのと騷ぎ廻るのも、つまりは此の爲めだが、併し結局に於て、現狀の打破を恐れて居つては、何の改革もいゝ加減のところで止つて仕舞ふに極つて居る。腐敗の基は外部の力や金に恃む所に在る。之に頼らないといふことになれば、現狀は一時飛んでもないものと變つて仕舞ふかも知れぬ。政友會が一轉して二三十名の小黨派になつても構はないといふ位まで腹をきめてかゝらねば、徹底的の改革は出來るものではない。今の政治家に果して之れがやれるだらうか。之をやるに躊躇するものは、獨り政友會ばかりではない、殊に貴族院邊には澤山あるといふのだから話が六つかしい。

○

憲政會の樣な少數黨が、先度の議會に見るが如き反對の爲の反對に浮身をやつすのも、我々にはよく理解が出來る。內面の力に關係なく勝敗の數がきまり、而かも一旦勝者の地位を占めた者は其の地位を利用して益々强くなるばかりだとなれば、反對黨としては勝ち誇れる者を覆すに陰險な極端手段を用ふるに至るのも無理はない。昔なら暗殺とか襲擊とかをやるところだ

が──支那の政界に見る様な──二十世紀の今日とて夫れもならぬ。やがて自暴になつて徒らに妨碍をこれ事とするに至るは是亦毫も怪むに足らぬのである。

かうした政情の下から、一體國利民福の増進といふことが望まれるものだらうか。道義的生命の伸長と云ふ様な事は期し得らるゝものだらうか。退いて、議員の一人〳〵に就て之を詰ると、彼等は異口同音に答へていふ。誠に困つたことだ。何とかせねばならぬと。冷靜に復れば彼等も斯くある可らざることを萬々承知なのだが、さて一旦議場の人となり、政界擾亂の渦中に投ずると、困つた〳〵と慨歎した其人が實に困つた事を自ら敢てするのだから困る。併し政界の斯くの如くなれる所以を退いて靜に考ふると、我々は更に一歩を進めて、もつと根本な所に革新の斧鉞を振ふの必要を認むるものである。

○

枝葉の改革は駄目だ。一番根本な一番有力な手段に手を染めるに限る。然らばそは何かといふに政黨の地盤を覆すことだと思ふ。政黨の地盤政策の弊害については、色々の機會に於て屢々述べたから玆に再び贅せぬが、兎に角各政黨殊に政府黨が、各種の利權を餌として地方民を釣り、以て鞏固なる地盤を諸方面に作つて居るのが百弊の基だ。利權を以て地方民を釣り、百姓町人を驅りて政黨に入らしめ、依つて以て鞏固なる地盤を作り、而して其の選出する代議士をば宛かも奴隷の如く意のまゝに、頤使せんとする。之が爲には金が欲しい。金を作る爲には味方が要る。味方が出來ればまた金も出來る。斯う云ふ政情の下に於ては、多數則ち罪惡の淵叢たるは當然だ。故に曰ふ。地盤を覆すのは何よりの急務だと。

百姓町人は元來政黨などに籍を置くべきものではない。政黨は政治家の仕事だ。百姓町人は政爭に超然として公平なる審判者を以て任じなければならぬのだ。何れの黨派でも構はぬ、良い方に投票するといふので、政黨の爭に道德的意義が出て來る。理が非でも自分も黨員だから味方に投票するときまつて居つては、其處に何等の道德的批判も加らない。公平の地位にあるべき百姓町人が我から政黨員たることを誇るのは片腹痛き次第であるが、併し斯かる形勢を作つた黨界策士の瞞着手段は甚だ惡むべきものである。故に所謂地盤政策は、理に於て排すべきものであると共に、實際弊害を流すこと頗る大なるものとして又大に之を斥けなければならぬものである。

地盤政策を破る最良の手段は、現に入黨して居る百姓町人にすゝめて速に脫黨せしむることである。併し之は一時に出來ることではない。不徹底ではあるが、實際的方策としては、普選

の實行などが捷徑だと思ふ。十人の基礎の上に地盤を作つてゐたのが、選擧民を增して三十人四十人とすれば、從來の地盤は全く用を爲さぬに至るからである。普選は之を主張するに他にも幾多の根據があるのだが、實際問題としては、我國などでは、此見地からも大に之を主張するの必要があると思ふ。政黨者流が内心私に之を喜ばざるは、亦恐らく專ら這の理由からだらう。

併し普選になつたからとて、すぐに政界の積弊が消えるものと思ふなら、それは餘りに早計である。普選の實行は地盤政策を著しく困難にする。或は一旦之に依りて從來の地盤が崩れるかも知れぬが、其上に果して正しい美果を新に結ぶに至るやは、更に其後の別な努力に待たなければならない。

○

斯う考へて來ると、日本の政界は、普選の實施を見るまでは到底碌な進歩を見まいと云ふことになる。普選になつたとて良くなるとは限らないが、良くしやうとの我々のあらゆる努力も、普選にならぬ以上は、殆んど何等の效を奏しないと云ふことだけは確實だ。夫れ迄は手を供いて傍觀するより外に道はないのである。差當りの問題としては、高橋内閣をこの儘經續せしむべきか、又は改造を迫るべきか、人心に離れた現内閣を去らしめて中間内閣を作らしむべきか、又は憲政會内閣の出現を迎ふべきか等が論議の題目となつて居る樣だが、夫がどつちになつたつて國利民福に大した變りはない。權兵衛の代りに田五作を出すことに識者の興味の乘らないのは固より怪むに足らないのである。

○

夫れでも茲に一つ、斯んな風にでもなつたならと思ふことがある。それは今の内閣をやめて憲政會をして代り立たしむることである。但し之には條件がある。曰く直に議會に解散を命ずることである。曰く次の總選擧には政府進んで不當無用の金を使はず、且つ相手方の金錢的運動を最も嚴重に取締ることである（憲政會なら之れが出來さうだ。ナゼならば金がないといふから）。曰く其爲には成敗を全然眼中に置かぬことである。

そこまで思ひ切つてやれまいとは思ふけれども、若しやつたとすれば、茲に始めて金なしの本當の力競べが出來、議員が眞に國民的基礎の上に立つ端緒が開ける。假令反對黨の政友會の方で依然金を使ひ爲めに競爭で敗かされたとしても、一度でも金を使はなかつたといふ經驗が非常な敎育的効果を來すべきは疑を容れない。而して一度かく國民を訓練することが、やがて政弊革新の必要にどれ丈け彼を覺醒することになるか分らない。斯う云ふ條件を飽くまで嚴守するといふなら、憲政會にやらす

のも一策だと思ふ。否な政界革新の清涼劑として可なり大きな意味のあるものだと思ふ。一時敗れることありとも、斯の如きことこそ眞に政黨の永遠に活きる途だといふべけれ。今の憲政會に果して斯の決心ありや否やは遺憾ながら多少の疑なきを得ない。

○

假りに我國の政界が僕の希望して居る通りに發展するものとする。そして既に普選の實施をも見たとする。金の毒は全然政界から跡を絶つたとする。さうすると日本の政界はどうなるだらう。

金で繋がつてゐる現在の多數の崩れるのは言ふまでもない。然らば新なる政黨の分野が多數の結束に依て從來の樣な形に出來るかと云ふに、僕の考では寧ろ却て小黨の分立を見るに至るではあるまいかと思ふ。政界の分野は、抽象的の議論としては、二大政黨の對立となるが自然だが、實際上劃然二派に分るゝ爲には、人格的信認と云ふ高級なる情操の流るゝものがなければならぬ。政見は時によりて變り得る。變らざるは人格だ。此の不變の人格に相互信賴して疑はざるの訓練を積んだものでなければ、恒久の鞏固なる結束は出來難い。不幸にして我國の政界はまだこの程度に達して居ないから、私共は獨佛の樣に小黨分立の勢に甘んずるの外はないと考へて居る。之れが又我國に相應な分際だかも知れない。强て大政黨を作らうとすれば、今日の政友會の樣に、外部的な力で人爲的に結ばねば出來ぬのだから、却て小黨分立の儘に放任する方が政界の健全を保つ所以であらう。

我國の樣な處で小黨分立で居る事の一つの利益は、その大小に拘らず、凡ての黨派が議會に相當の勢力を張るを得ることである。そこで大政黨に賴らざるも政界に驥足を伸ばし得る途は開けるから自然人材の政界に輩出するを促すに至るだらうと思ふ。蓋し獨佛の形勢と合せ見ば思ひ半ばに過ぐるものがあらう。小黨分立は、官僚軍閥の跋扈する處では動もすれば之に乘ぜらるゝの危險なきに非るも、今日は——少くとも今後は、之等のものとて左まで恐るべき程の事もなからう。又かうした形勢を馴致する事に依て、官僚の徒をしてまた公然政黨的行動を執らしめ得る樣にもならう。かくすれば却つて政界革正の實を擧げることが容易になつて來るかとも思はれる。

斯んな事を念頭におきつゝ政界昨今の動搖を見て居ると、興味中々盡きざるものがある。說いて盡さゞるものがあるが、又他日を期して再論することにしやう。

唐氏

室生犀星

一

務觀は、その妻の唐氏と、籬落に間もない軒簾の下に、榻を對ひ合せ、をりをり唐氏の小ちよい足さきを眺めながら、微風の匂を嗅ぎ話しつゞけた。

「その高官は初めつから娘を秘書役に遣る氣はなかつたのだ。なぜと云ふに餘りに身分が異つてゐたから、それゆえ、娘を一室に監禁して置いた。だがそんなことで二人の仲を割くことができない――秘書役は、椰子の實の殼に手紙を封じては、娘のゐる窓さきに投げ込んだ。娘は、象牙の板に細かい文字を刻んでは、窓ぎはにほつれてゐる柳絮に結んで、秘書役の來るのを待つてゐた。

或日、いつものやうに秘書役が柳の木に攀ぢのぼつて娘と話してゐるところを高官の下僕のために發見けられたのだ。それから毎日娘のゐる窓下には、鞭をしなへてゐる下僕が立つてゐて、秘書役をみつけ次第に打ち据える高官の言ひ附けがあつ

たのだ。」

「それも段々に不安になつたのか、高官は、娘を川を越えた花の多い、しかし寂しい緣引きの或る村裡の家にあづけた。夜の間に事を行はせたので、まさか秘書役のしうねく尾け廻してゐる眼さへ、こんどは必とくらやんだに違ひないと、高官は、やや安心をしてゐた、だが(務観は、そこで品のある冷笑を一つ泄した。唐氏も快よげにその冷笑の意味を理解した。)いつの間にか秘書役は、花をしたふ虻のやうに、娘のゐる窓さきに通ふた。そして二人は村外に逃げ出し、或る農家に身を匿した。が、惡魔は、このぬくぬくと羽搔きを合した二羽の小鳥をその溫かい藁の床から引き摺り出し、こんどは窓のない白壁の家に閉め込んで、最う再度と世に出られぬやうにして、しまひに高官の慘忍な憤怒は、その白壁の外部から火を放けてしまつたのである。それは自分の娘だけを救ひ出し、男ばかりを燒き殺すつもりであつたらしいが、娘は、火の口が捌け、自分の名を呼んでゐる父親の方へ走らうとしなかつた。そして白壁の崩れ落ちる下敷きにならうとしてゐた秘書役の胸に、その纖い手をもたらせ、重なりあつて燒け死んだ。」

唐氏は、優しい眉根に愁はしげなそよぎを見せ、まぢまぢこの珍らしい話をした夫の顔を見つめてゐた。世にもやさしい男と女のゐたことを、古い支那の絹を見るやうに感じた。

務観は話しつづけた。

「その翌朝、やはり氣がさしてならない父親が、その燒け跡の、黑ずみくすぶつた土の上に立つてゐた、と、何處から立つて來たとも知れない、白い爽やかな羽根をもつた二羽の小鳥が、燒け黝ずみ形容さもしい梢の上に、その細い花蕚のやうな脛をつかまらせ、その嘴を合せ、嬉しげに羽をあはしたり啄ばみ取り交してゐた。人の目をおそれず、しまひには空高く川添えを降りて行つたさうだ。」

「間もなく高官は、それらの圖柄を燒いた陶器をひさいで、自分の頑な心を永く記念したさうだ。」

務觀は、そこにあつた紅豆を容れた一枚の陶磁を指さした。――一人の高官が鞭を持ち、二人の若い男女を追ひかけてゐる圖柄があつた。そしてほつれかかつてゐる柳絮に白い二羽の鳥のとまつてゐるのが描かれてあつた。

「これは古い子守唄に過ぎない。しかし何となくいまのわたしには心が惹かれてならない、これと相似たやうなことが今からうしてゐるお前と私との間に起りかけてゐるのだから――。」

「お前はこの小話をどういふ風に味ふか、二人は不幸であつたか、あまりに不幸過ぎはしなかつたか。」

唐氏は、しほらしい筲の沈むやうな聲で、どうかするとその感情をおしかくさうとする悲しげな夫の目を、よそながら差しのぞき見た。

「いいえ。」

唐氏は、さう言つて

「お二人はお仕合せだとぞんじます。そのやうにしてまでもご一緒だつたと云ふことは、おしやはせでなくて何んでございませう。」

「わたくしだちのやうに、故もなく別れなければならないものに較べ、その方がどれだけ本統かもわかりません。わたくしお母さまのお氣に入るためにどうしたらよいのでございますか、それすらわたくしには最う分らなくなりました。」

唐氏は、つい口をすべらしたため、すぐさし俯向いた。

務觀は、唐氏を、いつもより悩み多い美しさの中で、目を停めた。

「わたしは恁ういふ感情の上のことで、あまりくどくど對き合ふことに耐えられぬ。わたしは自分で考へてゐるお前への氣持ちを、あらはに露はすことを好まない。わたしが默つてゐるほど、わたしの心がお前のものになつてゐることを、よく考へてゐてくれ。」

「母親の氣の沈むまでの間だ。」

務觀のこの言葉は、唐氏を首垂れさせた。唐氏は立つて素竹の石のもとに踞んだ。そして一面の鏡を毀いた。鏡は二つに破れ、それを手にもち換へた唐氏のいたいけな纖手には、その股間に茱萸のやうなきれきづの赤みが走つてゐた。唐氏は、その一片を務觀に、あたへ、自分が再び相見るときに、二つを全き形にしやうといふ、寂しい考へをのべた。

「どうぞ。」

務觀は、なみだぐんだ妻のその指の血をすすり、顔をそむけた。鏡の一片には、唐氏の手間の温みが殘つてゐた。

二

二年の後、その日も籬落を眺め、務觀は、榻にもたれ、指さきに、一つの玉をなでさすつてゐた。李花は明るく、日の中に立ち驕つてゐた。うつすりした紅い、可憐な、或る形あるものが逆光に浮いてみえ、それに觸るときには、なまめいたくすくすした微笑ひが、いまかうしてゐる務觀の心に浮いてきた。それは唐氏の、なめらかで厲がましい耳でなくて何であらう。

務觀は、衣をあらため、禹跡寺の南端を拾ひあるきに出かけた。沈氏の花園には、緞子のやうな濃い牡丹の深紅が、すずしい白瓷と研乳との間に入り亂れ、生温かい微風を醸しながらゐた。

獅子くずしの石怪のほとりに、趣きあるしつらひになつた亭榭のうちに、木蓮の花蕊がしきりに群ら立ち、瀝青の空をつんざいてゐた。務觀は、泉滴にかがみ、心をひたした。

務觀は、そのとき樹の間がくれに、或る人かげを見つけた。顏はよく見へない。しかしながらその匂ひは美しい姿整の裡に、それと確かめられた。唐氏であつた。務觀はもはや他人に適いてゐることに就いて、歩みを早めることができなかつた。

かれは、鏡片をとり出し、眺めた。それを與へた唐氏が怨めしかつた。自分一人がこれを携つてゐることは、何といふ下らないことであらう、かれはさう思ひながら、それを手に弄してゐるうち、鏡裡にはらんだ光が矢のやうに樹の間の、うす蒼い網の目なりの、芽立ちの奥へ辷りこんでゆくのを不思議にながめた。

その光の、ゆきとどいたところに、唐氏のまるい靜かな細い腰が、樹にもたれたまま動からとしなかつた。務觀も、枯葉が履下にがさつくのにこころ怯えながら、やはり立ち駐つてゐた。向ふでも歩き出さうとしない。しかしその顏は花園の方にある。務觀は、しばらくその姿をまんぢりとせず見とれてゐた。耳が透き、かつと紅く見えた。なぜ、あちらから歩いてきて吳れないのだらうか、それとも此方から聲をかけるべきであらうか、務觀は、こころ亂れることを感じた。

が、そのとき唐氏のかげは、すこしづつ動きかけた。ちやうど、その暇に何ものかを待ち倦んでゐるやうだつた。けれども、務觀は、やはり立ち竦んだままでゐた。動かないものが履下に膠づいてゐるやうだつた。

唐氏は、つひに花園へ出た。そこは明るかつた。もう逐ひつくことができなかつた。務觀は、自分の勇敢でないこと、ぐずぐずしてゐたことに苛立ち、汗を搔く念ひをした。しまひに、その鏡片を泉滴に投げ打つた。摧けたものは、にぶ

い光りを流れの底にしづめてゐた。

務觀は、自分のしたことを悔ひた。さうして歩みがさつき唐氏のゐたところに到いたときに、ふいに臥石の上にある、唐氏の置いて行つたれいの鏡片を見出した。——やはり自分と同じい心でゐてくれたか、そして自分はなぜ逢ひ話さなかつたかと、悔んだ。——そのとき既う唐氏の姿は、花園の埒の外にあつた。

三

務觀は、閑暇さへあれば、沈氏の園に杖を曳いた。戀するものにそれが甲斐のない、たはいない逍遥であることが分つてゐても、それの歩みを停めることができないやうに、務觀は、唐氏の細腰のかかりを見付けた樹のほとりに、そのすらりとした、寂しい肩さきを忍び浮べた。

務觀は、知らず識らず手をもたらせた幹を、ちやうどそれに應へのあるもののやうに、撫でさすりゐた。紅脂の、その滑らかな觸肌はしだいにかれの掌の上に、ひくい穩やかな脈を打つてきこえた。——それに、ふしぎなことは、この沈園に來るごとに、いつも一人の女がそぞろ歩きをしてゐるのを見出した。務觀は、この女が驛卒の娘であることを、旅中の宿に於て知つてゐた。

かの女も何が故に、務觀が園裡を逍ふかを知つてゐた。唐氏に烈しい心をゆすぶられてゐる務觀は、その女の眼のうちに含まれる、物思はしげな、何事をも囁きつくすことを許してゐる表情に、しだいに心が向いてゐた。務觀は、或る日、二人で石の上に座し、池心を抜いた紅蓮をかぞへながらゐた。一莖に二花のある珍らしい紅蓮は、ちやうど、唐氏のちいさい靨を思ひ出させた。

「娘よ、わたしについては來ぬか。」

務觀は、その娘が箋紙に、稚氣のある、しかし初心な染筆を示したのを讀み、手を把つたのである。

きざはしのこほろぎ、淸し夜にふけり
こがねなす井のかたへに
散りたる枝をさかる桐の葉、
まくら涼しみ隙漏りて眠りなしがたし、
燈火をいくたびか剪り
われはつづる秋おもふうた。

娘は、多くの詩を念ふ女がする、あつい瞳を務觀の額に投げた。それは崇拜に高らんだため、心も身も投げ出した、詩そのもののやうな美しい洗ひざらしの心であつた。務觀は、娘の背をなぜ、そして沈園の奥深く逍遥ふた。

「わたしに唐氏といふ夫人がゐた。母のいかりのために別れなければならなかつた。お前と沈園で邂逅つたのも、何かの深い因緣にちがひない。わたしは唐氏のやうにお前を愛でたく思ふ。」

務觀がかう話したとき、娘は、默つてうつ向いた。古葉に交る芽を讀んでゐるのではない――務觀は、娘が何か氣にかけはしなかつたかと、その横顔をぬすみ見た。

「あなたは唐氏のかはりとおつしやいますが、その唐氏の心どほりのわたしでせうか。女であるわたしには、それがよく分りません。」

務観は、その言葉に心冷えこるとを感じた。「燈火をいくたびか剪り、われはつづる秋おもふうた。」その詩句がふいに浮んだ。やつと務観は軽はづみな心から、いまぼんやり醒めたやうな氣がした。

「娘よ、わたしは考へ違ひをした。わたしはお前をただ呼ばうとしただけだ。わたしは別れなければならない。」

おれはあまり聰明ではない、務観は、さう考へながら立ち停つた。が、娘の輝いた目は既う沈もうとしなかつた。

「いいえ、わたしは參りません。わたしはご一緒に、おことば通りになります。」

娘は、さつきの言葉と反對に、身うごきもしなかつた。務観には、その糺問と優柔との區別ができなかつた。

務観は、沈園を出たとき、娘は、いそいそと、務観の、杖に躓きさへして、よろこび歩いてゐた。

四

沈園の春はいくたびも變つた。務観の、その姿が沈園の主のかはつたときに現はれたとき、髭の間に白いものを交へてさへゐた。

務観は、唐氏の靠れた幹や、娘と話した踞石の前にも立つたりした。池畔は泥を食み、水面は狭められてゐた。務観は、唐氏の死をも、娘との別離をも、ちやうど繪巻の中の人物を見るやうな氣がした。どれだけの年と春とが渝つたかも知れない。ただ、自分の心だけが落着き沈み込んで、むかしと今とをはつきり區別してくるのだつた。かれは、唐氏の幹と名づけた己れの記憶の木のそばへ寄つても、心は立ちさわぐことをしなかつた。水脈さへ立たなかつた。かれはかれの視對の遠方に、さびしげな唐氏の微笑と、娘のうひうひしい姿とを、まるで別のもののやうに眺めた。

「こんなに變化るものだらうか、心がまるで重石のやうにからだを壓してゐるのだ、そして自分のしてきたことが白

分の心とはべつべつに映つて消えるのだ。」

務観は、かしらを撫で、髪のこはばりを感じた。荒れた花園には、くろぐろした髪をなぶらせてゐる女が立つてゐても、ふたたびそれに瞳を凝らすことがなかつた。それと自分とは、言葉の通じない異國人のやうな氣さへした。曾てあれほど自分の心を和めた唐氏のことも、うすい、あるかないかのやうな夢のやうな氣がした。實際さういふ女がゐたかと思はれるくらゐ、隔け離れたところに、務観は自分の心を認め感じた。

沈園の白晝は靜かで、紅白の花とりどりに落ち、務観の坐下の地をくつきりと染め上げた。務観は、杖のさきで、その肌辷る花瓣をいじくり、靜かに刻んでゐる時のうつりかはりを、自分の心音に觸れながら、目に見るやうな氣がした。

「おれは美しいものにもう心をおどらせることがない。ただそれを眺めるだけしかできない。」

「おれはもはや何ごとをも忘却への年齢を取つてゆくだけだ。樹が餘儀ない年輪をきざんでゆくやうに。」

務観はふたたび沈園の荒れた春のなかに、自分を見出した。肌寒い風がいくたびも耳のへりを通り過ぎ、その音は、冬のやうに茫乎としてゐた。務観は、すこしづつ歩いてゆくうち、自分の夫人が、母と拉れ立ち、林下を歩んでくるのを見た。

務観は、自分一人でゐる境致を犯された不氣嫌をも、間もなく自分でおしころさうとした。なるべく自分といふものの感情を他に理由なく移させることの、必らず不愉快であるべき結果を知つてゐたため、それを押しころすことに馴れてゐた。

夫人は、母の手をひき、小子は、母の手にもたれ、その黑々した目を父親にそそぎ嬉しげだつた。——務観は、小子を肩のところまで抱き上げ、頬づりしながら地上にしづかにおろした。

母親は、唐氏を趁ふた人だつた。さういふ念ひが務觀のあたまに影うごかしたが、すぐ消えた。それと同じやうに娘を追ふのも夫人であつた。

母親は、沈園の荒れたことを、その茶亭に這入つたときに、務觀に、何氣なく茶をとりながら話した。

「さう沈園も、そして人の心も荒れ老ひぼれました。」

務觀は、夫人と小子とをかへり見、髮白い母親に、寂しげにほほえんで見せた。皆、心をこめ、そして園裡に目をさまよはせ、木には、花を探した。――務觀は、默つて我が子を膝の上に乘せ、あたまを撫でさすりながら居た。――が、務觀は間もなく一人でかへりかけた。栴檀の葉に手を觸れ、それを指さきに丸め、その烈しい匂ひをかいだ。が、すぐ寂しさうに、疎泉の面に投げ、流れゆくのを見つめてゐた。

綠色の朝

嬰兒は、ぼんやりと目をさましました。いままでした笛や太鼓の音いろがきふにしなくなり、赤い幟や虹の影が急に通りすぎてしまつた。なんだか城のなかが白い壁ばかりつづき、その壁は光らないくすんだ曇りを帶び、遠いほど狹まり顫えてみえた。嬰兒は、くろぐろした暗で不安さうにきふに變つてしまつたあたりを眺め入つた。まだ耳のそこの方にかげ引いてゐる笛の音が殘つて、それの世界が何故かうも早い變りかたをしたのだらうといふ考へを、その考へに近いも

のに辿りついたとき、あたりは全く白い障子ばかり見えた。目になれた白い眩しいものが明るい方に張りつめられ、それをすつかり目にいれたところには、笛の音は全くかげをおさめた。

嬰兒は、その白い障子にかならず目にとまる顏がなければならなかつた。いつでもその顏は障子よりも近く、すぐ目のそばに微笑つてすこしづつ動いては、れいの笛のやうな言葉を出すことに馴れてゐた、が、どういふものかその顏が目にはいらなかつたばかりではなく、白い障子ばかりが極立つて尖つてみえた。嵌め硝子からうつる緑いろの樹のかげにも、そのくろぐろした瞳がとまつてゐたが、しかしいつも目をさましたときに、きまつて動く顏のないことが實際以上に物悲しい氣がした。それと同時にさつきからしてゐた笛の音いろの消えたことまで、あまりに寂しい障子を見つめてゐるうちに思ひ出し、耐らなくなつて一時に、嬰兒は泣き出した。

母親は、ちかくに居なかつた。

嬰兒は、泣きごゑをあげられるだけ大きく、そしてやたらに手と足とを動かした。泣きながらもその黑い瞳はあたりを素早く見廻し、さぐり始めた。見なれたものはみな在るところにあつた。さういふ泣くときに限つて目にとまるふしぎな白い時計や、褐色の天井や、かちかちする音があつた。それから最う一つゑたいの分らない動いてゐる顏によく似たものが壁ぎわに停つてゐたし、紙覆ひをかけた明りも毎時ものところにあつた。變化つたところがない、それゆゑ、なほ大ごゑに泣きさけんでみた。さういふとき決つて天からふつてきたやうに吃驚りするほど近くに聲をさせる母親が、突然にやつてくることを知つてゐたからである。

動かした手をばたばたやつてゐるうち、ふいに、指さきにからからといふ音がくつついてきたことに氣がついた、おぼえのある乾びた音だつた。嬰兒は、その指さきを伸し、そのからからする音の物體をつかもうとした、が指さきがそ

れにとどきながら辷つて、きふに握れさうもなかつた。それゆえ、なほ泣き聲を高めた、高めるほど目はあたりを見ることに馴れ、指さきは音のする物體をさぐることに忙しかつた。――嬰兒は、聲だけ出して泣いてゐたが、自分ではまりあたりを捜ることになれてゐたため、いつの間にか悲しくなくなつてゐた。ただ非常に永い氣がした。天井に目をとめてゐる間ぢゆうにも、自分の寢てゐるところがだんだん下の方へ降りてゆくやうな氣がした。といふより何時も誰もゐないときに感じるものの隔離がたとへば遠目金を逆に廻したやうに、ずんずん移つて行つて天井が遠くなり、禍いろの渦を卷いてゐるやうだつた。その下の方へ降りてゆく感じは、嬰兒の、古いころからしびれたやうに頭腦にこびりついてゐる感じだつた。どれだけ左ういふ不思議な下降するやうな目まひをかんじたかしれなかつた。

嬰兒は、その下へ降りるやうな感じの、いちばん古いおぼえをおぼえてゐることができなかつたが、現在のやうに誰もゐないときなどに、ときどきに來る感じだつたので、すぐその感じをおぼえ出した。或る時は、あまり恐ろしくなりむやみに物をつかみたかつた。さうしないと辷り落ちさうで、底がまつくらでコワかつた。が、そんなとき誰もそれが分らなかつたらしく、嬰兒は一人で恐がつてゐるばかりだつた。

嬰兒は、自分の指さきの働きかけてゐる方へ、だんだん啼きぢやくつてゐる顏を捩ぢ向けやうとした、と、紅いすべつこい圓い形がすうと眼尻をながれ、ながれ射しこんだためなほ顏をその方へ向けた。圓いあかい物がすべつこく積まれてあつた。その折り累なつたさまざまな形體と濃い色彩とは、すぐさまその物體のなにものであるかと言ふこと、それが自分とどういふ關係があるかといふこととをぼんやり頭にうかべた。みな一度は手にふれもし、眼に色を感んじたものに違ひなかつた。それらは決つて何處か頭のうしろの、手のとどきさうなところにあり、いつも忘れぽいやうな位置にあるもののやうな氣もしてゐた。嬰兒は、その城のやうに積みかさなつた圓形の堆積のなかから、しばらく見つめ

てゐるうち、さつきぽつかり目をさましたときに失ひかけた笛の音いろを思ひおこした。虹や幟や太鼓や城や、さういふ大人の名づけた以外の、一種の氣流のやうなものの美しく裝はれてゐるものが、嬰兒の眼には眠つてゐるときと同樣にどんよりと霞みながらうかんできた。

それゆえ嬰兒は、手を伸し、そのまんまるい、つるつるしたものに、同じいまんまるい自分の指をくツつけたときに、さつきからの夢のつづきをさぐり當てるやうな氣もした。嬰兒はそれを二三度振つて見、そして自分の胸のところに持つて行つた。胸の内部ではさういふ珍らしい色彩をかんじる心臟が、これもゆるい太鼓のやうなものを叩いてゐたのである。かれはその圓いものを唇にあてがひ、そして最後にそれをちよいと舐め、すぐ投げ出してしまつた。投げ出した手はすぐ紅い長い竿のやうなものを搜りあて、それを先刻と同じいやうに二三度弛い調子で振つてみた。そしてその長い竿のやうなものの紅さをぐるぐる見つめてゐるうち、その紅い色はしだひに嬰兒の眼のなかへ影を沈み込ませ、ちやうど清い水のなかへ一點の梅嫌をおとしたやうだつた。そして一尺ばかりの竿の紅さを辿つてゐる嬰兒の眼は、しだいに疲れたやうにとろんと白みが浮み、黑い瞳が下瞼の方へだんだん陰れてゆくやうになつた。――嬰兒は、何も見もしなければ考へて居さうもなく、うすい睡りにとぢ込められ、れいの、紅い竿を手からばたりと辷り落した。掌は開けられたまま、まるで山梔花のやうに白かつた、と、その瞬間からふしぎに嬰兒は、笛や太鼓や幟の建つた城のやうた世界へぽかりと又た浮み出るやうな氣がした。いつものやうに珍らしい、どうかすると不意に、全く思ひがけなく浮み出るさまざまな色と音との世界だつた。どうして斯ういふ世界が有り得るかも、又どうしてこの音樂の世界へすべり込むやうに來るのかも分らう筈がなかつた。ただ、嬰兒は、睡りぬいでゐた。

さまざまなものを嬰兒は眺めた、さういふ意識とは名づけがたい、假令へば風や空氣と同じいやうな程度での、うすいおぼえが殘りかけてゐたのだが、ふと、またぼんやり眼をさました、と、すぐ笛や音や色が城のやうな虹めいた大輪廓と一しよに、ふき取つてしまつたやうに消えて了つた。嬰兒にはその感覺のあまりに卒氣なく悲しげな氣もちにはしばしば馴れてゐはしたが、しばらくぼんやりするほど、波濤のひいてゆくやうな音樂のあとを趁ひかけるやうな目付をした。實際、その音樂はすこしづつ消え去り、ありありとその姿を見つめることのできる程度の感じであつた。手さぐりで何處かをつかめさうで、それで居て今は全くかげもなく過ぎ去つてゆく音樂でもあつた。

白い障子がやはり寂しく閉められ、覗き硝子のそとの青い木木が透き、そのよく光る繊柔な色は嬰兒の眼にはつきりと映り出した、と、嬰兒は、いつものところに自分のゐることを考へあてることが出來、そこにある何時もの顏がないことをさとりはじめた。それ故、いままでの樂しさがすつかりブチこはされ、物悲しく凝乎としてゐられなかつた。一時に哀しくなつて泣き出した。泣けば必らず來るよく動く顏が眼にありありとうつりはしてきたが、白い時計ばかり目にはいり誰れもこなかつた。

母親はそこにゐなかつた。

街裏の小さい通りを母親は小刻みに併しできるだけ早足で歩いてゐた。ゆるい坂道が幾つもあるため、母親は息切れをしながら青い垣根に添ひ、飛ぶやうに急ぎ足をしてゐた。ちやうど坂のなかばに四つ五つの女の童どもが、踞んで草

ツ葉をいじくり遊んでゐたが、その黒い小さい頭だけが可愛らしく黒々とうつつたので、思はず母親はよその知らない子の頭をなでてやつた。日南にぬくめられた髪の地はうつすりと生温かく蒸されてゐた。母親は、嬰兒の髪の毛がこの童ほどに伸びるのには、非常に長い年月がかかるにちがひないと、ぼんやり考へて見た。そして童どもは何か低い聲でお愛想を言つて見、きふに風呂敷包みの中から何かを摑み出さうとしたが、ちよいと躊躇つてその手を包みの外側へ持つて行つた。童どもはよその知らない母親が何かを呉れるものだと素早く感じたが、却つて反對に包みを持ちかへたので、寂しさうに微笑んでみせた。母親はこれもやはり同じい微笑みを泄らすと、すぐ童どものそばを放れた。

が、母親は包みのなかのものを童どもに與へることが。却つてわるい氣がしたから、こんどは又急いで歩き出した、地上は白くけばけばしく削り立ての材木のやうに、よく光つては目を射りつけた。母親は、ふと何氣なく坂をのぼりつめた板塀のきわで、誰にもわからないやうな微笑みを一つ知らず識らずうかべた。いつも突然にやつてくる微笑で、それが顯はれると何かしら恥かしい氣がした。よその人が見てゐたら變に思ふにちがひないと思はれるやうなきまり惡い微笑ひであつた。怺へるほどしつこく浮んでくるのだ。母親は、さまざまなお弄品の山を枕元に積んで、白い寢床にすやすや眠つてゐる嬰兒の、かるい呼吸づかひまでその耳のそばに感じ出した。白くきれいに揃つた手と足とが、小布團のそとに食み出し、そこへ新しすぎるため荒い庭風があたりはしないかと、戸障子を閉めきつて來たかどうかといふ憶えを頭のなかで考へ出した。

道路が挾かつたために、母親は、荷馬車の通りすぎるのを垣根の葉ツぱを背中に苛々しく感じながら、暫らく立つてゐなければならなかつた。疲れてゐるらしい馬はのろのろと足場の惡い道路を軋んで、その、がりがり砂利を嚙む轍の音が腦をげぢげぢ刺戟した。そのくせ自分もつかれてゐるらしく、轍から立つ白い砂ほこりさへ、そして飴色をしてゐる馬の

肌身から立つ生ぬるいいきれが頬にさはるのさへ、むしろ茫然と見入り込むに過ぎなかつた、と言ふより、むしろ柔らかひ馬の全體が非常なゆるい歩調でいつまでも夢を見てゐるやうに目の前を、ほとんど母親の全生涯をつゞけて歩きつゞめてゐるやうな倦んだ氣さへ起した。母親は目をほそめながら弛い映畫にうつるこの鉛色の馬をみつめてゐるうち、遠い微かな目まひを感じた。

石の段々を敷きつめた坂みちで、母親は、もう嬰兒の泣きごゑまで聞く思ひがした。頭の奥の方で小さい嬰兒がうようよ動き、その白い手をひろげてゐるのを見た。母親はいそいだ、乾びた敷石を踏むごとに雪駄はその固さにはねかへされ、白いまぶしい光は、ふた側の緣のかげを映してゐながら、强烈に目を射りつけた。――母親は、そのとき乘り出した一枚の敷石の角で、足の親指の爪の上皮を逆にこぢ上げられ、はつとする間もなく痛みは脳の内部までひびいた。母親は、垣根の方へ、からだをくの字にかがませ、餘りの痛さに泪ぐんで、その折つた腰をきふにもとのまつつぐな位置にとりかへすことが、できなかつた。母親はその痛い痛い瞬間に、すぐ嬰兒のことが不思議に頭へうつつた。ちやうど生爪を剝いだ疼きと、嬰兒を考へる事とが、どちらも半分づつの重さで比較されるやうに浮んだ。母親は、そのとき自分で非常に靜かにおもちやの龍の笛を吹いてゐる、いつもの、自分の姿を思ひうかべ、龍の笛は、悲しげに空へ沈んでゆくやうな音いろを立てた。(「支那に玄宗といふ古い帝王があつた。月明の夜にさへなれば笛聲を城外の空へ亘らし、そのやうに月明と笛とを愛した。人人はそれを龍の泣く聲だといふほどに噂さした。城外の術者は、或る夜呪ひをしてこの笛の音を封じた。が不思議にそれと同時に玄宗は病氣にとりつかれ蒼ざめ臥るやうになつた。使者を馳せ、何事も知らないでゐた術者に、王の笛の音色を開けるやうに命じた。王は再びその笛を月明に吹くことができた――。」)母親は、その短かい瞬間に、非常な速度でこの小話を思ひうかべた。母親はいそいだ。彼女の道路をとる方向からこの笛の

音が寂しくきえぎえに綠をかぶる屋上を越えては起つてゐた。」

母親は、家の前へつくと、その潜り戸から內庭へ立ち、つたの葉が這ひかけた格子窩の小窓へ目をうつしながら、耳をかたむけた。が、べつに嬰兒の泣いてゐるやうな容子もなく、ひつそりしてゐた。母親は、そこでうつすりと微笑み、そしてできるだけ靜かに音を立てないやうに格子戶をあけた。自分のからだだけ開けた戶のすき間から、母親は、あぶらを流したやうに其格子戶のなかへ辷りこんだ。それから猫のやうにひそひそ步きかけ、嬰兒の部屋の襖間からなかを覗き込んだ。ちやうど非常に嬉しいときにするやうに手をひろげ、やや躍るやうな快活な足つきを持ち、かつ非常に周到に音を忍ばしながら近づいた。

嬰兒は、短かい眠りを三度つづけたあとだつた。ちくりとからだの或る部分に痛みをかんじたやうに、突然に目をさましかけた。が、そのさきに最うからだ全體がすこしづつ快よい搖れやうをしてゐるのに氣がついた。嬰兒はぼかりと目をさました。と、すぐ近くに、あまりに近くに人の顏がさしつけられてゐるのに、吃驚してまつた。そしてこんどはまぢまぢと目をすえ、その顏をながめ入つた。ふしぎにその顏を思ひ出せなかつた。嬰兒は、やはり黑々とした眼を凝視するだけだつた。

母親は、そのとき低い聲で何か言ひながら、嬰兒の頰のところを小指のさきで、ちよいと小衝いて見た。嬰兒は、それと同時に母親の顏を非常に近くに大きく眺めた。それがあまりに大きかつたために、ためらひながら、その黑い眼をすえた。

嬰兒は、そのときやつと思ひ出した。母親の眼が嬰兒のそれと或るふしぎなつながりを持つてゐたため、嬰兒の、頑ばつたやうな凝視がすぐ柔らかくなつてしまつた。そしてだんだん悲しげに潤ひながら一杯に涙を溜めた、永い間見なかつたものの、それが急激に嬰兒の心を充たしたために、嬰兒は、持ちきれるだけ涙を溜めたが、耐らなくなつて、先刻より一層大聲に泣き出した。泣きながらなほその瞳を据え、じろじろ母親が再た立つてよそへ行きはしないかと云ふことを、母親のからだの動くたびに、それとなく不安げに感じたのである。

母親は動かなかつた。すぐ嬰兒を抱き上げ、頰ずりしながら、自分が外へ用事に行つてゐたことを詫びるやうに話し出した。嬰兒は、抱かれたまま、すつかり安心をして了つた。が、そのとき不思議に嬰兒の兩肩にくつついてゐた青い翼のやうなものが、母親の抱き上げた瞬間からぽろりと落ちてしまつたやうに、あとかたもなくなつてゐた。何となく青い翼の生えてゐたやうな肩のあたりに、母親の、蒼白い手がかゝつてゐるだけだつた。

蘭使行

一

明るい綠いろに浮んだ日本の陸が見えると、エンゲルベルト・ケンペルは、助手や船長と一しよに舷に立ち出て、思

はず聲を擧げた。透明な綠りの島かゆつたりと魚の脊中を見るやうに、うすい朝霧のなかから、靜かに呼吸をし、ぽつかりと溫かさうに浮んで見えた。ちやうど玻璃作りの大溫室を公園の丘から見下ろすやうな故國の位置を、ケンペルは、その頭に浮べた。

「長崎。」

船員は、みな甲板の上で、踊りはじめた。ちやうど綠の島に向き合ひ、それに對する一つの禮節をこころみるやうに、包みきれない喜悅しさに、マストの上では、日の匂ひに蒸せながら蘭旗が光つた。縞狀の朝日のなかでその强烈な色彩が迸しつた。

牧師のサモエルは、踊り上つた船員を靜かに手でおさへる眞似をした。そして皆は甲板の央に、輪なりの形と、その激しい傾斜ある影を波の上にまで落した。みんなは、しばらく身動きもせずに朝の光のなかで祈禱つた。ケンペルも膝頭をついた。――ほがらかた、しかし極めて控え目な、ハレルヤの聲がおこつたとき、みんなは目を濕らせた。

ケンペルは、牧師サモエルと、しばらく囁き交はすと、あらゆる祈禱書や切支丹案內、または傳道書類を船底の、そのために作られた、奈落のいいい天國に匿してしまつた。その間ぢゆう、知らず識らずのうちに船員は聲を立てずに、暗い階段を下り降りした。ケンペルは、それらのひつそりした船員の動きを眺めてゐるうち、ふしぎな靜かな顫えをかんじた。ケンペルは、その顫えがこの國へくると、感じる異常な例となつて何時もかんじてゐたのである。

船に留るものと、ケンペルに從ふ一行との別れが濟んだころ、長崎の白い屋根や甍が、綠り樹のなかに、優しい貝殼のやうに光つてみえた。霧は反對に蘭船をつつんだことを、陸に着いたときに、一行はふりかへり眺めた。

船員は、ケンペルの目のとどかないところで、手をつないで踊つた。あとさきに犇めいたこの奇體な國のひとびとは、

ぞろぞろ連れ立つてきた。船員は、ちやうど不思議な物語りのなかにあらはれてくるやうな、小さい、不憫なむすめ達を見た。かしらに光る花を挿したむすめ達は、云ひやうのないぼつちりした可愛い唇をひらき、それに朝日のかげをやどらせ、みな艶やかに匂ふやうに思はれた。

長崎甲比丹と一緒になつたとき、上陸から熱心に一行のあとを尾けてきた一人の青年が、ケンペルの傍近く立ち、珍らしげにケンペルの顔を打眺めてゐた。船員は、その青年の身に近づいて、警しめ合つてゐた。それほど、この青年は、鋭利な眼光をもつてゐた。――青年はケンペルに切支丹の、金色の縁をしてゐる書物をその袂から取り出して見せた。ケンペルは、この異國に着いた最初の印象を非常に快よく感じた。そして青年の手を握つた。青年は嬉しさうにケンペルの、初老に近いやうな手を握り締めた。

船員の一行は、こんどもケンペルの下命で、互ひに數羽づつの、ココア色をした紅雀のやうな小鳥をそのカツパの下に抱えてゐた。銀屋町で、その一羽が飛び出したときにも、群衆は誰一人として氣の附くものが居なかつた。唯ふしぎにその小鳥の立つてゆくのを見ただけだつた。

が、ケンペルは、青年をかへり見、微笑んで見せた。なぜだと云へば、青年はそのさきから長崎にふしぎな、ココア色をした小鳥がゐることを知つてゐたからであつた。青年はその翌日、ケンペルを誘つて、町端れの古い寺院につれ立つて行つた。

そこの、古い赤松の梢に、灰ばんだ雀と交りながら、數羽のココア色の小鳥が翅つてゐたのである。――ケンペルは四邊に氣を配りながら、カツパの下から數羽の小鳥を、なつかしさうに啄づける眞似をしながら放してやつた。――が、その數羽は、同じいココア色の種類のなかに自分達の姿を見出したにかかはらず、それの群れに交はらうとせずに、立

ち竦んで梢の上にとまつてゐた。却つて先きから居た方のココア色の小鳥が烈しく咥み啼きをしてゐた。

「あれを見い。」

ケンペルは、それを指さし、寂しさうに微笑んで見せた。「しかし今にきつと一緒になるにちがひない。」

青年の眼は、ケンペルを凝視めてゐたが、異様な熱情にとり絡んだ光をもつて、たへず崇敬に近い目つきをしてゐた。

しかしケンペルは、さきの小鳥の羽根の色が、いつ誰が放して行つたのか分らないが、だんだんそのココア色の艶を沈ませ、やや、稀薄になつてゐることに氣がついた。そして氣候の相違や、自らなる食物風俗のちがつてゐることに、心づいた。ケンペルは、かるく舌打ちをしながら故國の小鳥をなつかしさうに呼んでみたりした。小鳥は、松の梢に停つたきり、なれない綠の冷たさや鋭い酸味のある空氣に探ぐられるやうに、いくたびとなく羽ばたいた。

紅毛船檢吏の手を經たときには、一行のうちに誰一人として柔順でないものがなかつた。

二

元祿五年の初春、入貢の蘭使一行は、城中大廣間で、將軍綱吉と謁見した。老中牧野備後守を筆頭に、柳澤出羽守の若年寄の一列、及び横山與三右衛門がその日の通辯にあたつた。

將軍綱吉は、御簾の中にゐた。ケンペルは甲比丹と併び、その禮服のカツパを纏ふてゐた。ケンペルは、ぼんやりと將軍の顏をながめた。たぜ、ああいふ御簾のなかに居なければならないだらうと考へてゐた。

「不老不死の藥餌があるといふが、それは本統のことか。」

將軍の、その質問には、すぐ甲比丹がすさり出て答へた。

「永年苦心をして製つて居りますが、大支那の北方からの、人跡未到の谿谷に咲く珍花から採り入れた珍藥がございます。シルキウス先生のそれよりも、最つと有効に存じ上げます。」

「それを試みたものがあるかどうぢや、そして不老不死の實を上げて居るものが居るか。」

綱吉の追ひかけた質問に、甲比丹は、すこし狼てて、ケンペルの顏をちらと偸み見、すぐ答へた。

「我が國にはそれが澤山ございます。皆高貴人の料にあたつて居ります。」

將軍はぶつきらぼうに

「早速取り寄せい。」

さう言ひ附けた。そしてケンペルに向ひ、同じことを言つた。

「その方はやはり不老不死を信じてゐるのか。」

ケンペルは、靜かな微笑みをうかべ、カツパの上張りを一と撫でした。

「諸病のわざはひを未然にふせぐ事に於て、わたくしは信じ上げます。」

「さうか。」

將軍は、氣のなささうに答へた。が、すぐに、ケンペルのカツパを指さし

「それは何んといふものぢや。」

「カツパと申す禮服にございます。」

ケンペルの聲の終らないうちに、再び綱吉は饒舌つた。

「カッパを取れい。」

ケンペルは、仕方なげにそのカッパを脱いだ。が、こんどは筒袖めいたズボンのままで、立つた姿を見て、將軍は、御簾のなかでがらがら嗤ひか[illegible]た。

「いや、ちよいと歩いて見い。足をもた上げ、あ、さう、それからちよいと跳り上つて見い。」

將軍は、どぎまぎする通譯の横山が言ひ澁ると、不機嫌な聲をとがらせた。

「かやうに致すのでございますか。」

「もと早く歩いて見い。」

ケンペルの姿は、さらに老中、裾ながれの武士どもを哄はせた。將軍は、しまひに上衣まで脱がせた。そして哄ひながら上機嫌であつた。

お廊下越しに、奥女中が戸の隙間隙間に、三重にも四重にも累なり合ひ、くすくす忍び笑ひをしてゐた。

ケンペルは、上衣をとるときに、物悲しげな、呆氣にとられた顔をしたが、すぐ、それが冷たい譏笑の色にかはつてしまつた。かういふ將軍にも、犬畜に對する熱いふれあいを出したことがあるかと思ふと、異國人同士の心持ちが彼れをどこまで不可思議なものにして見せた點に就いて、ケンペルは、我慢をし通したのだつた。

最後にケンペルは、舞踊しながら、綱吉將軍の徳をたたへる獨逸語のうたを歌つた。どういふものか彼れ自身いつの間にか、綱吉にへつらふ歌詞になつてしまつてゐた。ケンペルは、自分でうたひながら、自分の皮肉さが將軍にはわかりはすまいと考へられたからである。

三

將軍は、奥醫師と、ケンペルとを問答させたが、奥醫師は、ケンペルの水銀錠によつて熱の高低をはかる機械を珍らしがつた。そのとき將軍は、接吻といふものの、その形をして見よと言つた。

ケンペルは、躊躇つたが、しかたなしに甲比丹と目を合せた。

「親近の間では、唇と唇と合し……。」

ケンペルの說明の間もなく、將軍は、れいのぶつきらぼうに言つた。

「目前で致して見い。」

ケンペル學士は、あさましいやうな心地で、甲比丹と唇を併せた。將軍はまたがらがら嗤つた。

奥女中は、美しい眉をひそめ、犬を見るときのやうな目で、わらひ戯れた。ケンペル學士は、しだひに厚顔になれ、平氣で、居ながれた近侍の誰一人と眞面目な顔をしてゐるものの居ないことに氣がついた。飛び興じる、なかば街角で見世物をみるやうな氣合ひが、ケンペルの心を或ひは怒りや寂しさに追ひ立てた。自分だけが皆の嘲笑の焦點になつてゐるだけ、居耐らない、くらい氣になつてゐた。

しかし將軍のいたづらは、この不思議な紅毛人のからだに、何か異常な、自分らと變つたものがあるにちがひないと考へられてならなかつた。たとへば白いさらしたやうな皮膚からが最うふしぎな原因であるやうな氣がした。

將軍は、かれらを裸體にし、そして何かの異常なものを見付けやうと言ひ出したとき、誰も皆興味半分にこれを止めるものがなかつた。が、栗崎道有は、すぐに御前に辷り出た。そしてそれは全然無禮であること、蘭土にも聞え惡いこ

ことを申し出た。

「われわれと變化つたところがないと申すか。」

「全く、道有、責に任んじます。」

さう答へたとき、ケンペルは、道有と目を合せた。ケンペルは、道有の眼底を讀み込んだ。

將軍の發意は止められた。道有は、ケンペルと、その脈數の不動などの時に、起りやすい發熱などの質問をし合つた。

ケンペルは、道有が蘭醫の學傾を帶びてゐるらしいのを感じた。――ケンペルが謁見を終つたとき、將軍が今度表はした生類憐愍の嚴命について、お答ひを願つた。將軍は、さきからゝ打つて換つたやうな眞面目さで、人畜ともに相助け合はなければならないことを饒舌つた。が、異國人であるケンペルを犬より劣つた眞似をさせたことに、すこしも心づいてゐなかつた。

四

蘭使一行が品川はづれに來たとき、れいの青年がケンペルに從つてゐた。

開帆の時に、ちやうど入港したときのやうな踊りが、船員の仲間同士で、やはり綵りの島に向き合ひ、うたはれた。あるものは、その淺綠に溶け合つた陸を目がけ、ただ、ちから限りうたつたり、情熱で輝いた聲で叫んだりしてゐるのもあつた。が、ふしぎなことには、左舷に蹲んだ一人の日本人が、その踊り狂つてゐる船員の姿をみてゐるうち、しらずしらず立つてケンペルのそばへやつて來たのである。

ケンペルは、その青年の憂色ある蒼白い頬を見た。そして、自分の考へどほりに、陸へかへして吳れといふことが、

その表情に讀むことができた。

實際、船員は、みな蘭土にある妻や子や、その優しい知己に近づいてゆく、この開帆に熱狂してゐた。蘭土は遠かつた。が、かれらには地圖のやうに明晰に、青くけぶつてゐる人家や町なみが、眼底にちらつき、かつ動いてみえたのだつた。

「わたしをかへして下さい。何んだか恐い氣がして來ました。」

青年は、白いボオトの下ろされるときに、ケンペルの手にすがりながら、妙な流涙を仄めかした。

ケンペルにも、この青年の心持ちが能くわかつた。みんなの踊つてゐるのを自分一人離れて眺めてゐた、しよんぼりした姿が、かれにも同感できたのである。

「下りなさい。君の考へてゐることは能くわかるのだ。」

ケンペルは、この名もない青年の肩に手を置いた。青年は、ボオトに移り乘つてからも、ケンペルの顔を凝然とながめた。ボオトは隔れた。船員は、いつさいに舷に群れ聲をそろへ、何かのうたをうたつた。青年は、波の上を低くなつたり高くなつたりして、手をふるごとに、よろけた。

ボオトが歸つてきたときに、船員の一人に飛びついて、泣き出した青年のことを彼らはケンペルに話した。みんなは又船の上で、踊りながら唄つた。

ケンペルは、甲板の椅子の上で、サモエル牧師と、日本の岸邊をながめ、二人とも默つてゐた。が、同時に二人とも、熱しやすい、しかし寂しさうな青年の姿を目にうかべてゐた。

船は次第に動きはじめた。望遠鏡を逆にねぢつたやうな緑の島が、だんだんにうしろ退さりして行つた。

ケンペルは、この國の人情について、牧師と話しはじめた。

「あゝいふ青年さへも、この船に乗り込んだだけでも珍らしいのだ。」

ケンペルは、その緑の島の人情が古くいぶしをかけたやうだとも云つた。

十分の後、緑いろの島が、もはや波の上から消えた。



湖水のほとり

正宗白鳥

櫻梅桃李などさま〴〵な春の花が一度期に咲出てゐる繪のやうな小村落を幾つか通つて、ある峠を上ると、そのあたりには、まだ春が淺かつた。梅も櫻もところ〴〵花を着けてゐるに過ぎなかつた。そして、鑛山地らしい大きな煙突から噴出される黑煙は、朦々として大空を汚してゐた。草木の薄い周圍の山や、都會の場末の新築の貸長屋見たいな無趣味な人家は、今まで見て來た昔ながらの山里とは違つて、彼れの心に快い刺戟を與へなかつた。古びた衣類やさま〴〵な食品を並べてゐる露店の前を通りながら、彼れは、ある露店の主婦にX湖への通路をたづねた。

「私はこの土地の者ぢやないから、湖水の道なんぞしりません」と、ぶよ〳〵太つてゐる主婦は卒氣ない返事をした。

彼れは薄汚い商店の並んでゐる町を二三丁歩いて、薦包を脊負つてゐる行商人らしい男に道をたづねた。

「私は湖水の方へは一度も行つたことがないから道は知らないが、途中はなかなか厄介ださうですぜ。あなたはこれからおひとりで湖水まで行きなさるのですか」と、その男は不思議に思つてゐるやうな顔して答へた。

更に一丁ほど足を進めてから、彼れは、家の様子が勞働者の休み場らしく察せられる駄菓子屋へ寄つて、土間の腰掛に腰を卸した。茶を乞ふて、ふかし立ての饅頭を取つて午餐時の空腹を滿たせながら、X湖への道をたづねた。

「此方は裏道だから不断でも人通りが少いのですが、今年はまだ通つた者は御座いますまい。上の方は雪がまだ隨分殘つてゐますでせう」と、圍爐裏の側で、藥を煎じてゐた其家の老主人が云つた。

「しかし、道はついてゐるんでせう」

「道はありますとも。ところどころに道しるべの棒杭も立つてゐるし、細くつても大抵は一筋道で、枝道は滅多に無いのですから、少し氣をつけなされば、途中で迷ふことは御座いますまい。しかし、この町を離れたら、先方へ行着くまで五里ばかりの間は、村も家もまるつきり無いのですから、用心に案内者を雇つてゐらつしやい。この頃は日が永いから、晩までにはゆつくり向うへ行かれますよ。五里と云つても登りばかりぢやなし、お若い方の足なら、何でもないやうなものでさあ」

老主人は自分は近年通つたことはないがとことはりながら、湖水への道筋を言葉で明細に描いて、若者に教へた。草原を横切り、谷川を渡り、奇岩に富んだ峯の中腹を上下して、それから、アカシヤや白樺の林の中を通つて、山の向うへ出ると、湖水の一端が木の間から見下ろされる。そこから湖畔までは一里足らずの下り道で、道の盡きたところにある茶店に頼めば、宿屋までの渡し舟を出して呉れる。……

若者は老人の言葉によつて、途中の風色や湖水の美しさを想像したり、多少の難路を跋渉することに却つて興味を感

じたりしてゐたが、老人は煎じた藥を飮んでしまふと座を立つて、案内者を雇ひに行つた。

脚絆を着けて草鞋をはいて山登りの身仕度をした若者は、戸口に立つて空を仰いで、徒歩の旅には想ひ懸しい柔しい日の光と、稍々冷たい空氣の肌觸りとを喜んだ。待遠しい思ひをして彼れは案内者の來るのを暫く待つてゐたが、老人は歸つて來ると、今日はS市の藥師の祭や花見にそこの土地からも大勢出掛けてゐて、案内者は捜しても見當らないと云つて、「今日は此處でお泊りなすつて、明日の朝早くお出掛けなさい。その方がゆつくり登れてよう御座んすよ」と、先づきは事もなげに云つた途中を登りづらい險しいところとして話した。

「ぢや、ひとりで行つて見ませう。行けさうでなかつたら、途中から歸つて來るまでだ」と、彼れは決心して云つて、老人が引留めるのを聞入れなかつた。

彼れの足は强かつた。内臟も健かであつた。頭には美しい快いさまざまな空想を湧立たゝせる力が宿つてゐた。都會に住んで都會が與へて呉れる五官の樂みに日常親んでゐる彼れには、人間の影も見えない山野を獨りで歩むのは調子のちがつた淋しい所行であつたが、さういふ淋しさと五體の腦みに打勝つだけの力を彼れは具へてゐた。

彼れは老人に聞いた道を通つて、鑛山區域の禿山を拔けて、雜草の茂つた高原へ出た。空の色は一層冴えて來て遠くの雪の山は神秘な感じを彼れの心に起させた。高原を下つて溪流を渡ると、若葉の樹間から鶯の聲が聞かれた。彼はをりをり岩の上や木の根に腰を卸して汗を拭ひ、淸水を掬つて渴を醫した。

彼れは險しい道をば喘ぎ喘ぎ上つたが、平坦な道へ出ると、都會で唄はれてゐる唄を口すさんだり、今度の旅で聞覺えた可笑しな地方唄を頭の中で思出してほゝゑんだりした。

同伴者があればよかつたと、彼れは今度の旅に、友人のAかBかCかを、あるひは兄弟のDかEかを誘つて來なかつた

ことを後悔したが、さういふ人々よりも、戀なかのF子を連れて來なかつたこと――連れて來られないことをふと物足らなく思つた。雜沓した都會の彼方此方で彼女に會つて遊ぶのとはちがつた樂みが、かういふところで得られさうに思はれた。……彼れは雪解け水がしと〳〵と注いでゐる溪流のほとりに、竹の柱に茅の屋根の小やかな家を設けて、F子と二人で大古の人のやうな生活を營む樣を心に描いた。水の音鳥の聲、それにF子の聲を聞いてゐれば、一年も二年もこの山中で安んじて、日々を樂んで生きてゐられさうな氣がした。都會にゐると、自分だちのために、彼方此方でさま〴〵な歌舞音曲が催されてゐると思込んでゐる彼れは、自分だちのために、流れがさゝやき、爽やかな風が吹き、木々が芽を出し花をつけ、山が雪に光つてゐるやうに思つてゐた。

美しくて柔しくて弱々しい都會の女であるF子は、こんな山の奥へは連れて來ようたつて來れないやうに造られてゐるのを、彼れは造物主の手落ちとして牴牾しく感じたが、しかし、彼れの心は望みに向つて自在に馳せて、彼女の姿はその滑らかな肌や笑顔をもつて、彼れの側にあり〳〵と現はれるのであつた。あるひは、聳え立つた岩の上に彼女が白い足を投出して横たはつてゐた。あるひは、森の中で紅い唇を動かして唄つてゐた。

彼れは自分の通つてゐる道が間違つてゐようとは思つてゐなかつた。道が二つに分れてゐると、彼れは躊躇せずその一つを撰んで、それを正しい道として歩を進めた。ところ〴〵里程を書いた道しるべも立つてゐた。

旅程半ばに達した所に、何のためにか、小屋が建つてゐて、筧の水がその側に落ちてゐた。彼れは戸を押して内へ入つて、板の間の埃を拂つてその上に横になつて疲れを休めたが、さうしてゐるうちにわれ知らずしばしの眠りに落ちた。山小屋の假寢の夢にも魔の影は差さなかつた。

でも、心の底では警戒してゐたのか、小やかな物音にも氣づいて、やがて目を開けたが、見ると、彼れの目の前に、赤

い目をした背のヒョロ高い男が蹲んで煙草を吸つてゐた。眠りから醒めきらない彼れは、まだ殘りの夢を見てゐるやうな氣で、默つて赤い目の男を見据ゑた。流石に多少の恐怖を覺えた。

「あなたはどちらへ行きなさる？」と、その男の方から口を開いた。

「X湖へ行きます」

「おひとりですか」と、その男は分つてゐることを訊ねた。

「え〻。……もう少しで下り道になるんでせう。」

「私も、今年になつてはじめて通るんだが、これから先が雪が深いだらうと思つてゐます。あなたはこちらはおはぢめてぢやないんですか」

「無論今度はぢめて來たんです」

彼れはこの變な男を、時に取つての案內者と賴んで、やがて一緒に小屋を出た。少しの間に空は曇つて風も寒くなつてゐた。成程雪は俄かに深くなつた。白樺の多い山の角を曲ると、數尺の厚さを持つた一面の雪の原で道筋は分らなかつた。偶然案內者が得られたのは天の助けだと、彼れも、ふと思はぬではなかつたが、さういふ氣持は强くは感ぜられなかつた。彼れの身には當然あるべきことのやうに思はれた。

雪を踏み〱道のないところを上下するのは壯快であつた。

「私はX湖の近くの村に十二三年住んでゐるんですが、今年ほど雪の積んだことはありません。この邊は一丈も積んだでせう。まだ十五日も二十日もたたなければ遊びに來る人はありますまい」

「しかし、泊られる宿はあるんでせうな」

「それはありますとも。」

「宿さへあればいゝ」

若者はそれだけで前途の安心を得て、日差しも薄くなつた雪道をさして苦にしなかつた。雪中の强行軍をさせられる軍人ではないし、高山の冒險的跋渉を自慢にする學生ではないし、こと更好んで、人の通らない山路を登るには及ばないと思つてゐる彼れも、新たに目に觸れた新たな世界から、新らしい幸福が得られた。

若者と案内者とは、雪の上、林の中のたゞ二つの生物として動いてゐたが、互ひに餘計な言葉は取りかはさなかつた。……時々は案内者の充血した目付きや堅く閉ぢた口元が、凶惡な心の現はれとして若者の目に映ることもあつた。そして「間違つた道へおれを導いて、おれの衣服を剝いで、おれの持物をも奪はうとするのではないか」と、ふと疑はれることもあつたが、自分はさういふ殘虐な目にやす〳〵と會はされる人間ではないと、彼れは動かしがたい自信をもつてゐた。

「やあこいつは弱つた」

案内者は湖水の一端の見下される峠へ出ると、ふと叫んだ。下りの小徑は雪崩(なだれ)に埋められて、足のかゝり所がないやうであつた。

「あれがX湖か」

若者は志して來た湖水を一瞥すると、數日來の望みの遂せられた悅しさに、胸を躍かした。AもBもCもDも、あるひはF子も、わが此處に立つて見て、感じてゐるわが喜悅の一分をも感じてゐないのだと思ふと、彼等のすべてが憐れなものゝやうに思はれた。道の有無などは顧慮しないで、ひた走りに驅下つて、かの蒼い湖の水にわが唇を浸したかつた。

ドンヨリした太陽は湖上のかなたに沒しかけてゐた。

「私の草鞋の跟を踏んでゐらつしやい」と云つて、案内者は絶壁の雪の上に深い足跟を印しながら伺ふやうにして進んだ。若者は案内者に倣つて進んだが、この時ばかりは心が一點に集中して、外の何事も考へる餘裕がなかつた。案内者の足跟のみが强大深刻な力をもつて彼れの目に映つた。

難路を下つて湖畔に着くと、案内者は宿屋の在る方を指さして、若者に挨拶して別れた。若者は林の中へ案内者の姿の消えるのを顧みた。再び獨りとなると、帯を締直し草鞋をも穿直したが、ふと氣がつくと、小錢を入れた蟇口や手巾や煙草など、小さな持物は何時の間にかスツカリ紛失してゐた。

かねて聞いてゐる茶店を捜して入つて、圍爐裏で濡れた衣服を溫めながら、かの案内者の事を訊ねたが、茶店の人々には分らなかつた。今年はじめての都會の客を珍らしがつて、主人や主婦は左右からいろ〳〵なことを訊ねた。

「東京では先日大地震があつたさうぢや御座いませんか」

「えゝ、可成りひどい地震でした」

「二三百人も人死があつたといふことですが」

「そんなことはない。家が潰れるほどぢやなかつたのです」

「博覧會は大變な人で、うつかり見に行けないさうぢやありませんか」

「僕はまだ一度も入つて見ないんです」

「こちらではもう二十日もたゝなければ花が咲きません」

若者は茶店の主人の煙管を借りて粉煙草を吸つたり、焙じたての番茶を饗ばれたりして、圍爐裏の側を樂んで時を過した。そして、渡舟を雇つて貰つて、寒凌ぎの褞袍を借りて頭から引かぶつて舟に乘つたが、山のほとりの雲の絶え間

から新月がほの見えた。何年も見忘れてゐた月を思掛けなく湖上で見たので、彼れは詩人らしい感興を起して昂奮した。渡舟の船頭は耳が遠くつて、此方から訊ねることに頓珍漢な返事をするのを、時に取つて興の多いことのやうに思つたりした。

彼れは、ＡＢＣＤへ宛てゝ書送るべきいくつかの和歌や今様の詩をつくつた。薄暗い山々を指さしてその名を訊ねても、聾の舟夫(かこ)は答へずと、彼は耳の遠い船頭を聾にすることによつて、自分の作詩の意味を深くするやうに感じた。一點の燈火も見えず、自分が默すれば、水をわける櫓の音の外に、漫々たる湖上に音もなく、聲もなく、神秘な感じが山や水に漂つてゐるやうに勝手に思込んだ詩をも考へた。温き今宵の宿、安らかな眠り、やさしき言葉、彼れは自分の今の心の願ひが詩でなくて何であらうぞと考へた。

船頭に導かれて、星あかりで宿屋へ行きついて、上框に腰を卸すと彼は今までの疲勞が一時(とき)に出て來たやうに感じた。

「まだ何處もお掃除をして居りませんで」と、若い主婦は言譯をして、提灯を點けて埃だらけの長廊下を傳つて、奥の部屋へ彼れを案内した。風呂が立つてゐなかつたので彼れは水で足を洗ふだけで我慢して、爐の側に横たはつた。

薄くらいランプの下で「モンペ」とかいふものを穿けた色の白い小娘の給仕で、料理は質素だが、空腹には山海の珍味と思はれる晩餐を、感謝の念をもつて喰つて、それから繪葉書を幾枚も書いた。

寢床に就く前に、明日(あす)の湖水見物の順序を宿の人に相談しようと思つて、暗い長廊下を辿つて、燈火の點いてゐるところへ行つて、内を覗くと、廣々とした臺所の側の圍爐裏の前で、若い主婦は膨らんだ白い乳房を出して、膝の上の赤ん坊に吸はせてゐた。側には東京の有名な婦人雜誌が、開かれたまゝ表を外にして伏せられてあつた。

「ちつともおかまひ致しませんで」と、若い主婦は愛嬌笑ひを浮べて、「この頃は女ばかりでお留守居をしてゐますの

ですから」

「御主人はゐらつしやらんのですか」

若者はふと廣々とした左右を見廻したが、臺所の隅の薄暗いところに、小娘が二人差向ひで何かしてゐた。

「主人は據ろない用事で、四五日前に東京へまゐりました」

「此處から東京へ行くのは容易ぢやありませんね」

若者は主婦のお愛想のいゝのに惹かれて、もつと打解けた話をしようとしたが、俄かに赤ん坊が泣出したので、明日の見物の事をちよつと訊ねたゞけで、自分の部屋へ戻つた。

冷い寢床の中へ彼れは疲れた足を伸ばして快い眠りに落ちながら、「かういふ湖水のほとりで、雪の中で、小娘を使つて、若い小綺麗な女と冬籠りをするのは惡かあるまい」と此家の主人を幸福な人のやうに見做した。

彼れの寢間と宿の者の寢間とは、五つも六つもの部屋を隔てゝゐた。赤ん坊の泣聲も聞えなかつた。

晝間の疲勞のために、前後不覺に、夢も見ずに深い眠りに沈んでゐた彼れは、ふと耳元の聲を聞取つて驚いた。

「お客樣」と、晩餐の給仕に出た小娘の聲がした。

彼れは目を見開いたが、ある事に思當つて、わざと默つてゐた。爐の殘り火が光つてゐるばかりなので、女の顏も擧動も見えなかつた。

「お客樣」と、またもあたり憚るやうに呼掛けた小娘の聲は震えてゐた。

「何だい。今時分どうしたのだ」と、彼れは頭を持上げて咎めるやうに云つた。

「申兼ねますが、あちらへお出でなすつて助けて下さいませ。主婦さんが困つてゐなさるんです。」

若者は氣輕にさう云つて當推量の違つたのを可笑しく思ひながら、マッチを探つて、枕許の提灯に火を點じた。見ると、寢衣姿の小娘は青い顏しておど〳〵してゐた。

「何事が起つたのだい」

「何か變つたことが出來たのかい」

若者は跳起きて急いで衣服を着けながら事情を訊ねたが、小娘は答へないで提灯を持つて先きに立つて部屋を出た。

若者は夢を見てゐるやうな氣で、後から廊下へ出たが、家族の居間へ近づくにつれて、氣色ばんだ男の聲が次第に聞えて來た。男氣はない筈の家の眞夜中の男の聲は奇怪に思はれたので、若者は部屋の外に立留つて耳を傾けた。小娘も內へ入りかねてゐた。

「此處で話が出來ないのなら外へ行かう。このまゝで指を啣へて、夜中に山を越して歸れるものか、歸れないものか、あなたも考へて見るがいゝ」と、男は稍々柔しく云つて、主婦を促した。手を執つて引張つて行かうとさへした。

「山を越して來ようと、谷を越して來ようと、それはあなたの勝手ぢやないの。何も夜中に血相變へて脅かしに來なくつたつて、話があるのなら、晝間明るい時にあたりまへの顏して來たらいいぢやありませんか」

「理屈はどはどうでもいゝ。今夜は云ふだけのことは云つて、聞くだけのことは聞かなければならないのだ。……さあ外へ出るのなら出よう。僕が怖いのかい」

「人が怖くつてこんな所に一人ぼつちでゐられやしませんさ」主婦は動じない聲でさう云つて、「お前だちは安心してお休みよ。何でもないんだから」と、も一人の小娘に云つた。そして、外へ行く身仕度をしてゐるやうであつた。

若者はうつかり其處へ顏出しゝなくつてよかつたと思つて、立聞きしたことを氣づかれないやうに忍び足で自分の寢床へ歸つた。が、この頃になく神經が冴えて暫らく眠つかれなかつた。宵には赤ん坊の泣聲さへ聞えて來なかつたのに眞夜中の山の空氣は、あちらの部屋の物音を忍びやかに此方へ傳へて來た。

表の戸が開いて、二人が一緒に外へ出たのにちがひなかつた。男の足音と女の足音と、男の聲と女の聲とが、舟着場の上の石段の方から幽かに響いて來たが、やがて闇の中へ吸込まれたやうに、物音は消えてしまつた。……あとは、世界が死んだやうに靜かになつたが、若者の心はいつまでも二人のあとを追つてゐた。

夕暮れに湖水へ着いた彼れの目には、この土地はまだ茫漠とした薄ら暗らい印象を留めてゐるに過ぎなかつたし、若い主婦の白い顏と白い乳房とは、闇の中の電光のやうに一瞥してゐるのであつたが、訪ねて來た男の顏は見てゐないのだから、二人の所行を想像するのにたよりが少かつた。……風の寒い夜の湖畔で二人は何を話してゐるのであらう？

餘程の時が立つても、主婦は歸つて來なかつた。關係のない他人の事でありながら、彼れは次第にいら／＼した氣持になつて、起上つて、廊下のガラス越しに外を眺めたりした。空は明日の天氣の氣遣はれるほどに曇つて、星の光さへ見えなかつた。

いら／＼した彼れの氣持は、いつとなしに、F子の姿を呼起した。そして宿の主婦がF子であるやうな氣がしだした。此家の主人が自分であるやうな氣がしだした。主婦を寒い戸外へ連れ出した正體の分らない黒い影は、東京の街上に、F子の近くにも動いてゐるやうに思はれた。……で、彼れは今度の旅行もこれくらゐで切上げて、早く東京へ歸ることにしようと決心した。

あくる朝目を醒ました時には、冴えた日が廊下のガラスから差込んでゐた。彼れは眞夜中の記憶を夢ではなかつたかと疑ひながら、顔を洗ひに行くと、主婦は愛嬌のある顔して快い挨拶をして、

「舟は今朝申付けときましたから、御都合のよろしい時にお出掛けなさいまし」と云つたが、

「舟は寒いでせうから、どうしませうかな」と、彼れは躊躇した。

長い廊下を傳つて自分の部屋へ歸りながら、左右を心を留めて見てゐると、昨夕は誰れもゐなかつた筈の部屋の一つに、誰れかが泊つてゐるらくし、寢息が其處から洩れてゐた。

寢床の取片付や朝餐のお給仕には、昨夕の小娘とは違つた、年輩は同じくらゐな小娘がやつて來た。

「も一人の姉さんはどうした？」と、彼れは失望して訊ねると、

「身體(からだ)の加減が惡いと云つて、まだ臥(ふせ)つて居ります」

「外にお客様がゐるのかい」

「いゝえ、」

小娘は微笑してゐた。若者は自分の立入つた想像を小娘に訊糺すのを躊躇した。

「料理は主婦(おかみ)さんがこしらへるのかい」と、彼れは昨夕と同じ鱒の鹽燒と干大根の煮付を膳の上に見た。

「えゝ。……もう一月も立たなければお客様がゐらつしやらないから、召上るやうな物は何も用意して御座いません」

「姉さんは何時ころからこの家へ來てゐるのだい」

「私は四年も前から來て居ります。夏のうちは五六人も手傳ひの人が來るのですけれど、年中ゐるのは私だけでした」

「も一人(ひとり)の姉さんは？」

「あの人は去年の夏はじめて來ましたのです。寒くなると家へ歸る筈だつたのですけど、赤ん坊さんが出來たから、續けて居るやうになつたのです」

「冬のうちこんな淋しい所にゐても怖かあないかね」

「私は別段怖いといふことも御座いません。馴れて居りますから」

「えらいねえ。……主婦(おかみ)さんは柔しくていゝんだらう」

小娘は答へないで微笑した。話はそれで終つた。

若者は食後廊下へ出て、暫く湖上を眺めてゐたが、一度崩した都戀しい思ひに、最早矢も楯もたまらなくなつて、歸り仕度に取りかゝつた。

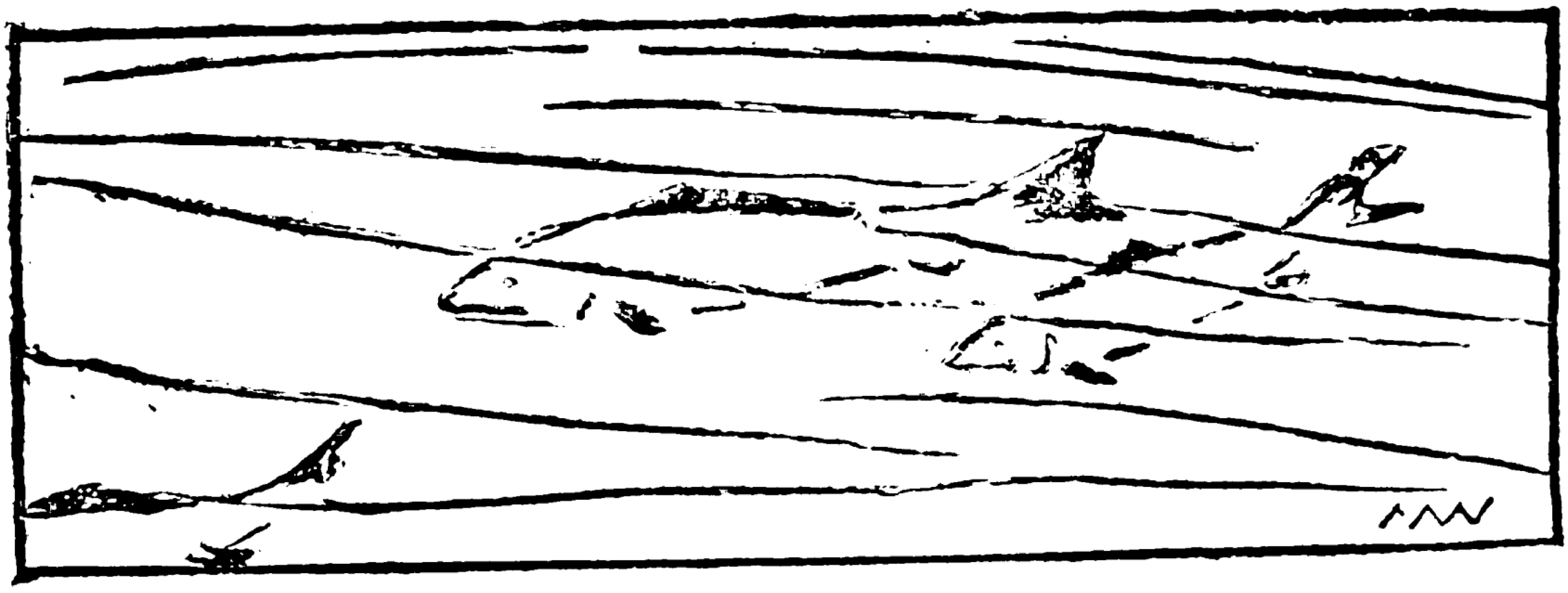
歸りには、來た時とは違つた安らかな道を採つたが、彼れの頭の中は萎びて足の力も衰えてゐた。峠の茶店で休んで湖水に最後の目を向けてゐると、そこの老婆は彼れの顏をしげ〴〵見入つて、いろ〳〵と話をしかけて、

「X屋といへば、昨夕おそく提灯を持つて此處を下りて行つた人が御座いましたから、X屋の旦那が歸んなすつたのぢやないかと思つてゐましたのですが、」と云つたりした。

「あの宿の旦那はどんな人です？」

「あなた樣くらゐのお若い方です。先の旦那がお亡くなりなすつてから、お家(うち)の御樣子が變つてしまひました。早晩此方の宿は誰れかにお讓りになつて、東京へお移りなさるので御座いませう」

若者は今は他人の事に耳を留める興味はなかつたので、老婆に訊けば聞かれるX屋の事を進んで訊かうとはしないで、茶店を出た。そして、峠を下ると、昨日とちがつた單調な道を脇目も觸らず歩きつゞけた。



犬

金子洋文

一

ふと眼をさました時、彼の眼にはいつたものは紺色の蒲團の模樣であつた。その花模樣を眤つと凝視てゐると、彼はいつもの朝とちがつた靜かな自分の心に氣づいた。室はまだ薄暗かつた、障子のほとりがうつすらと朝のにぶい光を吸ひ込んでゐるだけで、室の隅々には押へつけられてゐるやうに暗さがよどんでゐた。

「靜かな朝だな。」と、彼は心の內でつぶやいた。いつも尖つた、喰つてかゝるやうな音を出してゐる眼醒時計も、おとけ者が唄の調子をとつてゐるやうな丸い階調でひゞいてゐた。その音にずつと耳を傾けてゐると、閉ぢた瞼の上に、お伽噺に出てくる一寸法師の時計屋がひよつこり飛出してきた、すると、その可愛らしい時計屋が、昨夕一晩自分の枕元にすはつて、尖つた眼醒時計の音を、丸いおどけた音になほしたやうに思はれてならなかつた。

「おや〳〵」と、彼は輕い微笑を浮べながら獨言した。「俺は學校に行くのを忘れてす

つかり詩人になつてゐるぞ。』

かう、長閑な自分の心に氣づくと、彼は何處かでその長閑な心を責めつけられるやうな憂鬱を感じた。その憂鬱にふれまいと要心しながらそつと身體を横にした時、彼は本箱の上にのつてゐる、古びた眞赤な薔薇の造花を見なければならなかつた、彼は不意に夜中の夢を思ひ出した。

暫くの間彼は他人の夢を考へてゐるやうな氣持でゐた、が、やがて主觀的に自分の心持をはつきり言はなければならなくなつた時、『それは人間の力で何うすることも出來ないことだ』と、彼は夢から遠くはなれながら巧くみに逃げをうつた。『若しも彼女に夢中で戀した者が私であつたなら、私に罪があるかも知れない、而しそれが私でなく、青春を玩具にする見えない自然の力であつたなら何うだらう、私が彼女を愛することが出來なくなつたことも、何うすることも出來ないのだ。』

ちつとみつめてゐる内に赤い花は次第に彼の眼に近づいてきた。そして花瓣や葉の凹んだところにたまつてゐる塵まで見え出してきて、それが今迄夢中で愛してきた女の總ての價値のやうに思はれてならなかつた。

『女が戀の象徵にあの造花を送つてよこしたことも、見えない自然の力のしたことだ』と彼はまた心の内でさゝやいた。『誰があの造花を十年も廿年も一介の塵をとめずに愛することが出來るだらう、造花は一時烈しく愛されて棄てられるのは自然の運命なのだ。』

而し、かうして彼が如何に明快にそのことを論理づけやうとしたところで、心の内に生ずる空虛を何うすることも出來なかつた。彼の小說で賢くなつた頭が藝術的な言葉と論理を探し出せば出す程、心の空虛はます〳〵大きくなるばかりであつた。彼は夢の中で女と別れやうとした時、狡い口實を考へ出したのであつた。

『私はすつかり聞きましだよ。』と、彼は女の唇を手で遮つて言つた。『そりやあの男の家は金持ですよ、だから私などは比べものにならないでせう。』

『ずるい言葉だ』と、突然彼はそのことを思ひ出して顔をしかめた。『自分は一度も女の愛を疑つたことはなかつた、それだのに自分は最も狡るい言葉で女をだまさうとした』

それが儚かない夢の言葉とは思はれなかつた自分には確かにさうした狡るい心があるに違ひない、いろ〳〵な辯解も要するに自分の狡るい心を胡魔化さうとしてゐるに過ぎないのだ、と考へると、その狡るさから來る苦痛と、女を捨てる苦痛とが一つになつて彼の心を責めつけた。

五分前の靜かな心は忽ち消え失せてしまつた。

『何うしたらいゝだらう。』深い吐息と一所に彼は誰かに哀願するやうにさゝやいた。

間もなく眼醒時計が踊るやうに小さい身體を搖り動かして烈しく鳴り出した。

二

時間に追はれて自炊の用意に身體が機械的に動いてゐたが、彼の心は全く感傷に捕虜になつてゐた。彼は八疊の室を隔てて眠つてゐる父や母の鼾や、その中に小さくフ、フ、フと聞える妹の鼾を聞いた、さうかと思ふと、昨日ペーヤ（犬の名）に情れなくしたことをひどく悔いたりした。

ボーと川の方で汽笛が鳴つた。

『六時だな。』と、彼はチラと思つた。

『自分は何故ペーヤの頭をなでてやらなかつたらう。』彼は七輪に火をおこしながら獨言した。『女と別れたつて、ペーヤを可愛がつて惡い理由は少しもない。』

彼はがつかりして引返した瞬間のペーヤの寂しい顏を思ひ出した。

『あいつは何時ものやうに自分の愛撫を豫期してゐたのだ。』彼は精米所で鳴つた汽笛が六時五分であることをぼんやり思ひながら考へ續けた。

『あいつは自分が不機嫌に默つてゐたので、元氣よくふつてゐた尾を、力なくだらりと下げてしまつた、そしてこの人は自分をも棄てゝしまふのだ、と言ふ風な顏をした。』

悲しみが胸に湧いて來た。間もなく、彼はチン〳〵なり出した鐵瓶の音をかすかにきゝながら、初めて女と犬に會つた一年前のことを考へつゞけてゐた。

三

家を出たのは六時半であつた。彼の勤めてゐる工業學校は市にあつたので、家から徒歩で一時間と十分ばかりかゝつた。彼はその朝に限つて遠い距離の勤めが泌々いやになつた。

外は霜で白かつた、その近くには樹が一本もないのに、昨夕の風に飛んできたのだらう、赤い木の葉がところ〳〵に凍りついてゐた。冷たい朝風に襟をたてながら彼は急いだ、堅い靴が霜の上できし〳〵なつて指先が折れさうな氣がした。

道を一丁ばかり行つたところに喇屋といふ料理店があつた、その前に來ると、彼は硝子戸にことと書いた落書を見た。

と、彼はそこの料理屋に働いてゐる薄馬鹿な娘と、その娘に子供を生ませた、痩せて顔色の蒼い鍛治屋の弟子を思ひ浮べた。

『いやなことを考へたものだ』と、彼は吐出すやうに獨言した、『きつと頭が惡いのだらう。』

彼は冷たい風に顔を眞直にあげて歩き出した、彼は何も考へまいとした。

烏小路を曲つて下酒田町にはいつた、そして郵便局の前まで來ると、彼はかつて女に送つた本の中に手紙を入れて罰金をとられたことを思出した。その考へを急いで振り落すと、今度は茶店の前で、少學校時代寫眞屋の男から『お前の髮の毛は女の毛のやうに柔かだ』と言つて罵しられたことを思ひ出した。そして更に角の藥屋の前に來ると、今度はそこの妻君が息子を追出して、五十に近い色男を引入れた考へがはいつて來た——と、その瞬間であつた、彼が藥屋の前の四ツ角を左に折れようとした時、ギヨツとして立ち止つた、冷たいものがスウと身體を走つた。

『犬殺しだ。』

それは眞白い大きな犬であつた、一寸前殺したのだらう、犬殺しの男はその犬を南京米の大きな袋に仕まひ込むところであつた。

犬が大きいのと、殺した時血を多く吐いたので男は非常に狼てゝゐた、彼は白晝を失つて人の來ない前に、その犬を袋の中に仕まいこむことばかり考へてゐた。その狼狽のため犬の死骸を逆に頭から袋の中に押込んだので、後足と長い後尾が何うしても袋の中にかくれなかつた、男はます／＼狼て出した、そして機械的に袋の端をつかむと、やけに二三度地面に打ちつけた。ガチ／＼と犬の頭部が地面にぶつかるはげしい音がした、そして黒い血がどく／＼と袋の底から流れ出した。

毛の深い褐色の男の顔がさつと變つた、そして凹んだ眼が凄く光ると、彼はやにはに尾と後足を力一ぱいぐいとねぢ枉げた、と同時にボキツと足の折れる音がして……………袋の口がぐる〳〵と荒繩で縛られてしまつた。

男は初めて安堵したやうに、ほつと深かい呼吸をした、そして兩手にくつついてゐる血を袋へなすりつけると、地面に轉げてゐる犬殺棒を拾つてアツシ(東北で防寒の爲に用ゐる黒木綿でこしらえる、厚くて長い外套)の中にかくした。

男が振り返つて、陽吉が其所に立つてゐるのを見ると悸つとしたらしかつた、そして暫の間險惡な顏で彼を凝視めてゐたが、やがて嘲けるやうに微笑むと、わざとつかゝるやうな氣勢を示して彼に向つて近づいてきた。

二人は烈しく敵視し合つてすりちがつた。

犬が殺された四辻に來た、そこの小さい溝板には小量の空豆がこぼれ、その周圍は吐き出した犬の血で眞赤に染められてゐた。

『惡い日だ。』彼はそこに立止つて、その一瞬間のみぢめな場面を空想しながら心の内で思つた。輕いふるひが全身をながれた、と同時に男に對するはげしい憤りが彼の心の內に燃えあがつてきた。

ふと、彼は口笛の聲でびつくりしてふりかへつた、犬殺しの男だ。彼は米屋の前の塵箱に一疋の痩せた白い犬が、頭を突込んで食物を探してゐるのを見つけた。

はげしく吹く男の口笛をきゝつけて、痩せた犬は塵箱に前足をかけたまゝ、びつくりしたやうな無邪氣な眼を向けて振返つた。そしてその口笛が自分を呼んでゐることに氣づくと、犬は機械人形のやうに塵箱から足をはなして、嬉しさうにぶる〳〵尾をふりながら男の傍へ駈け出した。

『しまつた』陽吉は自分の胸を鋭い爪でかきむしられるやうなはげしい焦燥を感じた、『あの犬も殺されるのか』と思ふと、絶望的な氣持のために顏が歪むやうな氣がした。ふと、彼の眼に家並の奥にある廣い雄物川の流れが見えた。全身がひどくふるひた。彼は一刻も早くこのみじめた場面からのがれようと思ひながらそこを去ることが出來なかつた。彼は烈しい憎惡の眼を男に向けながら、シュツシュツと叫んだ。

その力弱い反抗の聲をきゝつけた時、犬殺しの男は一寸顏を陽吉の方に向けて、フヽンと輕く冷笑した。そして今度は右手をさしのべて小さいやさしい口笛で犬をおびきよせた。

小犬がひどくおど〳〵しながら、而かもはげしく尾をふつて男の傍に近づくと、男はアツシの中から空豆を摑みとつて犬の前に投げてやつた、すると犬は盛んに彼に媚を呈しながら一つ一つ豆を忙しく拾ひ初めた。

豆は幾度か投げられた、そして犬がすつかり彼の懷近く接近すると、彼は一摑の空豆をそつと自分の足元に棄てた、犬はびつくりしたやうに立止つた、そして『おやこんな澤山……』と言ふ風なやさしい眼で男の顏を見あげたが、次の瞬間何事も打忘れて喰べることに氣を奪はれてしまつた。

この有樣を見ると、男は寂しさうににつこり笑つた、次に陽吉に向つて毒々しい敵意の眼を送りがなら、彼はアツシの中からそつと、二寸角の樫の棒を取出した、そして左足をそつと後にひくと、大上段にその棍棒を頭上にかざした。

陽吉はこの有樣を見てほつと深い吐息をもらした、彼は自分の眼の前が急に暗くなるやうな氣がした。

『早く救つてやれ、早く男を止めろ。』と、詰責に近い聲が彼の心の内にきこえた、彼は再びシュツ、シュツと叫んだ、が、何といふあはれなことだ、彼の唇は凝結したやうに堅く閉ぢて聲が少しも出なかつた。

風をきつて棒が落ちた。ガンと、石を叩くやうな音が周圍にひゞいた、その瞬間ある一つの生命が、既にこの地上を

去つてゐた。

四

靜かな歩調で彼は歩から〳〵とつとめてゐた、そして彼はまき起つてゐる感情をしづめて、自分の理性を信じよう〳〵と努力してゐた。

『自分の理性は亂つてゐない』彼は獨言した。『兎に角一疋の小犬が殺されたのだ、それを自分が目撃したのだ……自分は今清水町を歩いてゐる、』

それから彼は自分が學校に行つた時、どんな風に友人に話したものだらうと考へた。

『君、今朝僕は犬殺しを見たよ、』

而し、彼の顏色は非常に惡かつた。彼が靜かな歩調で歩からと努力すればする程、彼の歩調は亂れた、今でも倒れさうに思はれた。

彼の理性も同樣に混亂してゐた、彼は自分で友人と會つた時の靜かな會話を考へてゐたが、その實彼の足は學校と反對の方に向いてゐた。

道を何う歩いたか彼にはわからなかつた、而し兎に角彼は家に歸つた、その時初めて『今日は勤めに行くのはよさう』彼は考へた。

室に歸つて暫くたつと、彼は漸くしづかな自分に歸ることが出來た、すると、今度は印象がまざ〳〵と歸つて自分の卑怯な態度がはつきりしてきた、彼は一種の苦痛に堪えゝれなくなつて、仰向に倒れて深い呼吸をした。

『皆過ぎ去つたことだ』と、彼は寂しさうに獨言した、それから暫くたつて『自分は何故あの時犬を救はなかつたらう。』と、彼は考へた。『自分は眞先にあの男の傍に行つて話しかけるとよかつたのだ。』すると、今まで堅く閉塞されてゐた水が急に流れ出したやうに、彼の頭は活氣づいて來た。『寒い朝ですね……、川にはもう鴨がやつて來ましたよ、あなたはあの鳥を食べたことがありますか……するとあの男は何とか返事をするに違ひない、何だらうるさい小倅奴とか、或はにつこり微笑んで自分を見たかも知れない、するとその際に自分はあの犬を救ふことが出來たに違ひない。』

彼は意氣地のない自分を恥じた。シユツ、シユツと大きな聲で叫ばうとして何うしても聲が出なかつた自分を哀れに思つた。

『實に醜態であつた』と、彼ははげしく自分を責めながら考へつゞけた。『何を自分が怖れてゐたのか全く理解することが出來ない、さうだ、自分はたつた一言呑んだためにあの犬を殺してしまつたのだ、それが何うして千圓のダイヤモンドより價値がないと言ふことが出來よう、いやたしかにそれ以上の價値がある、吾々がある悲しみを抱いて町を通つたとする、するとあの小さな犬は他人が感ずることの出來ない自分達の悲しみを感じて、昵つと吾々に優しい眼をなげてくれるかも知れない、それが神の愛でなくて何だらう、いや、そればかりではない、あの犬が貧しいお主婦さん達の爲に子守番をしてくれるかも知れない、お主婦さんが臺所で御飯を炊く時、誰が椽側にゐる幼兒を見てやることが出來よう、幼兒は退屈をしてきつと泣き出すに違ひないその時、あの小さなおどけ者が、わん〳〵と吠えたてたとする、一人でちん〳〵をやつたり、跳ねまはつたりしたとする、そしたら……、さうだ、みすぼらしいたつた一つの生命こそ、人類にとつて非常な價値を持つてゐるのだ。』

『何といふ恐しい罪を自分は犯したのだ。』彼の心はすつかり感傷に落込んでしまつた、そして今度は逆に自分を冷酷に責めながら考へつづけた。『あの男と自分を比較したら、どつちが罪が重いだらう、いや、あの男には全く罪はないかも知れない、彼は無智だ、そして彼はそれで生活しなければならないのだ、それだのに、自分は何から何まで判つてゐるくせに默つてゐた……本當はあの小さな犬を殺したのは自分かも知れない。』

そんな理論はない、自分は何も知らないのだ、と、彼はおちついてそのことを否定せうとしたが、感傷におち込んだ彼の心はますます一方に傾いて、さうした自責を拂ひのけることが出來なかつた。

室は非常に冷たかつた、全身ががたがたふるへるやうに寒い、彼はそのまゝになつてゐた寢床に洋服のまゝはいつて、頭からすつぽり夜具をかぶつた。

五

何時間の後であつたらう、彼は淺い眠の中で夢を見た。

彼は淡暗い町を歩いてゐた、彼の眼には銀行や靴屋や、懇意な醫者の家などが見えた、彼はひどく愉快さうであつた。丁度子供が初めて學校へ行くときのやうににこにこしてゐた。

暫く歩いて、彼は馬車會社の前で歩きとまつた、そして戸口の大きな硝子戸に自分の姿を映して大きな聲で獨言した。

『諸君、』と彼は先づ口をきつた。『僕は犬殺しだ(馬鹿な、と誰かが言つたやうな氣がした)いや、諸君は決してそれを疑つてはいけない、先づ僕の着物を見給へ、諸君はちつ共變つてゐないと思ふだらう、而しそれは僕の背中を見ない

からだ』

かう言つて彼は背後を硝子戸に向けた、すると南京米入の大きな褐色の袋が、ダラリ背中にぶら下つてゐた（不思議なことにその姿が彼にも見えた）

『そればかりではない、僕は他に犬を殺す棍棒を持つてゐる、これがそれだ』彼はアツシの中から棍棒を取出した『この堅い棍棒で僕は犬を殺すのだ、而し最も僕にとつて愉快なことは、アツシのカクシ（ポケツト）にある空豆で飢えてゐる犬を釣ることだ、さあ諸君僕と一所に來給へ、僕は今犬を殺すのを諸君に見せてやらう、』かう言つて彼は歩き出した、誰れもついて來る者はなかつた、而し彼は自分が今犬を殺すことを思ふとぞく／＼する程嬉しかつた。

町を曲らうとして彼は吻つと思つた、一疋の痩せた白い犬が、角の塵箱に足をかけて食物を漁つてゐた。

『占たぞツ』と、彼は心の中で叫んだ、彼は自分が小さい時から、非常に口笛が上手であつたことを考へながら、フエウ、フエウと朗かに犬を呼んだ。

小さい犬は彼の口笛をきゝつけると、びつくりしたやうに頭を擡げた、そして彼を見つけると、自分の飼主に呼ばれたやうに喜んで彼の足元近く走り寄つた。

『これは拙い』と彼は思つた。『こんな筈はない、犬は先づ自分の姿を見て疑はなければいけない、でなければ空豆をもつて、心理的に彼を一歩／＼誘惑する興味が、全くなくなつてしまふ』

だが、彼は躊躇することが出來なかつた、少し狼て氣味にカクシに手を突込んで空豆をどつさり掴むと、犬の足下にこぼした、そして急いで棍棒を頭上に持つて行くと、犬の頭部を眼がけて力一杯打ち下ろした。

がんといふ音が聞えた、犬ははげしい呻きをもらして二三度くる／＼風車のやうに廻つた、そして黒い血をどつと吐

き出すと、ばたり地上に倒れてしまつた。

『しまつた』と、彼はその瞬間思つた。

『俺ぢやない、犬を殺したのは俺ぢやない。』と、彼は顔色を變へて自分の行爲を打消した、そして次の瞬間彼は棍棒や袋をなげすてて逃げ出さうとした。

『やつたね。』と、その時突然男の聲が彼の背後からきこえた。『とう〳〵君もやつたね。』

その男は近寄つて彼の顏をしげ〳〵とのぞいた、それは朝に見た犬殺しの男であつた。

『君は何を怖れてゐるんだ。』と、男はにやにや笑ひながら言つた。『こんなことは誰でもやることなんだよ。』

『俺は知らない、犬を殺したのは俺ぢやない。』

『君でなかつたら誰だらう、或は俺かも知れない、而し誰だつて同じことだよ。』

『いや俺ぢやない』と、陽吉は喉を押へつけられて聲がちつ共出ないやうな焦燥を感じながら叫んだ。『俺にはこんなことは出來ない、これは恐しい罪惡だ』

『罪惡……そりや仕方がないさ、俺達が生きてゐるといふことが、既に罪惡なんだからね。』

『君は何を言つてゐるのだ、君は俺が犬を殺したと思つてゐるのだな。』

『俺はさうは思はないよ、誰だつていゝ、それは只自然の力なんだ。』

『自然の力……』

『さうさ自然の力さ、犬が生きてゐることも死ぬことも誰も關はつた事ぢやないんだ、それは人間以外の力なんだ。』

『こいつは誰だらう。』と陽吉はふと思つた、

『こいつは何處からやつて來たのだらう、こいつはたゞの犬殺しぢやない、刑事かそれとも哲學者だ。』から考へると彼の心は急に苛立つてきた。

『君は何も知らないのだ。』陽吉は彼の眼に不安を感じながら、なげつけるやうに言つた。

『俺はすつかり見たんだ、恐しい不幸をすつかり見屆けたんだ』

『不幸を見屆けた、君はそんなことを信じてゐるのか。』

『俺の眼に間違はない。』

『それは大變な見當違ひだよ、この犬は非常に幸福になつたのだよ。』

『馬鹿な』と、彼は意外な答にやゝおどろいて叫んだ。『君はそれをどう論理づけようとするんだ。』

『簡單なことだよ、この犬は生れてから初めてあれだけの御馳走にありついたんだ、犬は全身の喜びであの空豆を食べてゐたんだ、その瞬間にこいつの魂は天國へ行つたのだ、これこそ幸福と一所に神樣のふところに行つたといふものだ。』

『こりや素敵な論理だ。』と陽吉はます〲おどろきながら思つた『こいつはきつと哲學者に違ひない。』

而し彼は服從しなかつた、尙も男に逆らうた。

『そりや詭辯だ、この小犬にもあれ以上の幸福が待つてゐたかも知れない』

『君はまだ坊ちやんだね。』男は突然陽吉を冷笑しながら言つた。『犬だつて人間だつて同じことだよ、金持はいつまでも金持で、乞食はいつまでも乞食さ、こいつが一生涯塵箱を漁つて步かなけりやならないことは、地球が丸いといふことよりも確かな眞理だ……だから君はいゝことをしたと思つていゝわけだ。』

男はから言つて狡るさうに陽吉の顏を睨つと眺めた。

『こいつは刑事だ』陽吉は彼の眼に射すくめられるやうに感じながら心の内で思つた。

『こいつは俺の罪を嗅ぎ出さうとしてゐるんだ。』

『君は一體誰だ、』彼はふるへる聲で叫んだ。『君は俺を罪人にせうと企らんでゐるな、俺は知らない、犬を殺したのは俺ぢやない』

『だから自然の力と言つたぢやないか。』

『嘘だ、それは俺を捕まへようとする罠だ。』

陽吉は危險が眼の前に迫つてゐることを感じながら、どなるやうに叫んだ『犬を殺したのは君だ、君に違ひない。』

『本當は俺が殺したのさ。』男はます〳〵狡るさうに微笑しながら言つた。『而し君は何故止めなかつたんだ。』

『止めなかつた』陽吉は突然胸をつかれたやうにおどろきながら鸚鵡返しに口走つた。

『さうさ……それは君が狡るいからだ、君の意志が弱いからだ、君はベーヤが殺されるのを默視したぢやないか。』

これは實に意外な言葉であつた、彼は氣が顚倒する位おどろいた、そんな筈はない、殺された犬はベーヤぢやないと打消しながら足元を見ると、今まであつた白い痩せた小犬の死骸が消失せて、大きな黒いベーヤの死骸が、燒きつくやうに彼の眼に映じた。彼は全く自信を失つてしまつた。

『君は何故女を棄てないのだ。』男は勝ち誇つたやうに尙も語りつゞけた。『君は自然の力を無視してゐる、君の今やつてゐることは犬を殺すことより罪が深い。』

この言葉の言ひ終らない前に、彼ははげしい女の泣聲を耳にした、一人の女が彼の足元に泣き伏して『ベーヤが殺された、ベーヤが殺された。』と、狂ひさうに泣き叫んだ。

彼は眼がくる〳〵廻るやうな氣がした、意識がぼうとして暗い谷底に引ずり込まれるやうな氣がした……と思つた時、彼の夢は破れた。

昂奮とおどろきが次第に去つて、數分間前に見た夢をはつきり思ひ出すことが出來た時、

『俺はすぐ女と別れるやうにしよう。』と、陽吉は輕い心持になりながら考へた。『それが何より急がなければならないことだ。』

彼はベーヤを思ひ浮べた、彼は急に犬と會ひたくなつた。

『今晩すつかりきめてしまふ、するとベーヤにも氣持よく會ふことが出來る。』

それから彼は寢床からぬけ出でて机に向つた、そして今晩川で待つてゐるやうに、と、女に手紙を書いた。

六、

室には淡桃色のランプが燈つてゐた。緑色の花瓶から造花の薔薇が取りのけられて、机や本箱の位置がすつかり變つてゐた。さうした室の中で陽吉は炬燵に身を入れながら女に會ひに行く時間を待つてゐた。

外には冷たい風が出たらしい、電線が穴庫で女が唄つてゐるやうにうなつてゐた。彼はその音を氣にしながら、時々珍らしさうに變つた自分の室を眺めた。

總てがいひ具合に變つたやうな氣がした、机も本箱も繪も、さう配置するのを、自分が早くから希望してゐたやうに思はれた。

『一切が新らしく初まるのだ。』から思ふと、彼は重い病からはなされた人のやうな自由を全力に感じた。

而し何といふ寂しさであつたらう、次の瞬間、何處からとなくある寂しさが心の内に湧いて、彼を憂欝の中に捕へてしまふのであつた。彼はその憂欝を拂ひのけようと努めながら心の内で考へた。

『さうだ、彼女と會つたら自分は三分間とためらつてはいけない、ぐづ〳〵してゐたら、また何も言へなくなつてしまふ。』

そこで彼は初めどんな風に女に話したものかと考へた。

『僕は長い間あなたを僞つてゐました。』と、彼はかつて學校で韻文を讀んだ時のやうな氣持を味ひながら考へつゞけた。『僕はあなたを愛してゐないのに愛してゐるやうに見せかけてゐたのです、いや、初めの間は僕も夢中であなたを愛してゐました。あなたを見ない日は世の中が眞暗に感じた程愛してゐました。私は道を歩いてゐる時でも、學校で機械の設計をしてゐるときでも、あなたのことばかり考へてゐたのです、私は今でもよく覺えてゐます、二人が初めて公園で會つた夏の夜のことを……あの時、私もあなたも丘へ登る細道をすつかり見失つた程、夢中でしたね、あなたは何遍も足をすべらして丘の中腹から轉げやうとして私につかまつたでせう、あなたはすつかり上氣して、汗ばんだ額を私の胸におしあてて、疲れて登れなくなると烈しい呼吸をしながら私の顏を眤つと見あげる……あゝあの時私達はどんなに幸福であつたらう、私の心は全く狂ひさうでした、私達はしつかり抱き合つて、三四尺滑り落ちては熱い唇と唇をふれ合ひました。漸く丘の上へ登りついて、街の燈を見下した時の歡喜、あのほのかな夏の夜、むせるやうな森の匂ひ、明るい街の灯、そしてなやましい、汗ばんだあなたの肉體、あゝ私は何うしても忘れることは出來ない……』

これまで考へ拔けた時、彼は急に眞赤になつて口をつぐんだ、それは餘りに馬鹿げたことであつた、別れようとする

女に、狂はしい戀の思出を語ることは、消えかゝつた火に油をつぎ込むも同樣であつた。

『何も冗く言ふ必要はない、短く僞りなく話すといゝのだ。』

而しそれは同じく愚劣で、醜くかつた、彼が正直に自分の心を語らうとすればする程、辯解の美しい言葉が次から次へと湧いて來て大きな僞りを編むに過ぎなかつた。彼はそのことをきつぱり思ひきつた。

ゴウ……と、風が通りを走つて過ぎた、するとその風に飛ばされて上手な口笛が遠くから聞えてきた、彼はそれが誰であるかすぐに判つた。彼は眼の大きい、背の低い、鍛冶屋の小僧がいつものやうに酒罎を持つて、冷たい風で顏を眞赤にしながら走つて來る姿を思ひ浮べた、すると、いつかその小僧が

『陽さん、ベーヤは身體は大きいが喧嘩は下手だね。』と言つた言葉を思ひ出した、彼は寂寥の中にある慰めを見つけたやうに、その小僧の足音を待つてゐた。

一分間たつと、跳つてゐるやうな小さな足音が遠くから聞えて來た、風がゴオツと走ると、口笛も足音も何處かへさらはれて行つたやうにはたとやんだ、彼は喧嘩の下手なベーヤを思出した、と、小僧の口笛と足音がはつきり聞えてきて、無邪氣な小僧の顏がありありと眼に映じた。

ガンと、その足音が、陽吉の家の前で石を蹴つた。コロコロと溝板を轉げて行く小石の音がした。

ゴオツと又風が吹く、彼は又ベーヤを思ひ出す、それが何遍か繰返されてゐる間に、小僧の口笛も足音もいつの間にか聞えなくなつた。

『俺はいつまでもベーヤを愛さう』彼は時計を見て立上つた『そしてそのことを君さんに話さう。』

七、

彼女の家は廣い川に沿ふて建つてゐた、彼は家の近くでペーヤが烈しくクン〳〵うなつてゐる聲をきゝつけた。と、外の冷たい風で縮み込んでゐた彼の心が、急にはづんでくるのを覺えた、彼は犬の優しい眼や無邪氣な喜びを思ひ浮べながら、ペーヤに自分の足音が聞えるやうに、わざと下駄をひきづつて歩いた。

突然、ペーヤが歡びの聲をあげて吠え出した、その聲のとぎれから彼女の甘い笑聲が聞えてきた。

彼の姿を見つけると、ペーヤは急に吠えつくのをやめて、不自由を訴へるやうにうなり出した、そして飛上りながら、綱を持つて居る彼女をぐん〳〵引づり出した。

『まあペーヤはそんなに嬉しいの。』彼女はペーヤに引づられて陽吉に近寄りながら、さゝやくやうに言つた、冷たい風の中に白粉の匂ひがした。

ペーヤは傍に近よると非常な勢で彼に飛びついた、その烈しい力のために彼女は危く轉げかけて彼の肩につかまつた。

『まあひどいペーヤ』彼女は子供のやうに笑ひながら陽吉の顔にその美しい眼を近づけた。

『よし、よし』と、彼ははげしく飛びついてくるペーヤを兩手で受けとめて、その綱をとつた、そして二三度犬の頭をたゝいてやつてから、綱をはなした。

と、ペーヤは歡喜にあふれて、クウと風をきつて走り出した、そして十間ばかり行くと不意に引返してきて陽吉の胸に飛上つた。

二人はさうしたベーヤの狂態を滿足に眺めながら川岸に降りて行つた、そして川岸に積んである木材に冷たい風をさけながら肩を並べて坐つた。『寒くない』陽吉は女をいたはるやうに優しい聲をかけて、マントの半分を彼女に與へた。『いゝえ、私ちつとも寒くないの。』彼女はこい白粉の顏を近づけて答へた、そして兩手を陽吉の頬にあてて『ほら、暖かいでせう、私今お湯からあがつたばかりなの。』

二人はマントの中にくるまりながら暫くの間無言でゐた、と、突然彼女は兩手を彼の肩になげかけて接吻を求めた。彼は身にくひいるやうな女の暖かさに醉ひながら暗い廣い川の流れを見た、それは永遠を見るやうに暗くはてしがなかつた。

『俺は何のために女と會つてゐるのだ』

チラと、彼の心の内をこの考へがかすめた、而し彼は深くそのことを考へなかつた、眞黑な、廣い帯のやうな川が、盲目的な勢で海に向つて流れてゐる樣をながめてゐると、彼は何もかも忘れてしまつたやうな氣がした。

『何を考へてゐらつしやるの。』彼女はその豊かな頬を少し離して彼の顏を讀まうとするやうに、 呢つとみつめながらさゝやいた。

彼ははつとして自分に歸つた。

『俺はこの女と別れるために來てゐるのだ。』

而し彼は言はなかつた。

『僕は今朝犬殺しを見たよ。』

かう言つて、彼はほつとした

『犬殺しを……』

『それで僕は學校を休んだのだよ。』

『まあ……』と、彼女はひどくおどろいたやうに叫んだ、そして彼の胸に喰ひいるやうにすがりついて『あなたはペーヤのことが氣になつて手紙を下すつたのね。』

『さうぢやない』と、この時初めて彼は自分の本當の考に歸つた、『あなたと別れるために手紙を出したのだ。』

而し彼は言はなかつた、彼はたゞ

『あゝ』と、低くさゝやきながら、力一ぱい彼女を抱きしめた。

二人は長い間無言でゐた、風がゴオッと音を立てて水の上を渡つた、ド、ドツ、ドドッと向濱にぶつかる浪の音がはげしくきこえてきた。

『ひどい浪の音だね。』暫くして彼は獨言のやうに言つた。

『浪の音にまじつて、ウオ、ウオと聞えるのは何でせう。』

『狼の聲だよ。』

『本當……』彼女はおどろいたやうに低い聲で叫んだ。

『あれはね、向濱の草にあたる風の音だよ、僕がまだ小さい時、お祖父さんから狼が吠えるのだと聞かされたものだよ。』

二人はまた沈默をつゞけた、そして堅く抱き合ひながら、枯草にあたる異樣な風の音をぢつときいてゐた。

そこへペーヤが二人を探しにきた、そして二人に近づくと甘へるやうにクン〳〵鼻をならしながら、二人の膝にさ

かんに頬をなすりつけた。

このベーヤの無邪氣な有様を見てゐた時、陽吉は不意に忘れかけてゐた晝の夢を思ひ浮べた、と、彼は不思議な悲しさが心の内に湧いてくることを感じた。

彼は新らしく一日を振り返つた、そして自分の弱い心につきあたつた時、彼は、眼に涙のにじんでくるのを感じた。

突然、彼は女から身を放した。そしてしがみつくやうにベーヤの頸を兩手で抱きしめると

『俺は駄目だ』と、呻めくやうに心の内で獨言した。

女は何も知らずに、ウオ、ウオとなく卒の音を聞いてゐた。

蘇生

徳田秋聲

一

夫婦で二階に間借りしてゐる眞柄が、感冒で床についたのは、十日も前であつたが、それがこの頃では何うやら肺炎を喚起したらしかつた。

最初彼等は會社員といふ觸込で、勝子の二階を見に來たのであつたが、双方とも溫順しさうな人なので、勝子はしばらく開いてゐた二階二室を、割安に借すことにした。勝子はそんなことをする必要もなかつたけれど、何もすることがないので、獨りで孑然としてゐるよりもと思つて、近所の子供たちに琴の手釋きなどして、五つになる男の子と二人きりで、寂しく氣樂に暮してゐた。

勝子の良人は最近臺灣の方に赴任してゐた。勝子にも來ることを勸めたが、持病もあつたし、都會生活を離れるのも厭だつたし、子供をそんな處で育てるのも心配だつたので、應じなかつた。もう三年越し彼女は獨身者のやうな寂しい生活をつゞけて來た。今二三年で三十女になるのだと思ふと、さうして別居してゐるのが、ひどく詰ら

ないことのやうに思へるのであつたが、しかし東京近くに年取つた親もゐるので、思切つて遠くへ行く氣には成得なかつた。で、それに慣れて來ると、結句その方が氣樂のやうでもあつた。行きたいところへは何時でも行けたし、體の工合のわるい時には、自由に臥つてもゐられた。それに大抵一月に一回か二月に三回くらゐの割合で、良人から手紙の來るのが、ひどく待遠しくて嬉しかつた。その返事を書くのも、いつも新しい緊張した氣分を彼女に喚らせたり、遣瀬ない寂しい思ひに浸らせたりした。

眞柄夫婦はそれを不思議がつてゐた。

「何うして貴女は臺灣へ行かないのですか。」眞柄は訊いたが、別に深い理由もないことが解つてからは、異しみもしなかつた。

たゞ勝子の氣が差すことは、事情を一々説明することもできない處から、近所の人達から、怪訝の目を瞠られることと、懇意な人が、用事もないのに訪ねて來て話しこむことであつた。眞柄の友人の佐伯などがそれで、彼は一二度眞柄を二階に訪ねてからは、眞柄のゐないときでも、下の茶の室へ來て、坐りこむのは珍らしくなかつた。

眞柄の職業が何であるかは、初め勝子にはよく判らなかつたが、運送會社のやうな種類のものだといふことは、その話によつて想像された。何十頭とかの馬が病氣で死んで、そのため大打撃を被つたところへ、最近經濟界の恐慌の煽りを喰つて、會社が滅茶々々になつたと云ふことを、眞柄は保險會社へ出てゐるその友人に話してゐた。

「つまり、我々のやうなものは駄目だよ。會社を好くしようとか、株主の利益を謀つてやらうとか、そんな融通の利かないことぢや、あんな仕事に關係しちやゐられないよ。」

眞柄はそんなことを言つて、會社の成立つて行くことよりも、自分の肚を肥すことばかり考へてゐる、重役の我利々

々速を罵つてゐた。そしてその毎日々々血眼になつて、彼はその後始末に奔走してゐるらしかつたが、その果にふと流感にかゝつてしまつたのであつた。勿論眞柄の生活が、寂れて來てゐたことは、毎日々々一張羅の紺サージの洋服が、埃に塗れて、形がひどく崩れて來てゐるのでも判つた。彼は保險會社から轉じて、他の人達と運送會社の經營に當つたのであつたが、それは全然失敗であつた。

勝子は眞柄を自分の良人と同じやうに、正直な好い人間だとは信じてはゐたが、危い事業などで焦心つてゐる氣持が解せなかつた。

「やつぱり何處ぞ堅いところへお勤めなすつた方がね。」勝子は眞柄の細君に話してゐた。

細君のみほ子は、重に北の方の國で育つて來たらしかつた。肌理の細かい、色の白い、涼しい目をもつた女で、口元に締まりのないのと、體つきの骨ばつたのが缺點だと思はれたが、その頃よく方々へ出張してゐた眞柄が、地方から連れて來て同棲することになつたらしかつた。

彼等夫婦は、ひつそりした暮しをしてゐた。勿論郊外の家をたゝんで、部屋を借りることになつたのが、もう會社の運命がよんぢり傾きかけてゐた時で、二人とも何となく沈みがちであつた。眞柄は朝八時か九時頃に、洋服を着て出かけて行くと、大抵六時か七時頃に疲れた顏をして歸つて來た。時には酒氣を帶びてゐることもあつた。

みほ子は田舍の女學校出だとか言つてゐたが、土地で或農家へ一度片着いたのを、家族との折合がわるくて、自分から離縁を取つて、家にぶら〳〵してゐるうちに、東京から時々出張してくる眞柄と親しくなつたのであつた。出張所を引受けてゐる町の議員と、父が懇意であつた關係から、二人は相知るやうになつた。父は土地の裁判所に勤めてゐた。

「それは大きな農家でしたの。土地では一番古い家で、お父さんは代議士にも出たことがあるんですよ。けれど、子息

は低能なんですもの。中學すら中途で止めて、藝者買ひなんかして、大分お金を費つたさうです。」みほ子はさう言つて嫉妬家だと云ふその男の話を能く勝子にしてゐた。

勝子はみほ子には餘り親しみを感ずることができなかつた。眞柄に滿足してゐないやうな口吻を洩らすのも耳障りだつたが、眞柄が誰よりも自分を美しいものゝやうに思つて、始終やつてくる佐伯などを警戒してゐるのだと云ふことなども、聞き辛かつた。

「まさか、眞柄さんだつて、貴女をそんな浮氣ものだとは思つていらつしやらないでせう。それに佐伯さんにだつて、奥さんがおありなんですもの。」

みほ子は苦笑してゐたが、

「でも男はみんな嫉妬家だと思ひますわ。私の前の良人がさうでせう。眞柄が私を一人でおくのを、やつぱり厭がるんですもの。」

「それぢや貴女は佐伯さんを好いてゐるんですか。」

みほ子は視線をそらした。

「あの人何だかべちやくちやしてゐますわ。女のやうに。」みほ子は眉根を顰めてゐたが、「けれどあの人なか／＼悧巧なの。住居なんかも隨分氣取つてゐますわ。私行つてみて驚きましたわ。あの人あんなに收入があるんでせうか。」

「あの會社は此の頃なか／＼好いんだと言ふぢやありませんか。」勝子も調子を合せて、

「貴女の旦那さまも、今迄あすこに御辛抱なすつて入らしたら、隨分偉くなつてゐらつしたでせうにね。」

「え、さうなんですの。何でも辛抱づよくなくちや駄目ね。」

みほ子は流元のところで、氷をかきながら、そんな話をしてゐた。

二

眞柄は寢ついてからは、五圓の小使にも困るやうになつてゐた。病氣なぞしたことがないので、卒となると何にもなかつたので、吸入器や氷嚢を買ふとか、濕布の布が必要だとか、毎日々々多量の氷も使つたし、見舞に來る醫者の乘つて來る車の若衆に包金を出すだけでも、今のみほ子の手元としては、容易なことではないらしかつた。

そんな内輪のことは、勝子にはよくも解らなかつたけれど、見え坊のみほ子のことだから、隨分苦しいだらうと同情はされたが、自分の方から言出すのも、餘計なおせつかいだし、みほ子の氣をわるくするやうなことがあつても、詰らないと思つたので、見て見ぬふりをしてゐた。

それにみほ子には厭な病癖があつた。爲ることがだらしのないのも、その一つであつた。拭掃除などの無精なのは、爲方がないとしても、勝子の洗濯盥をつかふのに、外へ持出すやうなことはしなくて、いつでも流しでじやぶ〳〵遣つてゐた。自分の體につけてゐた汚れもの、何でもを、そこで平氣で洗濯してゐた。彼女は毎日化粧ばかりしてゐたので、首から上は何時でも白くなつてゐたが、髮の手入も怠らなかつた。

「洗濯でしたら、外の方が反つて取廻しがいゝでせう。」勝子は或時見かねて言つたことがあつた。

「そこはお米をといだり、お茶碗を洗つたり、食物を扱ふところですからね。」

みほ子は、「さうですね」と言つて、その時は盥を外へ持出して、手拭を姉さん冠りにして、ごし〳〵やつてゐた。それは秋のことで、殘暑がまだ衰へてゐなかつた。みほ子はその日にやけるのを、甚く怖れてゐた。

それから日ましに冷氣になつて、やがて冬が訪づれ、町中でも手洗の水に鏡が入るやうなことがあつた。勝子は手の荒れるのを厭うて、亞鉛製の銅壺を臺所にすえて、湯をわかして使つてゐたが、みほ子も朝起きると、その盥を取つて、惜氣もなくさぶ〳〵汲出して顏を洗つたり、食後の汚れものをすゝいだりしてゐた。

「これ少し使つても可いんですか。」みほ子は偶にはさう言つて斷つた。

「さあさあ何うぞ」と、勝子も外らさなかつたが、しかし肚立しかつた。

「物を識らない女だ」と、彼女は思つた。

それよりももつと惡いことは、蜜柑箱に入れて物置においてある切炭が、いつの間にかげつそり減つてゐたりした。それは目に立つほどではなかつたけれど、勝子の感じで判ることであつた。それに其は炭だけではなかつた。米にも手が入るらしかつた。醬油もさうであつた。

その度に勝子は、自分の氣のせいかも知れないと思ひ直して、餘程我慢してゐたのであつたか、幾度ものことなので、事實を明白にしようと思つて、或時米のなかへ印の紙片を入れておいた、そして二階のみほ子へ聲をかけて、夕方洗湯へ行つた。果してそれがみほ子の仕業だといふことが明白になつた。

終に勝子はみほ子に警告を與へずにはゐられなかつた。

「こんな事を申しちや失禮ですけれど、事實は事實ですからね。私も眞柄さんにお話しませうか、餘程さう思つたんですけれど、それぢや貴女がお困りでせうと思つて、貴女に御注意申すんですよ。」勝子はみほ子が臺所へ來て煮物をしてゐるところへ來て、少し強い調子で言つた。

みほ子は紅い顏をして俛いてゐたが、しかし謝罪まることも早かつた。

「濟みませんでした。つい何の氣なしに無斷で拜借してしまつて。これから氣をつけます。」

「いゝえ、ちつとも介意いませんけれどもね、お入用のときには、ちよつと斷つて戴きますと、私もその積りでゐますからね。」

一度などは、長火鉢の猫板のところにおいた、五圓といくらかの釣錢が、零碎だけ殘して五圓札の方が、紛失してどこを何う搜しても見當らなかつた。それもてつきりみほ子の所爲だらうと思はれたが、それだけでは自分で氣をつけることにして、言出さなかつた。

勝子はそれ以來いくらか安心はしたが、しかし偸まないまでも、そんな日常の些細なことで、みほ子の不檢束な習癖はやつぱり反省されなかつた。勝子は折があつたら、斷つて出てもらはうと思つてゐたが、眞柄の生活狀態が段々不安に陷つて來るのが、目に見えるので、それに附込むのだ、と思はれるのも氣持が好くはなかつた。眞柄が病氣で仆れたのでは、一層工合がわるかつた。

或日も佐伯が晩飯をしまつてから、暫くぶりで顏を出した。

「何うしましたですか、二階の病人は。」彼は直ぐ段梯子を上らうとして、茶の室にゐる勝子の姿を見つけると、ちつと共入口までやつて來て、微聲で訊いた。

勝子は火鉢の側で夕刊を見てゐた。子供もそこに童話を讀んでゐた。

「何ですか、私も今日はまだお見舞しないんですけれど、奥さんのお話では捗々しくないさうでございますよ。」

そして彼女は座蒲團をそこへ直して、「まあお吸ひなさいまし。隨分お寒いぢやございませんか」などと、火を興したりしてお愛相をした。

もと〳〵、此の二階は、佐伯の細君が近所の人から聞いて、更に佐伯が眞柄を紹介したので、勝子は眞柄夫婦を知る前に、佐伯の細君を知つてゐる譯であつた。佐伯の家も、七八町の距離にあつた。

「さうですか。隨分長いですね」と、佐伯は顏を曇らせながら、「私も、しばらく何の沙汰もありませんからね、多分もう好いんだらうと思つてゐたんですが、まだ可けないんですか。」

「何ですか、餘り樂觀もできないと言ふお話でございますの。私は昨日お晝にちよつと伺つたんですが、何だか滅切お痩せになつたやうですよ。今朝も奥さんにさう申したんですが、誰かもう一人、確なお醫者にお見せなすつたら何うかと思ひましてね。肺炎にでもなつてちや大變ですからね。」

「さうですか」と、佐伯は顏を顰めてゐたが、

「それぢや細君も心配してゐるでせう。」

「奥さんも大抵ぢやございませんわ。濕布だ、氷だ、吸入だと言つて、隨分手がかゝりますから。」

「さうでせうつて」と、佐伯は頷いてゐたが、

「細君も少し暢氣だからな」と苦笑してゐた。

勝子も笑つてゐた。

「ちと看護婦でも上げると可いんだけれど、……眞柄君も弱り目に祟り目の方で、氣の毒です。」

「眞實ですね。」

「私も早く手をお引きなさいと言つたんです。處が、さうも行かなかつたとみえて、後始末まで引受けさせられて、お仕舞に感冒にかゝるなんて、惡いときは惡いもんです。」

「ほんとうに好い方ですがね。」

すると其處へみほ子が降りて來て、「佐伯さん暫く」と言つて、顏を顰めながら彼の横へ來て坐つた。

佐伯は色の淺黑い、長みをもつた目鼻立の優しい顏をもつてゐたが、洋服も似合つたけれど、角帶に縞の羽織を着た不斷の樣子は、どこか下町あたりの番頭さんらしかつた。

「この頃は毎日歸りが遲いんで、つひ御無沙汰で……。何うです、今聞くと、餘り好くないといふお話ですが。」佐伯は體を少しみほ子の方へ向けるやうにして訊いた。

「何だか分明しなくて困ります。熱が二三日下つて可かつたと思つたら、今し方また急に二度ばかり上りましたの。」みほ子はさう言つてがつかりしてゐた。

「そいつは可けない。」佐伯は顏を顰めて、「惡くすると肺炎かも知れない。市川さんの診斷が中つたんだろ。」

「さうでせう。だから私も心配なんですの」と、みほ子は暗い目をして、「肺炎なら迚も駄目でせうか。」

「そんな事はない。手遲れないうちに、早く酸素吸入でもかけて、手當をすれば必ず癒ります。」佐伯は言つたが、首を傾げてゐた。

「しかしちよつと面倒だね。」

「え、大變ですわ、今迄でさへ隨分大變だつたのに、此上肺炎になられちや、それこそ遣切れたもんぢやありませんわ。」みほ子はこぼした。

「貴女も大變です。お察しはしますが、しかし何うも仕方がない。そんなことを言つてる間に、早く醫者を呼んだら何うです。」

佐伯はさう言つて、樣子を見究めるために二階へ上つて行つた。みほ子もついて上つた。勝子も放抛つておけないので、行つて見た。

眞柄は頭髮や髯を蓬々させて、黄色い顏をしてうつとりしてゐた。昨日から見ると、又少し弱つてゐるのぢやないかと思はれた。顎や頬がおそろしく骨張つてゐた。一體が嚴丈な骨格で、不斷はがつしりした感じを與へるのであつたが恁うなつてみると、何だか脆さうに見えた。

みほ子は氷嚢の位置を直してやりながら、その顏を覗きこむやうにして、「貴方……貴方……」と、二聲ばかり呼んだ。

眞柄は力なげな目をあいた。そしてぼんやり佐伯の顏を見た。

「何うだね。つひ御無沙汰してしまつたが……。」

「有難う」と、眞柄は弱い聲で言つたが、少し調子をはつきりさせて、

「何しろ衰弱がひどいんでね。」

「けれども、そんなでもないよ」と佐伯は恍けたやうに言つてゐたが

「しかし用心に如くことはないから、一度醫者をかへたら何うかね。」

「さうかね。」眞柄は呻吟くやうな聲で、「二三日したら好くなるだらうと思つてゐる。」

「そい氣がするのか。」

「貴方駄目よ」と、みほ子は窘めるやうに、「佐伯さんが親切に言つて下さるのに……自分ばかり癒る氣でゐたつて駄目よ。」

眞柄は寂しい苦笑を浮べてゐた。

「しかし何うだね、會社の方ぢや知つてるのかね。知つてゐたら誰か一人くらゐ見舞に來さうなもんぢやないか。」
眞柄は首を振つて、
「駄目、駄目。あの會社にはそんな氣のきいた奴は一人もゐない。」
佐伯は勝子やみほ子と顔を見合せてゐた。
勝子は氣味がわるいので、やがて下へおりて來た。

三

その翌日の午後おそく佐伯はまた訪ねて來た。
勝子は昨晩も、自身醫者を呼びに行つてやつたり、醫者が歸つてから、藥を取りに行つたりして、疲れてゐるみほ子に代つて働いてゐた。看護婦の來たのはつひ今日の十一時頃であつたが、一時頃に醫者の來診があつたりして、始終病人の方へ氣を褫られがちであつた。琴の方も病氣が病氣なので、斷はつて歸すことにした。そこへ佐伯が晩酌の酒の氣をおびて、褞袍の上に外套を引かけて、遣つて來たのであつた。
「今晩は……」と、彼は二階へ上りさうにした足を、わざ〳〵此方へ運んで來て、手つきで二階の樣子を聞いた。
第二の醫者の發見によると、眞柄は確かに肺炎であつた。もう左肺の大半を冒されてゐると言ふのであつた。熱が高かつたし、衰弱も加はつて來た。意識は比較的はつきりしてゐたけれど、不斷酒を飮んでゐたので、心臟は餘り樂觀できなかつた。こゝ兩三日が峠だといふのであつたが、結果が何うなるかは誰にも豫想できなかつた。勿論醫者の注意もあつて、看護婦も傭つたので、みほ子は助かつた。其間五時間ばかりを、替つて寢かすほか、夜は總て看護婦が起きて

ゐることになつてゐた。」

勝子は昨晩、醫者も歸るし、看護婦も來て、自分も奥の部屋で子供と一つ床に寢てしまつてから、思ひがけない甘い場面を演じてゐる佐伯とみほ子を見てから、悉皆佐伯に厭氣がさしてゐた。そんな事がなくても、佐伯の態度は餘り感心されなかつた。貴女もそんな事をしてゐては詰らないだらうとか、それでは夫婦の情愛がなさすぎるとか、森潤で何をしてゐるか判らない良人を正直に、信じてゐるのが可笑しいとか、彼はよくそんな事を口にしてゐた。

「さういふ貴方こそ、奥さんに秘密でちよい／＼そんなことをなさるんでせう。」勝子も負けずに遣込めた。

みほ子はその晩、佐伯と下へおりて來て、勝子が寢てしまつたと思つたらしく、ひそ／＼話をしてゐた。もう十一時を過ぎてゐた。初めて上げた其の醫者が歸つてから餘程たつてゐた。醫者のところから酸素吸入が持込まれたり、それを二階へ持込んで裝置をしたりして、大騷ぎをやつた後であつた。

火の氣もない長火鉢のところで、彼等はひそ／＼話をしてゐた。勝子はうと／＼しかけたところを、それが耳につくと、時邉に目がさめた。

最初二人は金のことを話してゐた。

「……何しろ先々月から、月給が取れないで困つてゐたんでせう。今月あたり何うしようかと思つてゐたところ、肝腎の宅が斃れてしまつたんですもの、私だつて遣切れないぢやありませんか。」みほ子は出來るだけ聲をおさえるやうな調子で言つてゐたが、四邊がしんとしてゐるので、大抵聽取れた。

佐伯は「うむ、うむ」と、時々應答をしてゐたが、薄寒さうな風邪聲で、

「まあ何うにかしよう。少しばかりのこと彼此言つてゐる場合ぢやないからね。」

「濟みませんけれど何うぞ。」と、みほ子は感激したやうな口調で、

「病人に言つてみたところで、あれぢや仕方がないでせう。看護婦の前も見つともないですからね。貴方にこんな御心配かけちや濟まないんですけれど、私だつて他に行くところもないでせう。いづれ田舍へ言つてやらうとは思つてゐるんですけれど、今の間に合ひさうもないんですもの。」

「ぢやね、明日の朝に私がお屆けしよう。ね、それで可いだらう。」

「結構よ。明日の朝が晩になつても介意ひませんわ。」

「けれど何うだらう」と、佐伯は一層微聲になつて、「何だか少し變だね。あれで癒る見込があると思ひますか。」

「さうね、貴方は何う思つて。」

「放心したことも言へないが、何うも怪しいね。醫者も首を傾げてゐたね。」

「え、分明したことは言ひませんでしたけれど、看護婦の言ふのでは餘り樂觀はできないらしいんですの。問題は心臟一つにあるんださうですけれど、其の心臟があれですもの。」

「さう言つちや惡いけれど、どうも八分どほり駄目か知らんね。」佐伯は微かな聲で言つて、「だから貴女も其の時になつて力を落さないやうに、今から覺悟しておかなくちや可けない。さう決めておいて、癒れば其のくらゐめでたいことはないからね。病人には氣の毒だけれど、こればかりは如何とも仕樣がない。傍でいくら焦燥してみたところで、可けないものは可けないんだから。それも何うだかわからないがね、行くところまで行つてみなければ。」

「それあそうだわ。」

「ぢやさう云ふことにしておかう。萬一のことがあつたら、又その時のことだ。」

「濟みませんが、では何うぞ……。」

「何だか莫迦に寒くなつて來たぢやないか。腹もすいて來たね。早く家へ歸つて寢るとしよう。」佐伯は立上つたらしかつた。

「ぢや二階から外套取つて來ませうか」と、みほ子も立上つたらしかつたが、部屋を出てからも段梯子の陰の方で、まだひそ〳〵話してゐるやうであつた。

勝子はいつか夢心地に陷ちてゐたが、それから暫くすると、段梯子を軋らす跫音が連りにしてゐたやうに思つた。看護婦も降りて來たらしく、流し元で氷を碎く音も、聞えてゐた。

翌朝勝子は、初めてその看護婦と臺所で顏を合して親しい口を利き合つたが、勝子の頭腦には、昨夜のことが夢のやうに思出された。夢現に聞いてゐた二人の甘い言葉を思ひ出すと、今までそれに氣もつかなかつた、自分の迂濶が可笑しかつた。勿論みほ子の心が眞柄から離れようとして、何かしら新らしい生活の對象を求めてゐるやうな氣分は感ぜられたが、今の場合、それが直ぐさう云ふ風に露骨な大膽な發展の經路を取らうとは、想像もしなかつた。

「みんなあんな事をしてゐるんだ。」勝子はさういふ氣がした。誰がどこで何をしてゐるか知れないと思はれた。

「佐伯さんの言ふやうにあの人もやつぱりそんな事をするかも知れない。」勝子はそれを思ふと、遽に心が曇つた。

勿論金の話だけならば、そこに何等の不思議もなかつたけれど、眞柄の死を豫想しての彼等の行爲は、勝子に劇しい衝動を與へずにはおかなかつた。

佐伯はけろりとした顏をして、不斷のとほり勝子にお愛相を言ふと、やがて段梯子を上つて、二階へ顏を出して、そこまで出て來たらしいみほ子と何か話してゐたが、やがて金を渡して歸つていつた。

四

ある日の夕方勝子は看護婦と下で話してゐた。その時も佐伯は子供をつれて、ぶらりと遣つて來たと思ふと、看護婦が危險だからおよしなさい、と言ふのも肯かずに、漸と這出したばかりの其の子供を抱いて、二階へ上つて行つた。

「あの方あんなお子さんがおありなんですか。」看護婦は憫れた顏をしてゐた。

子供は女の子で、佐伯によく肖てゐた。看護婦は愛らしがつてあやしたりした。

佐伯の細君は、年が二つばかり佐伯より上だと云ふことであつた。同じやうな仕事に關係してゐる友人の姉で、その實家は田舍で、小樂に暮してゐるらしかつた。彼女はその頃弟のところへ來て、東京で獨立の生活に有りつかうか、好い緣があつたら片着かうかと、思案してゐた。勿論彼女はみほ子などとは違つた意味の出戻りであることも判つてゐた。佐伯はそこへ遊びにいつてゐるうちに、いつかさうした間になつてしまつた。彼はその前にも、同棲した女が一人あつたが、深い理由もなしに、ふいと別れたきり、機會があつたら縒を戾さう〳〵と思つてゐるうちに、すつかり懸隔たつてしまつた。或會社の事務員であつた其の女は、顏や樣子から佐伯を好いてはゐたけれど、同棲生活の結果飽足りなさを感じてゐた。そして田舍へ歸つて來ると言つて別れたつきり歸つてこなかつた。佐伯は田舍へ訪ねて行かうと思つたことも、度々であつたが、深い執着もなかつた。そんな女が、さらに見つかるやうな氣がしてゐた。

しかし今の細君と、一緒になつてから、その女の價値が初めてはつきり判るやうに思へて來た。彼は時々その女の事を思出してゐた。道を歩いてゐる時や、電車に乘つてゐるときなぞ、それに似た女が目につくと、はつと思つて、胸の躍ることがあつた。けれど其の女は永久に見失はれてしまつた。

「さうですよ」と、勝子は看護婦の問に應へてゐた。

看護婦は「さうですか」と言つた顔をして、口元に薄笑を漂せてゐたが、

「奧さんもおありなんですか。」

「え。」と勝子は答へたが、「何うしてゞす」と訊いてみた。

看護婦はぢろりと勝子を見た。

「御存じないんですか。」

「ぢや何かあるんですか。」

「え、それあ可笑しいんですわ。」看護婦は顔を紅くして笑つてゐた。

「ぢや、やつぱり然うでせう。」勝子も呟いてゐた。

「あの方達、たしかに可笑しいんです。だつてあの病人の傍でいちやついてゐるんですもの。私が寢てゐる振をしてゐると、それこそ可恐しいやうな話をしてゐるんですの。つまりあの方達は、病人が死ぬものと決めてゐるんですの。そして見るに見兼ねるやうなことを、平氣でしてゐるんです。」

勝子も好奇の耳を聳てずにはゐられなかつた。看護婦はその詳細について、又少し話した。そして口をおさへてくす〳〵笑つてゐた。

「さうですかね、私もそれほどとは思ひませんでした。」勝子も嘆息してゐたが、自分の眼の先で、そんな事をされてゐるのだと思ふと、莫迦にされてゐるやうで腹立しかつた。

大分たつてから、泣出した子供をすかしながら、みほ子が降りてくると、續いて佐伯も降りて來た。そして看護婦が

ついと立つて二階へ上つて行つてからも、二人はそこで子供をあやしてゐた。

「何と氣持がいゝんでせう。」みほ子はさう言つて、白々とぽつちやりした子供の頬擦してゐた。

「こんな子供の顏を見てゐると、人間が死んで行くときのこと考へられませんわね。」

佐伯はえへらへらしてゐた。

二三日やゝ春催ひの潤みが、何となく蘇つてゐて、その晩は殊にも暖かであつた。

「今日は三月の十日ね。」みほ子は柱の日暦を見あげて、遣瀬なげに呟いた。

「早いもんだね。もう幾日になるんです。」

「彼是一月になりますわ。」みほ子はじれつたさうに言つた。

「さうかね。病人もじれつたいだらうが、傍のものも氣が氣でないね。けれど案外しんねり强いところがあるから、まあ稍々大事になさい。」

「ほんとね」と、みほ子は苦笑してゐた。

勝子は肚立しい苛々しさを感じた。

佐伯は程なくむづかる子供を抱出して、歸つて行つた。

勝子は或時途中で佐伯の細君に出逢つたので、それとなく警告を與へようと思つて、ちよつと其の問題に觸れて見た。

佐伯の細君は、田舍々々した舊式な女であつたが、性質が善良で、家政を執ることが上手であつた。で又良人に深く執着してゐた。看たところ、誰よりも幸福らしく見えた。

二人はその晩通りで行逢つたのであつた。勝子も明日のお總菜を買ひに出たのであつたが、細君も何かの用達しに出たらしかつた。彼女は叮嚀に勝子にお辭儀をした。

「眞柄さんもお氣の毒でございますね。」細君は心から言つてゐた。

勝子は擽つたく感じた。

「宅があゝ云ふ風の人だものですから、奥さんが氣の毒だ〳〵と言つて、口癖のやうに申してをります。」

勝子は笑出しさうな表情で、細君の顔を見てゐた。

「こんな事をお聽かせして、好いか惡いか判りませんけれど、私奥さんのお耳へ入れておきたいことがあるんですよ。」

勝子は切出した。

「は、何ですか、伺ひまして……。」

「奥さん、しつかりなさらないと駄目でございますよ。」勝子はさう言つて、あわたゞしい思ひで、しかしづつと順序を追つて、その事について概略説明した。けれど細君は餘り感じないやうであつた。その上少し機嫌を損ねてゐた

「何ですか、宅もお友達思ひですから、自分のことか何ぞのやうに心配して、三日にあげずお見舞ひに伺つてをりますけれど……。」細君は辯解するやうな態度になつて、

「御注意は有難いんですけれど、佐伯も子供がありますから、まさかそんな事はあるまいと思ひますよ。」

勝子は細君が悧巧で、わざとさう言つてゐるのか、愚かで世間見ずで、感じが鈍いのか、判斷に苦しんだが、とにかく彼等夫婦なかゞ睦まじいのだといふ氣がした。そして好意を蹂躙された不快よりも、脚下を掬はれたやうな寂しさを感じた。

日ならずして、一旦死の手に取られようとした眞柄が、づん〳〵好くなつて行つた。そして略健康を恢復されたところで、彼は或日一思ひに、妻のみほ子に離縁を宣告した。

生死の境に彷徨つてゐた彼も、みほ子のしてゐる事を、見遁してはゐなかつたのであつた。

佐伯は賢い細君の手から、容易に放たれなかつた。そして眞柄との友情にも何の罅も入らなくて濟んだ、

みほ子は眞柄と別れてから、近所の下宿にしばらく居た。そしていつか勝子が途中で逢つたとき、平氣で佐伯を許してゐる眞柄を罵しると同時に、細君に丸められて、みほ子を深いところへ突落した佐伯を憤つてゐた。

それは勝子にも、全然頷けないことではなかつた。（をはり）

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
同　神田區裏神保町	上田屋
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　日本橋區本石町	至誠堂
同　本郷區春木町	盛春堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	立盛堂
京都市七條停車場前	共盛社
同　四條西洞院	前田大誠社
名古屋市富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

◉定價 金八拾錢郵税金貳錢五厘（海外郵税貳拾八錢
但支那を除く

冊數＼國別	內國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓貳拾四錢
十二冊	金九圓六拾錢	金拾貳圓四拾八錢
以上郵税共		

▲但し新年號春秋二期附錄號增刊號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七冊分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金拾參圓六拾錢外國は金拾七圓六拾八錢の割さなれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし

送金注意

一誌代郵税 は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一振替貯金 口座は東京三十四番なり
一郵券代用 は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるゝを拒まず
一代金引替 小包の取扱は一切謝絶す
一集金郵便 御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌發送せず

一金一圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢
一金拾圓迄　金八錢
（集金委託料及送料共）

一中央公論及婦人公論 代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ
一受領證請求 は必ず返信料を要す

大正十一年五月三十一日印刷納本
大正十一年六月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木酉三

發行所　東京市本郷區本郷三丁目六番地
中央公論社
電話 長小石川一四四
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING CO., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

